俳諧人名譜

あ

鴛宿（あうしゅく）八木氏、方寶、此花庵、春星堂の號あり、大阪の人、夜半亭道統なり、天保時代、著書に鼇頭奥の細道。俳諧冬龍あり。

鴛笠（あうりう）鳳朗を見よ。

阿音（あと）駿河の人、籌太門。

顯成（あきなり）山井氏、名は定宣、通稱は林庵、阿知子と號す、泉州堺南の庄に住し醫を業とす、貞德の門、著書に堺界集。同後集。手操舟あり。

秋の坊（あきのぼう）名は寂玄、加州金澤の人、法華一乘の隱宿なり、蕪門に入て李東と友とし善し、或時吾れ層を作れり、正月四日萬づ此世を去るによしと云て瞑目すといふ、元祿時代。

秋丸（あきまる）木魚庵と號す、江戸の人、柳

柯の門。

秋良（あきら）山岸氏、通稱重兵衛、東杵庵、最中堂の號あり、江戸の人、實商なり、秋瓜の門、文政四年九月廿五日歿す、年七十二。

阿貢（あこう）次山氏、播州伊丹の人、鬼貫門。

阿人（あじん）江原氏、牡丹庵と號す、籌太門、雪の幸の著あり。

蛙水（あすい）柴田氏、名は勝範、通稱多宮、渭濱庵二世、道耳坊、有無庵の號あり、初名野萵といふ、柴田出雲守の家臣、二世素丸の門、文政十年八月六日歿す。

蛙井（あせい）東々庵と號す、浪華の人、談林派の俳人なり、實曆二年秋歿す。

阿澤（あたく）東氏、蝸牛庵と號す、蕪志の門。

蛙芳（あほう）蘆池水と號す、伊賀上野の人、蕪門なり。

安徑（あんけい）大瀨氏、名は右購、梅堂と號す、野逸の門。

安山（あんざん）阿野氏、鵝毛筆と號す、京の人、常春の門、元文三年七月三日歿す、年六十五。

安之（あんし）高瀨氏、通稱は正左衛門、似山、又益翁と號す、泉州堺の人、大阪に住す、宗因の門なり、著書に落花集。犬さくら。西吟千句。濡からす等あり。

安靜（あんせい）荻野氏、通稱は長左衛門、似空軒と號す、京の人、手習師匠にして貞德の門に入り俳人となる、鄙諺集。如意實珠。けふの細布。打出の小槌等の著あり、延享四年歿す。

い

依々（いい）石村氏、通稱は近江、三味線を製作し、古近江と稱し有名なり、蕪門、（猿は本文中の古近江の條參觀）

友意（いうい）渡邊氏、通稱は八彌、尾州名古屋の人、一雪門、旅衣の著あり。

悠々（いういう）川崎氏、名は重恭、杜春の男、江戸に住す、千鳥庵四世なり、國學を平田篤胤に享け著書あり、天保四年七月廿三日歿す、年三十三。

悠々（いういう）河原氏、通稱元治、槐窓と號す、肥前大村の藩士、蒼虬の門、安政四年十一月廿七日歿す、年八十二。

友我（いうが）根岸氏、名は眞英、通稱幡兵衛、尾州名古屋の人、令德の門に入て學ぶ、後信州に假居し、又江戸に出て、小瀨戸玄佐と改名し、幕府の醫官となる、享保十四年九月廿五日歿す、年六十七。谷中天王寺に葬る。

友閑（いうかん）京都要法寺の住職、日祕上人といふ、貞德の門。

遊德（いうとく）通稱藤屋仁三郎、江戸敷寄屋河岸に住す、沾德の門、元文三年八月十三日歿す。

友宜（いうぎ）藤田氏、通稱七郎兵衛、京の人、令德の門。

友吉（いうきつ）櫻井氏、通稱甚右衛門、京の人、季吟門、或は云元隣門。

有琴（いうきん）林氏、嘯鳥舍と號す、屋元坊の門、泊風の男なり、妻某又俳に名あり。

有恭（いうきよう）武田氏、通稱探次郎、本所に住し書肆なり、二世案水庵と號す、有計の門、嘉永二年の夏歿す。

又花坊（いうくわばう）杉本氏、五竹坊の門。

有計（いうけい）鄉渡氏、通稱三郎兵衛、其夜坊二世、又老龜齋の號あり、幕府旗下の士、逸窓の弟子、後宗泉の門に入る、絢堂七世を繼ぐ、嘉永三年四月六日歿す。

有計二世（いうけい）川井氏、通稱玄節、町醫なり、初名有白、二世桂洲庵と號す、有計の門。

由健（いうけん）澤田氏、名は正茂、通稱三郎右衛門、友雪齋と號す、京の人、幸和の門。都草。若竹の著あり。

友五（いうご）常州板久の人、江戸に在住して蕉門に入る、其句七部集中に散見す。

有國（いうこく）浦井氏、京の人、富士谷御杖に國學を享け、入江斗雪に俳を學ぶ、俳諧手爾波抄の著あり。

有克（いうこく）小谷野氏、通稱豊次郎、西丸御跡方六尺なり、有計の門、二世老龜齋なり。

有佐（いうさ）宮岡氏、露囲、露々庵、北澤莊の號あり、桑岡貞佐に學び、享保二十年列者に列す、江戸小石川に住す、寶曆八年四月廿七日歿す、著書に其砧。湯島集あり。

有佐二世（いうさ）皐月氏、（本姓芥川）千載庵、露庵の號あり、初名棲霞、江戸の人、初世の門。

有左坊（いうさばう）山本氏、通稱梅州、雪香園、百塋仙の號あり、獅子門九世なり、弘化三年二月廿四日歿す、年九十。

友三（いうさん）奧西氏、名は義茂、通稱市左衛門、京の人、令德の門。

幽山（いうざん）高野氏、通稱孫兵衛、丁々軒と號す、京の人、松江維舟に學び、後江戸に出で談林に入り鳴る、後年藤堂家に入りて竹內爲入と號し、伊勢に在住し、寶永中彼第に歿せり、著書に江戸八百韻。俳枕。歌林名所追考あり。

友賓（いうし）友貞の男。

由之（いうし）井手氏、通稱長太郎、奧州の人、蕉門。

由至（いうし）小川氏、來川庵と號す、京の人、移竹の門。

友次（いうじ）岩田氏、通稱次郎兵衛、剃髮して有哉といふ、江戸の人、立圃の門。

友次（いうじ）吉田氏、通稱六左衛門、一醒子、一水子、無能子の號あり、尾州名古

屋の人、貞德の門、著書に蠶香物。和漢陽吟。阿波手。八百韻。千種等あり。

祐晶（いうしやう）釋氏、（本姓桑谷）江州粟津義仲寺の住職にして重厚門なり、文化四年十二月九日寂す。

友水（いうすゐ）宮原氏、盧船堂と號す、京の人、晉來の門。

友水（いうすゐ）田中氏、京の人、寶曆時代。風狂文草の著あり。

有靜（いうせい）井狩氏、通稱次郎兵衛、京の人、定淸の門、後菅谷高政の談林に遊ぶ、新增山の井の著あり。

酉生（いうせい）山口氏、喜鶴堂と號す、京の人、初名優生といひ鞭石門なりしが、後和及の門に入りて露吹庵二世酉生となる、寬保二年正月十五日歿す、年七十五。

由誓（いうせい）豊島氏、（後大江と改む）通稱久藏、爲誰庵、坎窩の號あり、夏目成美が家の番頭なり、初名久臧といふ、成美の門、安政六年九月二日歿す、年七十一、著書に成美家集。其角發句集。芭蕉發句集等あり。

友雪（いうせつ）宵木氏、松水軒と號す、大阪の人、西鶴の門、一日千句の著あり。

由雪（いうせつ）澤田氏、京の人、令德門。

友仙（いうせん）有馬氏、通稱意安、嵤白と號す、近江坂本の人、醫を業とす、貞德の門。

友扇（いうせん）佐藤氏、杏花亭、桂花菴の號あり、京の人、似船の門、享保十五年十一月三日歿す、年七十。

有村（いうそん）淺鶴庵と號す、蒼虬門、嘉永三年九月十日歿す。

游刀（いうたう）近江膳所の人、蕉門。

有中（いうちう）釋氏、津濱館と號す、薩摩の人、冶天の門。

友直（いうちよく）川崎氏、通稱源左衛門、薙髮して宗立といふ、大阪の人、始め貞德に從ひ、後立圃門となる。俳諧若狐の著あり。

友直（いうちよく）中村氏、通稱內藏丞、正親町家の臣、立圃門。

友貞（いうてい）井上氏、通稱重右衛門、渺宇と號す、京の人、立圃の門、著書に唐人踊。天神法樂集。神子舞。花軍あり。

由貞（いうてい）和氣氏、大阪の人、宗因門、能書を以て聞ゆ、著書に濵花辨癡。蛪淺。八重一重。千句付あり。

右調（いうてう）通稱伊兵衛、江戸の人、龜成の門。

友德（いうとく）江戸の人、荒木加友の門。

右麥（いうばく）桑原氏、集虛齋、抱一山人の號あり、美濃の人、獅子門十四世なり、安政三年六月十六日歿す、年五十。

右範（いうはん）山縣氏、雲工園と號す、美濃の人、支考門、寶曆二年正月廿日歿す。

由平（いうへい）前川氏、夕舟子、半幽子の號あり、浪華の人、宗因の門、剃髮して自入居士と稱す、寶永七年歿す、著書に明骨集あり。

祐甫（いうほ）神戸氏、通稱八郎右衛門、伊賀上野の藩士、蕉門卅一人衆なり、寶永七年八月十五日歿す、年七十九。

由卜（いうぼく）進藤氏、名は元重、京の人、常矩の門。

由林（いうりん）山田氏、一捧庵と號す、江戸の人、米仲の門、明和四年九月十五日歿す。

以悅（いえつ）和田氏、京の人、貞德の門。

易延（いえん）平井氏、通稱八左衛門、京の人、定淸の門。

以哉坊（いさいばう）安田氏、雪炊庵、無事窟、二狂の號あり、美濃の人、五竹坊の門、安永九年八月廿九日歿す、年六十六、俳諧夏の山。奧羽紀行。風巾の晴等の著あり。

意翊（いき）伊勢村氏、名は之夾、通稱九

兵衛、招鳩齋と號す、京の人、貞徳門、後季吟に從ふ。

以之（しゆし）丹羽氏、名は能少、千鳥庵と號す、尾州丹羽郡淺野村の人、支考に學び、八哲中の一人なり、兼て諸を巧にす、寶暦九年七月十三日歿す。俳諧六ッ花の著あり。

意深（いしん）菊川氏、石田未家の男。

伊人（いじん）古跡氏、通稱は久米之助、尾張の人、令徳の門。

以專（いせん）泉州堺眞光寺の僧、梅盛の門。

以則（いそく）牛文庵と號す、雪才の門。

一阿（いあ）一掬庵と號す、江戸の人、初め雪才の門、後三世寥和門となる。

一有（いうう）新波氏、伊勢山田の人、望一の門、一說に圓女の夫といへり。

一幽子（いうしい）宗因を見よ。

以中坊（いうちゆうぼう）松澤氏、通稱は與三郎、藍花井、竹天仙の號あり、武州浦和松葉屋といふ旅店なり、以哉坊の門。

一永（いえい）盛氏、通稱は久兵衛、一葉軒と號す、阿波の人、江戸に出て一晶の門に入る、享保五年九月十一日歿す、年五十。

一音（いおん）浪華の人、隱居士と號す、明和時代、二柳等と交る。瓜の實。さびしなり等の著あり。

一峨（いがち）路齋と號す、今日庵と自稱す、江戸の人、元夢の門、文政九年三月廿九日歿す。何袋の著あり。

一雅（いがち）柘植氏、通稱顯之助、曉池庵と號す、風谷の門。

一匊（いきく）鳥野氏、采緑齋と號す、加賀の人、希因の門。

一漁（いぎよ）鵜見氏、通稱は嘉平治、釣月堂と號す、江戸淺草茅町に住す、其角門人なり、享保廿一年五月朔日歿す。

一漁（いぎよ）一世の男、晋阿と稱し、相應庵、提堂、傘車、豆花等の號あり。

一漁（いぎよ）須田氏、初名を長隱と云ふ、松壽庵と號す、二世一漁の嗣となり鵜見氏を冒す、著書に月見原あり。

一漁（いぎよ）下村氏、三世の嗣となり鵜見氏を冒し、釣月堂と號す。

移竹（いちく）田川氏、烟月亭と號す、京の人、竿秋の門に入て初名來川といふ、師風を喜ばず、去來の風骨を慕ひ古調を謳ふ、寶暦九年十一月十三日歿す、年五十一、著書に舍利濱、乙御前あり。

一具（いぐ）高梨氏、名は恩春、一具庵と號す、初名は夢南、出羽村山郡最橋岡村上の人、羽冠出でゝ山城の專稱寺に入り、瓦孔上人の弟子となり、福島大圓寺の住職たりしが、文政に寺を捨て、乙二の門に入て俳師となる、江戸に出て、由誓等と交り、天保頃の大家たり、一具兼て繪事に工なりしといふ、嘉永六年十一月十七日歿す、年七十二。遺骨は灰とし大河に流せしといふ、家集には由誓の集めたる斷橋思藻あり。

一道（いたち）松村氏、通稱伊兵衛、江戸の人、初名桃鏡、燕門なり。

一入（いにゆう）石倉氏、通稱は三郎兵衛、容膝軒と號す、紀州熊野長島の人、貞徳門人。

一馬（いばち）田代氏、名は綱紀、通稱新右衛門、一掬庵と號す、秋田の藩士、貫明の門、文政六年十月歿す年六十九。

一馬（いばち）采氏、萬物庵と號す、江戸の人、鶴口の門。

一麿（いまろ）雀々坊と號す、大阪の人、才麿の門。

一麿（いまろ）石橋氏、百路房、峰朔庵と號す、江戸の人、島得器に學び、華尋集の著あり。

一味（いみち）北田氏、名は遠雄、京の人、常矩の門人なり。

一武（いむ）硯氏、通稱は市兵衛、和泉の人。西武の門。

一陽（いやう）望月氏、通稱清助、方長園と號す、錦江の門。

以重（いやう）遠谷氏、京の人、貞徳の門。

以長（いやう）有馬氏、通稱は菊右衛門、芭蕉堂一翁と號す、江戸の人、明治四年歿す。

一朗（いらう）永井氏、名は佳賢、字は桂琳、通稱は喜右衛門、掃雲樓と號す、上州伊賀保の素封家なり、逸淵の門、明治三年八月二日歿す、年五十。

一樂（いらく）渡邊氏、陶里、三餘堂の號あり、美濃の人、獅子門派。

一鷺（いろう）通稱は京屋京助と云、伊賀の人、燕門、伊賀卅一人衆の中なり。

一碗坊（いはちわん）熊谷氏、通稱は鏡平、既白庵と號す、清水藩の士なり、二世宗瑞の門、文化八年四月朔日歿す。

逸淵（いえん）兒玉氏、或は云久米氏、可布庵、瓢顏、似我老人、椿老等の號あり、武州兒玉郡八幡山町の人、頓布の門に入り上州高崎に居す、後江戸に出て、六十六歳の時武藏本庄驛に退隱し、文久元年七月廿日歿す、年七十二。逸淵句集世に存す。

逸雅（いがち）吉濱氏、通稱久右衛門、白雲庵、寶賢齋の號あり、安房の人、二世素丸の門。

一竿（いかん）入江氏、通稱は左衛門、貞山の門、元文三年正月廿日歿す。

一龜（いかん）上田氏、清寧庵と號す、江戸の人、二世乾什の門。

一和（いくわ）尾張の人、一雪の門。

一景（いけい）松平氏、名は定行、辟山と號す、伊豫松山の城主、從四位隱岐守なり、同國東野に隱居し、祝髮して直昌と呼ぶ、貞徳の門人、寛文八年十月十九日卒す、同國和氣郡祝谷村常信寺に葬る。

一蕙（いけい）足立氏、通稱富次郎、後平左衛門と改む、草蓬庵、くめの木庵の號あり、武州多摩郡大谷村の人、道彥の門。

一溪（いけい）大沼氏、萬里の門。

一徑（いけい）島氏、松聲庵と號す、江戸の人、得器の門。

一桂（いけい）林氏、千秋觀と號す、江戸の人、初世乾什の門。

一見（いけん）永崎氏、三樂と號す、肥後熊本の人、維舟の門、かがみ幕。肩入奉公の著あり。

一茶（いさ）小林氏、通稱は彌太郎、俳諧寺、蘇生坊の號あり、信州水内郡柏原驛の人、幼時繼母の難あり、家を出て江戸に來り、素丸の門に入り菊明と名告る、二六庵竹阿の後を嗣ぎしが、葛門の規矩に協はざる所ありて破門せられ、更に名を一茶と改め、巧に俚俗の語を活用して新機軸を出す、成美、一瓢等は其莫逆たり、卅二歳郷里に隱れ、俳三昧に入る、文政十年十一月十九日歿す、年六十五、柏原驛妙國寺に葬る、おらが春。一茶句帳世に行はる。

一叟（いさう）鳥園と號す、下總の人、三世宗瑞の門。

一巢（いさう）野遊亭と號す、武州所澤の人、蓼太門、文化十四年十二月廿六日歿す、年六十六。

一草（いさう）時雨坊、千日庵の號あり、奥州南部の人、攝津兵庫に住す、寛政頃。

一三（いさん）半孤軒、泉郎子の號あり、讃岐の人、維舟の門。

一志（いし）木村氏、大阪の人、才麿の門。

一止（いし）正親町氏、名は公通、京の公卿なり、風水軒、白玉翁の號あり、立圓の門、狂歌には白玉翁の名頗る高く、雅筵醉狂集は其本領を見るに足るの著なり。享保十八年七月十二日歿す、年八十一。

逸志（いつし）宗梅を見よ。

一四（いつし）西川氏、紋齋、明月庵の號あり、京の人、穎石の門、延享三年九月十四日歿す、年三十八。

一之（いつし）須田氏、羅浮窓、山水舍の號あり、信州の人、醫を業とす、江戸に出て剃を尾張に通し士朗の門に入る、文政十二年七月七日歿す、年八十三、著書に花七草、天保あり。

一室（いつしつ）梅井氏、京の人、享保頃か、著書に蘆の苫屋、蛛のすがき、てには綱引綱等あり。

一正（いつしやう）柏井氏、通稱は多左衛門、泉州堺の人、貞德の門。

一晶（いつしやう）芳賀氏、名は治貞、通稱は玄益、冥霊堂、崑山翁の號あり、京の人、醫を業とせしが信德の門に入て俳人となる、後令德に從ひて學ぶ、後年江戸に出て伊勢町に居す、兼て畫道にも堪能なり、一説に常矩に從ふと見ゆ、寶永四年四月五日歿す、年六十三、著書には万水入海、如何、丁卯集、いかつほ、一葉重山、八宗懸隔、蔓疣、丙寅紀行、大筏、六種茗談、其他數種あり。

一酌（いつしやく）通稱酒屋太右衛門、伊賀の人、蕉門の卅一人衆の内なり。

一酔（いつすゐ）老山子と號す、越後新潟の人、信德の門。

一笑（いつせう）小杉氏、名は味頼、通稱は茶屋新七、加州金澤の人、初梅盛に學びしが、芭蕉行脚の時蕉門に入り、上手の聞えあり、元祿元年十一月六日歿す、年三十六。

一宵（いつせう）四世の八千坊なり、大阪江戸堀に住す、屋烏の門。

一抄（いつせう）通稱淺野屋長太郎、加賀の人、馬來の門。

一雪（いつせつ）椋梨氏、通稱は三郎兵衛、牛露軒、柳風庵の號あり、京の人、貞德の門、或は云梅盛の弟子と、延寶八年九月二日歿す、年六十、俳諧大系圖には此歿年に疑を存せり、著書には鋸屑、茶杓竹、雨あかり、猢猻、洗濯物、合掌ふくさ、作者盡、晴小袖、言羽織、行事板、屑入奉公、牛の露、增浦後傘兩畢、武士鑑、柳風軒隨筆等あり。

一鼠（いつそ）角鹿齋と號す、越前敦賀の商賈なりしが産を破り俳人となる、浪華に居す、天明二年正月廿一日歿す、年五十三、男不石、角鹿齋を嗣ぐ。奥の近道の著あり。

一村（いつそん）平澤氏、通稱は勘兵衛、京の人、古筆家了佐の男なり、貞德翁に學び俳諧を善し、兼て書に巧みなり、其子了任も又俳に通ず、慶安三年閏十月廿八日歿す。

一貞（いつてい）高田氏、通稱傳兵衛、京の人、一雪の門、貞德俳諧記の著あり。

一貞（いつてい）服部氏、江戸の人、一鐵の門。

一貞（いつてい）落合氏、通稱は傳四郎、言風軒と號す、江戸の人、一晶の門人なり、元文四年正月九日歿す。

一兆（いつてう）宮地氏、通稱宗右衛門、環流亭と號す、江戸の人、町與力職を勤む、鷺太の門。

一イ（いつてき）内山氏、通稱は正菴、播州姫路の人、貞德に學び後梅盛の門に入る、早梅集の著あり。

一鐵（いつてつ）三輪氏、江戸の人、木所に住す、初め西山宗因に學び、後調和に從ふ。

一蝶（いつてふ）英氏、本姓は多賀、名は安雄、一に信香、字は君受、通稱は次右衛門、或は云助之進、幼名を猪三郎といふ、翠簑翁、牛丸、藤斗堂、一峯閑人、隣樵庵、隣濤庵、六巣舘、雪寶、蕉雲堂、潮古齋、北窓翁等の數號あり、狩野より出て、別に一派の畫風を興し高名なり、俳諧は蕉門に遊び其角と莫逆の交をなす、俳名を曉雲と呼ぶ、享保九年正月十三日歿す、年七十三、芝二本榎承教寺中顯乘院に葬る。

一桐（いつとう）通稱京屋權右衛門、伊賀の人、蕉門に入て京に住す、卅一人衆の一人。

一燈（いつとう）櫻井氏、上總の人、鄰太門。

一得（いつとく）牧野氏、京の人、大阪に住す、宗因の門に入て西鬼といふ、後一得と改む、たがやしの著あり。

一德（いつとく）三浦氏、名は實信、通稱は文安、儘齋の人、醫を業とす、佛仙の門に入り俳諧を弄ぶ、基俳家三浦若海の祖父なり、寛政八年十二月十二日歿す、年六十六。

一方（いつぱう）北川氏、溯溪窟、鴫翁、西角庵の號あり、京の人、西角の門、烏宿の著あり。

一筆坊（いつぴつばう）長谷川氏、墨荘、硯水と號す、尾張の人、風左坊門。

一瓢（いつぺう）釋氏、本姓は淸水、名は桓雅、又境修といふ、知足坊、雪耕庵、橋中居、右之坊の諸號あり、日蓮宗の僧にして谷中本行寺の住職なり、日桓と稱す、一度び伊豆玉澤山妙法寺第四十一世の住となりしが、後年もとの谷中に歸る、深く一茶と交り其風を摸し殆ど伯仲す、天保十一年七月七日寂す、年七十一、本行寺に葬る、著書には俳諧瘤柳あり、一瓢句集は友人の梓刻に係る。

一瓢（いつぺう）山本氏、通稱兼吉、舊目庵と號す、木我の門。

一步（いつぽ）千村氏、美濃の人、梅盛の門。

一甫（いつぽ）和田氏、名は東湖、江戸の人、嵐雪に學び、元祿十五年早世す。

一鳳（いつぽう）木村氏、佛狸庵と號す、京の人、嘯山の門。

一蜂（いつぽう）河曲（カハ）氏、田泉舍、葛仙翁の號あり、伊勢山田の人、支孔に學び江戸神田に住す、晩年故土に歸り、享保十年九月十五日歿す、年八十五。

逸歩仙（いつぽせん）淺野氏、名は雅兆、青雲齋と號す、美濃長東村の神職、十世獅子門なり、天保八年十月廿四日歿す、年六十九。

淯北（いはく）淡々を見よ。

淯北（いはく）右江氏、牝沖巣、時々庵の號あり、浪華の人、淡々の門に入て初名因角、又參天と呼べり、後江戸に出て青峨の門に入て淯北と改む、寬曆五年歿す。

引牛（いんぎう）中川喜雲の男。

胤及（いんきふ）岡本氏、通稱は仁意、備前の人、醫を業とす、貞德に學び後季吟に從ふ、延寶四年歿す、著書には鉋屑、角柱、千句あり。

員九（いんく）兒島氏、名胤矩、青房と號す、大阪の人、才麿の門、通俗志、奥小日記、厚顏記の著あり。

因石（いんせき）三谷氏、初名は君季、松蓑軒と號す、林石の門、明和二年三月廿八日歿す、年六十七。

尹督（いんとく）小川氏、萬古庵と號す、江戸の人、百洲の門。

陰威（いんゐ）今村氏、初め楓山と云ふ、三田白峰の門。

う

鵜江（うかう）正木氏、京の人、紙隔の門。

雨考（うかう）石井氏、通稱久右衛門、夜話亭と號す、奥州須賀川の人、桃祖の門、文政十年七月六日歿す、年七十九。

宇考（うかう）佐々木氏、栗蒼下と號す、曉臺の門。

烏久（うきう）青木氏、通稱牛右衛門、璨牛齋と號す、駿州沼津の人、江戸に住す、

うまつ

天保頃。

雨橘（うきつ）小川氏、通稱彦兵衛、繁鈴亭と號す、江戸の人、沾德の門、享保廿一年四月廿九日歿す、年六十一。

宇曲（うきょく）省氏、篤農と號す、四世佛外の門。

烏旭（うきょく）石出氏、其蘆庵と號す、上州大井の人、楚石の門。

宇貫（うかん）杉浦氏、通稱友藏、始め雪翼人といふ、梅年の門、寄中庵十世を嗣ぐ、大正七年一月五日歿す年五十五。

羽貫（うかん）福氏、和氣庵と號す、江戸霊岸島に住す、蕪門。

宇喬（うきょう）佐々木氏、通稱宇右衛門、栗窗と號す、出羽米澤の人、乙二の門。

宇橋（うきょう）草川氏、通稱は助左衛門、但馬仙石侯の藩士、始め青藍の門に入り、師歿後、玉屑に就て教を受け、遂に栗の本三世となる、文政十一年八月十七日歿す、年六十一、著述の著あり。

雨言（うげん）沾圃を見よ。

宇古（うこ）原田氏、和泉郡山の藩士、始め才麿の門なりしが、芭蕉芳野行脚の時門に入て後秀の譽あり、蕉文の句を得意とす。

羽紅（うこう）名は登米、京の人、凡兆の妻なり。

うこう

羽紅（うこう）竹田氏、名は廣職、玄々堂と號す、下京の商家なり、大倉流の狂言を善す、放蕩なるを以て家を其子に讓り、劇場に入り道具方となる、鞭石の門に入り俳諧を善す、寛保三年四月三日歿す、年五十七。

雨谷（うこく）石黒氏、通稱輪二、双鷲庵と號す、風谷の門。

烏黒（うこく）川村氏、名は慮心、幕府旗下の士、慶應の和長崎奉行支配定役となり、維新後司法省に奉仕し、遂に大審院判事となる、明治卅一年退職して秋屋會に俳事に遊ぶ、烏黒の號は其南畫名雨谷より來り會中に重きをなす、畫は逸雲、鐵翁等に就て學び優に老大家を以て目せらる、明治卅九年十二月廿九日歿す年六十四。

烏巣（うこう）加藤氏、名は支順、三州吉田の醫、蕉門。

宇山（うざん）岡宮氏、幕府の士、宇機の門、鳴立庵十三世となる、明治卅五年一月廿五日歿す。

卯七（うしち）壯年享と號す、長崎の人、向井去來の甥なり、蕉門。著書に十日菊。

うしち

雨什（うじゅう）柳居門。

雨什二（うじゅうし）平花庵と號す、烏明の門に入て四世松露庵を繼ぎしが、師風に悖はず一年にして其門を去り、完來に從ふ。

雨什三（うじゅうし）山邊氏、通稱政次郎、交加庵と號す、二世の門、天保時代。

雨夕（うせき）小林氏、通稱彌三郎、江曉庵と號す、藻雨の門。

雨村（うそん）内山氏、愛廬と號す、武州五日市の人、抱儀の門。

雨塘（うとう）小河原氏、通稱七郎兵衛、下總市原郡曾我野の人、地頭の財政を預り世々素封家なり、其先は武田家の臣、小河原武太夫に出づと云ふ、柳居の門にして子孫皆俳に志す、其子、兄を兎石、弟を徐舟といふ。

雨塘（うとう）小河原氏、通稱七郎兵衛、五嶽館と號す、先代雨塘の孫にして兎石の子なり、始め眉尺と稱す、春秋庵白雄に學び高足たり、天保三年十一月十八日歿す、年七十五、雨塘句集一卷世に行はる。

于當（うとう）三津川氏、通稱彌右衛門、淵齋、猿後園の號あり、近江坂本の人、曉臺の門、著書に篇筑波集、增注桃青句

うたく

集、關清水物語、梅合等あり。

雨澤（うたく）牧氏、本姓は近藤、名は倫編、通稱は彌兵衛、和堂と號す、初名は雪芝と云ふ、二世冬爽の門。

右通（うつう）野木氏、本姓鈴木、通稱は清助、是介堂、圓月軒の號あり、奥州白川竹貫縣の庄屋なり、一具の門、文久三年二月廿四日歿す、年五十。

烏朝（うちょう）通稱三島屋美太郎、蒼悪親と號す、烏醉の門。

烏頂（うちょう）井口氏、通稱市郎右衛門、江州大津の人、蝶夢門。

雲鼓（うんこ）堀内氏、迎光庵、千百翁の號あり、薙髪して助給と呼ぶ、京の人、方山の門、享保十三年五月二日、六十四にて歿す、著書に家の風、鹿聞宿の松、夏木立、四國船、赤烏帽子、削かけ、鈴之音等あり。

雲扇（うんせん）井上氏、枯木庵と號す、京の人、伏見に住す、初め如泉に學び後雲堂の門に入り、畔甘舍二世を名告る。

雲堂（うんどう）川勝氏、畔甘舍、吹松庵の號あり、京の人、雲鼓の門、享保十五年五月七日歿す、年七十。

雲知（うんち）中野氏、通稱は佐四郎、後忠右衛門と改む、迎雪庵と號す、武州小岩村の里正なり、初代素丸の門。

雲柱（うんちゅう）瀧上氏、百和庵と號す、百萬坊旨原の門。

雲竹（うんちく）北向氏、通稱八郎左衛門、藤木敦直に書道を承け、芭蕉の師たり、俳諧は芭蕉に交り、時に吟詠を樂むと云ふ。

雲峰（うんぽう）居初氏、都塵舍、年々翁の號あり、京の人、雲鼓の門、寛延元年十二月十八日歿す、年七十一、著書に頭陀袋、峯風、御伽機、傳授車、雲の臺等あり。

雲里（うんり）釋氏、甲州下曾根淨照寺の住職嵐外の門、安政四年歿す年五十九。

雲裡坊（うんりぼう）有雅翁、杉夫の號あり、勢州桑名の人、支考の門、寶暦十二年四月廿七日歿す、年六十六。著書、俳諧小鏡。

雲鈴（うんれい）吉井氏、吹蘿軒と號す、京の人、雲鼓の門、寛延四年二月五日歿す、年七十八。

雲鈴（うんれい）姓氏詳ならず、摩詰庵と號す、奥州南部の士、始め其角を慕ひ、後支考の門に入り、佐渡に赴き入日記の著あり、享保二年二月二日歿す。著書、笈の若葉、入日記。

梅女（うめ）松村月溪の妻、文化七年歿す。

烏明（うめい）姓氏詳ならず、木耳庵、蘇六坊等の號あり、江戸靈廟町に住し、兩替屋なり、中年家を舍弟に讓り、松露庵烏醉の門に入て諸國を從遊し、終に三世の松露庵となる、能く師風を守り時流を趁はず、享和元年六月十九日歿す、年七十六、淺草正覺寺中智相院に葬る、懷玉抄。池の昔の著あり。

雨穎（うえい）田村氏、名は定雄、通稱昌甫、松閑堂、適堂の號あり、下野足利の人、後飯田了翁と稱し醫を業とす、鳳朗の門。

雨柳（うりゅう）長谷川氏、冠木亭と號す、江戸の人、寛政元年六月十日歿す。

雨柳（うりゅう）伊丹氏、初名眠堂と云、臥遊庵、茗溪庵、八九軒の號あり、江戸の人、糸屋を業とす、霜後の門に入て松穎庵三世を嗣ぐ。

羽笠（うりゅう）通稱橋屋彌右衛門、尾張熱田中瀬町に住す、蕉門なり。

烏林（うりん）中山氏、通稱は忠藏、長短舍、五桃館の號あり、野遊の男にして淡々に學ぶ、文政中歿す。

え

永機（えいき）鈴木氏、名は美之、鼠肝の男、善哉庵、其角堂、阿心庵、老鼠堂の號あり、明治三十七年一月十日歿す、年八十二。新五元集、みゝな草、俳諧自在、俳諧獨歩、七多羅樹、龜戸千句、かけ摺鉢等の著あり。

榮春（えいしゅん）井岡氏、安原貞室の門に入て才女の名高し、後薙髮して尼となる、元文二年七月十九日歿す。

英道（えいだう）岩本氏、（初大塚氏）楓光舍と號す、二世岩本乾什の門。

榮富（えいふ）速水氏、通稱市兵衛、富竹の號あり、定清の門。

嬰利（えいり）長島氏、松下庵と號す、京の人、巴人の門、造花集の著あり。

夷麿（えびすまる）松平氏、名は近明、花月齋、麗子、猪寛等の號あり、豊島佳風の門、寶暦五年四月廿一日歿す、年五十五。

葉裏坊（えふりぼう）岸本氏、遊林舍と號す、玄武坊の門、秋日和、亥中月、白山百韻、雪折集等の著あり。

延清（えんせい）志水氏、恕匠子と號す、京の人、常春の門、薙髮して日柳と呼ふ、享保十九年五月十六日歿す、年六十九。

延澤（えんたく）破扇子と號す、江戸の人、貞享頃の人。

れ

應々女（おうおう）鈴木道彦の妻、天保十三年三月二十七日歿す。

應隨（おうすゐ）松本氏、窓月庵と號す、京の人、山本普及の門、天明三年三月十日歿す、年五十三。

乙由（おついう）中川氏、通稱は利右衛門、麥林舍と號す、伊勢國山崎の人、初め慶德圖書と呼び、山田の祠官なりしが、後中川梅我と稱し、涼菟の媒介を以て蕉翁晩年の弟子となる、師歿後支考涼菟に商り、後年自ら一家をなし、伊勢風を興して大に鳴る、元文四年八月八日（或云三年八月十八日）歿す、句集に麥林集あり。

乙因（おついん）金子氏、通稱は半藏、生白洞と號す、奥州南部八戸の人、乙二の門に入り、江戸に出て、成美道彦等と交る、文化四年尾張に至り、四月廿五日、五雄が俳席に倒る、年五十三。

乙語（おつご）佐方氏、牛夜亭と號す、肥後宇土の藩士、支考門。

乙字（おつじ）大須賀氏、名は績、福島縣宇多郡中村町の人、父を筠軒と號し儒林なり、明治四十一年帝國大學國文科を出で東京音樂學校に教授たり、碧梧桐派に屬し俳論家を以て聞ゆ、大正九年一月廿日歿す、年四十。著すところ故人春夏秋冬あり。

乙兒（おつじ）六花庵と號す、後、夕暮坊の號あり、藝太門、行もどりの著あり。

乙州（おつしう）杙々庵と號す、近江大津驛の長、佐右衛門の男、母は智月尼なり、同所月見坂に住し、母子共に蕉門に入て名高し、著書にそれ〳〵草、笈の小文あり。

乙人（おつじん）二柳庵の別名。

乙雉（おつち）機氏、長白亭と號す、江戸兩國に住し、談林派の俳人なり。

乙二（おつに）松窓院と號す、奥州白石、片倉氏祈願所、千手院の脩驗なり、中比俳に志し、獨學自得して遂に宗師となる、（一說に白居の門とし又麥羅の男とす、然れども門人多代女の記に師傳なしと

云へり）江戸に出て道彦成美等と往來し、月居と併せて當時四大家の稱あり、最も即唫に達し、蕪村の風調を慕ふ、文政六年七月九日歿す、年六十九、白石陣馬山に葬る、乙二發句集、乙二七部集等其風韻を見るに足る。

乙良（おつら）佐藤氏、通稱は忠藏、雪見館と號す、越後蒲原の人、文政時代。

乙羽（おとは）渡邊氏、通稱又太郎、羽前米澤の人、東京に出て風俗畫報に編輯員となり、後博文館主の養子となり大橋氏を冒す、秋聲會員にて、小說紀行の著多し、明治三十四年六月一日歿す年三十三。

乙彦（おとひこ）萩原氏、通稱語一郎、對梅年と號す、書家秋巖の養子、戯作を以て業とす、明治十九年二月廿八日歿す、年六十一。

鬼貫（おにつら）上島氏、（本姓平泉）名は治房、通稱三郎助、又與三兵衛、槿花翁、囑々里居士、犬居士、馬樂堂の諸號あり、攝州伊丹の人、壯年出てゝ大和郡山本多侯に仕へ、中比京堀河に住し、後浪華に移る、導引を以て業とし、俳諧は初め重頼に學び、後宗因に據りしが中比卓然として一家の見を立て、誠の外に俳諧なしと言て、同鄕の百丸、青人等と伊丹風の一體を興す、元文三年閏八月二日大坂島の内殿谷の僑居に歿す、年七十八、伊丹墨染寺に葬る、著書には、七車、獨言、犬居士、獨吟百韻、老の寐覺、大悟物狂、有馬日出、寸の字集、西瓜三ツ集、蕙能錄等あり。

大江丸（おほえまる）大伴氏、（初小島氏、又安井氏、又多古氏）名は政胤、通稱は左衛門、（或云宗二）回心齋、大江隣の號あり、大坂の人、島屋と呼び飛脚問屋なり、初め活井舊室の門に入て芥室と呼び、改めて舊國と稱す、飛脚屋なるを以て諸州を往來し、至る所の名家に就て教を承けしが、一とせ松島に至り、藝太の句に感じ、江戸に至て弟子の禮を執る、其調談林派の俤を存し、滑稽を巧みにす、文化二年三月十八日歿す、年八十八、著す所俳懺悔、俳諧袋、其他記行あり。

か

加友（かい）伊勢松阪驛、樹敎寺中、法樹院の住職なり、春陽軒、又般舟庵の號あり、初め望一に學び、後貞德の門に入る、著書に伊勢踊あり。

加友（かいう）荒木氏、通稱泰庵、醫を業とす、江戸の人、上京して貞德に學び、歸て兩替町に住す、江戸五哲の一人なり、延寶元年三月歿す、著書に繪そらごと、鹿島集あり。

何有坊（かいうぼう）高科氏、老後庵と號す、幕府の御家人なり、玄武坊の門、三會附錄の著あり。

介我（かいが）佐保氏、通稱孫四郎、甘雨亭と號し、江戸本所に住し帳面屋なりと、初名普仙と稱し、蕉門に入りしが、後其角に頼るといふ。

介我五世（かいが）佐保氏初祖の曾孫、完來の門。

介我七世（かいが）薛甘と號す、五世の男、薛雪庵午心の門、風俗文選犬注解の著あり。

皆虛（かいきよ）土佐圓滿寺の僧、角茄軒と號す、初祖立圃の門、世話燒草、四名集の著あり。

海旭（かいきよく）和田氏、（始菊地氏）龍心亭と號す、初名雲阿と云ふ、初代沾山門。

海旭二世（かいきよく）芝氏、（初菊地氏）初世の門、二世雪阿觀と號す。

芥舟（かいしう）信安を見よ。

海鳥(かいてう)塚原氏、通稱六右衛門、語竹庵さ號す、上州高崎に住し、靈業なり、白井烏醉の門、後武州青梅に隱棲し、明和二年歿す。

海德(かいとく)山本氏、萬龜堂さ號す、京の人、吉井雲鈴の門、延享二年三月十三日歿す、年四十四。

可因(かいん)司馬氏、(初大峯原氏)立地庵、凡夫庵、英般若の號あり、初名駝牛さ呼ぶ、江戸の人、初代存義の門、寬政十一年八月十三日歿す。小日向還國寺に葬る。

雅因(がいん)通稱孫作、宛在樓さ號す、京の人、吉文字屋さ稱し島原妓樓の主人なり、山口羅人の門に入り初名牙院さ呼ぶ、嵐山の麓に庵を結ひ、時に嵐山さ稱す、蕪村等さ往來し故老を以て聞ゆ、晩年居を市中に移し、安永六年十一月廿六日歿せり。

香以(かうい)細木氏、名は鱗、字は冷和、通稱津の國屋藤右衛門、梅阿彌、桃江園の號あり、染屋を以て業さす、江戸の人、鼠肝の門、大通を以て聞ゆ、明治三年九月十日歿す、年四十九。

皐鳩(かうきう)初名吐鳳、文來庵二世なり、天保四年上州豊岡に歿す。

皐鳩(かうきう)遠藤氏、通稱吉右衛門、花王亭さ號す、二松庵貞松の男。

幸和(かうくわ)江崎氏、通稱春學、京四條に住し醫を業さす、立圃の門、著書に若竹、底ぬけ臼、鴉鷺千句、春學古韻あり。

江月坊(かうげつばう)豊後の人、以哉坊の門。

康工(かうこう)通稱澤屋伊兵衛、六壁庵さ號す、越中戸出町の人、初名を八椿さいふ、希因門人にて俳畫を善す、安永八年三月歿す、年七十九。金花傳。俳諧百一集の著あり。

幸佐(かうさ)高田氏、通稱治兵衛、幽竹堂さ號す、京の人、幸和門、著書灯火集、入船、大湊、俳諧品定等あり。

江左(かうさ)六世湖十を見よ。

江西房(かうさいばう)長野氏、柳月庵さ號す、越後の人、支考の門。

江三(かうさん)村井氏、一日庵さ號す、奥州大河原の人、幼にして柴田家に仕ふ、其妻かれ女、又俳才あり、天保時代。

豪山(がうざん)隅田亭、門松子の門あり、江戸の人、一に兀峯さいふ、鑿尖の門、天保三年二月廿九日歿す。眞砂集の著あり。

行尙(かうしやう)蘭岡氏、沾涼の養父。

好春(かうしゆん)兒玉氏、(或云中尾氏)名は宗悦、向陽堂さ號す、伏見の人、元隣の門、寶永四年八月十一日歿す、年五十九。當流俳諧小傘の著あり。

江水(かうすゐ)江州栢原の人、流木堂さ號す、信德の門、柏原集、當世百人一句の著あり。

江聲(かうせい)堀氏、玉弓樓さ號す、風谷の門。

敲石(かうせき)中村氏、通稱太郞左衛門、武州埼玉郡谷原村の人、眠牛の門に入て二世御留庵たり、博識にして常に越谷吾山さ交る、天明八年七月歿す、著書に俳諧原道、金花石葉集、賦物問答あり。

幸琢(かうたく)伊佐氏、牛々庵さ號す、幸和門、延享二年六月十一日歿す。

幸忠(かうちう)山森氏、通稱二郞兵衛、京の人、幸和の門。

幸德(かうとく)今村氏、通稱長三郞、寬中舍さ號す、江戸の人、初め佳風の門に入り石泉さ號し、尋で魚尺さ改め、後沾德沾州等に師事し、享保二十年判者に列す、元文三年九月十六日歿す、年四十。

高阜(かうふ)杉下庵さ號す、吳園の門。

行風(かうふう)生白堂さ號す、大阪高津の隱僧なり、狂歌を善し、古今狂歌集の著あり、俳諧は松江維舟の門なり。

好柳(かうりう)壺井氏、江戸の人、調和の門。

可焉(かえん)上坂氏、京の人、巴人の門、明和九年九月十三日歿す、年七十五。

鰕交(かかう)龍馬庵さ號す、播州魚崎の人、栗の本青蘿に學ぶ、天明七年九月十日歿す、年三十三、家集を阿万加句集さいふ。

我行(がかう)金子氏、通稱彌三郞、萍靑居さ號す、江戸の人、介我の門、安政時代。

賀角(がかく)吉田氏、江戸の人、不角の門。

可玖(かきう)西村氏、名は重親、通稱善右衛門、大阪の人、苦竹軒、長愛子の號あり、初代立圃の門、遠近集、たつき、湊舟、十万句、物見車の著あり。

可吟(かぎん)吉田氏、通稱兵左衛門、美濃の人、芭蕉の門。著書に浮世の北あり。

賀近(がきん)老田氏、通稱伊右衛門、京の人、初名古根さ呼ぶ、立圃門。著述「詞の友」あり。

鶴英(かくえい)山城伏見に住し召波等さ往來風吟す、明和中歿す。

學海(がくかい)千代倉龜世の四男、名は寬、字は君栗、苔蒔園、御柳園、百川、樂山の別號あり、通稱千藏、千代倉家六世の主人、經學を宮崎甫、市川鳴鶴に、書畫を池大雅に、歌學を日野家、俳諧談に、俳を蝶夢、也有に學ぶ、家藏の書籍畫幅充滿し、詩文の交遊頗る多し、寬政二年八月二日歿す、四十九。

角々(かくかく)江州堅田本福寺十四世の住職明槃上人さいふ、角上の後嗣、越中那古浦に至て寂す。

鶴人(かくじん)森川氏、並笛齋さ號す、京の人、仙鶴の門、寬延三年三月朔日歿す、年五十二。

角上(かくじやう)釋氏、名は明因、瞬七亭さ號す、江州堅田本福寺十三世の住職、千那の後任なり、蕉門に入て俳に遊ぶ、後三井寺の傍に菴を結び居る、延享四年五月八日寂す、年七十三。

鶴平(かくへい)下山氏、通稱喜右衛門、大阪の書肆にして四鶴の門。

鶴步(かくほ)平野氏、通稱甚四郞、五雲亭さ號す、其角の門、元文三年八月廿三日歿す、年五十三。著書に鶴の步あり。

鷲群(がくぐん)森本氏、伊丹の人、宗旦の門、又畫を善す、享保十七年十月晦日歿す年六十一。

岳輅(がくろ)尾州名古屋乘西寺の住職、源惠上人さいふ、虎足園の號あり、曉臺の門、文政四年五月十一日寂す、閑古鳥の著あり。

何丸(かぐわん)なにまる。

荷兮(かけい)山本氏、通稱武右衛門、橿木堂さ號す、尾州の藩士、蕉門に遊んで曠野集の撰者なり、「木枯に二日の月の吹ちるか」の句を詠て木枯の荷兮さ稱せらる、後年橘守集を著し、師風を嘲るを以て勘氣を蒙るさ云ふ說あり、著す所曠野集、雪藂の穗、橘守集、靑葛葉、鳥おさし、奥細道拾遺。

我兄(がけい)田中氏、通稱友泉、醫を以て安藤冠里公に仕ふ、元文二年歿す。

荷月(かげつ)下條氏、通稱伊兵衛、雪樵樓さ號す、紀州家の士、眠考の門。

夏口(かこう)有田氏、通稱彌五郞兵衛、好文舍さ號す、江戸の人、步牛の門、嘉永二年六月九日歿す、年八十一。

我黑(がこく)中尾氏、李洞軒、靑白翁さ號す、京の人、維舟の門、寶永七年十月六日歿す、年七十一、橘立紀行の著あり。

賀谷(がこく)山口氏、江戸の人、梅人の門。

佳山(かざん)内村氏、央更舍さ號す、初め稼石の門、後閑石の點式を嗣て二世さなる、天明八年九月二十一日歿す。

加之(かし)和風軒さ號す、仙臺の人、大淀三千風の門、文臺を讓らる、著書にみ

つかしら、山海集、はすの實等あり。

可枝（かし）通稱豊田屋九郎兵衛、一溪堂と號す、加賀の人、米商なり、希因の門。

何我坊（かがばう）大島氏、文東老隠、文岡、稀古庵と號す、江州川越の人、五竹坊の門。

我尙（がしやう）砂岡氏、下總結城の人、初世介我の門なり、男周平又俳を善す。

可常（かじやう）丹波氷上郡、神池寺中性院の住職、季吟に俳を學び、「法の花」の著あり。

佳種（かしゆ）星野氏、通稱六左衛門、後宗以と稱す、京の人、山田屋といふ商賈なり、西武の門。

可俊（かしゆん）森氏、京の人、常矩の門、大洛車附合集の著あり。

可處（かしよ）足氏、旭雪庵と號す、江戸の人、二世再賀の門。

何處（かしよ）姓氏不詳、伊勢の俳人、享保十六年二月十一日歿す。

加生（かせい）凡兆を見よ。

可政（かせい）太田氏、通稱勘十郎、貞松子と號す、美濃の人、太田道灌が六世の孫なり、梅盛の門。

可靜（かせい）戸田氏、瑞雲園、松亭の號あり、京の人、普求の門、天明五年十一月

六日歿す、年五十五。

何聲（かせい）伊勢の人、曾北の門、神風館七世なり、伊勢風は何聲出で丶彌々俗に墮るとの說なり。

霞樵（かせう）池野氏、名は無名、大雅堂と號す、南宗畫の大家、蕪村等と交り俳に遊ぶ、安永四年四月十三日歿す、年五十四。

歌川女（かせん）越前三國驛、荒町屋の抱遊女にて泊瀨川といふ、實名はぎん、後年剃髮して瀧谷と號し、東國を行脚す、安永六年七月十七日歿す、年六十一。

可全（かぜん）大村氏、通稱白木屋彦太郎、京の人、季吟の門、元祿十二年歿す、年五十七。

我泉（がせん）高畑氏、通稱善次郎、湛堂、有友庵の號あり、江戸音羽に住し妓樓の斷役なり、二世素丸門に入り、天地庵の號を承け二世となる、文化四年十月七日歿す。葛飾蕉振の著あり。

莪川（がせん）中島氏、通稱克左衛門、幕府小十人組なり、宗泉の甥、自稱して向旭樓を名告る、嘉永中歿す。

方女（かた）川崎方孝が妻、初代立圃の門なり。

佳棠（かたう）田中氏、汲古堂と號す、京の

書肆、蕪村門。

何中（かちう）十河氏、牛日窗と號す、才麿の門、土餅、松の梅の著あり。

荷杖（かぢやう）北川氏、京の人、正木風狀の門、明和六年十一月十七日歿す、年七十。

葛才（かつさい）風一窓と號す、駿河の人、吏登の門、明和二年秋歿す。

葛才（かつさい）石川氏、名は一齋、通稱市左衛門、初め旭窓桂露と呼ぶ、幕府大御番を勤む、蓼々に學び、阿香庵、月可園、蓁月庵と號せしが、三世素法關を襲ぎ、冬史沒して五世夕可庵となる。

葛三（かつさん）倉田氏、信州更級郡戸倉村の人、世々松代侯の臣なり、初め虎杖庵の門に入り、後白雄に學び、門兄長翠より三世春秋庵を承繼し、幾はくもなく去て大磯鴫立庵を嗣ぎ八世となる、時に秋暮亭と號せり、家集は門人雄啄の集めし葛三句集あり、文政元年六月十二日歿す、年五十七。著書に蘂紫土產。

葛之（かつし）高尾氏、斯文樓と號す、玄武坊の門。

葛人（かつじん）松柯亭、水壺廬と號す、駿河の人、吏登の門、葛のうら葉。桃の親の著あり。

可都里（かつり）五味氏、通稱は宗藏、雪亭、鶴鳴館と號す、甲斐巨摩郡の人、曉臺の門、（或云ふ闌更の門）甲州の重鎭と稱せらる、晩年明を失ひ、文化十四年九月十五日歿す、年七十五、著書に名なし島、同じ年あり。

嘉廷（かてい）望月氏、通稱善九郎、江戸の人、嵐雪の門。

嘉貞（かてい）常陸下館の人、江戸に住し蹴鞠に名譽あり、嘉廷門、明和六年二月歿す、年八十餘。

賀朝（がてう）久米田氏、杉尋の男、醫を業とす、其角の門。

歌鳥（かてう）釋氏、春扑と號す、京の人、延清の門、享保十六年正月十六日歿す、年四十六。

可登（かとう）久保氏、通稱太兵衛、龍門齋、又如慶と號す、高松の人。

可登（かとう）寸方亭と號す、涼岱の門、「琵琶雨」の著あり。

可董（かとう）簑内氏、通稱は九藏、京の人、文化二年六月十六日歿す。

要女（かなめ）尾州の人加藤理右衛門が女、掬堂の妻、寛保二年八月廿八日歿す、年二十五。

蟹守（かにもり）五味氏、通稱五郎兵衛、蕪庵

と號す、甲斐西郡の人、可都里の類族にして其門に學ぶ、新篇俳諧文集、俳諧歷木集、發句古今撰の著あり。

加能女（かのめ）尾州知多郡大野の人、大黑屋利兵衛が妻、菊園社と號す、曉臺の門。

佳方（かはう）通稱好三、倒枕舍と號す、大阪の人、淡々門。

歌白（かはく）心掃庵と號す、駿州の人、白隱の徒弟にして、後還俗し俳師となる、鬱太の門。

可布（かふ）逸淵を見よ。

佳風（かふう）疊島氏、（又志村氏）通稱平治右衛門、才庵、有紀堂の號あり、初め才麿に學び才尾と稱せしが、後嵐雪に從ひ佳風と改む、江戸の人にして、儒を以て業とす、享保十二年十二月十四日歿す、年四十九、谷中大雄寺に葬る。夢想扇の著あり。

可文（かぶん）北川氏、近江粟津の人、正秀の門なり、其子可風、又俳を善す。

我峯（がほう）通稱木屋助八といふ、伊賀の人、蕉門三十一人衆の内なり、正德五年三月十日歿す。

柯木（かぼく）榎本氏、通稱又右衛門、幕府の塗師なり、江戸西河岸に住す、嵐雪の

門、寛保二年二月十二日歿す、年四十八。

菅雅（かんが）五年齋、潮音齋の號あり、駿河の人、江戸に出て完來に學び、三世時雨窓を嗣ぐ、文政元年九月廿七日歿す。

寒匡（かんきやう）通稱七右衛門、冥々庵、鼓泉庵の號あり、能登羅村の人、文化七年十月歿す。

閑空（かんくう）佐々木氏、冠芳齋と號す、京の人、嘯山の門。

岩月（がんげつ）秋葉氏、流霞亭と號す、通稱彌右衛門、出羽最上の人、弘化時代。

甘谷（かんこく）長島氏、通稱五郎兵衛、其水堂と號す、江戸の人、沾州の門、享保十四年四月十一日歿す。

甘谷（かんこく）武州所澤の人、鬱太門、後白雄に從ふ。

竿秋（かんしう）松木氏、（本姓橘木）通稱は奈良屋市郎兵衛、香稻庵と號す、本と江戸の商家なりしが、家衰へ京に來て淡々の門に入る、享保十四年春、淡々より點印家譜を讓られ、京の門人を率ひ師風を守る、明和九年九月十一日歿す、年七十八。

岩松（がんしよう）狂雷堂、玉田夫、丁蓼庵の號あり、初名島雄、江戸の人、超波の門。著書に桑之林あり。

澗水（かんすゐ）白芥舍と號す、江戸の人、初世宗瑞の門、天明元年閏五月九日歿す、年七十六。

岩泉（がんせん）磯野氏、蕉門。

雁臺（がんだい）田中氏、林積堂と號す、大阪の人、烘川の門。

雁宕（がんたう）伊左岡氏、伐木齋と號す、下總結城の人、沾山の門、安永頃歿す。

岩翁（がんをう）多賀谷氏、通稱長左衛門、江戸靈巖島に住し、幕府の桶御用なり、其角に學び、兼て畫を狩野昌運に受く、享保七年六月八日歿す。

龜二（かめじ）伊藤氏、通稱善右衛門、一向齋と號す、完來の門、文化十二年三月十九日歿す。

可賴（からい）青地氏、通稱市郎右衛門、京の人、貞室の門。

可樂（からく）通稱京屋又四郎、三笑亭といふ落語家なり、天保四年八月八日歿す、俳風東遊の著あり。

可理（かり）大橋氏、通稱新之丞、加州金澤の人、貞德の門。

嘉栗（かりつ）永井氏、江戸の人、案外門、寛政四年四月廿四日歿す、年五十二。

珈凉女（かりやう）藤田氏、鼓打藤藏といへる者の母にて、草婦人と號す、加賀の人、初め希因に學び、後千代女に敎を受くると云ふ。

可令（かれい）芳全を見よ。

荷了（かれう）中島氏、通稱治兵衛、八束庵と號す、遠江濱名三日ヶ村の人、江戸に出て鳳朗に學ぶ。

き

龜友（きいう）永井氏、通稱は兵作、大阪の人、其頃が浮世草紙に倣ひ戯作多し、俳句は續明鴉、五車反故に散見すれざ、師傳詳ならず。

紀逸（きいつ）慶氏、四時庵、自在庵、倚桂子、竹尊者、硯田舍、番流等の諸號あり、江戸の人、井伊家の士にして、弱年立羽不角に五七五の手引を傳はり、中比三田白峯の添作を受け、祇空法師が紫野より江戸に來るの時、入て道を問ひ、初老の頃湖十の法幕に由りて列者に列す、鄙俗の人情に警句を吐き、寛延三年武玉川を出して大に流行す、後の川柳點は實に爰に起原すといふ、寶曆十一年五月八日歿す、年六十八、谷中龍泉寺に葬る、著述に夜寒碑、武玉川、同續、江都技折、六物集、黄昏日記、雜話抄等あり。

紀逸二世（きいつ）井上氏、四時樓、英窓、晉紀の號あり、初名風也、風窓湖十に學び、紀逸の跡を繼ぐ。

紀逸三世（きいつ）卷氏、是非庵と號す、六世湖十門。

起一（きいつ）通稱常陸屋六兵衛、霧齋下と號す、大阪の人、風谷の門。

希因（きいん）和田氏、通稱彦右衛門、暮柳舍、百鶴園の號あり、加賀金澤の人、綿屋及藥種を業とす、初め北枝に學び、後伊勢に乙由を訪ひ、京に住して大に鳴る、延享五年七月十一日歿す、年五十一、暮柳舍句集世に行はる。

祇尹（ぎいん）小笠原氏、名は長堅　通稱理右衛門、權花坊、此花仙、松陰舍の號あり、江戸の人、幕府の先手與力なり、祇德に學び、後支武坊門となり美濃風を詠す、寛政十二年四月五日歿す。

休安（きうあん）影山氏、通稱七左衛門、大阪の人、貞德の門。

及加（きうか）高島氏、通稱善太夫、伊勢山田の人、支札の從弟、加友の門。

九皐（きうかう）松倉氏、嵐蘭の姪孫。

丘高（きうかう）佐々氏、通稱は司馬、木枯庵と號す、伊勢の人、木薔の門、十三世神風館を嗣ぐ、文化時代。

牛行（ぎうかう）分流齋と號す、神澤杜口の門。羅人が御射山翁の跡を嗣ぐ。

牛竿（ぎうかん）江戸の人、露言の門。

及和（きうくわ）高島氏、通稱善太夫、伊勢山田の祠官、支扎の從弟なり、嘲哢集の著あり。

舊國（きうこく）大江丸を見よ。

虬窓（きうさう）樫原氏、通稱岩五郎、阿波德島の藩士、著虬の門。

久臧（きうざう）由誓を見よ。

舊室（きうしつ）笠家氏、後活井と改む、聒々坊、天狗坊の號あり、江戸の人、逸志の門、初名鱘簍、尋て岳雨と改め、後舊室と名告る、江戸點者宗因派中興の筆頭なり、明和元年十一月廿八日歿す、年七十二、築地門跡地中覺證寺に葬る。

九井（きうせい）太田氏、五耕堂と號す、江戸の人、寶馬の門、享和二年六月三日歿す、年六十。

九節（きうせつ）通稱内神屋源六、伊賀の人、蕉門なり。

舊竹（きうちく）石川氏、大阪の人、子日庵竹齋に學ぶ、明治十三年七月廿八日東京に歿す、年六十一。

舊德（きうとく）才麿を見よ。

牛呑（ぎうどん）米庵、牛放庵の號あり、江戸の人、初め貞山に學び、德山と呼ぶ、後米仲門に入る、寛政四年三月五日歿す、年七十。

牛呑二世（ぎうどん）小島氏、（一に榎本氏）萬象居と號す、江戸の人、三世平砂の門。

休甫（きうほ）津田氏、江齋と號す、大阪の人、貞德の門、畸行を以て稱せらる。

喜雲（きうん）中川氏、名は重治、通稱は吉左衛門、山櫻子と號す、藝州の人、京に住す、貞室の門、寶永二年十月三日歿す、年七十、著書多くは隨筆にして俳書なし、鎌倉物語、京童、同跡追、案内者、私加多吔、土佐名所記、我家草、女筆往來等なり。

玖也（きうや）松山氏、浪華の人、宗因門、延寶四年四月歿す。

舊旅（きうりよ）東本願寺門跡忍見院一如上人の俳號、蕉門なり、元祿十三年四月十二日寂す、年五十二。

奇淵（きえん）茅沼氏、大黒庵、又花屋庵と號す、泉州茅渟浦の人、大坂に出て二柳の門に學ぶ、文政八年俳諧を以て法橋の官を許さる、天保五年五月十八日歿す、年七十六。著書に綾羽とり、芭蕉袖双紙あり。

幾音（きおん）中堀氏、柳和軒と號す、浪華に住す、宗因門、家土產の著あり。

其角（きかく）本姓は竹下氏、母方の姓を冒して榎本と呼べり、通稱は源助、町醫竹下東順の男、江戸堀江町に生る、草刈三越に醫を學び順哲と稱す、服部寛齋に儒學を受け、佐々木玄龍に書道を傳はり、英一蝶に畫事を問ひ、鎌倉圓覺寺の大顚和尚に就て禪を修し、俳事は延寶五年、十七歳の時蕉門に入り、頭角を形はす、初名を螺子と呼び、螺舍、文合庵、善哉庵等と號せり、後晨の文に晉二其角一とあるに由り、晉子其角と名告り、姓を寶井と稱し、米元章の硯を得て寶晉齋と號せり、又書名を實子と呼び、專ら俳體を以て生業とせり、所謂江戸座の開祖にして、洒落風の一躰を起す、寶永四年二月三十日歿す、年四十七。芝二本榎上行寺に葬る、著書には、虚栗。同續。田舍句合。虁集。新山家。花摘。いつを昔。雜談集。萩の露。枯尾花。句兄弟。若葉合。裏若葉。錦繡談。三上吟。焦尾琴。誰が家。新二百韻。類柑子。新三百韻。五元集等あり。

姫岳（きがく）新渡戸氏、佳句堂と號す、奥州南部の人、蕪村門と云ふ。

季吟（きぎん）北村氏、俗稱久助、湖月亭、七松子、拾穗軒の號あり、京都新玉津島の刷祝なり、貞德の高弟にて、國學に深きを以て寛文十二年幕府に徵され、歌所に奉仕し、五百石を賜り再唱院と云ふ、寶永二年六月十五日歿す、年八十二。下谷池之端正慶寺に葬る、著す所頗る多く、俳書には、山の井。同續。歌仙俳諧撰。新續犬筑波。十會集。諸國獨吟集。埋木。花千句。弘誓舟。室咲百韻集。永栢。蟻集。師走月夜。岩つゝじ。誹諧合。廿會集。三物記等あり、此他國文の註釋、歌學の書等は枚擧に遑あらず、多くは自筆を印刻せりと云ふ、（一說に季吟は近江國、北村の庄右衛門と云へる者の男にして、洛の三條山伏町に居し、蘆庵と稱し醫を業とせしが、安原貞室の門に入り、俳を學び、醫業を捨て、和歌にも志深く、縉紳に交り、貞德の連衆に加はり、門人と僧稱せりと云ふ）。

祇空（ぎくう）稻津氏、石霜庵、竹韓舍、阿桑門、空閑人、玉箒山人等の數號あり、難波の人、江戸に出で蕪門に入て青流と呼ぶ、又其角に私淑し得る所多く、五十二歳、宗祇墓前に剃髮して祇空と名乘り東奥に行脚す、再び江戸に出で、法師風の一體を號吹し、淺草藏前の札差多く其門に出づ、後去て京の紫野に住し、歌俳と號す、更に洒花を經て江戸に赴く途次、箱根湯本に歿す、年七十一、時に享保十八年四月廿三日なり、湯本早雲寺に葬る、著書に百番句合。みかへり松。鳥筑波。譬の花等あり。

菊貫（きくくわん）眞田氏、名は幸弘、白日庵と號す、信州松代の城主、纂太門。

菊五（きくご）美濃の人、支考門。

菊舍（きくしや）長州の人、以竟坊門、俳諧六家集。手折薊の著あり。

菊所（きくしよ）池上氏、伊勢の人、椎室門。

菊堂（きくだう）峽田氏、雨夜庵と號す、江戸の人、三世一瀉の門。

菊峰（きくほう）武田氏、景富堂と號す、大坂の人、宰陀門。

菊路（きくろ）尾崎氏、通稱善太郎、泰阜の門、素丈庵二世となる。

規外（きぐわい）一東井、信天翁の號あり、江戸の人、素外の門。

鬼外坊（きぐわいばう）保川氏、綠黑、夏奇舍と號す、江戸の人、玄武坊の門。

器觀（きくわん）島氏、不染庵、壓瓢庵の號あり、江戸の人、得器の嗣子、談林の俳人、享和元年八月十九日歿す、年五十。

几圭（きけい）高井氏、京の人、少壯の頃速見傳左衛門と呼び、今春流の太鼓打なり、故ありて業を捨て、巴人の門に入て俳に遊ぶ、鄧泉居を巴人より讓受て宋是と更名し、几圭庵と呼ぶ、半時庵の徒と往來し、人情の句を以て聞ゆ、几董の父なり、寶曆十年十二月二十三日歿す、年七十四。嚊相手の著あり。

蟻兄（ぎけい）高松氏、通稱重兵衛、茶飯堂と號す、大坂の人、大黑庵奇淵の門、明治五年一月八日歿す年八十三。

其諺（きげん）圓山氏、名は正阿彌、四時堂、宵蛬翁の號あり、京の茶享なり、宮河松堅の門にて博識の聞えあり、漢和を齋藤如泉に學ぶ、方山、積石等と享保の俳壇に鳴る、元文元年八月二十二日歿す、年七十一。著す所滑稽雜誌。御傘飾柄抄。聯冠子。金衣島等あり。

希言（きげん）岩下氏、通稱萬屋平助と云ふ、信州善光寺の薬種商なり、曉臺門、文化八年三月二十三日歿す。

其窓（きさう）星野氏、通稱權右衛門、江戸の人、其角門。

其蒼（きさう）箕倫氏、東舍と號す、蓬谷の弟、貞佐の門、元文二年六月十六日歿す。

其爪（きさう）千東氏、幻々齋と號す、江戸の人、二世鶴口門。

寄三（きさん）河田氏、通稱甚兵衛、不智庵と號す、武州熊谷の人、兒玉逸淵の門、明治五年九月十九日歿す、年六十六。著書に七部集連句早見あり。

几山（きさん）横田氏、京の人、初め渙々門なりしが、後大圭に從ふ、安永二年六月九日歿す、年七十五。

箕山（きざん）藤木氏、（本姓畠山）名は成庸、通稱は七郎左衛門、呑舟軒、幻々齋、如幻齋、遙莫堂の號あり、京の人、貞德の門、翁冠より遊里に耽り、花街の事に精通し、其著書頗る多く、色道大鑑の如き三十餘年にして成るといふ、後年意なき書畫の鑑定に注ぎ、了因と稱し生業とす、寶永元年六月廿日歿す、年七十七、著書に焚付。燃くひ。消炭あり、此他吉原始め色町の著書、略して戯せず。

葵山（きざん）涌江舍と號す、上總の人、醫太の門、天明六年八月十五日歿す。

其山（きざん）木仙居と號す、大坂の人、淡叟の門、五世八千房なり。

喜之（きし）井岡氏、通稱彌兵衛、友硯と號す、眞宮の門なり、母榮春尼と風月に吟して相樂み、人と交るを好まざりしと云ふ。

几秋女（きしう）島醉の門、才媛。

其十（きじう）中島氏、瓦竹堂と號す、大坂の人、矩州の門。

几亭（きてい）萬翁を見よ。

龜從（きじう）疋田氏、大和國佐保河の人、調布な業とす、鳥明巡錫の折入門し、江戸に出づ、寶曆八年下總にて歿す。

祇承（ぎしよう）三上氏、浮山外、桑舍の號あり、江戸藏前の札差、初め淸水超波に學び、後祇德の教を受く、寶曆十三年歿す、獨相撲の著あり。

洪翠（きすい）佐藤氏、通稱十兵衛、西丸御納戸頭を勤む、薙髮して淨賢と云ふ、蓼々の門に入て修竹園、又如是庵四世となる、安政四年八月二十日歿す。

洪翠二（きすい）通稱重七郎、一世の男。

龜成（きせ）山本氏、雨夜庵と號す、江戸の人、馬場存義の門、初名青特と云ふ、時代違ひの笑話を巧にして有名なり、寶曆六年六月廿五日歿す。

龜成二（きせ）一閑氏、雨夜庵二世なり、甲冑者、損金庵の別號あり、江戸の人、島得器に學び、山本龜成の後を嗣ぐ。

其成（きせい）通稱菊屋太兵衛、京三條通寺町の書肆、燕村の門にして後几董に學ぶ、燕村文集。俳璧帖の著あり。

其川（きせん）江戸の人、初名几宣、百萬坊の門。

葵足（きそく）北村氏、疫王子と號す、天明比の俳人。

葵足（きそく）遠谷氏、京の人、丈石の門。

其雫（きだ）梅津氏、名は忠昭、通稱半右衛門、秋田矦の藩臣、一萬石を領す、一說に文鱗は其雫と同人なりといへり、其角の門、享保五年二月廿五日歿す。

祇道（きだう）島氏、玉蓮舍と號す、江戸の人、祇報の門。

其道（きだう）佐生氏、名は晃嵐、字は恒齋、通稱は近江屋由兵衛、一致亭と號す、大阪の人、寬政時代。

騏道（きだう）江州大津の人、霄雲居と號す、曉臺の門、文化七年正月歿す。新花摘の著あり。

蟻道（きだう）播州伊丹の人、維舟門人、鬼貫と友たり、正德元年五月十三日歿す。

祇中（きちう）祇空の門、「浦やどり」の著あ

り。

橘才（きつさい）雪州亭と號す、雪才門。

橘堂（きつだう）田淵氏、名は常佐、木谷庵、五乳人の號あり、紀州の藩士、寛來の門、天保五年七月廿二日歿す。

吉門（きつもん）津下氏、越入道と號す、江戸の人、風窓湖十の門。

葵亭（きてい）佐藤氏、通稱藤右衛門、豊後の人、文政八年三月三日歿す。

起蝶（きてふ）播州赤石浦西島の人、青蘿の門、文政五年歿す。

几董（きとう）高井氏、几圭の男、初名小八郎、春夜樓、又春秋庵の號あり、一字を晉明と云、京の人、蕪村の門に入て高足たり、師歿後天明四年三世夜半亭となり、剃髮して詐善居士と稱す、常に晉子が風骨を慕ひ之に擬せり、寛政元年大阪に遊び、門人伊丹の士川が有岡の別墅に倒る、時に十月廿三日、享年四十九、著書には其雪影。明鵜。同續。續一夜。松前集。附合手引蔓。一夜四歌仙。から檜葉。蕪村句集。菊の宿。新雜談集。點印論等あり。

岐東（きとう）越後高田の人、支朗門。

祇德（きとく）自在庵、遲日亭、水光洞、竹隱子、實捷萱等の號あり、江戸淺草藏前の札差、剃髮して來藏法師と名告る、祇空門なり、寶暦四年十一月廿四日歿す、年六十四。著す所、竹馬集。鳥なし吟。一言庭訓。芭蕉堂記。三夜歌仙。

祇德二世（きとく）仲氏、自在庵二世と號す、初名祇貞、江戸の人、一世の門、安永八年九月朔日歿す、年五十二、著書に、富士筑波集あり。

其梅（きばい）野村氏、通稱文右衛門、伴松庵と號す、京の人、初め釜石に學び、後丈石に從ふ、天明八年二月十二日歿す、年七十。

祇報（ぎはう）萩原氏、心祇の門。

既白（きはく）雲來庵と號す、加賀の人、希因の門、やぶれ笠。うもれ木。蕉門昔語集。千代尼發句集。

宜麥（ぎばく）川治氏、通稱彌三郎、後平右衛門と改む、睡堂と號す、江戸幕府の家人、蓼太の門に入て、老鶯巢の號を讓られ、二世となり、文政十一年十二月二十二日歿す、年七十八。著書に淺川集。綸歌仙。同續あり。

季範（きはん）雙輪軒と號す、季吟門、知月集。俳諧浮草の著あり。

幾風（きふう）人見氏、伴松庵二世なり、京の人、其梅の門。

其文（きぶん）柘植氏、通稱彥八、鳩來庵と號す、大阪の人、風谷の門。文化時代、途四つ手の著あり。

龜文（きぶん）本多氏、曲直庵と號す、江戸の人、寛政九年七月廿九日歿す。

其鳳（きほう）渡邊氏、名は昇、肥前大村の藩士、維新の際奔走し、明治に會計檢查院長となる。俳諧を好んで河原慾々に道を聞く、梅室崇拜黨とす、大正二年十一月九日歿す年七十六。

吟霞（ぎんか）堀内氏、松風亭と號す、京の人、仙徑の門、天明四年八月一日歿す、六十一。

錦江（きんかう）馬場氏、名は正統、秦々の男、其日庵九世なり、其他桃葉庵、錬水舍の二世、蓮池翁三世なり、嘉永十年九月十九日歿す、著書には蓮池雜談、風俗文選通釋、其他錦江稿本三十三卷あり。

槿花坊（きんくわばう）祇尹を見よ。

金鷄（きんけい）畑氏、初め赤松氏、名は道雲、燕石樓、萩の屋の號あり、上野の人、前田大和守に醫を以て仕ふ、狂歌を善し、俳諧は大江丸に教を聞く、文化六年正月廿一日歿す、年四十三。

錦曉（きんげう）長田氏、名は守信、通稱理介、霞中庵と號す、秦峨の門、今日庵五世を

繼ぐ。

琴左（きんさ）五竹坊を見よ。

銀獅（ぎんし）文鳥舍と號す、大阪の人、文化八年九月廿八日歿す。

吟市（ぎんし）釋氏、（本姓津久見）法名尊海、江戸安住院の住職、後近江銀塘に住す、季吟の門、天和二年寂す。

芹舍（きんしや）八木氏、泮水園と號す、京の人、花の本なり、蒼虬門、明治廿三年一月廿三日歿す、年八十六。泮水園句集。百川集の著あり。

吟松（ぎんしよう）中村氏、（後奧田氏）花月庵と號す、京の人、淡々門、延享二年歿す。

錦水（きんすゐ）上總の人、採茶庵梅人の門、文化十二年八月歿す。

吟石（ぎんせき）山田氏、井龜軒と號す、大阪の人、綠石の門、享和二年歿す。

金洞（きんどう）木村氏、丙辰夫と號す、江戸の人、醫を業とす、小知の門。

吟竹（ぎんちく）淺井氏、沾蔬軒と號す、露沾の門、享保十七年六月廿六日歿す。

公成（きんなり）長門の人、京に住す、芭蕉堂六世なり、明治元年六月四日歿す。

琴蜂（きんぽう）瀬戸山氏、通稱金左衛門、鹿兒島の人、野坡の門、明和八年六月廿三日歿す年八十。

琴風（きんぷう）生玉氏、槃羅架、白鴿堂の號あり、大阪の人、壯歲江戸に出て蕉門に入りしが、師程なく歿せしを以て其角に從ひ學ぶ、當時百里と伯仲して衝を爭ふ、享保十一年二月五日歿す、年五十九。本所押上春慶寺に葬る。著書に俳諧瓜作あり。

均明（きんめい）通稱龜屋德右衛門、浪華の人、宗因門、櫻千句。十歌仙。各盃の著あり。

金毛（きんもう）芳澤氏、蘆元翁、芳元齋の號あり、京の人、初名方設といひ、瀧方山の門、延享三年十一月廿六日歿す、年八十。著書に杖の名殘あり。

金羅（きんら）東氏、夜雪庵、峨眉山人、草芳林の號あり、初名は田沙、江戸の人、始め貞屋に學び、後樓川に從ひ、言掛けの句を以て一家を爲す、寛政六年正月五日歿す、高輪正覺寺に葬る。

金羅三世（きんら）近藤氏、江戸の人、南品川に住し、筆道指南をなす、夜雪庵と號す、二世金羅の門、慶應二年十二月廿七日歿す、年六十九。

金羅四世（きんら）近藤氏、通稱粂次郎、三世の男、明治廿七年十月三日歿す、年六十五。

琴雷（きんらい）角田氏、通稱は庄兵衛、玉渡亭と號す、江戸の人、天明七年八月十六日歿す、年七十九。

祇明（ぎめい）伊東氏、五湖庵と號す、淺草藏前の札差、祇空門、頓心法師と呼ぶ、寛延元年十月四日歿す、年五十一。五湖庵句集世に行はる。

規妙子（きめうし）山本氏、名は經足、京の人、恕近子の門、享保十九年二月廿六日歿す、年四十八。

杏雨（きやうう）美濃の人、蕉門。

杏花（きやうくわ）高林氏、通稱又十郎、彌生庵と號す、幕府の士、五竹坊の門。

鏡臺（きやうだい）雪中庵蓼太の妻、文化五年十月三日歿す。

去音（きよたん）高屋氏、好々舍、瑞雲亭の號あり、京の人、孟遠の門、寛延二年十一月十日歿す、年六十三。著書に追込棧敷。六玉川。京豆腐。鵜栗集等あり。

去何（きよか）渡邊氏、江州高田の人、蝶夢の門、ひさよ舟。他世集。廿日月の著あり。

魚眼（ぎよがん）大阪の人、升六門。

許九（きよきう）奈越江氏、通稱忠藏、阿山人と號す、初名は木導、蕉門に入り、後許六に從ひ更名す。

曲齋（きよくさい）江戸の人、姓氏不詳、七部集婆心錄。貞享式海印錄の著あり。

曲翠（きよくすゐ）一に曲水とも書す、菅沼氏、通稱は外記、馬指堂と號す、近江膳所本多家の臣、蕉門に入て名あり、同僚曾我某の奸を惡み、謀て之を殺し自刄す、時に享保五年七月二十日、其子内記死を賜はり、妻落飾して泉州に隱れ、破鏡尼といふ、和歌に堪能なり。

玉屑（ぎよくせつ）肥後の人、播州米田村神宮寺の住職、松岡青蘿の門に入り、二世栗の本を繼承す、諸國を歷遊し風交多し、文政十年歿す。著書、生松集。春の光。

曲川（きよくせん）中西氏、雪鷗亭と號す、江戸の人、蓼太門。

玉蟾（ぎよくせん）入江氏、醫を業とし傍ら生花の師となる、鳥醉門、安永八年四月十六日歿す。

玉疊（ぎよくでふ）海保氏、名は兵吉、南總矢潟の人、鳥醉の門、寛政元年八月九日歿す。

曲阜（きよくふ）通稱大和屋金四郎、照顏齋と號す、攝州伊丹の人。

魚貫（ぎよくわん）心祇を見よ。

魚冠（ぎよくわん）聽潮庵と號す、初世沾山の門、折花集の著あり。

魚冠二世（ぎよくわん）旭江館と號す。

巨山（きよさん）笠間氏、破笠門、或云半山門と、享和二年三月廿日歿す、年六十七。

去舟（きよしう）黑瀨氏、不識亭と號す、京に住す、暢好の門、明和六年六月十六日歿す、年八十。

魚十（ぎよじふ）河島氏、通稱七兵衛、百花庵と號す、紀州の藩士、眠江の門。

漁川（ぎよせん）落月舍と號す、江戸の人、初祖湖十の門。

魚堂（ぎよだう）北溟舍と號す、小知の門。

虛堂（きよだう）神宅氏、一晶門。

擧白（きよはく）草壁氏、江戸の人、蕉門なり、元祿九年の春歿す、著書に馬蹄三百韻。青柳千句あり。

御風（ぎよふう）淺見氏、烏角堂と號す、大阪の人、田鶴樹の門。

御風（ぎよふう）秋山氏、通稱宇吉、應齋、又俳聖堂の號あり、出羽秋田の郡奉行なり、土肥渭江の門、御風發句集世に行はる、慶應二年正月廿六日歿す、年七十三。

魚文（ぎよぶん）玄峰堂と號す、江戸の人、蓼太の門、俳神樂。立圃花見記の著あり。

去來（きよらい）向井氏、名は兼時、通稱は平次郎、後次郎太夫、義堂、蘭亭、落柿舍の號あり、肥前長崎の醫官、向井元升が二男にして、兄震軒と共に入洛し、天文曆數の學を以て堂上家に仕ふ、退隱して嵯峨に庵を結び、蕉門に入て關西の俳諧奉行たり、凡兆と共に猿蓑集を撰み、名聲世に聞ゆ、寶永元年九月十日歿す、年六十二。洛東鈴聲山眞如堂に葬る、著書、猿蓑。去來抄。渡り鳥。湖東問答。鶯突集返答。蓬萊島。旅寐論。伊勢紀行。

去留（きよりう）津田氏、若州の人、信德の門、青葉山の著あり。

魚路（ぎよろ）笠井氏、名は重榮、松凌齋、飛來軒と號す、江戸の人、沾涼の門。

許六（きよろく）森川氏、名は百仲、字は羽官、通稱五助、又金平、五老井、菊阿佛、琢々庵、風狂堂、無々庵、横斜庵の諸號あり、江州彥根の藩臣、初め田中常矩に學び、元祿五年江戸深川に芭蕉庵を訪ひて門に入る、爾來高言自負師風の蘊奧を得たりとなす、許六畫を巧みにし、又俳文を善す、正德五年八月廿六日癩疾に由て歿す、年六十。著す所、韵塞。鶯突。宇陀法師。俳諧問答。歷代滑稽傳。風俗文選。正風彥根體。十三歌仙。和訓三體詩等あり。

蟻粒（ぎりふ）冠氏、我何坊、梅亭、逍遙庵、

素陽庵の號あり、初め素粒に學び、後得器門となる。

騏六（きろく）通稱笹屋長兵衛、灌園、又福田舍の號あり、尾州清洲の人、曉臺の門、文化七年八月歿す。わらづと集の著あり。

龜翁（きを）多賀井氏、通稱萬右衛門、江戸の人、岩翁の男、其角門なり。

義翁（ぎを）長谷川氏、不老亭と號す、武州金澤の人、天保四年七月廿一日歿す、年六十四。

く

空阿（くうあ）瓢簞坊と號す、大阪の人、京の空也堂の僧、蕪村門なり。

空阿（くうあ）遲月を見よ。

空阿（くうあ）利清庵と號す、京都空也堂の僧、士朗の門。

遇春（ぐうしゆん）石川氏、茨條園、柳々庵、自得庵、九華庵の號あり、初名林雨、又几鳥と稱す、江戸の人、三世一漁の門、寛政六年六月廿六日歿す。

句空（くくう）柳陰軒と號す、加賀の人、卯辰山心蓮舍に住す、蕉門なり、北の山。

矩州（くしう）椎本氏、五彩堂と號す、初名桐麿と呼び才麿の門なり、二世芳室の跡を嗣ぎ三世舊德翁となる、著書に哀些集。清逸集。四日桃等あり。

愚堂（ぐだう）人見氏、芥耳軒と號す、京の人、暢好の門、享保十五年七月十七日歿す、年四十八。

臥鴆（ぐわあう）櫻田氏、通稱玄丈、尾張の人、醫を業とす、後京の二條家の祐筆となる、曉臺の門にして、二世の暮雨庵なり、文化七年六月歿す。

槐市（くわいし）中尾氏、名は家重、通稱は源右衛門、伊賀の人、蕉門卅一人衆なり、享保十六年六月十一日歿す。

花因（くわいん）松岡氏、名は定考、琴鳥園と號す、江戸の人、高彫の雕刻を以て業とす、可因の門、文政三年八月廿一日歿す。

塊翁（くわいをう）大鶴翁と號す、尾張の藩士、曉臺の門、文政十二年十月十七日歿す、年六十六。

快溫（くわいをん）是枝氏、初め周防坊といふ山伏なり、還俗して通稱善右衛門と云、薩摩の御船奉行を勤む、北村季吟に學び玉海集に其句入れり、元祿八年四月廿九日歿す。

晃山（くわうざん）爪木氏、晩山の男、京の人、後攝州長柄村に移り、醫を業とす。

篁村（くわうそん）饗庭氏、通稱與三郎、竹逍屋と號す、古參の小說家隨筆家にして俳諧に關する述作あり、作家にあらず、大正十一年六月廿日歿す年六十八。

和英（くわえい）岸本氏、名は元貞、壺枕齋と號す、初め齋藤德元に學び、後、調和の義子となる、享保二年二月四日歿す、年四十六。

和葉（くわえふ）松曉林と號す、調和門。

禾葉（くわえふ）石井氏、初名巨月、双雀庵、菊坊の號あり、下總の人、江戸に住す、寥松の門、天保十五年四月廿三日歿す、禾葉七部集の著あり。

花海（くわかい）中川氏、名は幸久、通稱傳兵衛、旦亭と號す、江戸の人、日本橋稻荷新道の大屋なり、好んで連俳に遊ぶ、旦亭文集、聞のまに〳〵の著あり。安政頃。

花好女（くわかう）下總猿島郡關宿、箱島氏の妻、蕪村に學び、九十六にして歿す。

和吟（くわぎん）別所氏、京の人、常春門、或は云ふ延清門、寶曆八年正月三日歿す、年

七十三。

花逕（くわけい）館氏、蕗霞窓二世と號す、烏醉の門。

禾月女（くわげつ）名は龜丸、足了庵と號す、仙臺の人、初め乙二の門に入り、後一具の門に入る、安政四年歿す、年七十。

化月坊（くわげつばう）國井氏、春香園と號す、美濃岩手竹中家の士、十五世の獅子門なり、明治三年十二月十七日歿す、年七十七。

花縣（くわけん）山内氏、春秋齋、橘隣田、東庵と號す、江戸の人、谷素外の門、寛政十二年閏四月七日歿す、年六十五。

和三（くわさん）藤田氏、江戸の人、土屋侯の侍醫、二世調和に學び、點印を附與せらる、寶永六年の秋歿す。

花讃女（くわさん）古川氏、名はまつ、横山萬齋の妻にて、其句雄渾女性に似ず、花讃女句集世に行はる、文政十三年七月廿四日歿す、年二十三。

花城（くわじやう）三嶋氏、通稱は鄕右衛門、武州加瀨の人、三世夢和に學び、丈石庵三世となる、天保二年十一月十三日歿す、年八十三。

花昔（くわせき）山田氏、通稱甚兵衛、上總の人、百明の門。

和專（くわせん）堀尾氏、通稱中村屋七右衛門、江戸小舟町に住す、調和の門、寛延二年三月八日歿す。

花千女（くわせん）木者庵湖十の妻、二世雪中庵吏登の姉なり、享保十四年七月廿七日歿す。

和全（くわぜん）二世和雄を見よ。

果然（くわぜん）田香庵、瓦雨亭の號あり、江戸の人、渭北の門、著書、時津風。俳諧名物鑑。江戸名所繪入俳諧。

瓦全（ぐわぜん）柏原氏、五升庵の二世なり、蝶夢の高弟、瓦全文集。職人盡發句。長うた。根無草の著あり。

花陶（くわたう）高橋氏、名は宗紹、字は田堂、通稱は駿河、近江滋賀郡坂本の人、文政頃。

花杖（くわぢやう）宿杖を見よ。

和椎（くわつゐ）二世調和を見よ。

和椎二世（くわつゐ）一世の男、敬而庵と號す、初名和全。

花天（くわてん）森本氏、伊丹の人、蟻道の子、才麿に學ぶ、享保六年三月三日歿す年二十九、鉢叩の著あり。

和風（くわふう）喜多村氏、通稱三郎兵衛、調和の門、元文二年九月十五日歿す。

臥鵬（ぐわほう）菅氏、蔦舍、八日庵の號あり、

初名萬和といふ、大阪に住す、漁千の門、文政十年五月廿七日歿す。

貫阿（くわんあ）加藤氏、名は旣明、字は士交、方圓居と號す、江戸の人、町與力なり、柳居の門、天明七年五月十五日歿す、年七十。

貫阿二世（くわんあ）中山氏、通稱文平、如雪庵と號す、初世の門。

關河（くわんか）森氏、大夢庵と號す。

莞月（くわんげつ）樋口氏、名は忠隣、通稱清右衛門、積素軒と號す、江戸の人、其角の門、安藤家の士、天明七年六月廿三日歿す、年七十四。

貫古（くわんこ）毎日庵と號す、播州の人、京鞍馬に住し醫を業とす、惟然坊の門、文塚集の著あり。

還兒（くわんじ）東氏、菊庵、座笑庵、東羅坊の號あり、江戸の人、四世湖十の門、享和元年八月七日歿す。

寛洲（くわんしう）松延氏、貫嵐の孫、三世橘雪庵と號す、嘉永三年十二月十四日歿す。

官鼠（くわんそ）六花庵と號す、伊豆の人、蓼太の門。

關叟（くわんそう）龍門司と號す、薩摩の人、洛東岡崎に住す、文化頃。

管鳥（くわんてう）通稱かたばみ屋彌三郎、百花樓と號し、京島原の妓家、蕪村の門。

官奴（くわんど）前田氏、名は秸順、江戸の人、梅人の門。

完美（くわんび）交氏、貫明の男、獨步庵三世なり。

貫風（くわんぷう）加藤氏、空門子と號す、京の人、貞德の門、著書に步行神あり。

官楓（くわんぷう）關氏、平生庵と號す、冬映に學ぶ、後柳尾の門。

完來（くわんらい）大島氏、（本姓宮増）通稱は吉太郎、麒翁、空華、野狐窟の號あり、伊勢津藩の士、始め二世宗瑞の門に入りて雪柳舍と號す、後蓼太の門に入り、擢てられて其氏を冒し、雪中庵四世の俳師となる、書を東江源鱗に學び能筆なり、完來句集世に行はる、文化十四年四月十八日歿す、年七十。深川六間堀要津寺に葬る。

貫嵐（くわんらん）松延氏、橘雪庵二世と稱す、寛政八年八月十五日歿す。

冠里（くわんり）安藤氏、名は信友、含芳亭と號す、奥州磐城平の城主、從四位對馬守たり、御老中を勤む、其角に學ぶ享保十七年七月廿五日卒す、年六十二。江戸麹町栖岸院に葬る。

完梁（くわんりやう）横雪齋と號す、完來の門。

蝸名（くわめい）西氏、（又野村氏）九斛庵、狹雲坊の號あり、超波の門（一說に祇丞門とも、又治山門ともいふ）寛延二年五月廿五日歿す。

花里（くわり）速水氏、交鶴翁と號す、京の人、隆志の門、明和七年三月十二日歿す、年六十七。

花菱（くわりよう）赤松氏、江戸の人、一世湖十の門。

禾力（くわりよく）齋藤氏、通稱玄眞、醫を業とす、京の人、梅盛門。

け

慶友（けいいう）温野氏、卜養といふ、醫師なり、牡丹花肖柏の子なりと、寛文五年歿す。

敬雨（けいう）祇空を見よ。

桂花（けいくわ）幸島氏、通稱市右衛門、遠州掛川の人、日本橋室町の算盤屋幸島氏の養嗣子なり、桂花園、紫暉堂の號あり、篤學にして記錄に勤め其册積て山を成すといへり、明治三十二年六月十六日歿す年七十。

奚花坊（けいくわばう）青木氏、自然齋と號す、美濃の人、獅子門十一世なり、安政五年三月十九日歿す、年八十七。

桂五（けいご）金森氏、通稱市之進、一旬井と號す、尾州の藩臣、曉臺の門、文化九年二月九日歿す。

荆口（けいこう）宮崎氏、美濃大垣の藩士、蕉門の故老なり、致仕して後東子と稱す、其子此筋、千川、文鳥の兄弟皆蕉門なり。

鷄口（けいこう）谷口氏、獅子眠と號す、木犀庵二世にして、樓川が養子なり、鷄口集世に行はる、享和二年七月十一日歿す、年八十五。

惠佐（けいさ）藤本氏、名に久寨、通稱久兵衛、貞室の門。

慶山（けいざん）河畑氏、三射園、暮香庵の號あり、初名は櫟山、京の人、羅人の門、寛延三年八月二十四日歿す、年四十四。

珪山（けいざん）林氏、摩阿窟と號す、江戸の人、蓼太の門、蜚蠊夜話。俳諧古事談。藤枝折の著あり。

敬村（けいそん）淺種庵と號す、初名素因、鳳朗門、嘉永五年六月二十五日歿す、年四十四。

徑童（けいどう）一睡庵と號す、京の人、仙徑

の門。

徑壺二世（けいかう）佐々木氏、初名湊竹と稱す、一世の門、天明七年四月七日歿す、年七十。

珪琳（けいりん）蓬之を見よ。

桂露（けいろ）石川氏、名は一壽、通稱市左衛門、蓁々の門、三世素法園となり、後夕可庵五世と稱す。

桂露二世（けいろ）一世の男、通稱辰之丞、阿香庵を繼ぐ。

曉雨（けうう）通稱大口屋治兵衛、江戸藏前の札差、俠客を以て有名なり、享保頃。

曉雲（けううん）一蝶を見よ。

業言（けふげん）寺島氏、名は安規、通稱伊右衛門、尾張鳴海の本陣、蕉門、元文元年九月六日歿す、年九十一。

曉臺（けうだい）久村氏、（本姓加藤）通稱平兵衛、暮雨庵、白一居、買夜子、周挙、龍門の號あり、尾州名古屋の人、江戸に出て、尾藩御右筆部屋、惣領方へ出役す、幾ばくもなく退役して俳諧に從事し、美濃派の俳人蓮阿坊白尼の門に入て學ぶ、東西諸國を歴遊し、飄然悟る所あり、復古調を唱ふ、屢々上京して三條鉄屋町に假居し、寛政二年二條家より花の本の允可を蒙る、尾州の俳人曾 曉臺の風を望んで至る、寛政四年正月二十日歿す、年六十一。京寺町大雲院に葬る、著書に夜の桂。芭蕉翁歌仙。秋の日。風羅念佛。熱田三歌仙。佐渡日記。しなり萩。蛙口亭集。幽蘭集等あり。

曉園（けうゑん）牧村氏、通稱仁十郎、錦曉の門、二世霞中庵なり。

月居（げつきよ）江森氏、竹巣、些居の號あり、京の人、蕪村の門にして、師歿後化政度の俳壇に牛耳を執り、江戸の道彦、尾張の士朗と三大家の稱あり、月居又和歌を村田春門に學びたりといふ、文政七年九月十七日歿す、一乘寺村金福寺に葬る、俳諧問答。月居句集。月居七部集。白馬奥義解。道の便等の著世に行はる。

月杵（げつきよ）椿氏、通稱泰次郎、柳兮舍と號す、下總の人、西馬門、明治十五年七月歿す、年六十一。

月溪（げつけい）松村氏、名は春、字は伯望、通稱嘉右衛門、三菓堂と號す、京四條に住し畫工なり、後年攝州吳服里に隱れ吳春と呼び、畫名一世に高し、俳諧は其畫の師蕪村に學び、餘伎たり、文化八年七月十七日歿す、年八十。

月齋（げつさい）大内氏、反故庵と號す、江戸の人、初世乾什門。

月巢（げつさう）山村氏、名は春安、駿河の人、初名盤古といふ、蓼太の門に入て時雨窓の號を讓られ、第二世となる、天明五年正月五日歿す、年五十六。

月叟（げつさう）晋氏、むかし坊と號す、江戸の人、四世一溪の門。

月尋（げつじん）藤岡氏、雷雨軒と號す、大坂の人、野田忠粛に就て國學を修め、青木春澄に俳諧を學ぶ、又竹内惟庸卿に從ひ和歌の秘を問ふ、岡崎に隱れ尋で同門座神の招きにより伊丹に住す、正德五年二月廿一日歿す、著書に伊丹發句合あり。按ずるに浮世草子の著に今様廿四孝の名ありて著者を月尋堂と署す、疑うらくは此月尋が岡崎閑居のすさびならんか。

月朶（げつだ）大澤氏、通稱孫七、幕府御賄方六尺なり、宗泉の門、六世絢堂を嗣ぐ、天保四年二月廿五日歿す。

玄賀（げんが）小谷氏、名は久憲、通稱甚太郎、立靜子と號す、京の人、貞德の門、「四季の友」「道つれ」の著あり。

玄化（げんくわ）樗良の門、樗良句集の著あり。

見外（けんぐわい）菊守園と號す、江戸の人、

護物の門、明治六年二月二十日歿す。

原元（げんげん）佃房と號す、近江八幡の人、原松に學び、畸人を以て名あり。

玄々一（げんげんいつ）竹内氏、有無軒、又竹窓の號あり、播州高野の人、初時失明し、白馬散人に俳諧を學び、江戸に出て、越谷吾山に教を受く、明和中勾當の官に進み、文化元年八月二十五日歿す、年六十三。俳家奇人談の著あり。

幻乎（げんこ）相州鎌倉圓覺寺、百六十三世の住職、大顚和尚の俳號、其角と交り時に口吟す、貞享二年正月二日寂す、年五十七。

玄札（げんさつ）高島氏、通稱玄道、勢州山田の人、京に出て貞德に學び、後江戸に出て醫を業とす、言掛の名手にして貞門五哲の一人なり、元祿二年十二月十四日歿す、年八十三。

見袖（けんしう）庵原氏、名は朝則、通稱久右衛門、近江彦根の人、立圃門。

玄二坊（げんじぼう）吉田氏、紅白仙と號す、江戸の人、玄武坊の門。

乾什（けんじふ）岩本氏、通稱仁左衛門、滿足軒、千歳兒の號あり、江戸吉原江戸町一丁目天滿屋と呼へる娼家なり、初め山本子英の門に入て吳丈と呼び、後沾洲の門に遊び乾什と改む、河東節の歌曲に竹婦人と云は此乾什の匿名なりと、（一說に竹婦人は竹島正朔と號し花街の坊正にて乾什門人なりと）寶曆九年二月十七日歿す、年八十、淺草誓願寺に葬る。

乾什二世（けんじふ）岩本氏、（本姓明田）滿足庵二世と稱す、江戸の人、二世譽窗門。

元正（げんしやう）柴田氏、名は如心、通稱平左衛門、京の人、貞德門、後季吟に從ふといふ。

玄樹（げんじゆ）沙羅を見よ。

原松（げんしよう）加藤氏、猨々庵と號す、常陸笠間の人、其角に學び、薙髮して虎溪居士といふ、伊賀、京、江戸等に居を移し、隱逸を樂しむ、寛保三年正月五日歿す、年五十八、星月夜の著あり。

言當（げんたう）岡村氏、通稱傳内、淀屋ヶ庵と呼び又、古庵といふ。浪華の富豪なり、茶事に精しく、又戯畫を善くす。俳諧は貞德門なり。寛永二十年十二月五日歿す、年六十七。

元知（げんち）西田氏、通稱三郎兵衛、京の人、貞德の門、拾玉集の著あり。

言聽（げんちやう）清水氏、通稱四郎左衛門、京の人。貞室の門。

玄武坊（げんぶばう）村上氏、（或云神谷氏）俳天堂、一碗亭、青白子、朧居子、白山老人の號あり、江戸駒込に住し、醫を業とす、初め無滓庵鱗甲と呼び、盧元坊の門なり、美濃派四世の宗師、茶摘笠の著あり、寛政十年正月十日歿す、年六十。牛込濟松寺中芳心院に葬る。

乾峰（けんぽう）居初氏、雲峯の男、初名を松諒と云ふ、貞五堂と號す、京の人、延享三年十月四日歿す、年三十四。

乾峰二世（けんぽう）居初氏、雲峯が外孫、初世乾峯が甥、初名扇峯といふ、貞六堂と號す、明和七年四月廿七日歿す、年四十七。

乾峰三世（けんぽう）二世の子、貞七堂と號す、二ッ臼の著あり。

元夢（げんむ）柏翁を見よ。

元隣（げんりん）山岡氏、名は玄水、字は德甫、抱甕齋と號す、又而慍齋とも號せり、京の人、醫を業とし、北村季吟に就て歌學、及俳諧を學ぶ、國學の注釋書を多く著述し、延寶三年病で歿す、俳書には俳諧仕様。寶藏。身樂千句。俳諧小式。諸國獨吟。小杯等あり。

巨舟（きよしう）下鄉氏、名助雄、通稱彌兵衛、尾州鳴海の人、千代倉蝶羅の嫡男、栢

樹庵、鍋盛、蒼蒼舍の別號あり、寛政二年八月廿八日歿す、年七十八。

こ

古友（こいう）風松の門、牛文庵二世なり。

悟友（ごいう）稲見氏、通稱柴夫、稲廼屋といふ、四世近藤金羅の實弟にして湯島に居す、一時盛んに流行したり、大正八年九月六日歿す、八十四。

釭文（こうぶん）樺山氏、名は資茂、通稱五郎兵衞、薩摩の士、大坂に出て圓女に敎を受け歸て蕉風を鼓吹す、鹿兒島に正風俳諧あるは此人に剏まる、享保十三年七月廿七日歿す年七十七。

弘永（こうえい）夕陽庵と號す、京の人、縫舟門、獨吟集の著あり。

紅葉（こうえふ）尾崎氏、通稱德太郎、十千萬堂と號す、東京の人、父は谷齋と稱し彫刻に名あり、紅葉東京大學に學び、硯友社を起し、小說に驍名あり、旁ら俳句を研究して、秋聲會、紫吟社等の牛耳を執る、明治卅六年十月卅九日歿す、年三十七、青山墓地に葬る、俳諧の著には十千萬堂哲句選。俳諧名家選。新潮。

句集等あり。

勾空（こうくう）柳陰軒と號す、加賀の人、蕉門、師歿後北枝に依る、卯辰集の著あり。

後川（こうせん）和田氏、通稱市郎右衞門、絲屋を業とす、加賀の人、希因の男なり、暮柳舍二世を名告る、又茶事に精し、著述に暮柳舍發句集。梅の草紙あり。

五雲（ごうん）岡氏、京知恩院門前、那波屋橋に住す、太祇の門にして、二世不夜庵なり。

五英（ごえい）田中氏、通稱喜左衞門、字は淸友、歸春窓と號す、野菊女の弟なり、文化九年十一月十七日歿す。

五葉（ごえふ）田丸氏、通稱新八郎、翁中園と號す、幕府の家人、支武坊門、深川三會集の著あり。

古音（こおん）大倉氏、初名飛士、飛夏の男、著書に近道。喚子鳥等あり。

故考（こかう）岸氏、通稱庄左衞門、紀州の人、眠考の門、享保四年歿す。

虎角（こかく）吉田氏、月杵泉と號す、京の人、巴人門、古紙衣の著あり。

穀我（こくが）佐保氏、介我の男、さぶ蓑の著あり。寶曆時代。

國甫（こくほ）柳隣庵と號す、四世寥和の門。

黒路（こくろ）山口氏、名は守常、通稱は須磨屋宗寶、素寶、未兆齋、稲中庵等の號あり、今日庵素堂の甥にして、茶道の宗匠たり、兼て俳事を善くす、寶曆中八十二歲にして歿す、著書に硯澤。老山集。駿河百韻。千鳥の岡。稲中庵淺擧あり。

壺外（こぐわい）乾氏、一龍井と號す、江戸の人、谷素外の門、文政三年十一月廿四日歿す、年七十。

胡兮（こけい）坂部氏、鋼堅と稱す、豊前中津の人、季吟の門、到來集の著あり。

五桂（ごけい）松井氏、後千浦氏に改む、富竹坊と號す、京の人、宗屋の門、明和六年八月廿七日歿す、年五十二。

五橋（ごけう）石井氏、暮四を見よ。

孤月（こげつ）江口氏、通稱辰之助、江戸の人、薬石門、太白堂六世なり、明治五年七月十九日歿す。

壺月（こげつ）石川氏、沾洲の門、享保中歿す。

壺月（こげつ）小守氏、通稱十左衞門、柏亭と號す、紀州安藤家の士、峨考の門。

顧言（こげん）松本氏、通稱順亭、湯島仲坂に住し醫を業とす、東杵庵三世なり、

俳諧茶話の著あり、明治十四年十二月四日歿す年六十五。

湖元（こげん）北村氏、湖春の男、和歌所に奉仕し法印に至る、寛延二年五月四日歿す、年七十四。

古湖（ここ）曾氏、青蘿庵と號す、江戸の人、初世存義の門。

五口（ごこう）長谷川氏、嗜月庵と號す、京の人、十口の門。

工齋（こさい）淺野野水を見よ。

五双（ごさう）有田氏、通稱三郎右衞門、梅室の門、慶應元年八月廿八日歿す、年七十七。

古山（こざん）森川氏、麥湖樓と號す、大和萩原の藩士、乙由門、雪の石摺の著あり。

皷山（こざん）中村氏、琴松堂と號す、京の人、雲鼓の門、羅文の句を善くす、延寶四年九月廿三日歿す、年四十六。

吾山（ござん）會田氏、名は秀眞、師竹庵と號す、武州越谷村の人、壯歲江戸に出て柳居の門に入り、師歿後自ら一家を爲し、法橋の官を許さる、天明七年十二月十七日歿す、年七十餘、武州越谷天嶽寺

に葬る。著す所、朱紫。俳書見聞の記。物類稱呼。翌檜。吾山遺稿あり。

吾山二世（ござん）淨氏、生松庵と號す、江戸の人、初世の門に入り、師竹庵二世となる。

梧山（ござん）重田氏、寄石舍と號す、京の人、初め浪々に學び、後白鶴の門に入る、羅文を善くす、享保十八年三月二日歿す、年三十八、青澤波の著あり。

吳山（ござん）三浦氏、寶晉堂と號す、風窓湖十の門、文化六年四月廿四日歿す。

五始（ごし）中島氏、堯車園、春要齋の號あり、京の人、山口羅人の門、安永四年九月十三日歿す、年六十六。著書に握墨。編一滿。雪の濱。古百倍。碟嘯等あり。

湖十（こじふ）深川氏、（初曾氏）木者庵、謙堂、老鼠、鼠肝、露入道等の號あり、江戸の人、其角の門に入り其角點式を秋色より受け、江戸座の正統となる、元文三年七月廿七日歿す、年六十三。今戸宗林寺に葬る、著書に二十歌仙。角文字。若帖。諱太郎。このむれ。眉斧日錄等あり。

湖十二世（こじふ）初祖の義子、巽窓、一點香の號あり、初名永機といふ、延享三年正

月廿四日歿す、深川森下長慶寺に葬る。俳諧古鑑の著あり。

湖十三世（こじふ）二世の子、風窓、雷吼坊、戀橋庵の號あり、安永九年七月十五日歿す、山谷宗林寺に葬る。著書に寶曆句集。

湖十四世（こじふ）晉窓、黃花庵、歡雷と號す、始め鄰太門、後三世の門となる、寛政元年五月廿七日歿す。

湖十五世（こじふ）文化三年七月廿七日歿す。

湖十六世（こじふ）江左氏、昇窓、寶晉齋の號あり、初名木髪といふ、五世の門、天保四年十月廿日歿す、年六十二。目白蓮華寺に葬る。

午心（ごしん）岩波氏、蒔雪庵と號す、又、山花人の號あり、江戸の人、鄰太の高足たり、文化十四年正月二十一日歿す、著す所、探術集五篇 六篇。玉田集。同後集あり。

悟尺（ごしやく）太田氏、通稱忠右衞門、幕府の士、葛才の門、二世才陰堂なり。

午寂（ごじやく）人見氏、一嶋林と號す、江戸の人、其角の門、寛保元年十二月歿す、つのもじの著あり。

五株（ごしゆ）八木氏、化龍館と號す、京の人、丈石の門、天明八年六月廿八日歿

ニしゅん

す、年六十六。

湖春（ゆんし）北村氏、名は季重、花果院と號す、季吟の長子、父と共に幕府に仕へ法橋に叙せらる、元祿十年正月十五日父に先て歿す、年五十三。

虎睡（ゐこす）各務氏、名は重紀、通稱吉左衛門、竹隱亭、笑貝子の號あり、美濃の人、五竹坊門、文化十一年四月二十日歿す。

古翠（ゐこす）高橋氏、通稱九兵衛、蕉園亭と號す、出羽米澤の人、長翠の門。

吳隨（ゐこず）小泉氏、寶雪庵、規矩庵の號あり、三世雪和の門。

吾扇（ゐこせ）中野氏、名は良直、通稱は半右衛門、觀阿、又、仁風舍の號あり、寛政十二年二月十五日歿す、年七十六。

梧泉（ゐこせ）通稱綱屋清兵衛、月太郎と號す、駿州の人、月巢の門。

吳仙（ゐこせ）松平氏、名は親孝、太白堂八世なり、明治二十四年十月二十六日歿す、年六十四。

吳大（ゐこだ）羽根氏、鶯谷隣と號す、江戸の人、二世乾什門。

壺中（ゐこも）京の人、蕉門。

湖中（ゐこも）九窓、鏡池庵の號あり、三世湖十の門、安永九年二月七日歿す。

ニしゅう

湖中（ゐこも）幻窓と號す、天保時代。芭蕉翁略傳。芭蕉翁句集の著あり。

吾仲（ゐこも）柳後園と號し、京に住し佛書師なり、李由の門、柿表紙。東六風。魂祭。誰身の秋の著あり。

孤竹（ゐこも）小柴氏、通稱四郎七、素丸の門、玲瓏閣二世なり。

五竹坊（ゐこちく）田中氏、通稱幸次郎、後市郎八、薙髮して東伯と云、五筑庵、歸童仙の號あり、美濃本巣郡芝原里の人、醫を業とし、初め支考に從ひ、師歿後廬元坊に學ぶ、初名琴左と稱し、美濃風の雛たり、晩年伏見里に隱れ、再び故國に歸る、安永九年七月二十六日歿す、年八十一。美濃故郷西運寺に葬る、著書に十二夜話あり。

虎杖（ゐこちゆう）天姥を見よ。

虎丈（ゐこちゆう）川村氏、通稱大黒屋源兵衛、草文亭と號す、伏見の人、巴大門。

兀雨（ゐこつ）大島氏、通稱仙右衛門、武州八王子の人、二世鳥醉の門、三世松原庵なり、後年座來より松露庵を讓られ、五世となる。

五趙（ゐこて）通稱油屋庄右衛門、野馬と號す、文化五年八月歿す。

古道（ゐこだ）村井氏、無名園と號す、奈良の人、小西來山の門、寛延二年十月四日歿す、年六十九。花日記の著あり。

ニだう

古道（ゐこだ）小河氏、提杖庵と號す、江戸の人、柳居の門。

孤桐（ゐこど）釋氏、綠綺堂と號す、京の人、宋屋の門、寛政元年二月三日寂す、年五十六。

五乳（ゐこに）田淵氏、通稱常作、木谷庵、橘堂の號あり、紀州の藩士、天保五年七月二十二日歿す。

木乃女（ゐこの）百明の妻なり、夫歿後薙髮して上總東金に隱れ、筆道指南して世を送る、寛政三年六月二十四日歿す。

故貝（ゐこは）美濃派の俳人、五竹門か、蕉門花傳授の著あり。

古白（ゐこは）藤野氏、名は潔、伊豫松山の人、日本派の俳人、明治二十八年四月十二日自殺す。

護物（ゐこは）谷川氏、田喜庵、又東寅居、鶴巣の號あり、伊勢の人、初め鶴飛と稱し、闕更門なりしが、故あり出奔して江戸に來り道彥に賴る、天保十五年七月二十八日歿す、年七十三著、書に梅菊餘情。梅文庫。蘆の一本。其他類題集あり。

五蓬（ゐこは）坂倉氏、通稱文太郎、一葉庵と號す、勢州の人、江戸に出て鳥醉門となる。

今更（ゐこん）村田氏、十符庵と號す、江戸神田に住す、三田白峯の門。

言水（ゐこん）池西氏、名は則良、通稱八郎兵衛、紫藤軒、洛下堂、風下堂の號あり、南都の人、松江重頼に學び、江戸に玄札を訪ひ、更に談林の徒に交り、自ら一家を爲す、後年京室町に住し、正風に移る、「凩の果はありけり海の音」の句世に名高く、凩の言水の稱あり、家集を元柏といふ、享保四年九月二十四日歿す、年七十三。京極誠心院に葬る、著書に我身鏡。京の水。前後園集。京日記。江戸辨慶。江戸新道。江戸鮎の鮓。東日記。獨吟後樣姿。都曲集。九折。積々母等あり。

言石（ゐこん）下村氏、始め鞭石の門、優士と呼ぶ、後言水に屬し紫藤軒二世となる。花紋日の著あり。

五明（ゐこん）吉川氏、（初め那波氏）名は了阿、小夜庵、虫二坊、樺岡、了閑人、半居士、一方庵、拔瓣舍、鶴頭翁の號あり、出羽秋田の人、初め談林に入り、次に美濃風を學び、後正風に歸すと、（或は云平文梅隣に學ぶと、梅隣は其雲の門なり）當時南部の素郷と併稱せられて奥羽の雙たり、享和三年十月二十六日歿す、年七十三。著書に三等文。ひとり歩行等あり。

五雄（ゐこゆ）通稱餝屋文助、尾州名古屋の旅館なり、曉臺の門、文化中長崎に赴きて歿す。

吳老（ゐこも）通稱大和屋五郎兵衛、浪華の人、月居の門。

古樂（ゐこら）通稱佐野屋與兵衛、一斗庵と號す、大坂の人。酒商なり。木僊の門、旁ら挿花に名あり、天保八年五月十一日歿す、年五十七。

湖柳（ゐこり）京の人、几董の門。

五粒（ゐこり）市川氏、四代目團十郎の俳號なり、夜雨庵二世と稱す、河東節の作曲多し、安永七年三月朔日歿す年六十八。

維駒（ゐこれ）黒柳氏、召波の男、蕪村の門。

五璉（ゐこれ）江戸の人、嵐雪の門。

五璉（ゐこれ）足高氏、梅隣庵と號す、蒼瓜の門、安永八年九月二日歿す、年七十六。

孤屋（ゐこを）小泉氏、野坡、利牛と共に蕉門。

ニんかう

再賀（ゐさい）守氏、一口仙、春來軒、兀山等の號あり、江戸の人、二世青蛾の門、明和元年七月十七日歿す。

再賀（ゐさい）芝氏、（初小倉氏）一滴仙、春來軒、回雪庵の號あり、三世平砂の門、再賀の後を襲うて二世となる。

西鶴（ゐさい）井原氏、松壽軒、松濤軒、二萬翁の號あり、初名は鶴永、晩に西鶴と改む、難波の人、宗因門下の書宿にして、師歿後は大坂俳壇の牛耳を握れり、西鶴文才非凡にして、浮世草子の著夥多あり、人皆其妙を湛へて止まず、元祿六年八月十日歿す、年五十二。大坂寺町書願寺に葬る、著す所の俳書には、征木葛。大矢數。博多百合。杉橋集。西鶴五百韻。兩吟一日千句。後大矢數。石車。胴骨等あり。戯作の書は茲に略す。

西角（ゐさい）寺井氏、輪花堂、村雲翁の號あり、京の人、貞兼の門、享保十五年八月八日歿す、年七十。

西鬼（ゐさい）西鶴の門、「竹林」の著あり。

才牛（ゐさい）堀越氏、通稱重兵衛、俳優市

川團十郎の初祖なり、才麿の門、寶永二年二月十九日歿す、年五十四。

才牛二世(さいぎう) 一世の男、二代目市川團十郎、初名栢莚、其角の門、寶暦八年九月二十四日歿す、年七十一。

西吟(さいぎん) 水田氏、落日庵と號す、攝州櫻塚に住す、西鶴の門、著書には 西行櫻。ねざめ廿日集。庵櫻集。蠅味集。彌生山。難波櫻。桑の花。鬼の目等あり。

柴兮(さいけい) 野崎氏、通稱治之助、東京牛込の薪炭商なり、秋聲會に屬し、史傳の研究に明らかなり、明治四十二年一月三十一日歿す、年三十三。

西國(さいこく) 西鶴の門、豊後の國の桑門なり、花見數寄。西國七部集の著あり。

再兒坊(さいじぼう) 加藤氏、玄武坊門。

宰陀(さいだ) 小宮山氏、百老齋、十二庵の號あり、裔白門、或云支考門さ、元文三年九月七日歿す、年六十四。

西治(さいぢ) 西鶴の門、俳諧新附合を著す。

左逸(さいつ) 淺見氏、田鶴樹の男、反故庵二世なり。

西奴(さいど) 伊勢山田の人、初め乙草さいふ、烏醉の門にして、鳴立庵六世さなる、大藏流の能狂言を善くし、又普賢流の茶事に精し、寛政五年八月十二日歿す。

宰馬(さいば) 尾州の人、曉臺門、天明二年三月二日歿す。

西馬(さいば) 富處氏、通稱豊三郎、惺庵さ號す、上州高崎の人、本さ左官職なりしが、逸淵の門に入り俳師さなる、弘化元年薙髪して自喚居士さ呼び、三十九歳江戸に出づ、安政五年八月十五日歿す、年五十一。著書一爺四哲集あり。

才尾(さいび) 佳風を見よ。

西鵬(さいほう) 西鶴を見よ。

西鵬(さいほう) 林氏、梅朝さ稱す、宗因の門、著書に通し馬。精進鱠あり。

塞馬(さいま) 板倉氏、通稱七左衛門、一庵と號す、三河足助の人、卓池の門、慶應三年十一月歿す年八十。

才麿(さいまろ) 椎本氏、(本姓谷) 名は則武、字は少文、蕃椒翁、松笠庵、甘泉庵、狂六堂、春理齋、槃特小僧等の號あり、和州宇陀織田山州公の臣なり、初め西鶴に學び、西丸さ稱せしが、西鶴導きて宗因に見え其門となる、享保十一年江戸に出で、石町に住せしが、再び浪華に歸り天滿に居す、談林中の奇才さ稱せらる、元文二年正月二日歿す、年八十二。(或云元文三年正月六日歿、年六十三)大坂西寺町萬福寺に葬る、著書に椎の葉。ゐくぼ。坂東太郎。椎本語類。松笠竹枝。千葉集あり。

西武(さいむ) 山本氏、通稱九郎右衛門、無外軒、風外軒の號あり、京の人、綿屋を業さす、其宗業さ壬生の神職なり、七歳にして貞徳門に入り、寛永六年十一月西武主唱して妙滿寺に俳席を開く、是俳席の權輿なり、和歌俳諧の傳書、多く此人に傳はるさ、延寶六年二月十八日歿す、年七十三。(大系圖に此歿年は疑ありさいへり) 著書、鷹筑波集。久留流。萩花。砂金袋。同後集。河上草。ついすゑ千。あはゝ千句。いつまで草等あり。

西六(さいろく) 山本氏、西鶴の門、大積手。無分別の著あり。

再和坊(さいわぼう) 尾州の人、龍庵さ號す、五竹坊の門。

草宇(さうう) 蘭山の門、寶雪庵三世なり。

巢鷲(さうが) 杉井氏、名は爲舟、通稱庄太郎、又、竹堂さ號す、江戸の人、巣兆門、書畫を善くす、文政八年五月歿す、年三十。

蒼虬(さうきう) 成田氏、(本姓松田) 通稱久左衛門、加州金澤の藩士、闌更が姪なり、弱冠仕を辭し、上京して闌更に學び、二世芭蕉堂さなる、後年八坂に居を移し對塔庵と號す、天保五年江戸に下り厩橋に假居し、大に鳴る、梅室、鳳朗等さ力を合せて新調を皷吹す、後世天保度の俗俳さ罰らるゝも、其當時の勢力に至ては、實に天下を風靡して流行せり、天保十三年三月十三日歿す、年八十三。京二條妙傳寺に葬る。

蒼狐(さうこ) 小菅氏、名は觀丈、通稱喜平次、笠庵、柳前齋の號あり、江戸の人、活井蓉室の門、龜戸天神に一日五千句を奉納し五千堂さ號す、明和三年十一月六日歿す、年五十五。

草古(さうこ) 京の人、行脚して越後村松の城下に歿すさ、明和九年七月二十三日なり。

霜後(さうご) 増氏、通稱左右六、自然庵さ號す、江戸の人、太無に學び、松籟庵三世さなる、寛政三年十二月二十九日歿す、年八十三。太無發句集の著あり。

巢樹(さうじゆ) 小原氏、名は諒實、字は胎儁、通稱三英、仙臺の人、世々眼科醫を業さす、文政の頃。

漱石(さうせき) 三世桃隣を見よ。

草石(さうせき) 村上氏、通稱五郎右衛門、松齋さ號す、鬱太門、文政十三年六月十日歿す、年八十。

莊丹(さうたん) 高柳氏、通稱新十郎、菖庵、桑窓の號あり、初名を梅朗さいふ、鬱太の門、文化十二年二月十四日歿す、著書に其角集撮解。玄峯集撮解の著あり。

巢鳥(さうてう) 平田氏、通稱甚藏、餘月庵さ號す、加州の藩士、南巢の門、文政三年七月十九日歿す。

巢兆(さうてう) 建部氏、名は英親、字は族父、菜翁、秋香庵、黄雀園の號あり、武藏千住の人、書家山本龍齋が男にして、畫を谷文晁に學び、蕪村が畫風を慕ひ、俳諧に巧みなり、俳諧は春秋庵白雄の門に入て八弟子の稱あり、關屋の里に隱れ、優遊自ら娛しむ、句集に「そばかり」あり、文化十一年十一月十七日歿す、淺草北寺町日輪寺に葬る。著書に 王の春。仙都紀行。おぼろ豆腐。德萬歲あり。

窓巴(さうは) 掬島樓さ號す、薩摩の人、文化八年六月二十日歿す。

双鳬(さうふ) 瀬上氏、瀏岡庵、井下庵、春峨房の號あり、京の人、雲桂門。

桑楊(さうやう) 松陽軒さ號す、江戸の人、書肆を業さす、貞佐の門、寶暦七年十二月十八日歿す。

沙鷗(さおう) 川居氏、通稱井桁屋治右衛門、帶川居さ號す、尾州名古屋の人、大鶴庵竹有の門。

左角(さかく) 馬場氏、壺中園さ號す、支考門。

鷺助(さぎすけ) 木村氏、伊丹の人、宗旦及惟中に學ぶ、著書に古藏集。似林記。扇集。四つの音あり、晩年癩風を病み多年の吟稿を燒捨つと云。

左橘(さきつ) 水足氏、荷旃齋と號す、大坂の人、瀧田大立の門、天香集。古硯屏の著あり。

左琴(さきん) 室氏、通稱藤屋市右衛門、越後高田の人、士朗門、文化十一年歿す。

昨非(さくひ) 乾氏、蘿香軒さ號す、備前岡山の酒商、後大坂に出て俳師さなる、初め立圃門、後宗因に學ぶ、著書に縄すだれ。悲の巻。根合。むしぼし等あり。

左舟(さしう) 川村氏、初名は紫燕、中川貞佐の門、反古文庫の著あり。

定香(さだか) 定門の男、了貼さいふ、通稱八郎兵衛、香藏子さ號す、貞享元年四月二十日歿す、年三十七。

定門(さだかど) 平澤氏、通稱三郎右衛門、薙髪して了榮さいふ、古筆家なり、立圃の

門。延寶六年十月八日歿す、年七十。

定淸（さだきよ）服部氏、通稱は喜三郞、離數堂、鵜鶴子の號あり、京の人、初め貞德門、後立圃に從ふ、著書に櫻千句。根無草。尾蠅集あり。

定重（さだしげ）𥷌氏、通稱は長兵衛、風船子と號す、京の人、貞德の門。詞の友の著あり。

定武（さだたけ）定淸の男、父に學ぶ。

定時（さだとき）太田氏、通稱は太兵衛、紀州若山の人、貞德の門なり、承應元年江戸に出て萬句を興行す、塵囊集の著あり。

定直（さだなほ）木畑氏、通稱玄佐、備前岡山の人、醫を業とし、宗因に俳諧を學ぶ、著書に兩吟集。春戸曙。朧月夜。五ケ國。卯月まうで等あり。

貞宣（さだのぶ）中島氏、通稱內藏之丞、京の人、貞德の門、初名貞義、又貞長に改む、蝶々子とは別人なり。

貞宣（さだのぶ）蝶々子を見よ。

定宣（さだのぶ）顯成(あきなり)を見よ。

定房（さだふさ）廣岡氏、通稱は紅屋彌兵衛、柳雨軒と號す、令德の門。

定之（さだゆき）南部氏、通稱淸右衛門、貞德の門なり。

定之（さだゆき）神戸氏、東林軒と號す、令德

の門、晩年西武に賴ると、元祿十三年九月六日歿す、年五十。一挺づゝ見の著あり。

三ケ（さんか）木村氏、通稱宗玄、不水子と號す、京の人、初め安靜に敎を受け、中比宗因の流を酌み、晩に蕉風に歸す。

傘下（さんか）尾州名古屋の人、蕉門。

三我（さんが）平野氏、子日庵と號す、幕府の士、消濱庵蛙水の門、嘉永四年八月十五日歿す。

山幸（さんかう）雪穿舍と號す、蓼太の門、安永六年六月歿す。

山輝（さんき）鈴木氏、名は梅見、下總刈谷の人、鳥醉の門、寬政五年二月歿す、年五十九。

傘狂（さんきやう）是什坊を見よ。

三菓（さんくわ）蕪村を見よ。

三化（さんくわ）瓢齋と號す、江戸の人、三世桃隣門。

三貫（さんくわん）寺村氏、名は邦雅、通稱助右衛門、蕪村門にして百池の父なり。

山曉（さんげう）川村氏、通稱日野屋三右衛門、正風堂、閑月庵の號あり、江戸の人、蓼松門。

三四坊（さんしばう）二柳を見よ。

三四房二世（さんしばう）大久保氏、通稱瀧野屋

木右衛門、長風亭と號す、初名扇雀、大阪の人、奇淵の門、二柳が三四坊の號を繼ぐ。

三信（さんしん）竹內氏、通稱市左衛門、一葉子と號す、伊勢松坂の人、貞德に學び、後季吟に從ふ。

杉尋（さんじん）久米田氏、柳居と號す、江戸の人、藤堂家の侍醫、其角の門なり、享保十四年十二月歿す。

三升（さんしやう）市川氏、七代目團十郞の俳號、一に壽海老人と號す、安政六年三月廿三日歿す年七十。

暫醉（ざんすゐ）東本願寺常知上人の俳號なり、蕉門、元祿七年五月廿二日寂す、五十四。

山夕（さんせき）樋口氏、高島玄札の門、元祿時代。

山夕二世（さんせき）桃井氏、鳴蛙井と號す、一世の門。

山夕三世（さんせき）二世山夕の嗣子。

山川（さんせん）寺村氏、通稱彌右衛門、藤堂家の士、其角の門。

三保（さんぽう）堀江氏、通稱八郞右衛門、京の人、貞德門。

杉風（さんぷう）杉山氏、名は一元、通稱鯉屋市兵衛、採荼庵、五雲亭、簑翁、衰杖等の

號あり、江戸日本橋小田原町に住し、幕府の魚御用なり、初め鯉歩と稱し、談林に遊びしが、蕉翁の江戸に來るや、直に其門に入て故老たり、傍ら畫を狩野昌運に學びて善す、享保十七年六月十三日歿す、年八十六。築地門跡地中淨勝寺に葬る、杉風句集世に行はる。著書に杉のゐほり。擇別座敷あり。

山蜂（さんぽう）高橋氏、通稱文次郞、蕉門。

三駱（さんらく）秦氏、雪太郞、振々亭の號あり。蓼太の門。

三惟（さんゐ）菊谷氏、大阪の人、來山、才麿に學ぶ、延享三年六月廿八日歿す、著書に鵜の水。梅の嵯峨あり。

左明（さめい）二世松露庵なり、鳥醉門、寶曆十年八月十三日歿す、年五十。

座來（ざらい）里見氏、遲日庵と號す、上州の人、鳥明の門に入て、四世松露庵となる。

左簾（されん）三浦氏、名は古道、通稱は四郞左衛門、幽雲齋、案渦庵の號あり、江戸吉原の娼家にして、笠家逸志の門に入り、初名鴫之と呼ぶ、後笠家氏を冒し、判者に列す、安永八年十一月廿一日歿す、年六十五。今昔問答の著あり。

左簾二世（されん）笠家氏、（本姓初垣）補蔵

庵、莽花坊の號あり、江戸の人、初名桃義、又貫羅と呼ぶ、一世の門、寬政五年五月廿一日歿す、年六十五。

左簾三世（されん）笠家氏、東雲齋、古常庵の號あり、初名社來、二世の門、文政五年正月廿三日歿す。

左簾四世（されん）笠家氏、麗好堂と號す、明治二年四月四日歿す、年八十餘。

左簾五世（されん）中村氏、景雲齋と號す、四世の門、明治十八年歿す。

左衛門（さゑもん）吉野氏、通稱太左衛門、日本派の俳人、各新聞の選者となれり、大正九年一月廿二日歿す年四十七。

し

士由（しいう）大谷氏、名は交敎、字は久敬、通稱は卓藏、信天巢と號す、世々幕臣なりしが、故あつて仙臺に隱れ高橋東皐に就て俳に遊ぶ、士由性來讀書を愛し經史子集稗官野乘に至るも涉獵せざるものなし、花涇樵話三百卷、槐國餘話若干卷の著ありと、嘉永三年十二月五日歿す年六十三。

士游（しいう）右原氏、優々舍と號す、美濃

の人、獅子門十二世なり、嘉永元年五月十三日歿す、年六十九。

秀億（しうたく）明田氏、春日庵、天目庵の號あり、江戸の人、米仲の門、俳諧葛藤。標雜談の著あり。

秋香（しうかう）井上氏、名は眞則、通稱昌海、連歌師なり、宗因の門。

周牛（しうぎう）砂岡氏、我尙の男。

秋擧（しうきよ）中島氏、通稱大之進、曙庵、呂齋の號あり、三州刈谷土井侯の家士、岡崎に住す、士朗の門、文政九年三月廿九日歿す、年五十。

秋杵（しうきよ）星霜庵と號す、江戸の人、蓼太の門。

秀和（しうくわ）大野氏、炭瓢齋と號す、又相水翁の號あり、江戸に住し、某藩の濱士なりと、似春に學ぶ、正德四年八月十三日歿す、年六十四。

秋瓜（しうくわ）太蕪を見よ。

秋瓜二世（しうくわ）多少庵と號す、江戸の人、初名は止弦、柳居及太蕪に學ぶ、寬政二年二月十一日歿す、著書二季の春あり。

修古（しうこ）宮本氏、文貨舍と號す、京の人、竿秋の門、安永四年八月四日歿す、年五十七。

秀國（しうこく）壽氏、石壽觀と號す、江戸の

人、買明の門、寛政八年六月十八日歿す、年八十六。江戸の幸の著あり。

秋色女（しうしき）江戸日本橋照降町の菓子舗、大目寒玉が妻なりといふ、菊后亭と號し、幼より其角の門に入り、俳に有名なり、其角が點式は此秋色預り、後湖十に讓りしと、享保十年四月十九日歿す、年五十七。

秋色（しうしき）野菊女を見よ。

舟泉（しうせん）永田氏、名は顯治、通稱六兵衛、介石園、流形庵、後凋子の號あり、三州擧母の豪家なり、青年放蕩のため家を逐はれ名古屋に寓す、後復りて家を嗣ぐ、蕉門にて七部集に其句多く出づ、元文二年十月廿七日歿す年八十四。著書に舟泉隨筆。擧母記。三河吟稿。庄司物語。擧母奇聞集。俳諧十百韻。舟泉句集あり。

秀堂（しうだう）大野秀和の男。

周竹（しうちく）清水氏、寸松齋、粥翁と號す、嵐雪の高弟なり、師より點式を附與せられしを、同門吏登に讓り、雪中庵第二世を名告らしむ、正德時代、著書、幾久いたゞき。

周竹（しうちく）平尾氏、寸松齋二世、風一窓の號あり、遠州掛川の士、蓼太の門、著書に五器一具。草鞋供養。蜀川夜話。三吟未來記あり。

秀朝（しうてう）藤井氏、通稱吉左衛門、梅遊子と號す、京の人、梅盛及貞室に學ぶ、明暦年中歿す。

周東（しうとう）片山氏、名は伊織、文月庵と號す、江戸の人、松平丹州侯に仕ふ、寸長の弟、盧元坊門、天明四年六月廿四日歿す。

秋風（しうふう）三井氏、名は時次、梅盛の門、狂遊集の著あり。

秀民（しうみん）片岡氏、通稱大黒屋庄六、螺舍と號す、江戸の人、明治十年十二月二十二日歿す、年五十六。

舟露（しうろ）佐藤氏、有扇の從弟。

周爲（しうゐ）大塚氏、雲石と號す、貞爲の門、松貞より柿園五世を承繼す。

子英（しえい）山本氏、通稱忠兵衛、伊勢松坂の人、江戸に出て丶加友に學ぶ、正德五年六月二日歿す、著書に黄楊枕。花時鳥の著あり。

自悅（じえつ）濱川氏、名は行中、季吟の門、著書に空林風葉集。二日三百韻。花洛六百韻。江戸十歌仙。洛陽集あり。

子葉（しえふ）大高氏、名は忠雄、通稱は源吾、播州赤穗の城主、淺野家の臣、主家退轉の際、浪人して水間沾德の門に入り俳に遊ぶ、元祿十五年大石等と復讐の擧あり、翌十六年二月四日死を賜はり伏刄す、年三十三。

二葉（じえふ）神田貞宣の男。

支考（しかう）各務氏、（一に渡邊氏）美濃國山縣北野の產、黄雲山大智寺の僧、鎭藏主と呼びしが、十九歲寺門を出で、伊勢山田に住し見龍と稱し、醫業をなす、元祿三年涼菟の導きに由り蕉門に入る、獅子庵、瑟々庵、東花坊、西花坊、野盤子、蓮二坊、十一庵、桃花仙、梅花佛、白狂、華表人などの號あり、師歿後蔚然として一家をなし、美濃風を興す、最も俳論に長じ、天稟の才氣に任せて自說を鼓吹す、從て學ぶもの多し、享保十六年六月七日歿す、年六十八、山縣黄雲山大智寺中梅泉院に葬る、著書頗る多く、葛の松原。笈日記。古今俳諧歌解。俳諧十論。續五論。十論爲辨抄。十論拾遺。新百韻。梟日記。東華集。西華集。櫻山伏。そこの花。草枕。寸濃草。露の光。三日月歌仙。家見舞。東山万句。白陀羅尼。南無俳諧。夏衣。貞享式。發願文。梅の別。削かけ。俳諧古今抄。本朝文鑑。和漢文藻。露川貴。難

陳二百韻。蓮の葉風。三千化。桃の首途。藤の首途。東花式。三日月日記。新選大和詞。百花譜。徒然草讃。新百韻。東西夜話。才の學。阿彌陀。阿難話。東山墨直。糸柳。大和助辭詞。蓮二吟集等あり。

紙隔（しかく）板羽氏、京の人、風狀の門、明和四年九月二十三日歿す、年五十一。

子規（しき）正岡氏、名は升、通稱常規、瀬祭書屋主人と號す、伊豫松山の人、東京に出で丶帝國大學に學ぶ、俳諧を研究して、當時格調の卑俗なるを慨し、猿蓑を祖述して一新派を唱ふ、其日本新聞の社員なるを以て、世俗之を日本派と稱し、旗下に聚る青年多し、尋て謝蕪村に私淑し、大に天明の句調を鼓吹す、雜誌「ほとゝぎす」を發行して其名字内に聞ゆ、又寫生文と稱する文章の體を工風し、俳句と相俟て唱道す、旁ら萬葉集の古調を賞して歌道に一革新を企つ、時人皆其風に歸向す、明治三十五年九月十九日、積年の病痾俄に革り歿す、年三十六、北豊島郡田端村大龍寺に葬る、著書に俳諧大要。俳人蕪村。瀬祭書屋俳話。俳句問答。俳諧四年間。春夏秋冬。子規隨筆。同續。俳句帖抄等あり。

似鳩（じきう）瓢堂と號す、大阪の人、似空の門、寛政九年十二月二十三日歿す、年八十。

此筋（しきん）宮崎氏、莉口の男、江湖集の著あり。

紫曉（しけう）宮氏、聽龜庵と號す、京の人、几董の門、師歿後二世春夜樓となる、鐘筑波。夢の猪名野の著あり。

重方（しげかた）望月氏、通稱八右衛門、藪内流茶事の宗匠にて紹佐といふ、貞德に學び、後維舟に從ふ。

重勝（しげかつ）筒井氏、通稱井筒屋庄兵衛、京の書林なり、貞德の門、俳諧濫觴記の著あり。

重樹（しげき）千村氏、美濃の人、貞德門。

重貞（しげさだ）望月氏、通稱庄兵衛、重方の從弟にて維舟門なり。

重似（しげつぐ）谷口氏、通稱十郎兵衛、同和子、樂山子の號あり、定淸に學び、後季吟の門に入り、更に談林に遊ぶ、著書に百人一句。新百人一句あり。

重辰（しげとき）兒玉氏、通稱源右衛門、尾張鳴海の問屋にて蕉門、享保十二年正月朔日歿す。

重俊（しげとし）西村氏、通稱次右衛門、京の人、令德の門、名所附合集の著あり。

重供（しげとも）重貞の兄、維舟門。

重長（しげなが）松江氏、通稱順庵、字は玄丹、宗眠と號し、醫を業とす、維舟門。

重榮（しげのき）竹山氏、燕遊軒と號す、維舟門四重の一人、後立圃門となる、著書短梗集、歌仙發句あり。

重軌（しげのり）一に園友といふ、近江大津の人、鐵砲鍛冶職なり、立圃の門、嗚呼立千句の著あり。

重德（しげのり）ちようとく。

重春（しげはる）野田氏、通稱彌兵衛、京の人、書肆を業とす、貞德の門。

重晴（しげはる）田村氏、通稱甚太郎、不雪子と號す、近江大津の人、西武の門。

重房（しげふさ）京の人、維舟門。

重道（しげみち）木村氏、飯袋子と號す、近江草津の人、梅盛の門。

重滿（しげみつ）乾貞恕の男。

重光（しげみつ）平澤氏、通稱次左衛門、了雪と稱す、京の人、古筆了佐の男、立圃に俳を學ぶ、延寶三年四月十四日歿す、年六十四。

旨原（しげん）小栗氏、通稱次右衛門、伽羅庵、百萬坊の號あり、江戸の人、超波の門、初め其川と呼ぶ、其角の五元集を世

に出せしは此人なり、安永七年六月十六日歿す、年五十四。築地覺龍寺に葬る、著書五元集拾遺。續五元集。玄峰集。俳諧百歌仙。

旨原二世（しげん） 坊城氏、後小栗氏に改む、天府庵と號す、伽羅庵二世にして、水野家に仕ふ、初名九鯉、寛政六年七月七日歿す。

重安（しげやす） 伊勢村氏、通稱宗養、大坂の人、佛工なり、宗因門、糸屑の著あり。

重頼（しげより） 維舟を見よ。

重頼（しげより） 西村氏、通稱善右衛門、後久可と改む、苦竹軒と號す、大坂の人、維舟門、著書に物見車。遠近集。たつき集。湊舟千句あり。

子興（しこう） 井上氏、通稱仁右衛門、響五樓、槇窓の號あり、江戸の人、蓼太の門、文化五年九月歿す。

市貢（しこう） 吹山氏、巨璞堂と號す、京の人、初め蘿石の門、後暮四に師事して石蔭庵を嗣ぎ二世となる、寛保三年正月四日歿す、年五十三。俳諧彼岸の著あり。

而后（じこう） 伊藤氏、名は道喜、暮雪亭と號す、尾州名古屋の人、榎田臥央の門、慶應元年十一月九日歿す。

子珊（しさん） 蕉門、別座敷の著あり。

芝山（しざん） 桐原氏、通稱武助、後三無と云ふ、江戸の人、文政七年九月九日歿す、年六十一。四海句双紙の著あり。

志山（しざん） 關氏、洞齋と號す、江戸の人、六世立志の門、俳諧霜夜塚の著あり。

子雀（しじゃく） 淺野氏、通稱安兵衛、大坂の人、暢好門。

似春（じしゅん） 小西氏、通稱加賀屋三郎右衛門、下總行德の社家となる、季吟の門、享保時代。芝肴の著あり。

旨恕（しじょ） 片岡氏、通稱庄次郎、松舟軒と號す、浪華の人、堂島に居す、季吟に學び、後宗因門となる、難波風。好色旅日記。わたし船の著あり。

之水（しすゐ） 細井氏、通稱忠右衛門、成江堂と號す、京の人、延清の門、寶暦十一年六月二日歿す、年七十三。

之水二世（しすゐ） 一世の男、明和六年九月九日歿す、年四十四。

兒水（じすゐ） 賴山氏、芳樹軒と號す、京の人、言水の門、ひたち帶の著あり。

自笑（じせう） 岡島氏、通稱庄三郎、出羽守氏雲といふ鳴海の刀工なり、蕉門、正德三年正月七日歿す。

自笑（じせう） 上林氏、通稱竹庵、淨雪と號す、宇治の茶園の主、晩年白川に閑居す、季吟の門、いせの記の著あり。

自笑（じせう） 加賀金澤在宮越の人、貞享時代なり、蕉門。

自笑（じせう） 京の書肆、八文字屋八左衛門の四代目にして、其笑の男、白露の弟なり、蕪村門、文化中歿す。

四夕（しせき） 高橋氏、通稱宗知、幕府の士、孤月の門、大白堂七世なり、明治四年八月十二日歿す、年六十一。

咫尺（しせき） 寥和を見よ。

士川（しせん） 松岡氏、通稱は傳助、五仙窓と號す、攝津伊丹の酒造家なり、几董の門。

似船（じせん） 富尾氏、名は重隆、通稱は彌一郎、蘆月庵、柳葉軒の號あり、京の人、安静の門、二世似空軒となる、寶永二年六月十六日歿す、年七十七。著書。茜代水。隱蓑笠。蘆花集。堀川水。勢田長橋。大上戸。安樂音。火吹竹。入相鐘。如意寶珠。千代の正月等あり。

似仙（じせん） 高瀧氏、（陸山崎氏）通稱正左衛門、名は安之、益翁といふ、泉州堺の人、初め令德に學び後宗因の門となる、著書に落花集。犬ざくら。兩吟千句。濡がらす等あり。

二川（じせん） 池田氏、純奴齋と號す、越中富山の藩士、蕉門、享保二年十月九日歿す。

之道（しだう） 諷竹を見よ。

士竹（しちく） 安藤氏、名は安貞、通稱は近江屋武兵衛、緑々齋と號す、大阪の人、士朗の門。

指直（しちよく） 矢部氏、通稱槇藏、桃支庵と號す、紀州田邊の藩士永機に學んで世に行はる、明治卅二年十一月六日歿す年七十。

此通（しつう） 入木氏、京の人、丈石門、明和二年三月廿八日歿す、年五十八。

十口（じつこう） 青柳氏、意心齋と號す、京の人、中川貞佐に學び、初名廣瀬貞恕と云ふ、師に從ひ讃岐に赴き、止ること九年、寶暦癸酉京に歸る、暫く佐德と名乘しが十口と改む、韻鏡の學に通ず、晩年清古閑人と號す、寛政三年七月廿一日歿す、年六十九。著書に四季出會。旅亭記。秩穗。いさまかき。生殖箋。禽獸解。行事錄。陸の舞。閑居の友。拾遺譜。後拾遺譜あり。

耳得（じとく） 力石氏、通稱猿之進、雪爪園と號す、駿府の士、蓼太の門、芙蓉文集の著あり。

信夫（しのぶ） 待必庵と號す、蓼太の門、明和二年歿す。

史邦（しほう） 根津氏、通稱宿之助、知雨亭と號す、京の人、仙洞御所に仕へ、後年浪人して江戸へ來ると蕉門の耆宿なり。

史邦（しほう） 中村氏、通稱春庵、尾張名古屋の人、醫を業とす、蕉門に學び名あり、小文庫の著あり。

四方太（しほうだ） 坂本氏、通稱四方太、因州鳥取の人、明治卅二年帝國大學國文科を出て同圖書館に勤務す、子規派の俳人にて寫生文に妙致あり、大正六年五月十六日歿す四十五。

市楓（しふう） 松原氏、初名、丶木（チユボク）と云ふ、市貢の門、石壽堂三世なり、乘合舟。鷲の響の著あり。

拾翠（しふすゐ） 不白軒、樂山觀と號す、嵐雪の門、寶暦九年の秋歿す。著書ひろ葉。

十丈（じふぢやう） 京の人、梅室門、文政十三年歿す。

子鳳（しほう） 澤井氏、楓魚堂と號す、京の人、蓼里の門、寛政元年十月十六日歿す。

示蜂（じほう） 植村氏、通稱幅左衛門、伊賀上野の人、蕉門。

晋阿（しんあ） 鶴見氏、堤堂と號す、一漁の男。

晋阿二世（しんあ） 杉浦氏、相應庵と號す、初名泰川、江戸の人、三世一漁の門。

信安（しんあん） 植村氏、棹歌齋、又芥舟の號あり、江州水口の人、信德の門、兼て狂歌を善し、茶事香道に精し、元文二年八月十七日歿す、年六十八。著書に花拾遺。芥舟。棹歌齋國筆あり。

心友（しんいう） 中田氏、鶉巴軒と號す、江戸に住し、調和に學ぶ、後伊勢山田に移り、足代弘氏と親み誹林に變す、著書に御田扇。江戸宮笥。伊勢みやげあり。

信我（しんが） 白壽坊を見よ。

信雅（しんが） 高橋氏、文友齋と號す、出羽の人、信安の門、扁朗詠の著あり。

晋我（しんが） 早見氏、下總結城郡本郷の人、薙髮して北藤といふ、其角門なり、延享二年正月廿八日歿す、年七十五。

晋我二世（しんが） 一世の男、初名桃彥、早野巴人の門、歿する年九十。

蓁峨（しんが） 矢島氏、名は行篤、通稱敬藏、幕府小普請組の士、蓁々の門に入り、初名桃丘庵語石、或は成隣梅居と呼ぶ、向旭樓を嗣ぎ、素仙堂二世となる、天保十四年七月七日歿す。

心祇（しんぎ）榊氏、雪堂、燕下庵と號す、江戸淺草藏前の札差、前名佳丁、後魚貫、遂に心祇と名告る、祇空の門、著書に新句兄弟。東千句。伏證說集あり。

蓁鮁（しんぎ）木澄氏、名は倹國、通稱五郎兵衛、紅日庵と號す、萬舞の男、四世今日庵となる、蓁峨門。

蓁々（しんしん）馬場氏、名は正督、通稱金之丞、桃葉庵、萬里軒、蓮池翁の號あり、初め無物に學び、玄武坊に從ひ、更に萬三に就き、七世其日庵の跡を繼ひ、八世其日庵となり、素英と呼び葛飾風に變す、天保十五年二月十三日歿す、年六十八。蓮池雜談其他著書多し。

神叔（しんしゆく）青木氏、季吟の門、江戸に住し神道者なり、其角時代。

信序（しんじよ）江戸の人、二世湖十の門、延享二年十月歿す。

臣石（しんせき）木村氏、桂花亭と號す、京の人、練石の門、明和元年十月十三日歿す、年五十二。

信徳（しんとく）伊藤氏、通稱助左衛門、竹杖子と號す、京の人、初め貞德に學び、西武、梅盛等の敎を聽き、令德に就て梨栫園の號を承く、中頃京の談林に移り、尋て芭蕉等の徒に交り蕉風に化す、元祿十一年十月十三日歿す、年六十六、著す所、桂姿。京三吟集。七百五十韻。江戸三吟。六百五十韻。白重。五畿晉。浮世姿。胡蝶列官等あり。

心非（しんぴ）東儀氏、通稱仁右衛門、峰月居と號す、幕府の士、成美の門なり、文政八年十月十一日歿す。

津富（しんぷ）島氏、奸齋、又君山と號す、江戸の人、蒼狐に學び、後紫外門となる、寛政九年十二月廿一日歿す、年六十五。

蓁阜（しんぷ）小田切氏、通稱清十郎、幕府御徒目付なり、蓁々に學び、楽仙堂三世を繼ぐ、嘉永七年八月朔日歿す、年五十二。笑吹草の著あり。

晉風（しんぷう）柳川氏、攝津の人、初不卜の門、後其角の門に入る、享保十一年十一月七日歿す。

新甫（しんぽ）海老原氏、通稱源吾、牛宵居と號す、江戸吉原巴屋の樓主、蒼虬の門、輕口の上手にして、人綽名して鐵砲源吾と呼ぶ、晩年薙髪して日阿と號し、現成上人の徒弟となる、元治元年一月十七日歿せり。蒼虬發句集。安政附合集。狗兒草の著あり。

晉明（しんめい）几董を見よ。

晉流（しんりう）藤井氏、名は左膳、簸月洞、青青堂の號あり、上野の人、江戸に出て其角に學ぶ、寶暦十一年十一月廿五日歿す、年八十二。

四明（しめい）中川氏、名は重麗、小自在庵と號す、京の人、一に霞城と號し京都新報の主筆たり、獨逸語の造詣深く、子規派の俳人として京西の重鎭たり、雜誌懸葵を主幹し 淸新富麗の 吟藻を示す、大正六年五月十六日歿す年六十八。著書に俳諧美學。四明句集あり。

四明（しめい）蕪村を見よ。

成安（じやうあん）泉州堺北の庄正法寺の住職なり、貞德の門、「うづみ草」の著あり。

正友（しやういう）伊勢山田の人、杉田望一の弟なり、江戸に出て荒木加友の門に入り、後田代松意と心を合せ江戸談林を起す。著書に伊勢長鯛。神法樂集の著あり。

正在（しやうざい）小原氏、名は隆光、京の人、西武の門。

正式（しやうしき）池田氏、和州郡山の藩、中足輕なり、貞德に學び兼て狂歌を善くす。

正宣（しやうせん）まさのぶ。

常仙（じやうせん）志村氏、孤鶴軒、二橋庵、青蓼堂、蓮葉庵の號あり、江戸の人、沾州の門、寛保四年二月（一に延享元年二月）歿す、著書に續の筏。鳴むかし。千々の秋あり。

常仙二世（じやうせん）初世の二男、蓮葉庵と號す、存義の門。

正巴（しやうは）下村氏、通稱和泉、京の人、小紅屋といふ染屋にして、下村春坡が叔父なり、几董の門。

正伯（しやうはく）鴻本氏、京の人、西武門。

尙白（しやうはく）江左氏、名は三益、幼名虎助、芳齋、木翁、老贅子の號あり、伊勢の人、大津に住し醫を業とす、始め貞室に學び、後蕉門に遊んで高足の弟子なり、享保十七年七月十九日歿す、年七十三。著書に、夏衣。ひとつ松あり。

常牧（じやうぼく）繁田氏、名は宗雅、闌化堂と號す、京の人、常長の門、著書に、萬歲樂。此花集。冬籠。遠歩行あり。

常陽（じやうやう）木戸氏、江戸根岸の稲荷の神官、調和門、享保中歿す。

常和（じやうわ）下鄉氏、名は昌雄、字言夫、晩秀齋、和菊如羽の別號あり、通稱次郎八蝶羽の七男にて千代倉家五世を相續す、也有門、天明五年二月二日歿す、年七十一。

車蓋（しやがい）京の人、闌更門なり、著書に發句三傑集。七部拾遺。枝の白實。蕉門格外辭あり。

雀庵（じやくあん）守田氏、通稱鈴女、東垣舍と號す、明治八年十二月十六日歿す、年八十。

若翁（じやくをう）長月庵と號す、伊賀上野の人、文化十年歿す。

雀志（じやくし）齋藤氏、通稱銀藏、雪中庵九世と稱す、梅年の門、三井銀行に勤務す、俳書を多く蓄藏したるを以て知られたり、明治四十一年十二月廿三日歿す年五十八。

謝大（しやだい）長島氏、朝榮軒と號す、沾州の門。

洒堂（しやだう）珍碩を見よ。

洒竹（しやちく）大野氏、名は豐太、熊本の人、性俳諧を好み、沒頭して其身在學中に拘らず 其雅名は都下に喧傳せらる、帝國醫科大學を出て大野病院を建設し泌尿器科の治療に當る、俳書を蒐集して其富五車を凌ぐ、大正二年十月十二日歿す年四十四。著書には與謝蕪村。俳諧略史。俳諧系圖。俳諧年表等あり、校訂したる故人の覆刻書は俳諧文庫中に多くあり。

社麥（しやばく）坂部氏、江戸の人、四世沾山門。

社麥二世（しやばく）磯氏、（一に堀氏）深茂亭、八千房の號あり、大坂の人、淡々門。

車用（しやよう）村田氏、幅湊亭と號す、京の人、丈石の門、安永五年六月二十八日歿す、年五十八。著書におのが光あり。

舍羅（しやら）榎並氏、大坂の人、始め之道に學び、後蕉門に入る、隱者なり、著書に蓑笠。あさの實。柴橋。荒小田。追鳥狩あり。

沙羅（しやら）堀口氏、通稱六左衛門、玄樹、雪星觀の號あり、江戸の人、鑿太の高足たり、沙羅句集あり、文化十三年十一月歿す、年六十九。

車來（しやらい）伊賀の人、蕉門。

壽角（じゆかく）立場氏、千秋堂の號あり、不角の二男、明和六年二月十五日歿す。

種寛（しゆくわん）朝江氏、名は忠榮、通稱は小左衛門、梅遊軒と號す、京の人、立圃の門、著書に詞友集。同糟。誘心集。俳諧大概。彩見草。俳諧作者の名寄あり。

朱人（しゆじん）鳴立庵二世と云、姓氏傳統を詳にせず 虛無僧なりと云ふ、享保十八年七月十五日歿す。

朱拙（しゆせつ）四方郎と號す、豊後日田の人、蕉門、享保八年八月三日歿す、著書、梅櫻。初便。星合。おくれ雛。けふの昔。

壽道（じゆだう）大澤氏、武州川越の藩士、溪齋の門、鳴立庵十一世を嗣ぐ、明治十八年五月二十四日歿す。

出紫（しゆつし）其角門、又深川の著あり。

朱廼（しゆてき）寺島氏、甘露齋と號す、蕉門、元祿中四十三にして歿す。

朱明（しゆめい）宮澤氏、通稱銕一郎、召南寺、青果等は其別號なり、東京の淺草銀行に勤務す、國民英學會、鳴星學校に學び佛語に通ず、多趣味にして、俳句、繪畫、玩具等に一隻眼を有す、曾て梓石と共に新撰佛語辭典を著はす、大正五年四月十三日歿す年三十一。

春悅（しゆんえつ）寶田氏、惟精軒と號す、江戸の人、完來の門、文政九年正月九日歿す。

春耕（しゆんかう）千葉氏、石橋岡と號す、大坂の人、姫州の門、著書に糸切鋏。無靈蔵。八重垣日記あり。

春湖（しゆんこ）橋田氏、通稱幸藏、小笠庵と號す、甲州の人、始め嵐外に學び後江戸に出で禾木に從ふ、維新後凍川佐賀町に住し行はる、明治十九年二月十日歿す年七十三。

春鴻（しゆんこう）堀口氏、上總の人、白雄に學び、白門八大家の一人也、鳥酔の露柱庵を嗣で三世となる、文政中歿す。

舜山（しゆんざん）帶金氏、江戸の人、初才慶の門に入り茂慶と呼ぶ、後三田白峰に從ふ。

春人（しゆんじん）通稱直右衛門、伊賀上野の人、鍛冶工なり、蕉門。

春樹（しゆんじゆ）山崎氏、名は三綱、字は如鼎、通稱は彌兵衛、寶山居と號す、江戸の人、補陶を以て業とす、後俳師となる、天保二年四月廿四日歿す、自筆の集句、狗杖一卷世に行はる。

春星（しゆんせい）蕪村を見よ。

春澄（しゆんちやう）青木氏、名は貞悟、通稱庄右衛門、印譽軒、素心子の號あり、京の人、維舟の門、（大系圖に貞恕門とす）正徳五年七月二十日歿す、年六十三。著書に二日三百韻あり。

春坡（しゆんぱ）下村氏、名は兼邦、通稱熊藏、還日庵と號し、京の人、大丸屋と稱し有名なる織物綿問屋なり、柳馬場押小路に住す、几董に學び入室の弟子たり、文化十一年十月二十二日歿す、年六十一。

春帆（しゆんぱん）富森氏、名は正因、通稱助右衛門、播州赤穂の浪士、子葉と共に浩徳の門に遊ぶ、復讐の後細川邸に伏罪す、年三十四。

春明（しゆんめう）生川氏、名は正香、通稱三郎助、好閑亭と號す、伊勢津の人、藪種商にして學和洋を兼れ、好古の僻あり、俳諧大系圖。近世女髪風俗考の著あり、明治二十三年八月七日歿す、年八十七。

順也（じゆんや）内田氏、通稱平吉、京室町に住す、梅盛の門、五節句の著あり。

春雄（しゆんゆう）杉本氏、青々館と號す、京の人、隆志の門。

春來（しゆんらい）水野氏、夜月庵と號す、初名山花、初世存義の門。

春倫（しゆんりん）濱田氏、大阪の人、宗因門。

春路（しゆんろ）倉橋氏、春冬舍と號す、壹岐石田郡の人、上野仁井田に住す、春湖の門。

朱陽（しゆよう）黒澤氏、還日庵と號す、江戸の人、冬暎の門。

珠來（しゆらい）洪氏、名は師光、字は公賓、桂花園、一石房、百花主人の號あり、江戸の人、初名魚浪、二世湖十の門なり、

天明七年二月廿九日歿す。著書に七異跡集。

子鷹（しよう）村松氏、六花坊と號す、江戸の人、初世沽山に學び、後乾什門となる。

子鷹二（しよう）一世の養子、二世六花坊、又寸歩庵と號す。

子鷹三（しよう）二世の子。

松意（しよい）田代氏、名は秀延、川草子、談林軒の號あり、江戸の人、延寶三年宗因を大阪より招き、友人正友と共に江戸談林を興す、之を飛體と名付け、一字の働き、一句の餘情頗る衆目を驚かし、大に流行す、其著書に談林十百韻。幕つくし。軒端の獨活あり。

松延（しようえん）春陽舍と號す、松雨の門、雪中庵八世を名告る、天保七年九月六日歿す。

松江（しようかう）本間氏、通稱は道悦、自準と號す、常陸潮來の人、醫を業とす、芭蕉行脚の時、此家に杖を留む、子孫皆俳好の士なり。

松兄（しようけい）尾州名古屋正覺寺の住職、士朗の高弟にして、士朗常に作句を此人に商る、松兄死して士郎の句光を失ふと評せらる、文化四年七月十七日寂す。

松堅（しようけん）宮川氏、名は正行、通稱は字兵衛、柿園庵、松亭子、道柯居士の號あり、初名を正由といふ、貞德の門なり、年二十の時師翁歿し、會德に就て學ぶ、享保十一年二月廿三日歿す、年九十六。著書に俳諧眞材。あはれ千句。和漢千句。歌仙自註あり。

松後（しようご）佐々木氏、通稱三太夫、備前の人、五竹坊の門、著書に今は昔。二見の花鳥。不二の夢あり。

松泉（しようせん）兒玉氏、（一に福井氏）松春の從弟なり、淡々の門、元文元年九月三日歿す、年五十三。

松貞（しようてい）加藤氏、京の人、貞爲の門、柿園四世なり、享保十五年四月七日歿す。

松頂（しようてう）管喜田氏、幕府の士、金令舍三世となり、鳴立庵十二世を嗣ぐ、明治廿二年八月歿す。

松瑟（しようつ）窪田氏、四正堂、員月翁の號あり、江州の人、大阪に住す、正秀門、寛延三年八月十五日歿す、年七十六、著書に水の友。雪なだれ。不斷櫻あり。

松圃（しようほ）山本氏、江戸の人、天明五年歿す。

如雲（じよう）如泉の門、五百三歌仙の著あり。

升六（しようろく）黄花庵と號す、大阪の人、二柳の門、文化十年九月三日歿す、著書に冬の日注解。花見次郎。乙丑句集。

松唯（しようゆい）内山氏、通稱定七、桃和亭と號す、鵜師なり、蓼噦の門、今日庵六世を嗣ぐ。

松翁（しようおう）立圃一世を見よ。

紙園拾遺物語あり。

松春（しようしゆん）宮森氏、名は正因、通稱助右衛門、播州赤穂の浪士、子葉と共に浩徳の門に遊ぶ、後細川邸に伏罪す、年三十四。

春明（しゆんめう）生川氏、名は正香、通稱三郎助、好閑亭と號す、伊勢津の人、藪種商にして學和洋を兼れ、好古の僻あり、俳諧大系圖。近世女髪風俗考の著あり、明治二十三年八月七日歿す、年八十七。

順也（じゆんや）内田氏、通稱平吉、京室町に住す、梅盛の門、五節句の著あり。

春雄（しゆんゆう）杉本氏、青々館と號す、京の人、隆志の門。

春來（しゆんらい）水野氏、夜月庵と號す、初名山花、初世存義の門。

春倫（しゆんりん）濱田氏、大阪の人、宗因門。

春路（しゆんろ）倉橋氏、春冬舍と號す、壹岐石田郡の人、上野仁井田に住す、春湖の門。

朱陽（しゆよう）黒澤氏、還日庵と號す、江戸の人、冬暎の門。

珠來（しゆらい）洪氏、名は師光、字は公賓、桂花園、一石房、百花主人の號あり、江戸の人、初名魚浪、二世湖十の門なり、

松翁（しようをう）河野氏、通稱主馬、月堂と號す、江戸芝神明宮の祠官、三世桃隣の門。

如行（じよかう）近藤氏、美濃大垣の人、蕉門なり、後の旅の著あり、寶永頃歿す。

諸九尼（しよきうに）筑前の人、浮風の妻、湖白庵と號す、夫歿して諸國を行脚す、天明元年九月十日歿す、年六十八。

如圭（じよけい）芝原氏、獅子庵と號す、江戸の人、鶴口門、文化六年八月十八日歿す、年四十一。

助叟（じよさう）片山氏、椿木亭と號す、長崎の人、常矩の門、師の歿後大淀三千風に從ふともいふ、正德五年八月十二日歿す。著書に京の水あり。

如自（じよじ）石井氏、嘲鷗子と號す、肥前佐賀の人、初め梅盛に學び、尋で立圃に從ひ、後談林に入て宗因門となる、一時雨の著あり。

如春（じよしゆん）伊藤氏、京の人、季吟の門、延寶三年歿す。

如川（じよせん）高松氏、通稱は龍策、京の人、醫を業とす、始め梅盛の門、後常矩に從ふ。

如泉（じよせん）齋藤氏、眞珠庵と號す、京の人、初名朝三といふ、梅盛の門、歷代滑稽傳には常矩門とす、最も漢和に高名なり後談林に遊ぶ、正德五年八月十七日歿す、年七十二、著書に重寶摺火打。松の榮。日本國。池心亭。漢和千句。狂歌句式。番匠童。俳諧重寶記等あり。

如貞（じよてい）井口氏、大阪の人、令德の門。

徐風（じよふう）長谷川氏、通稱其助、四世の鵲庵なり、慶應元年十月二日歿す、年七十。

序令（じよれい）石内氏、通稱四郎兵衛、如雲軒と號す、江戸魚河岸の魚問屋なり、其角の門。

士朗（しらう）井上氏、通稱專庵、琵琶園、朱樹叟の號あり、尾州名古屋の人、醫を以て業とす、國學を本居宣長に學び、繪畫を范古に承け、俳諧は曉臺門下の高足たり、寬政文化の頃月居等と名を齊うして鳴る、文化九年五月十六日歿す、年七十六。名古屋寺町照運寺に葬る、枇杷園句集。枇杷園七部集。士朗隨筆。鵜芝集。橘日記。若合草の著あり。

自樂（じらく）增田氏、久遠堂と號す、大阪の人、後に長柄の源立寺に落飾して僧となる、長齋の門、享和三年五月十一日寂す。

白雄（しらを）加舍氏、通稱は五郎、春秋庵と號す、信州上田の藩士、加舍六郎左衛門が二男、（一說に松平伊賀守の老臣、松平八左衛門の次男にて、俗稱新八と云ふ出で丶加舍氏を嗣ぐと）、元文四年江戸に生る、初め三世松露庵烏明の門に入り、昨烏と呼びしが、大磯鳴立庵に至り、烏醉の直弟となり薪水に侍す、初め露柱庵を繼ぎ、烏醉の歿後、百明より鳴立庵を承て五世となり、志ら尾と名乘る、既にして伊勢風の蕉風に合はざるを慨し、別に寂栞の一體を開き、一家をなして春秋庵白雄といふ、遂に江戸俳壇の先驅となり、門に集るの士頗る多し、寬政三年九月十三日歿す、年五十三（或云五十七）品川海晏寺に葬る、遺著には俳諧寂栞。白雄夜話。五百題あり、皆門人の後に輯集したるものなり。

白雄二世（しらを）或は白雄坊昨烏と云ふ。一號は醉石館、江戸麻布龍土に住す、師歿後星布女などにて取立しと云ふ、書は先師に似たりと、發句五百題を世に出せしは此人なり。

二柳（じりう）安井氏、七杉堂と號す、越中富山の人、（或云加賀の人）初め三四坊と呼び、桃妖に學び桃居と稱し、不二庵の號あり、後希因に從ひ二柳と云ふ、大

阪に出で丶鳴る、享和二年十二月廿八日歿す、年八十一（或は云織田氏、不二庵愼齋と號し、桃居三世なりと、又乙人二柳庵と號するものあり、同人か、將た別人か、後考を俟つ）著書に菊の香。其角直指傳。吟草。夜話等あり。

す

捨女（すて）田氏、丹波國水上郡柏原の人、宗族田義園に嫁し、妙齡にして寡となる、剃髮して妙融と呼ぶ、幼くして天稟の才あり、季吟及松堅に學び、奇句多し、後播州網干村に隱れ不徹庵を結び、盤桂禪師の法弟となり貞閑尼と呼ぶ、元祿十一年八月十日歿す、年六十五。

寸長（すんちやう）片山氏、名は邦敎、百草園、種杏庵の號あり、江戸の人、松平丹州侯の家臣、廬元坊の門なり、寶曆十一年六月二十七日歿す、年四十九。著書に俳諧飛鳥山。雁のつてあり。

寸來（すんらい）梅若氏、通稱吉之丞、咄々庵と號す、能役者なり、寸長の門、文化八年八月十五日歿す、年八十。

隨有（すゐいう）瀧川氏、昌樂、如水子の號あり、隨流の門、師の破邪顯正に次で猿鎭を著す。

椎蔭（すゐいん）山本氏、通稱啓之助、駿河の人、江戸に出で對山の門に入り雪中庵六世となる、明治七年一月十八日歿す。

翠羽（すゐう）木村氏、通稱岱藏、幕府御廣敷御用の六尺なり、無物の門に入て二世葛庵となる、天保五年三月十日歿す。

水雲（すゐうん）名は安朝、阿波の人、季吟の門、著書に俳諧鳥合。大長刀あり。

翠兄（すゐけい）杉野氏、通稱次右衛門、銀雨亭と號す、常州の人、鰲太門、文化十年十月二十七日歿す。

隨古（すゐこ）湯淺氏、長松庵と號す、京の人、初め江戸に路道に學び、後巴人の門となる、安永二年四月二十一日歿す、年五十四。

水國（すゐこく）雲津氏、通稱伊勢屋佐次兵衛、後鵜隣と改む、江戸大門通花町の銅鐵商なり、壯歲三浦屋高尾と契り、家を番頭某に委し、山伏井戸に僑居す、始め和散齋立志に學び立舞といひ、後沾洲に從ひ、落髮して水國と稱す、兩國橋町に移り、享保十九年五月八日歿す、年五十三。著書に身程の笠。身程の日記あり。

瑞信（すゐしん）山城北岩倉の僧、甫庵と號す、西武の門。連俳合掌の著あり。

翠扇女（すゐせん）二代目團十郎が妻、其角の門、安永四年七月四日歿す。

水竹（すゐちく）福谷氏、通稱藤右衛門、冷石舍と號す、三河吉田驛の人、鵜田卓池の高弟、嘉永三年正月十二日歿す、年六十四。

水巴女（すゐは）立山氏、名は美江、洋々園と號す、鹿兒島の人、三絃に巧みに、伊勢の春渚に就て俳諧を學ぶ「干潟にも白波たつる千鳥かな」の句によりて千鳥庵の號ありと、文化二年正月十五日歿す年四十四。

隨流（すゐりう）中島氏、名は勝直、通稱は源左衛門、松月庵と號す、京の人、西武の門、當時菅沼高政が談林の跋扈するを憤り、破邪顯正を著し之を難す、寶永五年二月十一日歿す、年八十、著書に鷲笛。百千鳥。紙屋河。水車。二ッ盃。破邪顯正。猿鎭。貞德永代記あり。

翠柳（すゐりう）山中氏、花木亭と號す、京の

人、知木の門、明和元年十月十二日歿す、年七十二。

せ

樨柯（せいか）松本氏、名は元順、紫花園と號す、醫を業とす、秋耳の門にて東杵庵二世となる、天保十一年二月二十一日歿す、年五十六。著書に俳諧多識篇。猿蓑さがし。五元集小鏡。似猫あり。

青峨（せいが）鴛田氏、六鎰仙、春來軒、百花窓、牡丹堂の號あり、江戸の人、沾徳の門、享保十五年十一月十五日歿す。著書、東風流。續江戸筏。

青峨二世（せいが）前田氏、二柳亭、紫子庵、點竇、春來窓の號あり、一世の門、初名泰室といふ、延享三年二月十五日歿す、年四十九。著書に江戸新八百韻あり。

青峨（せいが）田村氏、通稱權右衛門、古樗亭と號す、上野の代官にて宜麥に學び、三世老鶯巣の號を讓らる、天保四年二月二十日歿す。

栖鶴（せいかく）巣居と號す、江戸の人、二世盤谷の門、明和六年歿す。盤谷四季發句の著あり。

清雅女（せいがぢよ）森氏、栞庵と號す、芝區門前町の質屋の主婦なり、曾て某家の奥殿に祐筆として仕へたりと、書を能くす、幹雄の門、明治四十五年四月十六日歿す年五十九。

青牛（せいぎう）好文軒と號す、江戸の人、筆道指南を業とす、白雄の門、寛政九年正月廿九日歿す、年七十五。

青牛（せいぎう）東氏、名は盛庸、通稱は市左衛門、鵜鳴樓と號す、仙臺の藩士、東皐門。

靜管（せいくわん）桑島氏、蓬庵、青城山人と號す、甲州の人、醫を業とす、五味可都里に學ぶ、文政十一年九月十一日歿す、年七十九。

清佐（せいさ）北田氏、京の人、松貞の門、享保七年九月十八日歿す、年四十七。

青山（せいざん）放雀園二世なり、長翠の門。

清秋（せいしう）本多丹後守、名は忠永、隨翁と號す、伊勢神戸の城主、文化十四年九月十七日卒す、年九十四。

醒雪（せいせつ）佐々氏、名は政一、京都の人、明治廿九年帝國大學國文科を出て、雜誌文藝界の主筆となる、達俳小史を著はして其名同人間に知られ、後俗曲の研究に沒頭し文學博士の學位を享く、高等師範學校に教授たり、大正六年十一月二十五日歿す年四十六。著書は小史の外、名家俳句集。俗曲評釋。醒雪遺稿あり。

靑人（せいじん）上島氏、攝州伊丹の人、維舟門なり、後世の俳諧の野鄙に流るゝを厭ひ、交を絶ち和歌に遊び平間長雅の門に入るといふ。

盛住（せいぢう）筒井氏、京の人、巴人門、安永五年八月二十五日歿す、年六十六。

盛住二世（せいぢう）初世の門。

生德（せいとく）池田氏、江戸の人、二世祉參の門、松籟庵を嗣ぐ。

星飯（せいはん）種豆庵と號す、初め柳居の門、師歿後烏醉に師事し西國行脚に從ふ、臥雲禪師の法弟たり、寶曆十二年四月寂す。

成美（せいび）夏目氏、名は包嘉、字は萬齡、通稱井筒屋八右衛門、隨齋、贅亭、大必歡人、四山道人、萬齡房の諸號あり、江戸淺草藏前の札差なり、父宗成より俳を好み、和漢の學に精しく、當時俳人中の博識を以て推され、乙二道彦を併せて寛政の大三家と稱せらる、脚疾を患へ多田森に退隱し、四方の風交を受く文化十三年十一月十九日歿す、年六十八。下谷山崎町蓮華寺に葬る。句集はら〳〵傘。及成美家集あり、自著にははら〳〵傘。四山稿。隨齋諧話。七部集註解。淺草はうこ。一夜流行。萩まつり。魁春帖あり。

星布女（せいふぢよ）榎本氏、絲明窓と號す、武州八王子驛の人、初め烏醉に學び、後白雄に從ふ、白雄の勸めにて松原庵三世となる、文化十一年十二月二十八日歿す、星布發句集世に行はる。

星譜（せいふ）河角氏、通稱吉兵衛、大坂の人、奇淵の門、二柳の七杉堂二世を繼ぐ。

清風（せいふう）鈴木氏、羽州尾花澤の人、京に住す、宗因の門、著書に由加多郷廊。稲むしろ。おくれ双六。吐授鶴。あやしき。打曇り砥。俳諧一つ橋。

清民（せいみん）山邊氏、名は頼之、是非庵、觀山居の號あり、奧州須賀川の人、父を應之と呼び共に俳名高し、慶應三年十二月九日歿す、年七十五。

清明（せいめい）通稱錢屋七郎兵衛、雪の門と號す、嘉永五年五月六日歿す。

青蘿（せいら）松岡氏、通稱鍋五郎、幽松庵、山李居士の號あり、播州姫路の藩士松岡門太夫の三男、竹澤氏を嗣ぐ、十三歲故鄕を出て江戸に至り、玄武坊の門に入る、中比京に住し、機に乘して革新の旗を樹つ、栗の本、又栗庵と號し、一家を成す、後年故鄕に歸り木姓に復し、加古に住し加古に終る、青蘿句集世に行はる、寛政三年六月十七日歿す、年五十二。加古高念寺に葬る。蛸壺集の著あり。

青流（せいりう）祇空を見よ。

成屋（せいをく）長坂氏、青苔館と號す、沾州の門、初名仙柿といふ。

蕉雨（せうう）櫻井氏、通稱三郎右衛門、小麗庵、權堂、尼椿老人の號あり、信州飯田の人、士朗に學び、八巣の號を讓らる、江戸に住す、文政十二年五月七日歿す。

逍山（せうざん）井上氏、櫻戸と號す、京の人、曉山の門、享保五年八月十五日歿す、年六十四。

嘯山（せうざん）三宅氏、名は方隆、字は文中、滄浪居、葎亭の號あり、京の人、碩儒三宅觀瀾の同族たり、俳諧を宋屋に學び、蕪村等と相和して復古に力を用ふ、寛政元年四月十四日歿す、年八十四。山城內野立本寺に葬る、著書に俳諧古選。同新選。獨喰。葎亭畫讃集。瓠簞集あり。

小春（せうしゆん）通稱伊右衛門、加州金澤の人、宮竹屋といふ藥肆なり、似春の門。

紹雪（せうせつ）江戸の人、超波門。

小知（せうち）木村氏、通稱八兵衛、神田庵と號す、江戸の人、質屋を業とす、後破產して俳師となる、二世平砂の門、文化十四年歿す、年九十二。新神田集の著あり。

召波（せうは）てうは。

梢風女（せうふう）伊賀の士、小川氏小麥の女、同藩友田眞品の妻、俳諧袖といふ服を製し、芭蕉に贈りしといふ美談あり。

樵風（せうふう）入江氏、名は重房、通稱清兵衛、醉古堂、瀬棚の號あり、播州曾根崎の人、家代々製鹽を業とす、初名を龜洞、又泥中など呼べり、月居に學び俳文を得意とす、嘉永元年十二月五日歿す、年五十七。鵜口集の著あり。

紹廉（せうれん）小野氏、一炊庵と號す、江戸の人、沾徳に學び、大阪に移る、明和中歿す。

蕉鹿（せうろく）三徑庵と號す、信州の人、草芳庵猿左に學び、後白芥の門に入る、七世三徑庵なり、安政時代。

石鯨（せきげい）李下庵と號す、大阪の人、宮

天の門。

石鯨二世（せきげい） 岡村氏、南花坊と號す、石鯨門、二世李下庵となり、後江戸に出て三世沾山門となる。

積翠（せきすゐ） 石河氏、江戸の人、二世桃隣の門。著書に俳諧面問答。俳諧或問あり。

夕道（せきだう） 長谷川氏、通稱孫助、尾州の書肆、蕉門、享保八年二月歿す。

石丈（せきぢやう） 重田氏、移柳の門、探茶庵八世なり。

石腸子（せきちやうし） 深川氏、船窓と號す、其角の門、寛延四年三月十日歿す。

是橘（ぜきつ） 名は是吉、其角の僕。

碩布（せきふ） 川村氏、通稱七郎兵衛、樫家、蓬宮、六氣庵の號あり、武州入間郡毛呂本郷の人、素封家なりしが產を破り俳師となる、白雄門八大家の一、葛三より春秋庵を承繼して四世となる、天保十四年十一月九日歿す、年九十一。碩布發句集世に行はる。

是空（ぜくう） 增田氏、通稱角左衞門、和日庵四世、疊華齋と號す、豐後杵築の藩士、白芥の門、天保十五年六月十八日歿す。

是什坊（ぜじふばう） 大野氏、名は親芳、通稱は瀬兵衛、傘狂、朝暮園、老森庵、風瀲子、花中人等の號あり、美濃不破郡岩手の人、竹中家の臣、以哉坊の門に入り俳師となる、寛政五年十二月十七日歿す、年六十七。

是誰（ぜすゐ） 池田氏、落葉堂と號す、播州姬路の人、始め貞德の門、後貞室に學ぶ、著書に落葉の言。破實鷺。初元結。玉くしげ。呂玖呂。播磨姬路草あり。

世竹（せちく） 金森氏、通稱利三郎、此君亭と號す、奧州一の關の人、小野素郷の門。

淅江（せつかう） 小野氏、眠谷亭、倚桂子の號あり、武州關宿の人、初世紀逸の門、文化八年二月十九日歿す。

雪館（せつくわん） 櫻井氏、加賀の人、梅室の父なり、希因門、寛政二年二月廿二日歿す、年七十四。

雪柴（せつさい） 江戸神田に住し、延寶頃談林の俳人。

雪才（せつさい） 山口氏、江戸の人、初世宗瑞の門。

雪才二世（せつさい） 白銀臺と號す、目白蓮華寺の住職、二世宗瑞門、寛政七年七月歿す、年六十二。

雪才四世（せつさい） 通稱伊勢屋與八、三世雪才の門。

雪齋（せつさい） 大塚氏、珍重庵と號す、江戸の人、乾什の門。

雪齋二世（せつさい） 初世の義子。

雪齋三世（せつさい） 池田氏、雪洞庵、拘杞庵の號あり、三世珍重庵を繼ぐ、二世乾什門。

雪珊（せつさん） 久次米氏、通稱松島屋勘兵衛、月洞と號す、江戸の人、鬱太の門、文化四年五月九日歿す。

雪之（せつし） 通稱山田屋市兵衛、伊賀上野の人、蕉翁の從弟なりといふ。

雪芝（せつし） 通稱山田屋市兵衛、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり。

節士（せつし） 市野氏、望雲齋と號す、江戸の人、安永二年四月二日歿す。

雪泉（せつせん） 森氏、大黑庵、蘭泉翁と號す、大阪の人、淡々門。

雪堂（せつだう） 宮原氏、貞松軒と號す、京の人、普求の門、安永五年六月二十八日歿す、年六十一。

雪堂（せつだう） 笠家氏、四月庵、逸志庵、宗梅居の號あり、初世逸志の孫、存義の門。

雪萬（せつまん） 陶氏、通稱喜八、文來庵、雪燕居、兀々老の號あり、上州の人、鬱太の門文化五年九月十七日歿す、年七十五。

雪明（せつめい） 抔葉庵、去來庵二世の號あり、江戸の人、蘂々の門に入り、後普門に從ふ、後咫尺齋疊山の門に入り、水月齋是物と改む。

世南（せなん） 松本氏、通稱源藏、阿園と號す、信州の人、大阪に住す、天保元年歿す。

宣安（せんあん） 筒井氏、名は眞以、通稱は平三郎、後百之と改む、江戸の人、梅盛門。

千崖（せんがい） 簗瀨氏、竹樂と號す、越中富山の人、京東山に住す、蒼虬の門。

仙鶴（せんかく） 堀内氏、化笛齋、長生庵、白鶴翁の號あり、江戸の人、沾德の門、京に上りて流行す、兼て畫を善くし又茶事に堪能なり、寛延元年閏十月廿一日歿す、年七十四。著書に寄南寓。忘草。十二月箱。水鏡宮。人丸年代記あり。

千及（せんきふ） 田路氏、備前の人、伊丹に來り鬼貫の門に入る、後大坂に赴く、醉鼻集の著あり。

宣休（せんきう） 中村氏、名は淨貞、一安と號す、浪華の人、季吟の門、其子宣居又俳に名あり。

蟬吟（せんぎん） 藤堂伊賀守、名は良忠、伊賀上野の城主、芭蕉の故主なり、貞德及び季吟に學ぶ、寛文六年四月卒す。

仙花（せんくわ） 青蛸堂と號す、蕉門。蛙合の著あり。

全丸（ぜんぐわん） 丹波龜山の人、逍遙窩と號す、脩古の門。

仙徑（せんけい） 中井氏、春里庵と號す、京の人、竿秋の門、安永四年七月廿九日歿す、年七十一。

全故（ぜんこ） 素龍を見よ。

沾山（せんざん） てんざん。

千山（せんざん） 井上氏、春曙庵、丹頂堂の號あり、播州姬路の人、惟然の門、享保十三年十一月十四日歿す、著書に花の雲。當座拂の著あり。

千山（せんざん） 五十嵐氏、通稱紀國屋文左衞門、世に紀文大盡と稱し、事跡は人口に膾炙す、其角の門、享保十九年四月廿四日歿す、年六十六。

全獅（ぜんし） 釋氏、調和の門。

沾洲（せんしう） ての部。

千春（せんしゆん） 望月氏、蘇鐵林と號す、蕉門。武藏曲。松竹草。かり舞臺の著あり。

扇暑（せんしよ） 三四房を見よ。

仙水（せんすゐ） 桃井氏、山夕の男。

筌石（せんせき） 鈴鹿氏、寸松堂と號す、知石の男、寛保二年六月廿七日歿す、年三十。千里雪の著あり。

沾德（せんとく） てんとく。

千那（せんな） 江州堅田本福寺十二世の法主、明式上人と云ふ、葡萄坊と號す、蕉門に入て名手たり、享保八年四月十七日寂す、年七十三。

千梅（せんばい） 方寛、又白翁と號す、江州の人、江戸に住す、千那の門、明和六年歿す、著書に雙繡輪。若葉の奧。白翁文草。千鳥圖等あり。

川平（せんぺい） 森本氏、伊丹の人、宗旦の門、兼て鼓の上手なり、享保二年二月五日歿す年五十。

仙瓢（せんぺう） 江戸の人、六華庵と號す、二世秋爪の門。

千瓢（せんぺう） 六草庵と號す、對州侯の藩士、天保七年二月廿六日歿す。

沾圃（せんぽ） 三世立志を見よ。

沾圃二世（せんぽ） 富永氏、百紅齋と號す、奧州岩城內藤家の士、初世の門。

沾圃三世（せんぽ） 幾重齋と號す、二世の門。

沾圃四世（せんぽ） 松井氏、通稱十左衞門、重菊齋と號す、加州の藩士、三世の門。

泉明（せんめい） 佐々木氏、通稱住吉屋市兵衞、浪花の人、藥酒を商ふ、一交舍草秀の門、寛政五年六月三日歿す、年七十

入。

千羅（せんら）江州堅田本福寺十六世の法主明曜上人といふ、都文亭と號す、千那の後たり俳事も千那に受く、文化四年七月四日寂す、年五十四。

線來（せんらい）入江氏、通稱宗四郎、京の人、金吹屋といふ商家なり、淡々に學び、後四時堂其諺の圓山正阿彌の庵を訪ぐ。

沾涼（せんりょう）ての部。

千翁（せんおう）不角を見よ。

そ

素有（そいう）北島氏、通稱關次郎、御林奉行手代組頭を勤む、宥計の門、三世其夜坊、二世蓼原庵なり、嘉永六年歿す。

素因（そいん）芙木氏、紫庵、長松下等の號あり、天明五年十月三日歿す、年六十六。

宋阿（そうあ）巴人を見よ。

宗以（そうい）星野氏、（一に山田氏）通稱六左衛門、始め佳種といふ、西武の門。

宗因（そういん）西山氏、名は豊一、通稱は次郎、梅翁、西翁、梅花翁、野梅翁、忘吾齋、梅幽子、西幽子、向栄庵、有芳庵の號あり、素は肥州熊本加藤家の臣、主家退落の時京に來り、連歌を昌琢に學び、俳諧に維舟を訪ひ、後大阪に移り、天滿の社頭に獨吟百句を吐て自ら梅翁と稱し、檀林派の一家を興す、然りしより天下翕然として之に歸る、江戸に下りては高政等を從へ、京に上りては高政等を移ろ、晩年西遊して筑紫琴平山の麓一庵に終焉す、俳諧の機爽は、實に宗鑑が犬筑波集の滑稽より起る、天文廿二年十月二日歿す、年八十九。讃州豊田郡坂本村興昌寺の側に葬る、又京都天瑞寺に墓石ありと云ふ。

宗祇（そうぎ）飯尾氏、種玉庵、自然齋、見外齋、不害齋の號あり、紀州藤白莊の人、京に上り心敬僧都に連歌を學び、和歌を東常縁に受く、當時連歌の達人、海内を壓て第一と稱せらる、其著述も又頗る多し、後世俳諧の淵原は、實に宗祇等に始る、文龜二年七月三十日歿す、年八十二。駿州駿東郡富澤桃園定輪寺に葬る、或 又箱根湯本の早雲寺にも其墳墓あり。

宗久（そうきゅう）長島氏、甘谷の男、寛歴七年歿す、年八十二。

宗賢（そうけん）小島氏、通稱總兵衛、京の人、令德の門。

宗讓（そうじょう）去來庵と號す、京の人、寛政九年七月歿す。

宗信（そうしん）廣岡氏、名は定房、通稱は紅屋彌兵衛、柳雨軒と號す、大阪の人、令德の門。

宗靜（そうせい）土橋氏、通稱以慶、大字軒、春林子の號あり、攝津平野村の人、大阪に住す、宗因の門、浪華草紙の著あり。

宗春（そうしゅん）宗因の男。

宗瑞（そうず）中川氏、通稱三郎兵衛、白苑園と號す、江戸の人、開基爲換を以て幕府の御用達なり、初名は風葉と云ふ、鹿屋杉風の高足にして、長水、馬光等と共に五色墨を賜め、一時世の耳目を驚かす、延享元年七月三十日歿す、年六十。下谷幡隨院に葬る、白苑園句集世に行はる。著書に栴檀。梅の春あり。

宗瑞（そうず）二廣岡氏、通稱戸太夫、一曳、柳門、竹堂、以龍庵、白眼齋の號あり、水戸の藩士、駒込目白臺に住す、人呼で片枯先生と言へり、初世の門、二世白苑園なり、明和九年 八月九日歿す、年五十二。

宗瑞（そうず）三松井氏、通稱忠治郎、目白山人、鵜山、竹道の號あり、二世の門、文化十一年二月十五日歿す、年七十二。著書に俳則あり。

宗瑞（そうず）四新倉氏、通稱左內、天其、桂山、東園、露白炊の號あり、松平大炊侯の家人、三世の門、白兎園を繼ぐ、文政二年三月廿八日歿す、年六十六。

宗瑞（そうず）六初名大虛庵鳳來といふ、後竹道と稱す、六世白兎園なり、五世の門。

宗瑞（そうず）七初名臥龍菴東岡といふ、五世の門、六世歿後嗣號す。

宗瑞（そうず）八初名鳳儀、五世の門。

宗瑞（そうず）九初名月生、五世宗瑞の門、七世白兎園となる。

宗瑞（そうず）十初名擔月庵青龜といふ、七世宗瑞の門。

宗瑞（そうず）十一初名風柳、六世の門。

宋是（そうぜ）几圭を見よ。

宗成（そうせい）夏目氏、通稱八郎衛門、隨時庵と號す、江戸藏前の札差、成美の父なり、明和元年 十月廿日歿す、年七十。

漱石（そうせき）夏目氏、通稱金之助、東京の人、學舍に學び、明治廿六年東京大學英文科を出で大學院に入り諸學校に英語の教鞭を執ること四年、三十三年英國留學を命ぜられ彼地に在り、其間俳句を嗜みて「ほと、ぎす」に寄す、又小說倫敦塔を同誌に掲げて文名一時に噪がし、四十年歸朝して帝國大學の教授となり筆を斷て「吾輩は猫である」「坊ちやん」などの新趣味小說を同誌に掲げて洛陽の紙價を奔騰せしめたり、文部省が文學博士の學位を贈らんとしても其虛名を卑み辭して享けず、大學を退いて朝日新聞の聘に應じ專ら小說に筆を執る、其天才に加ふるに學問の博洽漢窓文壇の北斗を以て推さる、憎說大正五年十二月九日病て歿す、年五十。著書は漱石全集に網羅せらる。墓は小石川德雲寺にあり。

漱石（そうせき）三世桃隣を見よ。

宋專（そうせん）山本氏、顧泉舍、梅几庵の號あり、京の人、初め松江といふ、宋屋門、安永五年六月廿八日歿す、年八十二。

宗泉（そうせん）小出氏、通稱甚太郎、天地庵、有友庵の號あり、幕府旗下の士、白芥の門、三世天地庵、又五世絢堂となる、文政十年七月歿す。

宗旦（そうたん）池田氏、也雲軒と號す、京の人、松江維舟に學び延寶二年の春伊丹有岡に居を移し、居常酒を嗜んで、門下に老、莊、蒙好、長明の文を說き談林風の俳諧を解く、即ち維舟と宗因とを兼て別に機軸を出したる伊丹風是なり、居ること廿四年元祿六年九月十七日歿す年五十八。

宗丹（そうたん）或は宗旦に作る、松井氏、也雲軒と號す、攝州伊丹の人、京に出でゝ松江維舟の門に入り、後宗因に就て學ぶ、伊丹に歸て談林風を鼓吹す、萬治元年十二月十九日歿す、年八十一。著書

に三人蛸。五箇國集。無分別。當流籠拔。遠山島。鵜眞似。加樣に候者は。無盡經。野梅集。親仁意見。盆の旦。祇園會。藥袋。食俳諧。俳諧盤石錄等あり。

宗長（そうちゅう）島田氏、柴屋軒と號す、駿州鞠子の人、十八歳にして宗祇の門に入り、連歌を修す、師歿後花の本宗匠を印可せらる、享祿五年三月六日歿す、年八十五。鞠子宿宗長寺に葬る。

宗貞（そうてい）淺沼氏、望山軒と號す、大阪の人、宗因門。

宗梅（そうばい）笠家氏、通稱は源右衛門、致曲庵、半曲庵の號あり、播州の人、江戸新吉原引手茶屋巴屋の嗣となる、林鳳岡先生に漢學を學び、椎本才麿に俳諧を習ふ、初め一志と書し、後遇志と改む、巴屋の產を破り、俳諧點者となり宗梅と名告る、後淨阿と呼び、雪堂と號し、素竹軒、玄哲などとも稱せり、延享四年五月二十七日歿す、年七十三。淺草田原町報恩寺中高德寺に葬る、大椿葉集。都の梅の著あり。

宗梅（そうばい）丘氏、楊月庵と號す、江戸の人、岩松に學び、後二世宗梅となる。

宗畔（そうはん）馬淵氏、名は重治、貞德の門、正德四年入浴中卒倒す。獨吟千句の著あり。

宗普（そうふ）甘泉庵と號す、大阪の人、含鳳の門、寛政九年十月六日攝津今宮十萬堂に於て、獨吟一萬句を吐て人の視聽を驚かす、文化八年十二月廿三日歿す、年五十五。

宗鳳（そうほう）青木氏、初名几鳥、水蒲、紫雪庵の號あり、京の人、巴人の門、明和二年十二月十日歿す、年七十六。

宗明（そうみん）板原氏、通稱三郎兵衛、紀州和歌山の人、貞德門。

素雲（そうん）佐治氏、晩に吟鳥と云ふ、京の人、茶商なり、季吟門。

宗惠（そうゑ）內海氏、名は久重、通稱長右衛門、京の人、貞德の門。

宋屋（そうをく）望月氏、百葉泉、富鈴房、机墨庵の號あり、京の人、巴人の門、明和三年三月十一日歿す、年七十九。句集には門人嘯山の集めたる瓢箪集あり、著書に梅鏡。西の奧。小春の笠。杖の土等あり。

素行（そかう）久米氏、長崎の人、去來の親屬なり、蕉門。

鼠肝（そかん）上林氏、通稱峯順、大和宇治の人、貞德の門。

鼠肝（そかん）大坪氏、嵐々庵、雁字庵の號あり、江戸の人、四世湖十の門、寛政八年十月十二日歿す。

鼠肝（そかん）湖十を見よ。

素休（そきう）釋氏、京都妙滿寺中成就院の住職、日如上人といふ、貞德の門。

素琴（そきん）竹本氏、通稱隼之助、幕府の士、其日庵十一世を繼ぐ、明治三十二年十月四日歿す、年六十九。

素卿（そきやう）小野氏、通稱は永二、望春亭、松濤舍と號す、南部盛岡の人、始め蓼太に道を聞き、明和八年上京して蝶夢の門に入り、天明三年歸鄕して志家村に卜居し、大に新風を鼓吹す、當時長翠、乙二、五明等と奧羽の四傑と稱せらる、家集に柴の戸の著あり、文政三年四月二十九日歿す、年七十二。

素鏡（そきやう）上田氏、名は思文、通稱は與五郎、隨古堂と號す、信州上田の人、內藤素水の門、明和八年正月二十八日歿す、年七十四。

祖鄕（そきやう）過日庵と號す、江戸の人、鳳朗の門、嘉永五年八月七日歿す、十家類題集等の著あり。

則常（そくじやう）伊豆氏、京の人、季吟門。

則風（そくふう）大和多武峯院の住職、維舟に

學び、千八百韻。大矢數の著あり。

素外（そぐわい）谷氏、（本姓池田）一陽井、玉池、三化等の號あり、大坂の人、江戸に出て涼袋に學び、後蒼狐の門となり、江戸談林七世の宗師となる、文政六年二月八日歿す、年九十一。今戸慶養寺に葬る、著す所頗る多く、俳諧一物連歌。同世吉の物贊。天狗話。根源集。玉池雜藻。俳諧手引種。德祈新樂雪。類句辨後。他讃句。三名所。梅翁發句集。江戸河。齒固。花百句。類句辨。名知折。猿筑波集。古今句鑑。名所方角集。柏手千句。五色梅。滑稽著聞集。詞德抄。なのしぼり。富士。他人なし。神釋行事解等あり。

素丸（そぐわん）濱口氏、通稱十太夫、江戸の人、初め白芥と稱し、馬光に學び、其日庵三世となる、此他天地庵、渭濱庵、曇華齋、萬里軒、五味堂等の別號あり、葛門中興の英士と稱せらる、寛政七年六月二十日歿す、年八十三。著す所夏孟子論。梅の絢。芭蕉翁句解說叢大全。笑ひ續け。太夫新語。十論探問答。馬光發句集等あり。

素月（そげつ）藤井氏、名は元景、字は景福、西湖と號す、晩年坂氏と稱し龍鱗庵と號す、活花の師なり馬場存義の門。

素月尼（そげつに）今泉恒丸が妻なり、文政元年九月二日歿す。

素謙（そけん）川地氏、名は正量、通稱又兵衛、貞室の門。

素健（そけん）神取氏、力陽井と號す、江戸の人、素外の門、文化元年八月四日歿す、年三十五。

鼠公（そこう）辻氏、大黑庵と號す、京の人、春雄の門、明和七年八月二十五日歿す、年四十四。

素秋（そしう）熊谷氏、江戸の人、嵐雪門、寛延二年十月歿す。

祖順（そじゆん）青木氏、京の人、乾貞恕の門、享保十六年九月十一日歿す。

素水（そすゐ）岡田氏、名は友盛、日々庵と號す、幕府表坊主なり、初名春甫、有計の門。

楚石坊（そせきばう）伊藤氏、通稱春孝、四睡廬と號す、玄武坊の門、影七尺の著あり。

素堂（そだう）山口氏、名は信章、字は子達、（又子晉に作る或は公商）通稱官兵衛、人或は太兵衛、一說に幼名重五郎、長じて市右衛門）今日庵、其日庵、素仙堂の號あり、寛永十九年五月五日甲斐巨摩郡敎來石村に生る、弱冠江戸に出て、儒を林春齋に學び、又京に赴き、和歌を清水谷に、書を持明院に、連歌を季吟に、茶事を今日庵宗丹に承く、時に來雪と稱し、信章齋と號す、江戸に歸り居を葛飾郡阿武に卜し、芭蕉等と往來して俳に遊ぶ、元祿八年歸省して、故鄕笛吹川堤防の工事を監し、翌年又江戸に歸り、大に葛飾風の一體を鼓吹す、享保元年八月十五日歿す、年七十五。谷中瑞音院に葬る、著書に松の奧。櫻の奧。とく〳〵の句合あり。

素堂（そだう）佐々木氏、名は一德、來雪庵と號す、一世の門、安永七年十二月二十四日歿す。

素丈（そぢやう）大河內氏、通稱右門、五世曇華齋と號す、豐後杵築の藩士、是空の門。

素塵（そぢん）谷氏、素外の女、名はたみ、薙髮して素塵といふ、一陽窓と號す。

徂東（そとう）矢部氏、通稱五郎左衛門、雪顯亭と號す、上州本納の人、雪中庵三世より、五世までに師事す、天保四年九月十二日歿す。

園女（そのじ）渡會氏、伊勢山田の人、始め杉本美津女に學び、後蕉門に入る晩年江

戸に出て知鏡尼と稱し、眼科醫を業とせりと、享保十一年四月二十日歿す、年七十四。深川霞殿寺中念佛堂に葬る、(園女に就ては舊來岡西惟中の妻なりとの說あり、大系圖には斯波一有の妻とし、又一說には惟中といへる豪商伊勢松阪にあり、大坂の出店に園女住みしといふ、又淄川の妻なりとの說あり、何れも確かなる證なし、夫歿して江戸に出て、安藤冠里公の母堂に仕へたりとの事跡も存すといふ)

園女(その) 花千女を見よ。

素檗(そばく) 藤森氏、通稱は島屋太郎右衛門、信州上諏訪の人、曉臺の門、木曾の俳諧關所と唱へて、行脚の者必ず素檗を問はざるなしと、剃髮後福庵と稱し、文政四年二月二十六日歿す、年六十四。句集に鶯宿梅あり。

鼠麥(そばく) 中村氏、名は壽庵、松聲堂と號す、上總の人、醫を業とす、烏醉の門。

麁文(そぶん) 鵜川氏、名は政明、字は義氏、三餘齋、油幕庵、木雁子等の號あり、京の士、一說に土卵門と云、華實年浪草の著あり。

粗文(そぶん) 豊島氏、梅立巢、墨梅堂の號あり、江戸の人、蓼松の門。

曾北(そほく) 世木氏、伊勢の人、涼莵の門にして神風館を嗣ぎ、四世の宗師なり。

存義(そんぎ) 馬場氏、李井庵、有無庵、古來庵の號あり、江戸の人、始め服部南郭に師事し、儒を以て世に立たんと欲せしが、中頃變じて泰室の門に入り、泰里と稱す、江戸風を以て鳴る、天明二年十月三十日歿す、年八十一。

存義二世(そんぎ) 榎本氏、河上庵、五席庵の號あり、初名泰里、一世沒後有無庵二世となる、文政二年正月二十五日歿す。

巽人(そんじん) 小野氏、鹿音舍、老亭の號あり、奥州南部の人、始め風光門、後富鈴の門。

尊明(そんみやう) 服部氏、江戸の人、貞宜の門。

曾良(そら) 河合氏、通稱惣五郎、信州下諏訪の人、蕉門に入て奥の細道に師に隨行し、日光に剃髮して宗悟と名告る、寶永七年五月二十二日壹岐國須本にて歿す、年六十。(或は云ふ寶永六年十月二十二日豐前松本の客舍に歿す、年六十三と)是非を知らず。

素龍(そりう) 釋氏、江戸淺草觀音地內、東中谷自性院の住職、全故と稱す、蕉門に入て炭俵序者の一人なり、元祿十二年十一月二十二日寂す。

素粒(そりふ) 黒部氏、一万井と號す、素外門。

素練(それん) 釋氏、四睡庵、梨花坊の號あり、播州青練寺の住職、南架の門、享和二年八月十九日寂す、年五十九。

鼠六(そろく) 霧庵と號す、文化十三年八月二十八日歿す、年五十七。

素園(そゑん) 千代女を見よ。

た

袋河(たいか) 三宅氏、蝶々舍と號す、京の人、其諺の門、又兼て書畫を善くす、元文元年五月十七日歿す、年四十一。

岱河(たいか) 江戸の人、大梅の門、二世孤山堂なり、慶應二年四月十六日歿す。

太筇(たいかう) 青野氏、通稱慶次郎、猫頭庵、迎風庵、椿丘の號あり、下總香取の人、江戸に出て恒丸に學ぶ、常に江戸越後に半年交代に居を定む、依て半年庵と號せり、文政十一年八月十八日越後長岡に歿す、著書發句題叢。同續あり。

太祇(たいぎ) 炭氏、(一說に坂上氏)不夜庵と號す、江戸の人、初め雲津水國の門に入り水語と呼び、德語と改め、後慶紀逸に學び太祇と名告る、寶曆の初京に上りて島原上の町に住す、常に俳優を好んで交を結ぶといふ、明和八年八月九日歿す、年六十三。京の下寺町光林院に葬る、著書に鬼貫句選あり。

太蛾(たいが) 太魚の門、蕉翁所持の觀音像及古反故を讓らる。

太魚(たいぎよ) 松岡氏、一名伽香、因幡の人、大阪に住す、蕉門の末弟子なりと、一說に芭蕉の妹聟なりと云ふ、寶曆九年歿す、年九十。

大圭(たいけい) 兒島氏、名は正宜、錦綾室と號す、京の人、始め襲翁正宜の門に入て宮河正堅が統たりしが、淡々京に入に及び、其門に入り後其門を脫し獨立し、大に淡々と衡を爭ふ、知名の作者多く大圭を扶け淡々を凌ぐ、後年和議成り大圭一方の師たり、後大坂に出で享保十九年六月三日歿す、年四十四。

對山(たいざん) 大島氏、南濤、實柳舍の號あり、江戸の人、完來に學びて雪中庵五世となる、天保十四年二月十一日歿す、年五十七。著書に文政俳諧。

太初(たいしよ) 高氏、無由庵、袾無庵、指杲坊、桑窓等の號あり、柳居の門、初名夜庭。

岱水(たいすゐ) 武藏の人、蕉門。

岱青(たいせい) 渡邊氏、通稱源右衛門、五老峰と號す、尾州名古屋の藩士、曉臺の門、寛政十一年八月二日歿す。

苔蘇(たいそ) 岡本氏、名は正次、通稱治左衛門、伊賀の士、蕉門卅一人衆なり、寶永六年三月三日歿す、年八十五。

大蟲(たいちう) 藻魚庵と號す、江戸の人、大梅の門、慶應二年十二月十八日歿す。

大町(たいちやう) 中西氏、通稱伊勢屋七郎兵衛、江戸の人、其角の門なり、享保十三年五月十四日歿す。

袋年(たいねん) 京の人、三露園花守と號す、初名北映、臥鴎の門、嘉永五年正月十二日歿す。

岱貝(たいばい) 高橋氏、來笑庵と號す、江戸の人、初世沾山門。

大梅(たいばい) 中西氏、通稱七郎兵衛、東湊町に住す、大町の男、存古庵の號あり、珪林の門、寶曆元年十二月十日歿す。

大梅(たいばい) 兒島氏、名は筠、字は克從、通稱酉之助、剩庵、又大梅居と號す、江戸靈巖島の富商、始め市川寛齋の門に入て梅外と號し、詩に耽る、旣にして道彥の門に入り、俳に遊ぶ、初名を孤山と云ふ、渓和の連句に得意なり、後落魄して八丁堀に假居すと、天保十二年五月二十九日歿す、年七十。俳諧露六歌仙。

大阜(たいふ) 村瀬氏、通稱兵庫屋彌四郎、尾張知多郡の人、士朗門、文政二年の秋歿す、著書に阿沙野。

大蕪(たいぶ) 通稱鼠屋九兵衛、吹萬堂と號す、因州の人、月居門。

太蕪(たいぶ) 常州水戶の人、義脩と號す、柳居に學び、松籟庵二世となる、初名吐花、次で秋瓜と改む、後太蕪と稱す、安永三年十月二十二日歿す、太蕪句集世に行はる、著書に梅咲時。得手窗帆。歸る日。

泰里(たいり) 存義及存義二世を見よ。

大立(たいりふ) 龍田氏、水足軒と號す、大阪の人、才麿の門、延享元年四月二十六日歿す、年六十九。元の木。又元の木の著あり。

碓嶺(たいれい) 仁井田氏、昨日庵、九十九坊の號あり、上州坂本の人、長翠の門に入り小蓑庵二世を嗣ぐ、弘化三年四月二十二日歿す、年六十七。

大魯(たいろ) 吉分氏、蘆陰舍、三遷舍の號あり、阿波の藩士、蕪村に學び、初名馬南といふ、致仕して俳師となり、京に住

し涙華に移る、安永七年十一月十三日歿す、京東山金福寺に葬る、蘆陰句選。俳諧五子稿の著あり。

泰圓（たいゑん）京都寂光寺中、圓光院の住職、貞德門、師の沒後貞室季吟に道を聽く。

苔翁（たいをう）古壽衣氏、堤亭當と號す、堤亭の男、俳諧見物左衛門。寶の山の著あり。

道意（だうい）津田氏、通稱次郎兵衛、攝津池田の人、貞德の門なり。

桃雨（たうう）桃隣四世を見よ。

橙雨（たうう）左橋氏、京の人、吟松門、天明五年十一月二十八日歿す、年六十四。

桃妖（たうえう）通稱泉屋久米之助、桃枝當と號す、加賀の人、蕉門。

道可（だうか）山本氏、京の人、西武の門。

道甘（だうかん）高瀬氏、名は正代、通稱彌三右衛門、專庵、樂々庵の號あり、山城伏見の人、高瀬梅盛に學び高足たり、元祿四年二月十五日歿す、年八十三。著書に、花の露。糸瓜草。人眞似。是まで草あり。

道休（だうきう）岡田氏、通稱白子屋福兵衛、江戸靈巖島に住す、米仲の父、貴志沾州に學ぶ、正德四年歿す。

道舊（だうきう）黑樹園と號す、仙臺の人、鈴木道彥の門、玉のひかりの著あり。

桃鏡（たうきやう）松村氏、水上亭と號す、伊賀の人、江戸に住す、芭蕉の姪といふ、夏引集の著あり。

桃居（たうきよ）不二庵と號す、加賀の人、蕉門。

桃居二世（たうきよ）二柳を見よ。

桃化（たうくわ）越中井波の人、(三浦若海の說に浪化の男ならんといふ)

桃壺（たうこ）駿河府中の人、時雨窓と號す、月巢の門。

桃後（たうご）桃先の弟名は季知、通稱牛四郎、蕉門。

稻後（たうご）小倉氏、通稱理右衛門、夏月坊、起草庵の號あり、甲府の人、初名暮江亭魚鬢といふ、山口黑路の門、寬政二年六月二十三日歿す。

當國（たうこく）稻河氏、了花亭と號す、大阪の人、磐石に學び、後江戸に出で嵐雪門となる。

桃睡（たうすゐ）曲江亭と號す、京の人、曉臺の門、落梅花の著あり。

桃青（たうせい）芭蕉を見よ。

道清（だうせい）坂口氏、林松軒と號す、京の人、維舟の門、二見箱の著あり。

桃雪（たうせつ）桃隣五世を見よ。

道節（だうせつ）末吉氏、攝津平野の人、貞德の門、「もしあらば雪女もや白うるり」の句を詠で世に白うるりの道節と呼ばる、承應三年歿す。

桃先（たうせん）太田氏、白雪の長子、名は重英、通稱又四郎、蕉門なり、享保十年二月十日歿す。

道白（だうはく）青木氏、京の人、季吟の門、一に立圃門といふ、延寶三年歿す。

道槃（だうはん）佐々木氏、京の人、梅盛の門。

道立（だうりう）樋口氏、名は敬義、芥亭、又自在庵と號す、儒家伊藤坦庵の曾孫にして帷を下して京師に講說す、蕪村を友とし善く俳句又華潭なり、其句は夜半派の集中に多く見ゆ、文化九年十二月七日歿す年七十五。

桃隣（たうりん）天野氏、通稱藤太夫(一に作左衛門)太白堂、五無庵呉竹軒桃池堂の號あり、伊賀上野の藩士芭蕉の親戚なり、蕉門に入て江戸に住し、一世の宗師となる、後桃翁と稱し、享保四年十二月九日歿す、年七十一。淺草新寺町光明寺に葬る、著書に粟津ヶ原。陸奥千鳥あり。

桃隣二世（たうりん）切部氏、通稱作左衛門、江

戸幕府の士、初祖の門に入て、二世太白堂と號す、安永五年十二月十五日歿す、年八十一。大久保專福寺に葬る。

桃隣三世（たうりん）村田氏、通稱政右衛門、著園と號す、初名漱石といふ、幕府の御家人なり、二世の門、三世太白堂を繼ぐ、寬政十二年十二月二十日歿す、年六十七。

桃隣四世（たうりん）加藤氏、通稱九藏、江戸の人、初名桃雨といふ、三世の門、四世太白堂なり、文化三年三月二十四日歿す、年三十四。

桃隣五世（たうりん）加藤氏、(本姓山口)通稱藤屋勘右衛門、江戸の人、初め桃雪と稱し中比萊石と呼ぶ、四世の門、太白堂五世を繼ぐ、文政三年正月十四日歿す、年四十二。

桃翁（たうをう）桃隣一世を見よ。

桃翁二世（たうをう）瀬尾氏、大練舍と號す、初め大野秀和に學びて杜格と稱せしが、後桃隣の門に入り、桃翁を嗣ぐ、著書に雨あがり。冬の日。檜木笠。猿すべり等あり。

駝岳（だがく）木備を見よ。

高政（たかまさ）菅谷氏、惣本寺、牛天蓮社の號あり、京の人、當時田代松意の江戸談

林に對し、宗因を招きて京談林を起す、大に流行して、信德、如泉、友靜等の貞門派風指の者皆相從ふといふ、著書に俳諧綸合。中庸姿。同後篇。是天道。談林三百韻。江戸蹄等あり。

濁子（だくし）中川氏、通稱甚五兵衛、後素水と稱す、美濃大垣の人、五竹門。

卓袋（たくたい）通稱貸屋與兵衛、伊賀上野の人、蕉門なり。

卓池（たくち）鶴田氏、通稱與左衛門、青々處と號す、三河岡崎の人、其家紺屋なり、初曉臺に學び、師沒後士朗に從ひ江戸に出づ、文化八年本國に歸り、岡崎正風を唱ふ、弘化三年八月十一日歿す、年七十九。

澤雉（たくち）山内氏、通稱善四郎、伊賀の人、蕉門三十一人衆なり。

卓朗（たくらう）伊豆三島の人、孤山堂と號す、江戸に出て大梅に學ぶ、慶應二年四月十六日歿す。

多少（たせう）秋瓜を見よ。

多少（たせう）花隈氏、新樹庵と號す、江戸の人、初世存義の門。

忠知（ただとも）神野氏、通稱長左衛門、江戸の人、「白炭や燒かぬ昔の雪の枝」の句を吐て、世に白炭の忠知と呼ばる、井阪

春清の門、延寶四年十一月二十七日浮世を觀じて自殺す、年五十二。

只丸（たゞまる）釋氏、(本姓桑氏)京都本圀寺中福昌院の住職、覺印と云ふ、弄松閣、樹心坊、鴨水子の號あり、才麿の門、正德二年十一月二日寂す、年七十三。著書に三河城。小松原。己が光。足揃。秀沙汰。明題集あり。

田鶴樹（たづき）淺見氏、江霜庵、硯滴夫、叢專者、扶一山人の號あり、大阪の人、淡々門。

種彥（たねひこ）高屋氏、名は知久、通稱彥四郎、柳亭、愛雀軒、足薪翁の號あり、幕府旗下の士、戲作に高名なり、俳諧の傳統不詳、考證該博なるを以て聞ゆ、天保十三年七月十八日歿す、年六十。

玉成（たまなり）安川氏、通稱平左衛門、呉山堂と號す、武州千住驛の人、酒屋を業とす、狂歌に巧に、俳諧は卓朗、甘海、等栽に學ぶ、明治三十一年五月十九日歿す、年五十六。

團友（だんいう）涼菟を見よ。

湛月（たんげつ）橋本氏、通稱儀右衛門、雲林館と號す、江州彥根の士、許六門。

淡叟（たんそう）大坂の人、屋烏の門、四世八千房と號す。

探山（たんざん）本多氏、通稱八郎左衛門、幻住老人と號す、菅沼曲水の叔父にして膳所の藩臣、七十七歳にして沒す。

丹志（たんし）竹居と號す、白峯の門、著書にひさご。硯の筏あり。

團洲（だんしう）市川氏、九代目團十郎俳號。本名は堀越秀、團十郎の發句加留多あり、審董作皆一手に出づ、吟賞の句多し、明治三十六年九月十三日歿す年六十六。

旦水（たんすゐ）通稱辨次郎、竹立庵、倚々齋、彝蓊廬の號あり、蓼太の門、天保六年二月十七日歿す、年五十八。

團水（だんすゐ）北條氏、樗堂、平元子、白眼居士等の號あり、京の人、始め才麿に學び、後西鶴に師事し、其師風を眞似て浮世草子に筆を擱ふ、文章往々青藍の譽あり、師沒後其草廬を守ること七年、寶永八年正月四日歿す、年四十九、俳諧の著書には團袋。秋津島。赤曾有格。特うし。心の柴。塗笠。彌之助。くやみ草等あり。

團雪（だんせつ）村松氏、江戸の人、二世紫鳳の門、初名山曉といふ、安永八年正月四日歿す、年四十九。

淡淡（たんたん）松木氏、幼名熊之助、後傳七

と稱す、半時庵、勃窣翁の號あり、大阪西横堀阿波屋と稱する商家の出、弱年江戸に出て、小網町に住し、其角の門に入て氏名を曲淵宗治、俳號を渭北と云ふ、享保の初上京し、下河原に住し、姓名を森三鴨と稱し、半時庵淡々と號す、尋で松木氏を冒し、花押に青肉を用ひ、書拔を創め、總て新意を出して大に流行す、時の役人、町家多く門に入る、後年大坂に移り、茲にも淡々風を鼓吹して流行す、晩年泉州堺に居し、更に大阪島の內鍰谷に居る、寶曆十一年一月二日歿す、年八十八。大坂難波鐵眼寺に葬る、著書に八百三十番句合。淡々文集。かいつの海。無想集。淡々雑談集。晋子十七回忌。六百韻。戀獨吟。安達太郎。櫃栢。鹿島紀行。東仁波。五歌仙。六藝。十友韻。晋子三十三回。神の苗。若俵。紀行俳論。梅若葉。年賀集。重なぶり。寸歌仙紀行。月の鶴。二十歌仙等あり。

丹頂（たんちやう）澤田氏、通稱佐屋幸介、一鶴舍と號す、大坂堂島の米商、百堂の門。

旦調（たんてう）通稱刈豆屋六左衛門、江戸の人、清水超波の門、寶曆四年正月二十六

日歿す、年七十四。

潭北（たんぼく）常盤氏、名は貞尚、百花莊と號す、下野那須の人、其角の門、延享元年七月三日歿す、著書汐こし。後の月日。反故さらへ。年のみどり。俳諧反古拾遺等あり。

丹野（たんや）本間氏、通稱主馬、後に佐兵衛と改む、近江大津四の宮に住し、能太夫なり、蕉門。

丹蓉（たんやう）増山氏、名は守正、靜香園と號す、丹後舞鶴の人、醫を業とす、維新の後官途に就き、又跡いて著述に耽る、明治三十四年九月歿す年七十四。東京名勝畫詞六卷あり。

多代女（たよ）市原氏、晴霞庵と號す、奧州須賀川驛の邑長某の妻、始め道彥門、後乙二の門に入り、文政六年江戸に出て、風交す、慶應元年八月二十日歿す、年九十三。（或云文久三年九月歿す、年九十）

ち

中松（ちうしよう）酒井氏、通稱酉之丞、阿部家の臣、元文五年二月二十三日歿す、年

八十四。

智機（ちき）桐山氏、通稱正督、長崎の人、大通辭榮木仁左衛門の弟なり、京に住し醫を業とす、芭蕉に桃青の號を贈りしは此人と云ふ。

竹阿（ちくあ）北窓庵と號す、又二六庵と云ふ、馬光の門、寛政二年三月十三日歿す。

竹煙（ちくえん）坂上氏、通稱治右衛門、一夏庵と號す、上州草津の人、鳳朗門、元久二年七月十四日歿す。

竹外（ちくぐわい）深澤氏、世味庵と號す、幕府の御右筆組頭なり、柳居の門。

竹齋（ちくさい）通稱は幸庵、大阪薩摩堀に住す、濱甫の門にて蘆隱舍四世となる、著書に句商人。名月帖。落日記。欟玉藻集あり。

竹窓（ちくさう）櫻井氏、通稱源右衛門、阿兮と號す、上野下仁田の人、道彥の門。

竹城（ちくじやう）鈴木松什の男、弘化四年三月一日歿す。

竹亭（ちくてい）溝口氏、京の人、初め常矩に學び後和及に從ふ、元祿五年六月二十九日歿す、年三十五。俳諧なだまきの著あり。

竹平（ちくへい）神崎氏、通稱與五郞、名は則

安、播州赤穗の浪士、桑岡貞佐に學ぶ、元祿十六年二月四日伏刄す、年三十七。

竹冷（ちくれい）角田氏、名は眞平、聽雨窓と號す、代言人より辯護士に移る時代に於て錚々として聲名あり、市會に、國會に議員として選出し大正八年三月廿日六十四歲にて歿す。竹冷氏に俳句を好み明治廿五年新派の起るに及では秋聲會を起して之が牛耳を執り大衆を率ゐて一方に覇たり、自著は少しと雖も社中才子の後援をなして世に公にせるもの多しと云。

智丸（ちぐわん）中野氏、通稱文太夫、遠州濱松の藩士、蝶夢の門。

竹翁（ちくをう）橋部氏、耕齋と號す、京の人、元隣の門、或云好春門と、寶永五年三月五日歿す、年六十二。

竹翁（ちくをう）西村氏、通稱眞庵、瑞竹軒の號あり、熊本の人、貞門、後梅盛に從ふ。

智月尼（ちげつ）近江大津の驛長、佐右衛門が妻、乙州の母なり、弱き時京御所に奉仕し歌路と呼べり、蕉門に入て才女の稱あり、寶永二年歿す、年七十四。

遲月（ちげつ）釋氏、俗稱は丸山幸之助と云、備中笠岡の產、芥川貞佐の養家にて繼母の爲、洛西安養寺に入て剃髮し

如日空阿と號す、二柳に學び闌更、蕪村に交り宗雨、素蓮、など呼べり、諸州を行脚し遲月庵、虹橋庵、對萬庵、風露庵、摩尼庵、最中庵、瓦隣居、風露園、藤梁亭等到る所により別號あり、大坂、長崎、備中、常陸に居を轉々し竟に水戶上町に終る、文化九年九月十五日寂年六十三。著書佛書の外に俳諧水滸傳。俳諧年代記。風毛錄。呼子泊。奈古曾集。見聞隨志。遲月草。兎の園。舞日記。岐蘇道中記。そゞろ草。鼠狗征事記。百花物語。俳諧志殼。遲月文集。同文圀。同文草。同發句集。同續。

知之（ちし）千代倉知足の弟、分家して金右衛門と云、寛保二年三月十日歿す、年八十一。

知石（ちせき）鈴鹿氏、寸松堂、芦花翁の號あり、京の人、樂石の門、野馬臺集を著す、元文五年十二月十三日歿す、年六十。

知足（ちそく）小崎氏、猨海、須阿彌陀佛の號あり、京の人、知石の門、假寐の夢の著あり。

知足（ちそく）下里氏名は吉親、通稱勘兵衛、千代倉と稱して尾州鳴海の酒造家

なり、剃髪して寂照といふ、始談林風に遊び後蕉風となる、寶永元年四月十三日歿す、年六十五（尾州鳴海の傳は木太刀廿二卷三號に據る）

知足（ちそく）和田氏、玄々齋と號す、江戸の人、二世白其の門、天保三年歿す。

雉啄（ちたく）安房の人、葛三の門、鳴立庵を嗣て九世となる、天保十五年六月十四日歿す、著書、葛三句集。雉啄日々稿あり。

遲竹（ちちく）早野氏、三河の人、大阪に住す、長齋の門、文化元年六月一日歿す。

雉丈（ちちやう）春卉坊といふ、南總の人、盲者なり、鳥醉の門、寛政四年六月歿す、年五十餘。

知德（ちとく）福井氏、通稱長右衛門、京の人、初名來德といふ、立圃門。

千春（ちはる）大原氏、通稱彦四郎、千之の從弟、共に宗因門なりしが、後蕉風に移る、妻綾戸又俳を善くす、著書武藏曲。假舞臺あり。

治平（ちへい）堀越氏、大阪の人、古筆鑑定家なり、宗因の門、古今俳諧師手鑑の著あり。

知木（ちはく）鈴江氏、通稱傳兵衛、寄松堂と號す、知石の門、元文五年五月二十八日歿す、年四十四。

千丸（ちまる）二條攝政政康卿の俳號、貞德の門、寛文六年七月二十八日卒す、年六十。

珍碩（ちんせき）濱田氏、通稱道夕、酒堂と號す、近江瀬田の人、大阪に住し醫を業とす、蕉門の故老にして、ひさご。深川集。白馬集を著す。

椿堂（ちんだう）德田氏、通稱長太夫、東竹庵と號す、伊勢古市の人、士朗の門、文政八年十一月十八日歿す。

珍重（ちんちやう）今井氏、通稱八右衛門、仙梅堂と號す、薩州の人延享四年十月九日歿す。

長隱（ちやういん）山田氏、花實庵、龜硯齋と號す、初名曲秀、三世一漁の門。

長隱二世（ちやういん）及川氏、鶴々房と號す、四世一漁の門。

暢好（ちやうかう）平岡氏、通稱與左衛門、文蛤子と號す、京の人、延清の門、享保十六年十月二日歿す、年四十。

長庚（ちやうかう）蕪村を見よ。

長鶴（ちやうかく）志村氏、通稱源七郎、江戸の人、延享元年二月二十九日歿す、年三十二。

長吉（ちやうきつ）福岡氏、通稱餝屋吉兵衛、京の人、貞德の門。

長虹（ちやうこう）尾張の人、竹葉軒と號す。蕉門。

丈左（ちやうさ）岸氏、一無庵と號す、京の人、江戸に出て烏明門となる、花無津見の著あり。

長齋（ちやうさい）七五三氏、名は公齋、字は延美、通稱倉敷屋作右衛門、梯壺、放雀園、長月庵の號あり、大阪淀橋に住す、大魯の門、萬家人名錄の著あり、文政七年四月十九日歿す、年六十八。東天滿蓮興寺に葬る。

丈草（ちやうさう）内藤氏、幼名林之助、後林右衛門と云ふ、家代々尾州犬山の重臣なり、貞享元年、丈草二十五歳家を異母弟に讓り、熊野先聖寺の玉堂を師とし禪門に入る、尋で蕉門に入り俳を學ぶ、粟津龍ヶ岡に庵を搆へて弘句庵、懶高の號あり、元祿十七年二月二十四日寂す、年四十二。龍岡東林に葬る、丈草句集世に行はる、著書にれころび草あり。

長式（ちやうしき）池田氏、友貞の門、俳諧馬鹿集の著あり。

長水（ちやうすゐ）柳居を見よ。

長翠（ちやうすゐ）常世田氏、下總匝瑳郡木戸村の人、椿海、小簑庵の號あり、白雄門

下の高弟にして二世春秋庵なり、後年出羽袖ヶ浦に住し故床庵と云ひ、又酒田に移り殘露庵と稱す、乙二、素鄉、五明と共に奥羽四天王の稱あり、文化十年（或八年）八月十二日歿す、ふりつむ花の著あり。

丈水（ちやうすゐ）五柏園と號す、江戸の人、文化五年四月二十二日歿す、丈水句集あり。

長成（ちやうせい）菅氏、兎耳庵、鷗村、青棠の號あり、播州の人、蒼虬の門に入り半化房二世を名告る、後江戸に住し鳳朗に屬す、天保二年十二月十二日歿す、年三十八。

丈石（ちやうせき）早川氏、名は知雄、剃髪して宗順と稱す、千載堂の號あり、京の人、知石の門、安永八年七月二十一日歿す、年八十五。著書に俳諧家譜。思出草。名目鈔。俳諧筌。筆舞臺。長樂寺千句。菅簑日記。岡吟百家仙。緒手卷拾遺。橋立紀行。南紀々行。狂歌百首。續後霜轍あり。

丈竹（ちやうちく）田中氏、霽月堂と號す、大阪の人、團水の門、享保十六年十月二十七日歿す、年六十七。

長年（ちやうねん）通稱三五郎、伊賀上野の人、酒屋を業とす、蕉門三十一人衆なり。

丈鳴（ちやうめい）戸田氏、京の人、去音の門、明和三年九月七日歿す。

茶靜（ちやじやう）井上氏、通稱清七、竹樹軒、雪水軒の號あり、江戸の人、鳳朗の門、俳諧職業畫。美佐古。種茄子の著あり。

茶雷（ちやらい）山縣氏、東居齋と號す、大坂の人、白羽の門。

千之（ちゆき）望月氏、通稱三郎助、露分軒、近隣子の號あり、京の人、始め維舟の門、後宗因の門となる。

千代女（ちよ）加賀松任驛、表具師福增屋六兵衛が女、（福增屋は旅宿との說あり）幼名を「はつ」といふ、始め希因の門に入り、後盧元坊に教を聞き、伊勢の乙由に文通し、遂に著名の作家たり、夫歿して薙髪し素園と號す、傍ら畫を松村吳春に學ぶといふ、安永四年九月八日歿す、年七十五、松任驛聖興寺に葬る、（一說に金澤專光寺とす）千代尼句集世に行はる。

重五（ちようご）北藤氏、通稱加右衛門、後彌兵衛と改む、尾州名古屋の人、蕉門。

重厚（ちようこう）井上氏、京の人、去來の外戚なり、蝶夢に學ぶ、落柿舍を再建し嵯峨に居る、後年粟津義仲寺に庵を搆ふ、享保四年正月十八日歿す、年六十六。著書に乞食袋。俳諧句双紙あり。

重山（ちようさん）櫻井氏、伊賀の人、立圃門。

重雪（ちようせつ）通稱伊勢屋清次郎、雲足と號す、江戸の人、珪琳門、元文五年三月六日歿す。

重德（ちようとく）寺田氏、信德門、（大系圖に云寺田次郎右衛門正安、寺田清兵衛休也の二人あり兩士の内の一人か別人か不詳）著書に胡蝶判官評。三木櫻。類船。雛形。袿姿。便船。新花よめ。獨吟。續獨吟。塵塚。新獨吟。花見辨慶等あり。

樗雲（ちようん）林氏、通稱茂左衛門、觀閑亭と號す、初代冬映の門。

澄里（ちようり）上田氏、京の人、花里の門、安永七年十月十九日歿す、年三十九。

樗堂（ちようだう）栗田氏、名は政範、通稱廉屋三左衛門、後專助と改む、息隱居、昆宜庵の號あり、伊豫松山の素封家にして、大年寄役を勤む、曉臺の門に入て二疊庵蘭之と呼び、後樗堂と更名す、伊豫の地風交に便ならずとて藝州御手洗に庵を結び住す、文化十一年八月二十一日

歿す、年六十六。家集澤窓集世に行はる。

如風（じょふう）尾州鳴海 如意寺 六世文英和尚の俳號、蕉門、寛永二年九月二十一日寂す。

樗良（ちょら）三浦氏、名は冬翮、通稱勘右衛門、無爲庵と號す、志州鳥羽の人、稻垣對馬の守の家老、稻垣彌惣右衛門の家人、十四歲父と共に勢州山田岡本に隱る、晝を蕉村に學び、俳は師事する所なし、始め三笠付の點者なりしが、伊勢風の俗に墮るを慨し、明和四年新風を起す、中興正風の先驅たり、晩年薙髮して玄仲と稱す、安永元年十一月十六日歿す、年五十二。山田 妙見山麓嵩寺に葬る、櫻眞句集世に行はる、著書に櫻眞七部集あり。

千里（ちり）損居士と號す、大和葛下郡竹内村の人、蕉門に入り野晒紀行の時相從ふ、元祿九年七月十七日歿す。

智輪（ちりん）角田氏、通稱久野、駿河の人、曉臺門、寛政六年十二月二十四日歿す、年六十。

つ

月成（つきなり）平澤氏、名は常富、通稱平椅、薙髮して平荷と云ふ、明誠堂と號す、佐竹侯の留守居役、狂歌を巧にし、戯作に高名なり、龜成の門、文化十年五月二十日歿す、年七十九。

月守（つきもり）神田氏、通稱遣酒右衛門、京太郎と號す、江戸の人、藝太門、月守被句集世に行はる。

經定（つねさだ）山本氏、規妙子と號す、京の人、延清門、享保十九年二月二十六日歿す、年四十八。

常辰（つねとき）畢士氏、通稱長兵衛、松風軒と號す、京の人、立圃の門、貞享二年二月九日歿す、著書に木男さらひ。墓啓集。柾木葛あり。

常長（つねなが）村田氏、松風軒と號す、京の人、片桐貞深に學ぶ、大系圖に常辰が男にして畢士氏とす。

常矩（つねのり）田中氏、常長の甥にして貞深門なり、或は云ふ季吟門と、又貞保門と云ふ、大系圖に常辰が男にして畢士氏とす。

常春（つねはる）服部氏、眼柳亭と號す、京の人、令徳門、正徳五年八月十三日歿す、年七十二。

恒丸（つねまる）今泉氏、名は一、字は大寧、葛齋、石岩等の號あり、下總佐原の人、白雄の門、文化六年九月十四日歿す。

て

程己（ていき）朝倉氏、白日堂と號す、蕉門。

貞右（ていう）通稱貞右衛門、混沌軒と號す、大阪の人、貞佐の門、天明三年歿す、年五十。

貞因（ていん）榎並氏、通稱鯛屋善右衛門、長閑堂、白后齋の號あり、大阪に住し棄子舖なり、狂歌に有名なる油繰齋貞柳が父にて、貞室の門、元祿十三年三月二十三日歿す、年八十。

貞賀（ていが）貞山の男、一洲堂の號あり。

定雅（ていが）西村氏、通稱甚三郎、椿亭、俳仙堂と號す、京三條柳馬場に住し針問屋なり、蕪村に學ぶ、粹ヶ川といふ書を五回著して粹川翁の名あり、文政九年二月十二日歿す、年七十。著書に二色草紙。品ゐらび。春慨紙。粹ヶ川等あり。

貞橘（ていきつ）江戸の人、貞山門、「笛竇」の著あり。

底盧（ていろ）龜井氏、名は常郷、字は其考、尾張の人、延享四年七月二十五日歿す、年五十三。紙袋の著あり。

貞兼（ていけん）藤谷氏、名は貞好、通稱は甚吉、仰雲軒、桂翁の號あり、京の人、初め令德に學び、後貞德に從ふ、兄貞利、恂節と號し、又貞門なり、元祿十四年十月二十七日歿す、年八十七。

貞佐（ていさ）桑岡氏、名は永房、幼名平三郎、桑々畔と號す、中比了我と稱し、僧侶なりしが、其角の門に入て俳師となる、初め平三の國音を取て平砂と云ひしが、後貞佐に改む、享保十九年九月十日歿す、年六十五。（或云ふ享保十七年十月十二日歿す、年六十三）本所法恩寺中圓理院に葬る、著書に梨園。紙かひこ。江戸歌仙合。其柱。鳥廷諧等あり。

貞佐（ていさ）水原氏、（初中川氏）一十軒、短頭翁の號あり、京の人、初め幸佐に學び、後貞恕に從ふ、延享四年十二月六日歿す、年六十八。河東法林寺に葬る、著書に御傘集解。四ッ鉢あり。

貞佐（ていさ）芥川氏、通稱久右衛門、桃緣壹と號す、安藝廣島の人、諸侯に遣し、珠に狂歌に有名なり、俳諧は師事する所を知らず、安永八年正月二十一日歿す、年八十一。

貞佐（ていさ）阜月氏、風肝坊、井人軒の號あり、江戸の人、三世平砂門、嘉永八年正月二十一日歿す、年八十一。

鼎左（ていさ）桃の木、鳳樓居の號あり、大坂の人、花屋御坊前に住す、奇瀧の門、花屋庵の號を編ぐ。

貞山（ていざん）桐溯氏、蘆丸舍、湖月堂の號あり、儒者松永尺五の男、貞室に學ぶ、後江戸に住す、寛保元年歿す、年七十餘。著書に江戸名所集。俳諧其傘。

貞之（ていし）谷崎氏、谷遊軒と號す、京の人、種寛の門、海士釣舟の著あり。

貞至（ていし）星川氏、遠柿庵と號す、眞山の門、机錦手の著あり。

貞至（ていし）中島氏、期見庵と號す、京の人、羅人の門。

貞室（ていしつ）安原氏、名は正章、通稱は鯉屋彦右衛門、一瓢軒と號す、京の人、貞德門の高足にして、花の本第二世となる、爲に同門中の憎みを受けたりと、寛文十三年二月七日歿す、年六十四。鳥羽實相寺に葬る、著書に玉海集。同追加。氷室守。片言法師。慈母道善。獨吟千句。五條百句。百句自註。附合大全等あり。

貞恕（ていじょ）乾氏、名は重次、通稱は次郎兵衛、越前敦賀の人、京に上り貞室の門に入り、花の本三世となる、近江大津に居す、花の本は相續の弟子なく、此貞恕にて絕たりと、滑稽傳に見ゆ、元祿十五年三月四日歿す、年七十五。著書に新玉海集。蠅打。一瓢軒隨筆。阿太知千句等あり。

貞松（ていしょう）遠藤氏、二夜庵二世と號す、奥州弘前の人、關更に學び、江戸に出て後鄉里に歿す、寛政十年十一月十二日、年四十。

貞扇（ていせん）北川氏、東園舍と號す、大阪の人、始め才麿の門、後雲扇の門に學び、京に來り兒島大主の社中に屬し、最

ていてい

も點取に巧みなり、寛延三年五月十六日歿す、年六十四。

堤亭（ていてい）下村氏、通稱又右衛門、螺舍と號す、江戸の人、其角の門、長水、宗瑞等と五色墨を起して世に名あり、享保二年三月十一日歿す、年五十五（或云ふ三月十三日又二月十七日年四十五）、深川法禪寺中南龍院に葬る。

貞德（ていとく）松永氏、幼名勝熊、通稱を清右衛門と云ふ、逍遙軒、延陀丸、長頭丸、保童丸、明心居士等の號あり、松永彈正久秀の末子、永種（宗養門）の子なり、細川幽齋に和歌の傳授を受け、里村紹巴に連歌の式目を問ひ、守武、宗鑑が滑稽を慕ひて、遂に俳諧の一體を興す、寔に此道の開祖にして、御傘を撰し連歌の新式に則り俳式を定む、慶長三年八月勅許を蒙り、花の本宗匠となる、花咲翁の名遠邇に震ふ、承應二年十一月十五日歿す、年八十三。洛南鳥羽實相寺に葬る、著書には御傘。淀河。油糟。天水抄。紅梅千句。其他歌學の書頗る多し。

貞富（ていふ）榎並氏、通稱清左衛門、花實庵と號す、貞因の從弟にて貞德門なり、正德二年五月六日歿す、年七十二。

ていぼく

貞木（ていぼく）出口氏、花香堂と號す、初名柳意、京の人、貞室門、一說に西武門、元祿九年十月朔日歿す、年七十一。手松明。落松葉の著あり。

貞隆（ていりう）佐保氏、江戸品川の人、貞山に學び、武州川越に住す、介我の從弟と云ふ、鵜の遊の著あり。

貞爲（ていゐ）梅原氏、和海軒と號す、京の人、松堅の門、梅園三世なり、享保十三年七月十四日歿す、年六十。

貞屋（ていをく）熊谷氏、（一に金原氏）、旭洲洞、蘆丸舍二世の號あり、貞山の門、著書に後紅梅千句あり。

調和（てうくわ）岸本氏、名は友正、通稱猪右衛門、土齋、壺瓢軒の號あり、石見の人、荻野安靜に學び、江戸に出て、鳴る、正德五年十月十七日歿す、年七十八。築地本願寺に葬る、著書に夕紅。面々硯。洗朱。題林一句。郭公十二歌仙。是まで草。富士石等あり。

調和二世（てうわ）堀尾氏、敲柳堂と號す、前名和椎、江戸の人、寛保三年歿す。

鳥醉（てうすゐ）白井氏、名は信興、通稱は善左衛門、松露庵、露柱庵、松原庵等の一世なり、上總埴生郡地引村の人、江戸に出て佐久間柳居の門に入り牧羊と稱し、二世露霞窓となる、師風を固守して伊勢風を鼓吹す、晩年大磯の鳴立庵を再興し、三世を名告る、明和六年四月四日歿す。

鳥醉二世（てうすゐ）熊澤氏、名は序比、二世露柱庵兀雨といふ、武州八王子の人、後松原庵三世を名乘る、星布の親戚、醫業なり、文化五年四月十五日江戸に歿す。

釣雪（てうせつ）堀氏、名は元厚、京の人、一雪の門、能樂を好み能火消と綽名せらる、醫を業とす。

朝叟（てうそう）石内氏、江戸の人、其角の門、家門集。其濱木綿。溟の手。綰柳の著あり。

鳥道（てうだう）德田氏、伊高齋と號す、京の人、周爲の門。

超波（てうは）清水氏、通稱長兵衛、獨歩庵と號す、江戸の人、味噌問屋なりしが、破産して俳人となる、桑岡貞佐に學び、始め長巴といふ、元文五年七月二十二日（或云ふ十七日又二十七日）歿す、年三十六、淺草阿部川町稱念寺に葬る、（一說に諏訪町淨光寺）著書に落葉合。紙鬘。塚のにしき等あり。

召波（てうは）黑柳氏、春泥舍と號す、京の人、商家なり、蕪村の門に入て俊足た

ていし

り、明和八年十二月歿す、春泥句集世に存す。

荻子（てき）辻氏、名は景芳、通稱五平次、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり、享保十四年十月十日歿す。

滴水（てきすゐ）村山氏、風流子と號す、京の人、似船の門。

哲阿彌（てつあみ）佐藤氏、名は祐英、通稱又兵衛、牛島庵、露入道、清談林の號あり、秋田角館の產、佐竹侯に仕へて江戸定府となり馬場存義に學で塔露、北齋、朝四など呼びしが寶曆明和の比古調復活の兆を喜び、專ら浪花の宗因を慕ひて一流をなす、谷素外、酒井抱一等と往來して唱和す、晩年牛島に居を構へ牛島庵晩得と稱す、寛政四年の秋歿す、著者に古事記布俱路。芳野旅日記。哲阿彌句藻あり。

鐵齋（てつさい）三井園と號す、遠州の人、初名蚊牛、雪中庵完來の門、天保二年六月二十七日歿す、年五十七。

轍士（てつし）高島氏東鮪庵、楓翁、佛狸齋の號あり、京の人、宗因門の俊秀なり、曾て花見車を著し當世の俳人を遊女に見立て品隱し頗る時弊を諷す、著書に我庵。糸屑。此日。七車集。後瀬山。夜櫻。世の爲。わだち。白眼。尾山集。自在館。葵車。黑うるり。元祿拾遺。似我蜂。花見車等あり。

鐵舟（てつしう）小澤氏、浮月房と號す、京の人、二世徑堂の門、安永四年六月六日歿す、年五十二。

銕叟（てつさう）下鄕氏名は文雄通稱五郎八、藏六岡、聞潮介の別號あり、蝶羅の叔父にして千代倉家四世の主人なり、蝶羽の嗣子一に龜世と呼ふ、明和元年七十七にて歿す。

鐵曾（てつそう）蕪村門。

鐵叟（てつそう）蝶羽を見よ。

鐵卵（てつらん）上島氏、青人の舍弟なり、維舟の門、當時鸞動と双璧の名あり、元祿二年十月十日歿す二十八。

蝶羽（てふう）千代倉氏、通稱勘左衛門、寂照軒と號す、尾州鳴海の人、知足の男、蕉門なり、後鐵叟と稱す、寛保元年十一月十二日歿す、年六十五。千鳥掛の著あり。

蝶之（てふし）人見氏、芳草亭と號す、京の人、市楓の門、明和五年八月二十五日歿す、年五十一。

蝶々子（てふてふし）神田氏、（本姓平野）名は政宣、後政國と改む、通稱は左兵衛、風吟庵と號す、紀州和歌山の人、初め貞德に師事し、貞賴と呼び後貞宣と改め、更に江戸に出て井阪春清に學ぶ、明曆三年蝶々子と稱し、紅葉軒、花樂軒の號あり、別に一家を成し、物忘草、思出草を著して其名振ふ、其他玉手箱。當世男。松茸草。朋友集。立聞。板敷。江戸八百韻。詞の友。四季草木行事。己己巳巳。園の梅。蝶々遊。蝶々子草。江戸紫。百千鳥等あり。

蝶夢（てふむ）釋氏、名は幻阿、五升庵、又泊庵の號あり、京師中川阿彌陀寺歸白院の住職、後退隱して洛東岡崎に居す、師傳なく專ら蕉翁の遺著を搜り、旁ら二柳几董等と風交して俳諧を究む、寛政七年十二月二十四日寂す、年六十四。著書には蕉翁繪詞傳。芭蕉翁發句集。祖翁百回忌。類題發句集。新類題發句集。芭蕉翁文集。名所小鏡。蕉門俳諧語錄。芭蕉翁俳諧集。去來丈草發句集。乙酉墨直し等あり。

蝶羅（てらう）下鄕氏、名玄雄、字は官龍、臨川居、簑虫庵、の別號あり通稱は四郎兵衛、千代倉酒造店の別家として東都の支店にあり、俳諧は叔父鐵叟、米仲、也有等に教を受け交遊諸國に多

し、安永五年五月六日歿す、年五十四。

田女（てん）谷口櫓川の妻、由眉齋と號す、田女發句集あり、安永八年七月二十日歿す。

田女（てん）龜貝の妻、文政七年九月二十四日歿す。

天蹊（てんけい）松本氏、名は雄、字に子雄、順亭、紫陽亭の號あり、樨柯の男にして、三世の東杵庵を嗣ぐ、才學ありて考證に精し、著書に俳諧多識篇。猿蓑抄。紫陽亭餘筆。詩經名物辯解あり。

沾山（てんざん）内田氏、玉桂坊、桂二坊の號あり、江戸の人、沾德に學び、沾洲に次で流行す、寶暦八年歿す、著書に麓の道。濱松枝。東千句。芥川等あり。

沾洲（てんしゅう）貴志氏、行輔軒、五千叟、橘南居、篁影堂の號あり、江戸の人、沾德の門に入り、初め民丁といふ、比喩體の句を以て大に享保の俳壇に鳴る、元文四年十二月十七日歿す、年七十。深川正源寺に葬る、著書に兩吟集。西行庵。芭蕉庵。梅日記。七十子。五十四郡。のぼり鶴。百千萬。親鸞等あり。

沾德（てんとく）水間氏、名は友兼、通稱次郎左衛門、合歡堂と號す、江戸の人、刀劍の磨師なり、始め福田露言に學び、露葉といひしが、飛鳥井雅章卿の岩城へ下るに隨ひ、剃髮して友齋と名告り、歌道を聽く、江戸に歸り内藤露沾公に伺公し、直弟となり沾德と改む、江戸風の一體を興し、頗る流行を極む、享保十一年六月晦日歿す、年六十三。本所法恩寺中陽運院に葬る、著書に一字幽蘭集。文蓬萊。船便。俳度曲。枝葉集。餘花百句。秋花千句。

田福（てんぷく）川田氏、攝津池田の人、蕪村の門。

天姥（てんぼ）虎杖庵と號す、信州の人、梨翁と同人か、文政五年歿す。

沾圃（てんぽ）三世立圃を見よ。

天來（てんらい）牧岡氏、名は貞虎、反故庵、花咲舍の號あり、大坂の人、俳統は安原貞室より貞因に傳はり貞峨、田鶴樹、左逸と經て天來に至る、反故庵二世なり、當時梅室の勢力熾んなるに對し俳諧七草を著はして其附句を論難攻擊して完膚なからしめたり、梅室又春の田を著して之を打返したるは有名なる事柄とす、天來文久元年十一月其子の放蕩無賴を憂へて天保山沖に投身して歿す、年七十六。

天老（てんらう）小見山氏、尾州名古屋の人、曉臺の門、文化六年三月歿す。

天亮（てんりやう）新妻氏、名は胤往、通稱は弘人、欽齋と號す、仙臺の藩士、祖父立麿三世立志の門たり、父立富之を繼ぎ、天亮又父より承て俳を善す、文政時代。

沾涼（てんりやう）菊岡氏、名は房行、通稱藤右衛門、崔下庵、南仙齋の號あり、伊賀の人、江戸に出て、初め一晶に學び、後露沾門に入る、和漢の學に通じ、江戸砂子、近代世事談等の有用の述作頗る多し、（一說に江戸神田に住し經師屋なりと云ふ）延享四年十月二十四日歿す、年六十二。淺草暫願寺に葬る、俳書には藻鹽袋。綾錦。懷寶規矩。鳥山彦。三十六番句合。百福壽。俳諧故事談。奈良土産等の著あり。

沾涼二世（てんりやう）北村氏、東芭菴、開行舍の號あり、活井舊室の門、沾涼の緣家なるを以て二世を嗣ぐ、天明三年二月二日歿す、年八十五。

と

都因（といん）涼帋を見よ。

桐雨（とうう）伊賀の人、蝶夢の門。

桐雨（とうう）伊能氏、通稱彦作、默庵と號す、下總佐原の人、逸淵門、安政中五十八にして歿す。

東羽（とうう）各務氏、通稱彌三次、白馬亭と號す、美濃の人、支考の姪、寶暦七年九月十八日歿す。

冬映（とうえい）牧氏、桂窓、紫陽館、老蠶、如鷺亭、白花庵、瑞興庵の號あり、初代宗瑞に學び、冬英、或冬渉など呼べり、後風窓湖十に從ひ、更に柳居に就き、遂に一家をなす、天明三年八月二十四日歿す、年六十三、品川海晏寺に葬る。

冬映二世（とうえい）一巣庵と號す、初名雨澤、兌堂と號せり、江戸の人、初世の門。

冬映三世（とうえい）通稱近江屋彌一、松守庵、方堂、蓮窓の號あり、初め野逸の門、後二世冬映に學び、三世となる。

桐葉（とうえふ）林氏、通稱七左衛門、尾州熱田の人、蕉門、正德三年五月十三日歿す。

藤淵（とうえん）國甫の門、二世杉下庵なり。

棟高（とうかう）和仁氏、（本姓向井）通稱眞庵、秋去庵と號す、肥前長崎の人、魯町の孫なり、醫を以て戸田侯に仕へ、下野宇都宮に住す、陸奥箴の著あり。

東皐（とうかう）高橋氏、名は可興、字は子觀、通稱七右衛門、春星亭と號す、陸中東磐井郡東山の人、仙臺に住す、蕪村の俳風を慕ひ、其門に入る、又書法を以て其名高く、曾て江戸に出て鳴る、文政二年十月十一日歿す、年六十七。著書に東美人集。春星句集。蕉翁句解大全あり。

藤角（とうかく）木澤氏、文子舍と號す、大阪の人、紹廉の門、寛延元年歿す、著書に蛙袋。橘屑あり。

東儀（とうぎ）峰月居と號す、江戸の人、成美の門、文政八年十月十一日歿す。

等躬（とうきゅう）相良氏、通稱伊左衛門、乍單齋、巽庵、東籬軒の號あり、奥州須賀川の驛長なり、初め未得門なりしが、芭蕉行脚の時其門に入る、寶永二年十一月四日歿す、年七十八。著書に白川文庫。伊達衣等あり。

東瓦（とうぐわ）山本氏、老橘井と號す、攝州伊丹の人、文化三年四月十八日歿す。

燈外（とうぐわい）生駒堂と號す、大阪の人、來山門、著書にひび笠。生駒堂。發心集あり。

東花坊（とうくわばう）支考を見よ。

等哉（とうさい）伊賀上野の人、蕉門。

等栽（とうさい）島越氏、佳峰園と號す、江戸の人、明治二十三年十二月六日歿す、年八十八。

冬史（とうし）中田氏、通稱庄左衛門、蓁星庵と號す、蓁々の門に入て四世夕可庵となる、嘉永二年五月二十九日歿す、年四十八。

東順（とうじゆん）竹下氏、赤子と號す、江州堅田の人、木田上野介に醫を以て仕ふ、江戸に出て由良正春の門に學ぶ、後芭蕉に見えて教を聞く、其角の父なり、元祿六年八月二十九日歿す、年七十二。

東水（とうすゐ）通稱住吉屋林助、阿波の人、江戸に住す、掬堂の門、寛保二年十月十日歿す。

桐栖（とうせい）仁木氏、通稱竹助、五彩堂と號す、攝州の人。

東成（とうせい）蕪村を見よ。

棟雪（とうせつ）細川氏、通稱壽庵、越後高田の人、醫を業とす、蕉門。

東潮（とうてう）和田氏、猪中子と號す、又一甫といふ、江戸の人、嵐雪門、元祿十五年歿す、著書に光月集。平包。松笠集。獨吟千句。榎の木等あり。

洞天（とうてん）柏原氏、通稱勝兵衛、松頂軒と號す、筑前福岡の藩士、鳳朗の門。

東同（とうさう）杉山氏、秋里館、巽齋、一風子

の號あり、出羽秋田の人、初め淡々に學び、後風光の門に入る。

東巴（とうは）郭月の長子。

童平（どうへい）井上氏、梅長者と號す、美濃岐阜の人、支考の門。

洞木（とうぼく）佐治氏、通稱順琢、伊賀上野の人、醫を業とす、蕉門三十一人衆なり。

東來（とうらい）山岸氏、通稱半六、伊賀上野の人、半殘の甥にして蕉門なり。

都牛（とぎう）高橋氏、千蝶子と號す、京の人、初め貞佐に學び、後丈石門となる、寛延二年八月十五日歿す、年四十四。

得器（とくき）島氏、古瓠庵、方圓庵の號あり、談林派の俳人、津富の門。

德元（とくげん）齋藤氏、名は利起、通稱齋宮、帆亭と號す、岐阜の城主織田信秀の臣、關ヶ原の戰に逃れて江戸に出て、和歌を指南す、上京して貞德門となり、又江戸に歸る、後若州小濱に移り、又丹後に住す、正保四年八月二十二日歿す、年八十九。橘立智恩寺に葬る、著書に俳諧初學抄。帆亭千句あり。

讀精（とくさう）村松氏、弧松軒と號す、紀州若山の人、季吟の門。

德窓（とくさう）駿州久能山德音院の住職、貞室の門。

德七（とくしち）上島氏、青人の嫡子、伊丹發句合の作者、才麿の門、享保五年三月廿二日歿す年二十九。

得知（とくち）鈴木氏、名は利平、幸堂と號す、曾て三井銀行に入て地方に勤務す、中頃職を引き各新聞の寄書家となる、江戸趣味を喜び劇通として知らる、俳諧は雪中庵雀志と兩吟多し、大正二年三月廿二日歿す七十一。

得入（とくにふ）小澤氏、通稱太郎兵衛、江戸の人、卜尺の父、初め季吟に學び、芭蕉の江戸に下るや、始めて草鞋を此家に解く、爾來蕉門に化す、寶永六年十二月二十四日歿す、年九十四。

德布（とくふ）横山氏、名は重政、通稱重右衛門、如是庵、佳日庵の號あり、本所に住し、山田屋といふ米穀商なり、二世素丸の門に入て三世絢堂を嗣ぐ。著書に旅の一つあり。

得蕪（とくぶ）福芝齋と號す、甲斐の人、江戸に住す、寥松の門、安政五年八月十二日歿す。

篤老（とくらう）飯田氏、名は利矩、通稱完藏、篤老園と號す、藝州廣島の藩士、壯歳京に出て闌更門に入り、中比大阪に醫業を脩め、泉州に南蕙園と名告り、醫を業とす、再び故郷に歸り、文政九年四月二十三日歿す、年四十九。著書に自選句帖。溫泉津日記。嚴島奉納句集あり。

吐月（とげつ）飯島氏、通稱四郎左衛門、子規亭、不白軒、松下山人の號あり、駿州島田の人、江戸に出て藝太門に入る、初名吏中、安永五年九月四日歿す、年五十四。

都貢（とこう）尾州の人、曉臺門の高足、竪並集の著あり。

杜口（とこう）神澤氏、名は貞幹、通稱與兵衛、其蝸庵、可々齋の號あり、大阪の人、京に住し町與力職なり、初め晩山に學び、淡々に從ひ、後大圭に結び、羅人を助けて一風を起さしむ、退隱して專ら硯筆に泥み、隨筆翁草百卷、塵芥五十卷を草す、當時の紀錄にして後世頗る有用の事蹟を載す、寛政七年三月二十七日歿す、年八十六。

杜國（とこく）南氏、（本姓壺井）通稱彦右衛門、（一說に餝屋平兵衛）尾州の人、藩の米切手を扱ふ、蕉門に入て奇才と稱せらる、曾て罪あり尾州領篠島に流され、後赦に遇ふて皈り、三州渥美郡畑村に住す、元祿元年蕉翁の芳野行脚に從ひ、

更名して萬菊丸といふ、後三州伊良古崎に住すと、元祿三年二月二十日歿す。

兎七（とし）山口氏、通稱は祐司、幕府の家人、二世宗瑞の門、上總刈谷に退隱す。

斗十（とじふ）江戸の人、涼袋門。

杜若（とじやく）土田氏、名は正祇、通稱小左衛門、初め柞良と稱す、伊賀の人、蕉門三十一人衆なり、享保十四年八月六日歿す。

都雀（とじやく）高城氏、菊溪庵と號す、本願寺の侍なり、文護に學ぶ、後剃髮して宗賀坊と云ふ、寛政五年三月十二日歿す。

杜春（とし）川崎氏、名は重亮、肥前唐津の人、江戸に出て、鳥泰の門に入り、千鳥庵三世と號す、其子重恭、平田篤胤に學び、國典に委し、文政四年三月二十九日歿す、年六十。

斗雪（とせつ）入江氏、五章堂と號す、京の人、嘯山門。

杜川（とせん）須藤氏、松村一齋の男、安永八年四月二十一日歿す。

橡面坊（とちめんばう）安藤氏、名は鎌三郎、備前岡山の人、日本派の俳人にて大坂毎日新聞記者なり、大正三年九月廿五日歿す、年四十六、句集深山柴あり。

斗入（とにふ）村氏、加賀の人、生涯行脚して居定らず、文化二年八月信州別所村湯の山の客舍に歿す。

杜年（とね）向井氏、去來の兄、蕉門。

土芳（とは）服部氏、名は保英、通稱半左衛門、此中庵、蓑虫庵の號あり、初名は蘆馬、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり、享保十五年正月十八日歿す、年七十四。

鈍永（とんえい）蘆田氏、九如館と號す、水原貞佐に學びしが、其調浮華、輕口振なるを以て、師勸めて狂歌師とならしむ、明和四年八月九日歿す、年四十五。

呑鯨（とんげい）京島原の娼家、桔梗屋治助と云ふ、大坂新町の茨木屋幸齋が男なり、兒島大圭の門。

呑獅（とんし）呑鯨の男、二世桔梗屋の主人なり、不夜庵太祇の門。

呑舟（とんしう）近江大津の人、蕉門。

呑水（とんすゐ）尾州名古屋遠光院の住職、日陽上人といふ、靈江齋の號あり、蕉門、享保十四年十月四日寂す。

友吹（とも）尾州の人、貞德門。

土卵（とらん）富氏、名は敦吉、從五位下左近將監、京都禁裏に奉仕す、東山に引退し、狼狽窟と號し、俳文に巧みなり、文政二年九月七日歿す、年五十九。

徒流（とりう）石原氏、吟花庵、可來庵の號あり、江戸の人、初祖存義の門、庄司勝富が吉原洞房語園を增訂して北女郎起原の作あり。

屠龍（とりよう）酒井氏、名は忠因、播州姫路の城主、備前守忠仰の第二子、弱冠より隱居し、抱一、鶯村の畫名世に高し、俳諧は馬場存義に學て、江戸風の洒落を盡す、雨華庵、庭柏子、輕擧道人の別號あり、剃髮して文詮と稱す、句集に屠龍の技一卷あり、文政十一年十一月二十九日歿す、年六十八、築地本願寺中に葬る。

杜菱（とりよう）中川氏、（麥浪舍と號す、乙由の男、麥林集。心の蝶。一字題の著あり。

な

何丸（なにまる）小澤氏、通稱治郎右衛門、月院社と號す、信州の人、毛呂一元といへる醫師なり、闌更の善光寺詣の際門に入り、俳師となる、文化の初年江戸に出て、門人森村抱儀が扶助に依り居を搆

ふ、博學宏識にして尋常俳家の容るゝ所とならず、二條家に召されて宗匠號の印可を得、天保八年十月二十七日歿せり、年七十七。著書に芭蕉翁句解大成。七部集大鏡。酒茶名目一覽。藥品蠡海。異名大全等あり。

南架（なんか）松角氏、通稱周藏、納涼庵と號す、初名は髓兒、江戸幕府の士、寸長の門、安永五年三月二十二日歿す。

南岳（なんがく）太田氏、名は享、杏花園と號す、蜀山人の玄孫にて野口幽谷の門に入て畫を能す、秋聲會派の俳人、大正六年七月十三日誤て水に落て歿す年四十二。

南山（なんざん）奥州仙臺瑞鳳寺の住職、古梁師といふ、乙二の門、天保中八十五にして歿す。

南臺（なんたい）鹿窪氏、通稱宗十郎、白花園、林堂の號あり、江戸の人、初名を登蔦といふ、白芥の門、其日庵を嗣で六世となる、文化十四年十二月二十四日歿す、年三十一。

南竹（なんちく）曳尾庵、又龜の子と號す、文政頃、醫師の隱居なりと、柳亭種彦等と交り、考證に耽る、我衣の著あり、文政七年歿す、年五十二。

南明（なんめい）竹内氏、通稱周次郎、因州鳥取の人、有節の門。

に

任口（にんこう）城州伏見淨土宗西岸寺の三世にして、寶譽上人といふ、如羊と號し、里村昌程に連歌を、松江維舟に俳諧を學ぶ、後蕉門の徒と往來す、貞享三年四月寂す。

任口（にんこう）藤堂氏、名は高通、藤堂佐渡守高次の第二子にして、伊勢久居の城主なり、秀吟父子を招て俳を問ふ、八百五十韻の作あり。

ね

拈華（ねんげ）藤原氏、名は果、紙魚巣と號す、書店淺倉屋の主管なり、麥人、活東等と交り俳句に耽る、明治三十八年六月一日歿す、年二十六。

の

野風女（のかぜ）京島原松屋某の抱遊女にて、高瀬梅盛に學ぶ、又兼て藪内流の茶事に堪能なり。

野菊女（のぎく）田本氏、名はなか、後きよと呼ぶ、圓窓と號す、菜種屋清兵衛が妻、始め柳居に學び、中頃藝太に從ひ、後風窓湖十に屬して、其養女となり、野菊庵秋色と名告る、老鼠肝の養母なりといへり、野菊の母、和泉。弟五英、男古菊、嫁如菊、皆俳才ありと云ふ、天明四年五月二十日歿す、年五十八。深川雲光院寺中植光院に葬る。

は

梅逸（はいつ）江澤氏、通稱松五郎、不心庵と號す、多町に住し、青物問屋なり、通客を以て知らる、明治二十九年十二月二十九日歿す、年三十。

梅應（はいたう）山中氏、西翁堂と號す、京の人、攀高の門、寶暦二年十二月歿す。

梅應（はいたう）一世の男、天明七年五月四日歿す、年五十一。

梅價（はいか）喜田川氏、名は公香、字は子國、枯魚庵、萬象庵の號あり、西本願寺の侍、月居の門、天保十四年三月三日歿す、年七十。

梅間（はいかん）岡田氏、名は登、字は子龍、通稱半十郎、梅花園と號す、尾州名古屋の藩士、士朗の門。

買山（はいざん）在原氏、京の人、几董門。

梅室（はいしつ）櫻井氏、名は宣弘、剃髮して素芯と稱す、通稱治郎作、方圓居、遲速庵、餘花園、寒松庵、視庵、相應軒、陸々山人の號あり、加賀金澤の人、家は刀劍の研師なり、梅室刀劍の鑑定を以て藩侯に仕へ、文化元年致仕して俳に遊ぶ、時に三十七歳、初め馬來に學び、上京して闕更の門に入る、初名雪雄と稱す、江戸に出て留る事十二年、又京に歸る、名聲大に揚り、時人蒼虬、風朗と併せて三大家とす、嘉永五年十月一日歿す、年八十四。京都寺町本禪寺に葬る、著書に木葉百韻。俳諧七草。梅林茶談等あり。

梅人（はいじん）平山氏、通稱忠左衛門、獨武者と號す、三州田原の藩士、二世宗瑞に學び、杉風が採茶庵の號を繼で二世となる、享和元年十月十四日歿す、年五十八。著書、續深川集。冬かつら。杉風句集。七名八體附合要錄。繼はし。白兎、餘稿要錄。

梅盛（はいせい）高瀬氏、通稱太郎兵衛、佗心子と號す、薙髮して宗入居士と云ふ、京の人、貞德に學び、殊に歌學に博識の稱あり、元祿十二年四月八日歿す、年八十九。著書に口眞似草。頓船集。早梅集。貞享三ッ物。山下の水。落穗集。木玉集。捨子集。鸚鵡集。俳仙。古鏡。さゞれ石。はな留。狂遊集。三十六人仙。七十二物諍。道連集等あり。

梅石（はいせき）陽花庵と號す、美濃の人、蕉門。

配刀（はいたう）杉野氏、名は房滋、通稱勘兵衛、伊賀の藩士、蕉門の三十一人衆なり、享保十七年十一月十七日歿す、年八十一。

梅通（はいつう）堤氏、通稱俵屋六兵衛、麥慰舍と號す、京の人、蒼虬に學び、花の本を讓らる、元治元年三月十二日歿す、年六十八。舍利風語。麥慰舍隨筆の著あり。

梅亭（はいてい）紀氏、名は時敏、九老と號す、近江大津の人、初め若城藍田の家僕として畫を學ぶ、藍田勸めて蕪村に師事せしむ、畫の傍ら俳事に及ぶ、文化九年七月七日歿す、年七十。

梅弟（はいてい）垂井氏、通稱七兵衛、江戸の人、梅人に學び、三世採茶庵となる。

梅朝（はいてう）林氏、初名西鵬、大阪の人、宗因の門、江戸に住す、著書に通し馬。精進鱠あり。

梅年（はいねん）原田氏、通稱幸次郎、江戸四谷の人、雪中庵對山の門に入り後鳳洲の讓を受て八世雪中庵を嗣ぐ、明治二十一年雪中庵を雀志に讓り不白軒と號す、深川仲町に住して煙草入袋物を家業とせり、明治三十八年一月十二日歿す年八十五。著す所、繼集。入佛供養。後袋。空隱集あり。

梅府（はいふ）山野氏、通稱松次郎、江戸の人、梅人の門、文政二年歿す。

買風（はいふう）釋氏、名は圓諦、房州大倉滿藏寺の住僧、二世素丸の門に入て三世一練窓と號す、天保二年七月二日寂す。

買明（はいめい）交氏、（初高橋氏）木原居の號あり、清水超波の門に入り、獨歩庵二世となる、江戸派の俳師、天明四年十二月九日歿す、年七十四。著書に長者柱あ

り。

梅門（ばいもん）稻木氏、大阪の人、才麿の門、初名房麿といふ、著述に霜枯。小倉塵。布恩川。口の月。倭多羅尼。彙山蔭あり。

梅笠（ばいりつ）武州青梅の人、梅室に學び、後春秋庵の九世を嗣ぐ、文久三年六月十一日歿す、年五十九。

梅隣（ばいりん）平元氏、奥州の人、文隣の門。

梅路（ばいろ）伊勢川崎の人、もと魚商にして文字に疎し、曾北に學び、神風館を嗣ぐ、附合の作手は自然の妙を得しといふ。

梅翁（ばいをう）宗因を見よ。

梅翁（ばいをう）平角を見よ。

方由（はういう）南氏、通稱元順、泉州堺の人、醫を業とす、初め宗因の門なりしが、後蕉門に入る、元祿の初年に歿す、寛悟集。二日千句の著あり。

望一（ばういつ）杉田氏、伊勢山田の人、盲人にして音律に精し、守武の遺風を慕ひ、傍ら貞德の說を聞き、俳諧を善くす、寛永七年六月五日歿す、年八十三。

卯雲（ぼううん）木室氏、名は朝忠、通稱七左衛門、二鐘亭と號し、初名中山といふ、幕府の士一漁側の俳人、後狂歌を愛し、

白鯉館といふ、天明三年十二月歿す。

方孝（はうかう）川崎氏、浪華の人、立圃の門、筆跡よく師風に似たりと、其妻方女、六女俳仙の一なり。

抱儀（はうぎ）守村氏、名は約、通稱は次郎兵衛、眞實庵、不知齋、小青軒、補陀落三房の號あり、江戸藏前の札差なり、中村佛庵に學び、始め鷗鷺と號し、詩を以て世に鳴りしが、中比變じて何丸の門に入り、俳諧に遊ぶ、又蒼虬を京より招き學ぶ、兼て書畫點茶香花に巧みなりしと、畫は抱一の門といふ、文久二年正月十六日歿す、年五十八。

方救（はうきう）平山氏、名は直之、通稱奈良屋孫兵衛、薙髮して方石、又不琢といふ、大阪に住す、維舟の門。

方壺（はうこ）大澤氏、通稱藤九郎、徐庵と號す、江戸の人、蓼太門。

方山（はうざん）瀧氏、通稱圭水、招鳩軒、應翁の號あり、京東六條家の家士、初め維舟門にて、峰山又芳山と書す、師歿後似船に教を受くといふ、享保十五年五月二十二日歿す、年六十五。著書に此箱。正德俳諧。枕屏風。曉山集あり。

芳室（はうしつ）稻津氏、甘泉庵と號す、祇空の弟にて、椎本才麿の門に入り、其姓な

冒し舊德翁二世となる、大阪に住す、延享四年三月四日歿す、年八十四。著書に難波鶴。續千葉集。卯花月。白玉椿。簪花集。石霜庵追善あり。

寶壽（はうじゆ）石橋氏、晦朔庵と號す。

望翠（ばうすゐ）通稱井筒屋新藏、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり。

寶井（はうせい）深川氏、酒鐘庵、六藏庵、雪窓、桐窓等の號あり、江戸の人、風窓湖十の門。

芳全（はうぜん）赤井氏、清水軒と號す、京の人、隸石に學び、初名可令と云ふ、北野聖廟の笠着連歌に執筆を勤む、寛延元年十二月二日歿す、年七十四。

芳中（はうちう）中村氏、達々と號す、大坂に住し、光琳風の畫を善くす、芳室の門。

芳竹（はうちく）田口氏、黑釜庵と號す、江戸の人、沾山門、後蒼孤に依る。

望東（ばうとう）牧野氏、名は誠一、東京の人、和泉屋善兵衛といふ書肆の子なり、慶應義塾に學び上野圖書館に入て司書となる、角田竹冷の下に俳句を修し、麥人と共に俳諧年表を著す、大正二年一月十六日歿す年三十八。

寶馬（はうま）小管氏、（初吉成氏）竹恩庵、萬歲堂、達々舍、松窓等の號あり、江戸

の人、蒼狐に學び、二世五千堂を名告る、談林派なり、寛政十年二月十九日歿す、年七十二。

巴江（はかう）村田氏、水香亭と號す、伊勢白子の人、貞德派の統なり、寛政十一年五月二十八日歿す、年七十四、北野獨吟。漢和二百韻の著あり。

馬肝（ばかん）山崎氏、通稱太郎大夫、月簫と號す、江戸の人、一世湖十の門。

麥阿（ばくあ）長水を見よ。

白羽（はくう）鹿島氏、十雨齋と號す、大坂の人、紹廉の門、著書に無山香。俳諧石紫。五文齋。半墨。難波筏あり。

麥宇（ばくう）赤松氏、京の人、蝶夢の門、文化十年十二月二十七日江戸に歿す。

白雲（はくうん）戸倉氏、通稱三郎兵衛、大坂の人、天王寺導寸に學び、後江戸に住して其角門に入る、享保十五年十月二十日歿す。

白英（はくえい）山方氏、一井舍、瓠下庵と號す、江戸の人、島得器の門。

柏筵（はくえん）二世才牛を見よ。

白鷗（はくおう）浦上氏、通稱澄堅、江戸の人、醫を業とす、調和の門、延享四年八月七日歿す。

白鵠（はくかう）大矢氏、淸香庵、蘆隱軒、茅齋

の號あり、京の人、我黑に學び虎竹と呼び、後晩山門に入りて白鴎と改む、延享三年九月二十七日歿す、年七十九。著書に四季大全。俗根源あり。

白其（はくき）大網氏、無礙庵、貞幹齋、孤山老人の號あり、始め三世鄕和に學び、後初世素丸の門に入る、文化十三年正月二十日歿す、年八十三。

白芹（はくきん）關根氏、通稱叶屋三右衛門、木樨舍、素信齋、東呂子の號あり、初世素丸の門に入り、始め五味堂素水と稱し、後其日庵五世を嗣ぐ、文化十四年十月二十一日歿す、青ひさご。俳諧十葉抄の著あり。

白狂（はくきやう）支考を見よ。

白居（はくきよ）瓠形庵と號す、奥州仙臺の人、畫工四鶴（通稱喜右衛門）の末男と云ふ、四鶴は芭蕉が奥細道に杖を留めし家なり、白居、曉臺の門に遊び、始め丈芝坊と云ふ、奥州蕉風の先驅なり、寛政十二年十月九日歿す、年七十一。

薄古（はくこ）明田氏、通稱芝庵、醫を業とす、京の人、始め常矩門、後似船門に入る。

白砂（はくさ）吉田氏、名は兼爽、通稱忠左衛門、新月庵と號す、播州赤穗の浪士、

三田白峰の門、元祿十六年二月四日伏刄す、年六十三。

百洲（はくしう）江川氏、通稱幸助、掬山と號す、江戸の人、沾洲の門、延享三年四月十四日歿す、著書に內海。老の思出。花見三吟集あり。

白壽坊（はくじゆばう）野村氏、名は安長、通稱平太夫、始め敲月亭弄花と稱す、江戸下谷御徒士町に住す、是什坊の門、文化十四年六月十七日歿す、年七十九。

麥水（ばくすゐ）堀田氏、通稱池田屋長左衛門、樗庵、暮柳舍の號あり、加州金澤の人、書林を以て業とす、始め希因に學び、支考を慕ひ、後乙由に依る、終に麥水と號す、虛栗の調を喜び、一家を成して新風を唱ふ、其調、佶屈多く行はれず、麥水又多識にして、俳諧の外著述多く、慶長中外傳。琉球關和錄。三州奇談。南島變等の史談を著し、猶ほ且將碁に堪能なるを以て、藩邸に召さるゝといふ、天明三年十月十四日歿す、年六十三。俳諧の著には新虛栗。蕉門一夜口授。蕉門附句法解抄。俳諧蒙求等あり。

白雪（はくせつ）太田氏、名は長孝、通稱升屋金左衛門、密雲峰、有髪山人の號あり、

三河設楽郡の人、蕉門に入る、其子桃先、桃後、又蕉門なり、享保二十年六月七日歿す、年七十五。三河小町。きれ〴〵打込。俳諧曾我の著あり。

白黛（はくたい）京二條東洞院に住す、芭蕉の位牌を所持せしといふ、文化中歿す。

白潭（はくたん）初世沾山門。

白砧（はくてん）京の人、几董の門。

白圖（はくと）仁木氏、桂葉下と號す、尾州名古屋の人、曉臺門の俊秀、享和元年五月十四日歿す。

白頭（はくとう）熊谷氏、星霜庵と號す、江戸の人、初め龜成に學び、後旨原門となる。

白尼（はくに）蓮阿坊と號す、尾張の人、乙由の門の巴雀に教を受く、著書に三秋句合蓮の光。圃詠集あり。

白馬（はくば）吉田氏、名は勝信、丁々庵、又蝶々庵と號す、播州加古川の人、畫を以て業とし狩野派の丹青に長ず、生物、花卉、殊に鷹を以て世評高し、俳諧には師傳なく「鐘つきの今年へおりたる梯子哉」「鐘樓から餘所の鐘きく夜寒かな」等人口に膾炙せらる、歿年詳かならず安永頃。

伯夫（はくふ）宮道氏、玄々舍と號す、弘化元年十二月二十二日歿す。

泊楓（はくふう）林氏、橫橋軒と號す、美濃の人、始め蕉門に入り、後支考に從ふ、享保十八年六月九日歿す、年六十九。

白峯（はくほう）三田氏、通稱太郎兵衛、風琴子と號す、江戸の人、初め福田露言に學び、後嵐雪の門となる、寛保三年四月十八日歿す。

百陽（はくやう）阜月氏、万菓居二世と號す、平砂の門。

百里（はくり）高野氏、名は勝春、字は文館、通稱は市兵衛、江戸小田原町の魚問屋なり、始め蕉門に入り、茅風と稱せしが、後嵐雪に學んで、琴風と名を齊うして鳴る、雷堂、又俳諧舍堂の號あり、盲詩人なりと云ふ、享保十二年五月十二日歿す、年六十二。大川端東江寺に葬る、著書に遠の久。鐵槌賦。續誰が家あり。

麥里（ばくり）永田氏、四憧園と號す、京の人、丈石門、著書に四憧集。二葉草。續之流等あり。

麥林（ばくりん）乙由を見よ。

白露（はくろ）京の書肆、八文字屋自笑の孫、瑞笑と稱す、秋月下の號あり、父祖に次で浮世草子、及評判記の著あり、俳諧は羅人門、明和三年十二月十九日歿す、俳諧の著あり。

白輅（はくろ）永田氏、枝法庵と號す、遠州濱松の藩臣、蝶羽の門に入り半閑室の號を讓られ、二世となる、枝法集の著あり。

白話（はくわ）釋氏、名は光英、京都東本願寺の僧正、琢如上人と稱す、眞總門、寛文十一年四月十四日寂す、年五十四。

博和（はくわ）讃州丸龜の商賈、車龍と號す、五竹坊の門、文化七年歿す。

波光（はこう）山口氏、蔦堂と號す、蛭牙齋二世なり、山口羅人の門、俳諧を眞德風に復さんと聖廟に祈願せし人なり、明和八年十一月九日歿す、俳諧春雲集の著あり。

馬光（ばこう）長谷川氏、名は直行、通稱半左衛門、夕可庵、絢堂、一練窓、墨花齋、如是庵等の諸號あり、幕府四丸小十人衆にして、百五十俵を食む、素堂の門に入り、初名素丸、後泥山と稱す、其日庵二世の宗師なり、長水等と五色墨を興し、一時世に喧傳せらる、句集に馬光發句集あり、寶曆元年五月一日歿す、年六十七。本所原庭桃青寺に葬る、著書甚多。續五色墨。續百番句合。有渡日

記。元除春遊あり。

白翁（はくおう）初世の男、通稱秀庵。

栢翁（はくおう）森田氏、名は秀安、後元夢と稱す、二世素丸の門、初祖素堂、今日庵の號は茶家の嗣號なるを、俳諧の號とし、素丸栢翁をして襲がしむ、故に今日庵二世といふ。

白猿（はくえん）市川氏、五代目團十郎の俳號、白猿百人一句の著あり、文化三年十月廿九日歿す年六十六。

馬篤（ばとく）豐氏、名は眞穩、通稱權之丞、後仁右衛門と改む、豐流の能狂言師なり、眞門、京に歿す、元祿七年八月二十一日、年五十九。

艫女（ばとじょ）千代氏、秋踊庵と號す、南部藩加島七五郎の妻、乙二門、文政七年七月歿す。

巴人（はじん）早野氏、江戸の人、石町に住し、夜半亭の號あり、初名竹雨、其角に學び、又嵐雪にも問ふ所あり、中頃上京して江戸風を鼓吹し、薙髮の後巴人亭宗阿と名告る、後ち居を門人几圭に讓り、再び江戸に歸り、寛保二年六月六日歿す、年六十六。著書に一夜松。俳諧桃櫻あり。

巴常（はじょう）蕉門。

巴靜（はじょう）太田氏、通稱彌平次、六々庵、桑流下の號あり、美濃竹ケ鼻の産、太田何政の男、尾州名古屋に住し、支考に學ぶ、六々庵句集世に行はる、寛保四年二月十九日歿す、著述波計都以天。吾妻からげあり。

波靜（はじょう）日下部氏。通稱小源次、多少庵と號す、江戸の人、秋爪の門。

馬吹（ばすい）通稱若狹屋利兵衛、波岐亭と號す、丹後宮津の人、享和中歿す。

巴井（はせい）瀧口氏、通稱源兵衛、不朽亭と號す、初名龜江、南總の人、鳥酔門。

芭蕉（ばせう）松尾氏、通稱甚七郎、後忠左衛門（或云ふ藤七郎）父は松尾與左衛門、母は宇和島の産、桃地氏、正保元年、伊賀柘植郡に生れ、寛文元年、藤堂家に奉仕す、老公蟬吟に就て京の季吟に學ぶ、寛文六年、主公の逝去に會し、致仕して故郷を出で靈水となる、初名宗房と稱し、泊船堂、無名庵、蓑虫庵、狐中庵、釣月軒、風羅坊、杖錫子など、其時々別號す、既にして名を桃青と改め、江戸に出て杉風の家に寓す、深川に芭蕉庵を結び、新風を興す、所謂蕉風是なり、當時の青年之に和し、故老の俳士皆下風に立つ、宇内を席卷して、大漢の鴻圖

なゝし、無前の覇業を大成す、第、儒を伊藤坦庵に學び、歌を北村季吟に問ひ書を北村雪竹に、畫を森川許六に修し殊に佛頂禪師に參して禪に心體を練る、杜子美が沈鬱、西行が寂寥を慕ひて、寂栗に風韻を觀す、惜哉、元祿七年十月十二日、大阪花屋の客舍に歿す、年五十一。近江粟津義仲寺に葬る。

坡仄（はそく）伊勢の人、椋真の高弟。

巴丈（はちょう）尾州の人、支考門。

巴丈（はちょう）牧氏、（初め鰐目氏）通稱甚平、無事庵と號す、江戸の人、初龜冬瞑門。

巴丈（はちょう）春凍庵と號す、伏見の人、巴人門、文化九年十月十四日歿す。

法芳（はっぱう）佐藤氏、發我の門、介我の統四世なり。

八千房（はっせんぼう）舍樗を見よ。

八千房（二世）（はっせんぼう）駝岱を見よ。

八千房（三世）（はっせんぼう）屋鳥を見よ。

八千房（四世）（はっせんぼう）淡叟を見よ。

八千房（五世）（はっせんぼう）其山を見よ。

髮々（はつ〴〵）貫名氏、萬波庵と號す、小菅賓馬の門、寛政九年七月十日歿す、年七十二。

馬貞（ばてい）長野氏、名は統勝、通稱は與

一郎、茂林堂、甲子庵、柴石堂、瓢々坊、遠山翁等の號あり、豊後の人、蕉風を葛ひ一家をなす、寛延三年九月十九日歿す、年八十七。

馬泥(ばでい) 長谷川氏、名は直數、通稱半左衛門、馬光の男、二世夕可庵なり、寶暦七年歿す。

馬東(ばとう) 蕪村を見よ。

馬南(ばなん) 大魯を見よ。

馬乳(ばにう) 中岡氏、朱羅樓と號す、初名英賦、京の人、羅人門。

馬年(ばねん) 石原氏、通稱泰助、又節平、松洞と號す、仙臺の家士、馬光門。

法雨(はふう) 山崎氏、通稱與惣兵衛、半黔居、二世老茄園、業花坊の號あり、武州赤岩の人、馬光の門、文化八年正月元日沒す。

法策(はふさく) 馬江田氏、江戸の人、祇空門。

馬佛(ばぶつ) 六成堂と號す、江州彦根の士、蕉門、元祿九年十一月二十二日歿す。

馬佛(ばぶつ) 加賀の人、馬來の門、文政十二年歿す。

晩雨(ばんう) 江戸の人、成美の門、嘉永六年四月十三日歿す。

萬英(ばんえい) 波多野氏、三寸庵、東圃の號

あり、江戸の人、乾什の門。

萬英二世(ばんえい) 初世の男。

萬英三世(ばんえい) 東氏、如葉と號す、燕志の門。

萬英(ばんえい) 二松庵と號す、安永九年七月二日歿す。

萬海(ばんかい) 武松氏、名は昌數、曳尾堂と號す、大阪の人、高瀧似仙の門。

攀高(はんかう) 山縣氏、杏花亭と號す、京の人、友扇に學び、二世桂花園なり、享保十五年十二月二十七日歿す、年六十四。

萬客(ばんかく) 京の人、几董門。

萬嶽(ばんがく) 金子氏、古調庵と號す、羽州の人、初め風革に學び、後也梁に從ふ、江戸に出て列者となる、文化十年二月歿す、年八十五。

萬和(ばんくわ) 臥鷗を見よ。

半化坊(はんくわばう) 闌更を見よ。

萬乎(ばんこ) 通稱大阪屋次郎太夫、伊賀上野の人、蕉門、三十一人衆なり、享保九年八月十五日歿す。

盤谷(ばんこく) 志水氏、泉亭、雪香齋と號す、江戸瀬戸物町に住す、宗因の門、(大系圖に云ふ或は越前の人、家書桑梓略あり、又木村盤谷、大阪住、同名別人歟)著書に水尾杭。桑梓杭あり。

盤谷二世(ばんこく) 千足氏、通稱次郎右衛門、梅堂、雪香齋、比蓬塘の號あり、江戸の人、一世の門、寛延元年十一月六日歿す、飛鳥山。園圃錄の著あり。

斑象(はんぞう) 石中庵と號す、初名平舍、吏登の門に入り、二世素丸等と後の五色墨を興す、安永八年十一月歿す、著書に櫻勸進あり。

斑象二世(はんぞう) 中山氏、通稱甚五右衛門、石中堂と號す、江戸の人、蓼太門。

半殘(はんざん) 山岸氏、名は棟重、通稱重左衛門、伊賀藤堂家の藩士、芭蕉の姉聟なり、蕉門に入て名あり、享保十一年六月十二日江戸に歿す、年七十三。

晩山(ばんざん) 爪木氏、唫花堂と號す、京の人、初め二童齋永可と呼ぶ、宮川松堅に學び、元祿頃京都俳壇に鳴る、享保十五年八月十五日歿す、年六十九。著書に千代古道。橋立案內。撰物語あり。

潘山(はんざん) 壙氏、百千堂と號す、大阪の人、貞峨の女を娶て其俳脉を嗣ぐ、著書に橋柱。仙家の杖。猫筑波。盆筑波。餅月夜。時雨の橋。百千堂雜話あり。

萬子(ばんし) 生駒氏、通稱藤九郎、後內膳と改む、此君庵と號す、加賀金澤の藩士、食祿八百石を食む、元祿の始め芭蕉

に見え、其門に入る。

伴自(はんじ) 長井氏、名は家久、蛟市と號す、小西來山の門、雲雀笛の著あり。

半捨軒(はんしやけん) 名は正寮、大阪の人、宗因門、貞享中歿す。

晩翠(ばんすゐ) 齋藤氏、名は貞直、紅白堂と號す、備前の人、如泉の門、蟬小河集の著あり。

萬成(ばんせい) 笠氏、孤雲齋と號す、江戸の人、初世左廉の門、寛政十二年正月三日歿す。

樊川(はんせん) 林氏、大坂の人、東江閣と號す、布門の弟子、著書に、擊鼓樓一日千句。櫻道。雲の峯。菊の句。藍の手。東武遊記等あり。

萬踈(ばんそ) 閱氏、通稱九兵衛、丹波福知山の人、貞室の門。

晩得(ばんとく) 哲阿彌を見よ。

晩年(ばんねん) 野々山氏、桃隱居、招花堂の號あり、京の人、晩山門、享保十八年八月八日歿す、年五十八。

萬籟(ばんらい) 池田氏、播磨守賴方と云ふ、幕府御勘定奉行を勤む、紫花庵と號す、明治九年二月十七日歿す。

晩籟(ばんらい) 中江氏、通稱伊兵衛、松濤と號す、能登の人、曉臺門。

萬里(ばんり) 太田氏、名は盛庸、通稱次郎兵衛、幕府の士、梅弟に學び探茶庵四世を嗣ぐ、天保五年歿す、年七十七。

萬里(ばんり) 三澤氏、通稱次郎兵衛、上總の人、烏醉の門。

半輪(はんりん) 豊浦氏、通稱冝左衛門、大坂の人、文化七年十月二十五日歿す、年七十。

萬礫(ばんれき) 加藤氏、無樂庵と號す、江戸の人、四世一漁の門。

萬翁(ばんをう) 木田氏、通稱錢屋庄左衛門、浪華の人、初名几掌といふ、紹廉の門に入て二世一炊庵と號す。

馬來(ばらい) 上田氏、槐庵と號す、加賀金澤の人、希因に學ぶ、蒼虬梅室等が始めの師なり、寛政四年七月十二日歿す、著書に鵜の音あり。

破笠(はりつ) 小川氏、名は宗宇、(或云ふ尙行)通稱平助、夢中庵、卯觀子の號あり、初め福田露言に學び、後蕉門に入り其角と相善し、陶工、蒔繪、象眼等の技に秀で、破笠細工とて有名なり、畫は狩野尙信に學ぶと、後年津輕侯に仕事すと、延享四年六月三日歿す、年八十五。

波留女(はるめ) 千代倉蝶羽の女。

春淸(はるきよ) 井阪氏、通稱次郎左衛門、昌

雲軒と號す、江戸の人、娼家に生れ、醫を業とし玄孝といふ、京に上り立圃に俳を學び、歸て門戸を構ふ、明曆三年歿す、安山集。鹿賀集。千句集の著あり。

春澄(はるすみ) しゆんちよう。

巴蓼(はれう) 日想庵と號す、下總滿原の人、烏醉の門、天明八年十一月歿す。

ひ

尾谷(びこく) 千足氏、北蓮塘と號す、江戸の人、初め盤谷に學び、後沾州に從ひ、梅室と更名す、著書に阿次可屋萬あり。

眉山(びさん) 中山氏、通稱七右衛門、加賀の人、馬來の門に入て、北枝が烏黎臺の二世を名告る、文化十三年五月歿す。

眉山(びさん) 川上氏、名は亮、東京の人、帝國大學に學び業を卒へずして退く、研友社に入りて紅葉、小波等と小說に筆を執る、華麗の文字當時人の推服するところなり、俳句俳文又穩健殊に俳文に於ては比肩を見ず、明治四十一年六月十五日何故か自刄して歿す年四十。遺稿は眉山全集ありて世に行はる、其ふところ日記は名文として嘖々

傳ふるものといふ。

非吹（ひすゐ）池田氏、通稱要人、白々翁、片蘆齋の號あり、備前の人、蘆元坊の門、自悟文草の著あり。

筆端（ひつたん）貫明を見よ。

氷花（ひやうくわ）江戸の人、嵐雪門。

氷固（ひやうこ）松木氏、通稱長右衛門、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり、享保七年十二月十一日歿す。

百庵（ひやくあん）寺町氏、通稱三智、新柳亭と號す、幕府の表坊主なり。

百嬰（ひやくえい）清得舍と號す、大坂の人、石鼠の門。

百合（ひやくがふ）淺田氏、園扇堂と號す、攝州伊丹の人、宗因の門、享保十八年四月二十日歿す、年六十八。

百卉（ひやくき）山本氏、通稱傳左衛門、伏龜亭と號す、龍齋と稱し、筆道指南を業とす、烏醉の門、天明元年六月六日歿す、年七十六。

百花（ひやくくわ）奎石を見よ。

百花（ひやくくわ）松本氏、奎葉堂と號す、京の人、奎石に學び、後米史の門、安永八年二月二十日歿す、年六十四。著書に蝶々庵俳諧あり。

百花坊（ひやくくわばう）岡田氏、名は昌全、茶話亭、啼鳥舍の號あり、江戸の人、上田侯の侍醫、玄武坊の門。

百丸（ひやくぐわん）森氏、白鷗堂と號す、攝州伊丹の人、維舟門、鬼貫等と伊丹風を鼓吹す。

百歲（ひやくさい）西島氏、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり。

百洲（ひやくしう）はの部を見よ。

百川（ひやくせん）彭城氏、名は直澗、八仙堂と號す、加賀の人、尾張に住す、畫工にして法橋となる、俳諧を支考に學び、後乙由に從ふ、寶曆三年八月歿す、年五十六。

百堂（ひやくだう）田邊氏、名は敬明、字は子玄、通稱五郎兵衛、歩々齋と號す、大坂堂島の米商、大睿の門に入り蘆陰舍を嗣で二世となる、書を三木某に學び能筆なり、晩年明を失ふ、著書に御柱。饗替あり。

百堂二世（ひやくだう）一世の男、通稱熊藏、桃壺と號す、初名涙甫、後父の名を嗣ぎ蘆陰舍三世となる。

百池（ひやくち）寺村氏、名は雅昊、字は子文、通稱三右衛門、大來庵、徹雨樓の號あり、京の人、堺屋と稱し縣商なり、蕪村に學ぶ、天保六年十二月十七日歿す、年八十八。

百萬（ひやくまん）旨原を見よ。

百明（ひやくめい）杉坂氏、通稱志藏、土龍子と號す、上總東金の人、江戸に出て烏醉に學ぶ、鳴立庵を嗣で四世となる、後故鄕に歸り歿す。

百陽（ひやくやう）はくやう。

百里（ひやくり）はくり。

飛良（ひりやう）菅原氏、三居庵と號す、美濃大垣の人、乙由の門、寶曆十二年三月四日歿す、年五十一。著書に俳諧近道あり。

弘氏（ひろうぢ）足代氏、伊勢外宮の神職、宗因門にして、談林中の名手と稱せらる。

ふ

風祇（ふうぎ）静山氏、書錦堂、鼠亭の號あり、上州の人、風光の門。

風琴子（ふうきんし）白峯を見よ。

風和（ふうくわ）江原氏、梅樹軒、壺竹軒の號あり、江戸の人、出羽神社の宮司、岸本調和の門、正德二年二月十八日歿す、年六十一。梅の露。杷菅の著あり。

風外（ふうぐわい）古川氏、蓬窓と號す、越後の人、初名史千、風頭の門、弘化三年十二月五日歿す、年六十九。

風篁（ふうくわう）中村氏、通稱兵左衛門、常陸下館の人、巴人門。

風光（ふうくわう）知和氏、巽二坊、言寓齋、長鼠軒の號あり、奥州白河の人、初世湖十の門。

風虎（ふうこ）内藤氏、名は義泰、奥州岩城平の城主、紫軒、風鈴軒の號あり、宗因に學び、露沾公の父なり、享保三年五月二十八日卒す、年六十七。著書に夜の錦。信太浮島。櫻川。六百番俳合等あり。

風梧（ふうご）松尾氏、通稱三七、槐亭、松門庵の號あり、紀州の人、貫考門。

風國（ふうこく）去來の甥、京に住す、蕉門に入て泊船集の著あり、元祿十四年七月三日歿す、著書に菊の香。泊船集。木がらしあり。

風谷（ふうこく）金澤氏、鳩來庵と號す、江戸の人、二世素丸門、天保七年三月六日歿す、年五十九。著書に初蟬あり。

風齋（ふうさい）岡氏、通稱小傳次、狐中庵と號す、江戸錦小路に住す、蒔田藩士、風谷門。

風草（ふうさう）林氏、通稱太郎兵衛、出羽庄内酒井家の町役、支考門。

風左坊（ふうさばう）寺村氏、名は策、字は馬六、楓左庵と號す、尾州の人、支考門、天明八年歿す、年八十。

風之（ふうし）野坡の門。耳底記。野坡吟草の著あり。

楓城（ふうじやう）山鹿氏、通稱泰造、京の人、芭蕉堂八世なり、明治卅四年歿す年七十四。

風狀（ふうじやう）正木氏、風雲齋、新綾軒の號あり、京の人、羅人の門、初名長牙といふ、明和元年八月二十七日歿す、年五十二、著書に、今年竹。しほ竹。飯富士。よし簾。行合田。心葉。三年物。季寄菊盃。志目草あり。

風松（ふうしよう）一齋と號す、雪才の門。

灃水（ふうすゐ）四方庵と號す、相州津久井の人、雉啄の門、安政四年十二月二十四日歿す、年七十八。

風睡（ふうすゐ）淺井氏、通稱利右衛門、伊賀上野の人、蕉門。

楓川（ふうせん）通稱吉右衛門、京島原の娼家、橋屋といふ、淡々の門。

風堂（ふうだう）山崎氏、月嘯軒と號す、江戸の人、調和の門。

諷竹（ふうちく）通稱伏見屋久右衛門、浪花道修町の商家なり、初名を之道といふ、蕉門、著書にあめ子。淡路島。おくれ馳。砂川集あり。

風馬（ふうば）新井氏、名は春東、字は子珪、不及庵と號す、江戸の人、醫を業とす、初世白其の門、五世寥和の父、寛政三年九月十九日歿す、年六十四。

風瀑（ふうばく）松葉庵、重虹堂と號す、伊勢の人、一晶の門、著書に一樓賦あり。

風律（ふうりつ）藝州の人、野坡の門、無名庵を嗣ぐ、天明二年四月二十九日歿す、年六十五。著書に、さの葉。紙鳶日記。淺緣あり。

風廬坊（ふうろばう）岡崎氏、以雪庵、無別仙、白哉の號あり、三河の人、美濃大垣に住す、白壽坊門、文化九年二月十七日歿す、年六十七。

不角（ふかく）立羽氏、（本姓山崎）通稱定之助、虚無齋、松月堂、南々舍の號あり、しと江戸の一書肆なりしが、壯歲不卜の門に入て一家を爲し、化鳥躰と稱する新風を起す、元祿の頃大に流行し、門下千人に溢る、依て千翁の號あり、又兼て書畫に巧にして、縉紳に用ゐられ、享保中俳諧を以て法眼に叙せらる、寶曆三年七月二十一日歿す、年九十二。築地門

跡地中淨勝院に葬る、著書に村雀。友音鶴。淸鐘。同續。正風江戸菅笠。柾の葛。正風集。糊飯箆。廣海原。笠の蠅。有磯海。木曾麻衣。母恩集。二葉松。信顧行。一騎打。七十五版錢。百人一句。南々舍隨筆等あり。

不覺（ふかく）名は敬己、佛行房と號す、蕉門、寶曆六年四月十七日歿す。

舞閣（ぶかく）通稱藤屋新七、京島原の娼家、太祇の門。

普求（ふきう）山本氏、松門亭、雪莎翁の號あり、京の人、知木の門、（或云ふ其諺門）明和八年七月二十一日歿す、年七十九。著書に種袋。火燧開。磯の海。獨吟集あり。

不局（ふきよく）不角の長子、安月堂と號す、なうのうらなし。風姿集の著あり。

復古（ふくこ）通稱三河屋勘七、春日舍と號す、風馬の門、文政三年四月十七日歿す、年二十三。

福富（ふくふ）水野氏、名は勝種、通稱牛內、備後福山の藩士、季吟或は梅盛の門、はりぬきの著あり。

不言（ふげん）省氏、合歡堂、柿下庵の號あり、江戸の人、二世沾山の門、六世湖十の伯父。

不克（ふこく）名は宮穀、字は子善、通稱道秀、竹堂、乾々齋の號あり、江戸の人、弘前侯の藩醫、八朶園蓼松の門。

舞山（ぶさん）帶金氏、初名茂龍、江戸の人、嵐雪門。

布舟（ふしう）田中氏、通稱佐太夫、江戸の人、布仙の門、文化五年九月歿す、

浮生（ふせい）北藤氏、銀塘舍と號す、江戸の人、始め季吟に學び、後一家をなす、滑稽太平記を著し暗に時の俳宗を譏る、享保二年正月二十三日歿す、年四十八、著書に、原誹論。水秤集。烏跡話。滑稽太平記あり。

普成（ふせい）服部氏、通稱太郎右衛門、寶田窟と號す、江戸深川木場の材木屋なり、蓼太の門、文化十五年四月十二日歿す、年八十三。

布席（ふせき）伊達氏、通稱吉田屋清兵衛、雁來舍と號す、箱館の旅宿なり、乙二の門。

賦泉（ふせん）石田氏、京の人、普求の門、安永六年十一月二十九日歿す、年五十七。著書に秋日和あり。

巫僊（ふせん）市橋氏、尾張の人、曉臺門、文化十三年歿す。

普仙（ふせん）介我を見よ。

斧仙（ふせん）京の人、原松門。

布仙（ふせん）菊岡氏、晴行舍と號す、菊岡沾涼の長子。

蕪村（ぶそん）與謝氏、（本姓は谷口）名は寅、字は春星。長庚、三果、四明、東成、老雲、馬東、浮風庵、紫狐庵、落日庵、碧雲洞、白雪堂、河南逍居、草々樹等の諸號あり、攝津東成郡毛馬村に生る、（一說に大坂の商賈北國屋吉兵衛が妾腹の子なりと云）其地天王寺に近きを以て蕪村と號す、弱きより畫を好み、宋元明諸家の筆法を融化して自ら一家をなし、大雅堂と併べ稱せらる、俳諧は江戸に出て、始め內田沾山に學び、後早野巴人に就て二世夜半亭を讓らる、諸方を歷遊し、明和七年京に留り、始めて點列に加はる、丹後與謝の風景を愛して屢々杖を引き、遂に與謝を氏とす、常に太祇、嘯山、雅因等と唱和し、當時京地の卑俗なる俳調を慨し、新風を起して復古を唱ふ、俳壇爲に風靡す、天明三年十二月二十五日歿す、年六十八、山城一乘寺村金福寺に葬る、著書には、新花摘。玉藻集。花櫻帖。十番句合。桃李。芭蕉翁附合集。夜半帖等あり、家集は几董の輯めたる蕪村句集、其成の集め

し文集あり。

不存（ふそん）尾州の人、貞德門。

不存（ふそん）清水氏、通稱孫三郎、吸月堂と號す、蘿髮して春流と稱す、尾州の人、貞德に學び、浪花に住す、著書に尾陽句帳あり。

物外（ぶつぐわい）吉村氏、通稱丸屋善右衛門、自醉庵、苦樂庵の號あり、鳳朗門、嘉永元年六月十九日歿す。

佛仙（ぶつせん）子日庵、化海坊の號あり、加賀の人、希因の門、天明二年六月十一日歿す。

富天（ふてん）浦川氏、浪花の人、淡々に學び、二世牛時庵なり。著書に歸稻。民歌行等あり。

不入（ふにふ）中島貞宜の門。

武然（ぶねん）望月氏、蓬月庵、方壺、雪中庵の號あり、京の人、宗屋の門、鐵筆を善す、享和三年正月二十三日歿す、年八十四。

不白（ふはく）川上氏、孤峰、亭々齋、圓頓齋の號あり、千の如心齋の門にて茶道中興の師たり。俳諧は始め沾洲に學び、後珪琳を師とし、老後蓼太に諮る、文化四年十四日歿す、年九十三。

不卜（ふぼく）岡村氏、通稱市郎右衛門、一柳軒と號す、江戸の人、石田未得に學ぶ、元祿四年四月九日歿す、年六十、著書に、江戸廣小路。向の岡。續か原あり。

文雅（ぶんが）宇野氏、群雀窠と號す、京の人、西生の門、享保十六年七月二十日歿す、年五十一。

文考（ぶんかう）岡田氏、攝州伊丹の人、宗旦門、又茶事に精し、晩に休甫と更名す、享保三年三月十八日歿す。

文角（ぶんかく）太田氏、通稱平右衛門、可中庵と號す、闌更門。

文蛤子（ぶんがふし）暢好を見よ。

文曉（ぶんけう）西天庵と號す、肥前正教寺の住職、文化中寂す、年八十五。著書に、俳諧要論。反古裏。芭蕉談。青蜜柑集。露葵庵雜記。西天庵夜話等あり。

蚊市（ぶんし）伴自を見よ。

文十（ぶんじふ）高橋氏、烏路齋と號す、小西來山の弟子、遠山烏。夜ひるの著あり。

文壽坊（ぶんじゆばう）大谷氏、白柳舍と號す、美濃の人、明治十三年一月十三日歿す、年八十二。

蚊足（ぶんそく）和田氏、通稱源七郎、圓常と號す、京の人、書道に達し、常矩に俳を學ぶ。

汶村（ぶんそん）松井氏、字は師靈、九皐亭と號す、江州彥根の藩士、蕉門。

文鳥（ぶんてう）宮崎氏、荊口の次子。

文母（ぶんぼ）小林氏、通稱庄藏、飛花窓と號す、駿河の人、月巢に學び、時雨窓二世となる、寬政十年歿す、年六十九。

文鳴（ぶんめい）戶田氏、好々舍、九皐子の號あり、京の人、去音門、明和三年九月七日歿す、年六十一。著書に蛙袋。猿談義あり。

文也（ぶんや）山本氏、梅園と號す、京の人、隆志の門、安永八年七月二十九日歿す、年七十五。

文鱗（ぶんりん）梅津氏、通稱牛左衛門、佐竹の藩士、蕉門。

布門（ふもん）井上氏、五流齋、桑老父の號あり、大阪の人、來山の門、著書に小正月。手束弓。窠蟲。三十三回忌。滌之能。若葉井戸。有馬日記。桑老父。南無如月。呼子鳥等あり。

普門（ふもん）山田氏、通稱宇右衛門、去來庵と號す、江戸の人、三世宗瑞に學び、洛の去來を慕ひ、嵯峨蕉門の一派を樹つ。文政九年十二月八日歿す、年七十三。

芙蓉花（ふようくわ）松濤氏、通稱平野屋清兵

衛、一本亭さ號す、浪花の人、貞柳門にて狂歌を善す、俳諧は蕪村等さ交り、時に放吟あり、天明三年正月二十六日歿す、年六十三、其子又芙蓉花さ號し、狂歌を以て寛政六年江戸に下り、淺草觀音堂に奉額す、遂に江戸に歿す。

不老（ふらう）吉岡氏、遲日庵さ號す、江戸の人、空阿の門、安政時代。

浮流（ふりう）青山氏、三河の人、蝶夢の門、天明二年五月二十八日歿す。

武陵（ぶりよう）西尾氏、通稱奥四郎、丹波の人、月居の門。

古根（ふるね）飛田氏、通稱伊右衛門、京の人、立圃の門、詞の友の著あり。

富鈴（ふれい）宋屋を見よ。

斧鉞（ふゑつ）藤木氏、羽仙齋さ號す、一晶の門、享保の初年に歿す。

へ

平嘉（へいか）長田氏、通稱長十郎、青藍堂、黄鳥園、巣嘉の號あり、江戸幕臣なり、綾朶の門に入り、初名綾花さいふ、文化十一年九月二十三日歿す。

平角（へいかく）平野氏、通稱治兵衛、橡園さ號す、南部盛岡の茶肆なり、曉臺行脚の時門に入る、文政八年五月十六日歿す。

米駒（べいく）通稱米屋駒吉、京の人、寛政中歿す。

平砂（へいさ）貞佐を見よ。

平砂（へいさ）二世 皐月氏、（本姓石川）名は萇珍、字は美叔、解庵、閑花林、新花林、分洲等の號あり、初め其樹、又、律佐さ號す、貞佐の門に入り、師の初名を冒す、博學の士なりさいふ、天明三年二月二十八日歿す、年七十六、著書に而耐集。同續。芝集あり。

平砂（へいさ）三世 本姓蓊崎、皐月氏を冐す、萬葉庵、東窓の號あり、駿河町に住す、二世の門、文化十年十一月五日歿す、年七十八。

米史（べいし）隠岐氏、皐澄さ號す、京の人、其諺の門に入り、四時堂二世さなる、延享四年十二月二十七日歿す、年四十四。

米僊（べいせん）久保田氏、通稱は米吉、後雅號を以て顯はる、京都の人、畫家を以て其名遠邇に聞ゆ、別に錦隣子の號ありて俳句に美文に盛名あり 明治卅三年失明して後は俳句を以て讃を遣る、明治卅九年五月十八日東京に歿す、年五十五。「郭公其嶋沙羅双樹」「稲妻の雲土器の別れかな」之を辭世とす。

米仲（べいちう）岡田氏、入楽庵さ號す、初名沖巣、或は青蘿さ呼ぶ、二世青峨の門、（或云沾山門）明和三年六月十五日歿す、著書に籾簋筆。諸公畫讃。金油の著あり。

米明（べいみやう）一宮井さ號す、谷素外の門。

瓢界（へうかい）北村氏、大阪の人、宗因門、江戸に住す、大巓呂。難波順禮の著あり。

瓢水（へうすゐ）瀧野氏、通稱新之烝、富春齋さ號す、播州加古の積問屋なり、破産して俳師さなる、浜々に學び、後麥林に倚る、性磊銘にして奇行多し、寶暦四年歿す、年七十七。諧歌集。かはり狂言の著あり。

瓢緑（へうろく）淺井氏、通稱眞三郎、秋靡系の俳人、大正四年七月廿四日歿す年四十。

碧玲瓏（へきれいろう）直野氏、名は了之進、石川縣の人碧梧桐門、明治三十八年六月五日歿す三十一。

ノ身（べつしん）池田氏、通稱又三郎、尾州名古屋の人、貞德の門、友次、不存さ共に尾陽三哲の名あり。

鞭丸（べんぐわん）蘆荻舍さ號す、京の人、鞭石の門、寶暦十三年十一月二十四日歿す、年五十五。

鞭石（べんせき）福田氏、井蛙堂、面笑軒、御法兒の號あり、京の人、似船の門、享保十三年二月十五日歿す、年八十、礎瓢松の著あり。

ほ

棒庵（ほうあん）觀世氏、通稱三郎四郎、京の人、能太夫なり、貞門、寛延四年十月三十日歿す。

鳳羽（ほうう）森山氏、名は茂、俳禪窟、無塁堂の號あり、大和十津川の産、貴族院勅選議員にして俳諧に通ず、初め牧岡天來に學び、後高松蟻兄に教を受くと、附合の變化蕉合を能くする者、此人を措て舒むべからずとの評ありき、大正八年二月廿六日歿す年七十九。

豊秋（ほうしう）長村氏、皐亀齋さ號す、京の人、隆志の門、寶暦六年十一月二十九日歿す、年五十七。

鳳州（ほうしう）大島氏（本姓村井）雪中庵七世なり、椎陰の門、明治七年九月九日歿す、年六十一。

鳳棲（ほうせい）稲田氏、通稱筑後、阿波徳島の藩士、鳳朗の門、安政中歿す。

蜂房（ほうばう）坂上氏、竹五楷さ號す、攝州伊丹の人、安永九年九月二十日歿す。

鳳朗（ほうらう）田川氏、名は義長、字は中立、通稱東源、熊本藩士にして、鹿島源彌さ呼ぶ、父鼎山は越人の傳統にして俳に精しく、鳳朗父に從て學びしが、寛政十年三十七歳、江戸詰さなり、道彦の門に入る、（一説には京に出で、對竹、或は鶯笠さ稱し、後江戸へ下るさ）自然堂鳳朗さ號し、樗良の門に出入して大に鳴る、天保三大家の 蒼虬は老練を以て聞え、梅室は才藻を以て鳴り、鳳朗は德行を以て知られしさいふ、弘化二年十一月二十一日歿す、年八十四、谷中天王寺に葬る、鳳朗發句集あり。

豊流（ほうりう）岩橋氏、名は豊春、攝津天王寺村の人、宗因に學ひ、天王寺名所彼岸櫻の著あり。

鳳翁（ほうをう）千歳庵、衣香坊の號あり、江戸の人、鳳朗門。

歩牛（ほぎう）玉田氏、（初渡邊氏）通稱久右衛門、鵠庵、月左亭の號あり、江戸の人、初名花右さいふ、貞架門なり、文化八年八月三日歿す、年五十七。

ト一（ぼくいつ）菊岡氏、山城伏見の人、ト養の門。

木因（ぼくいん）谷氏、通稱九兵衛、白櫻下さ號す、美濃大垣杭瀬川の船積問屋なり、季吟に學び、初名木端さ稱す、芭蕉大和行脚の折、參見して其門に入る、和漢の學に精しく、俳諧秘密の著あり。

木我（ぼくが）加瀬氏、通稱崎十郎、謙虚道人さ號す、幕府御勘定方小役なり、桑岐に學び、二世桃丘庵さなり、天保三年列者に列し、四世素仙堂さなる。

木海（ぼくかい）長谷川氏、雲律居さ號す、白雄門。

ト琴（ぼくきん）柴垣氏、松風軒、又一下さ號す、洛外山崎の人、季吟に學び、越路草の著あり。

北元（ほくげん）鴨氏、椿の本さ號す、初名都喜丸、夫で馬寧さ號す、春雪庵午心の門に入て二世さなる、天保九年二月十五日歿す、著書古學戴畷字論。戀の枝折等あり。

北鯤（ほくこん）石川氏、山店の兄、蕉門。

北枝（ほくし）立花氏、森氏を冒す、通稱三郎右衛門、鳥翠臺、趙子の號あり、加賀の人、牧堂の弟、始めト枝さ號す、蕉門に入て十哲に數へらる、北枝發句集世に行はる、享保三年五月十二日（或云九月十四日）歿す、金澤卯辰山心蓮社の境

内に弾る、著書に養の名殘。花月傳。金言抄。桃盞人あり。

卜枝（ぼくし）北枝に同じ。

卜尺（ぼくしゃく）小澤氏、通稱太郎兵衛、蹈齋と號す、江戸淺草の里正なり、初め季吟に學び、孤吟と稱せしが、芭蕉東下の際卜尺が家に草鞋を脫さしより、蕉門に入り、小澤の偏旁を採て卜尺の名な受く、寶曆二年九月三十日歿す。

墨水（ぼくすい）梅澤氏、通稱代太郎、静岡の人、子規門の俳人、大坂に車百合を發行す、大正三年歿す年四十。

卜雪（ぼくせつ）喜多村氏、京の人、西武門。

卜仙（ぼくせん）卜養の男。

木僊（ぼくせん）竹上氏、五竹庵と號す、丹波の人、滇花に出て八千坊舍捧に學び、二世八千坊となる、初名陀岳と呼ぶ、文化十二年正月五日歿す、俳諧十家類題の著あり。

牧童（ぼくどう）立花氏、通稱次郎右衛門、加賀金澤の人、刀劍の研師なり、北枝の兄、始め談林の俳諧に遊びしが、後蕉門に入る、俳諧百太郎の著あり。

卜入（ぼくにゅう）梅原氏、卜養の門、延寶三年歿す。

北梅（ほくばい）有佐を見よ。

卜圃（ぼくほ）關氏、名は昌房、通稱利右衛門、京の人、立圃の門、小町踊。濱荻。歷塚の著あり。

卜養（ぼくよう）中井氏、（姑洗野氏）泉州堺の人、名を慶友といふ、牡丹花肖柏の子にして、幕府の醫官となる。

卜養（ぼくよう）前の卜養の子、狂歌を巧みにして卜養狂歌集世に行はる、俳諧は貞德門に入て、江戸五哲の一人なり、延寶六年十二月二十六日（或云延寶七年六月）歿す、年七十二。

步月（ほげつ）千歲氏、雲母坊、師古庵の號あり、江戸の人、風窓湖十の門。

暮四（ぼし）石井氏、通稱源右衛門、石蕃庵と號す、京の人、初め高村和及に學び、後竹亭の門に入り暮四と改む、又穀石を助けて常に机側な云ら す、穀石學に疎く、暮四を以て秘書と爲すと、晩年五橘と更名し、享保十九年二月二十五日歿す、年六十九。

步十（ほじゅう）風窓湖十の妻、安永五年七月十七日歿す。

浦人（ほじん）上野の人、二年歿す。

甫且（ほしょ）堀田氏、通稱源右衛門、長源齋と號す、尾州石河侯の家士。

蒲丈（ほじょう）豐津氏、鹿吼子、午晴庵の號あり、始め沽洲に學び、後滇花に至り紹鷹門となる、講說集。五百仙の著あり。

本水（ほんすい）桑摒氏、名に宗臣、通稱左衛門、青松軒と號す、伊勢字和島の藩主、季吟の門、大海集の著あり。

凡兆（ぼんちょう）春花園と號す、加賀の人、京に出て醫を業とす、蕉門の高足にして、猿蓑の撰者たり、後年寃を蒙り罪せられて後往く所を知らず。

凡鳥（ぼんちょう）石川氏、自得庵と號す、四世一漁の門。

ま

每延子（まいえんし）提本氏、通稱善四郎、尾張熱田の人、貞德の門。

孟遠（まおん）山本氏、橫斜庵、夢明坊の號あり、彦根の士、許六の門、享保十四年九月三十日歿す、年六十一。

政女（まさじょ）下村春坡が妻、薙髮して慈政尼といふ。

政二（まさじ）佐々木氏、通稱勘兵衛、寵泉、北翁の號あり、武州川越藩の士、初め栗の本玉屑に學び、後小河原雨塘の門に

入り、露柱庵を讓られ四世となる、上總大多喜に住し、常州霞浦に移りて歿す。

正辰（まさとき）岡村氏、大和郡山の人、池田正式に學び、大和順禮集の著あり。

正業（まさなり）田中氏、通稱作助、澄葉軒と號す、京の人、常矩門、大系圖に正德五年八月十二日六十一歲の歿年を誌せり。

正宣（まさのぶ）香田氏、衰翁、塊忍軒、松戸等の號あり、京の人、初名胴水と稱し、蕉門なりしが、後宮川松堅に從ふ、享保三年五月十二日歿す、年五十八、著書に、松戸集。麻木合。かりばし等あり。

正春（まさはる）由良氏、通稱八郎右衛門、京の人、浮田家の外戚といふ、立圃に學び、後江戸に出て、門戸を張る、寬文十一年四月晦日、年九十に近くして歿す、深川本誓寺に葬る。

正秀（まさひで）水田氏、通稱利右衛門、竹青堂と號す、近江膳所の藩臣、物頭役なり、曲翠が伯父といふ、蕉門の逸士、享保八年八月三日歿す、粟津東林寺に葬る、著書水の友。白馬集あり。

昌房（まさふさ）通稱茶屋新七、近江膳所の人、蕉門なり。

正盛（まさもり）今西氏、通稱與次兵衛、大和の人、貞德の門、耳なし草の著あり。

麻中（まちゅう）高橋氏、庭鳳齋と號す、江戸の人、岩松門。

麻父（まふ）ノ入庵と號す、蕉門四天王の一といふ、常に遊歷して居所を定めず。

滿足（まんぞく）岡田氏、名に善政、貞門の高手なり。

萬舞（まんぶ）木道氏、名は俊式、通稱主計、有慶舍と號す、初名芙川、栢翁の門、後蓑々の門に入り、三世今日庵となる、嘉永元年十月二十日歿す、年五十九、著書に、三千風、蓬萊の人、五味可都里の門、天保十三年五月四日歿す、年六十四。

み

未角（みかく）釋氏、名は明臨、藹窗坊と號す、江州堅田本福寺十五世の住職、千那の後、寬政五年三月二十九日寂す、年六十八。

幹雄（みきお）三森氏、通稱兼次、香楠居と號す、奥州の人、江戸に出で醒庵四馬の門に入る、維新後俳諧明倫雜誌を發行し大に道義的俳句を鼓吹す、爲に大教正の名を贏ち得たり、後春秋庵十一世となり、舊派の重鎭を以て推さる、明治四十三年十月十七日歿す、年八十二。

未琢（みたく）未得の男、通稱要之助、長堂と號す、天和二年三月二十日歿す、年七十。

未達（みたつ）西村氏、名は久重、京の人、書肆なり、元祿の門、關相撲の著あり。

三千風（みちかぜ）大淀氏、名は都、字は友輪、薙髮して吞空法師といふ、伊勢飯南郡射和村の産、奥州松島に住し、天和三年天下を周遊し、元祿三年故郷に歸る、是より相州大磯に住し、鳴立庵を結ぶ、寶永六年四月四日同所に東往居士之碑といふを殘し、飄然往く所を知らず、著書に日本行脚文集。笈さがし。仙臺大矢數。富士詣。松島眺吟集。和漢田鳥集等あり。

道彦（みちひこ）鈴木氏、（或云村上氏）金令舍、十時庵の號あり、奥州仙臺の人、道彦を音讀して醫を業とせしが、江戸に出て白雄の門に入り、高足となる、師歿後春秋庵を繼ぐの意ありしが、成らずして別に一家を樹て、師風に背く、文政

元年（或云二年）九月六日歿す、年六十三、淺草敎善院に葬る、著書に道彥七部集あり。

美津女（みつ）伊勢山田の人、杉本赤右衛門光貞の妻、望一の門に入て才媛の聞え高し、正保四年七月二日歿す、年六十五。

光方（みつかた）田中氏、名は信光、銀竹軒と號す、京の人、西武の門、後一家をなす、著書に雀子集。常盤草。そらうそ等あり。

三津人（みつんか）松井氏、月夜庵と號す、完來の門。

未得（みこ）石田氏、通稱文左衛門、乾堂、巽庵の號あり、江戸の人、初め德元、玄扎に就き、貞德に通じて敎を受く、兼て狂歌に巧みなり、寛文九年七月十八日歿す、年八十二。著書に廻文俳諧百韻。一本草あり。

末陌（みはく）櫻田氏、江戸の人、未琢の門

岷考（みんかう）東氏、通稱平十郎、二桃庵と號す、紀州藩士。

眠牛（みんぎう）増田氏、匍匐庵と號す、武州糟壁驛の人、舊室の門、後蒼狐に從ふ、明和八年三月六日歿す、年五十三。

む

無外坊（むぐわいばう）美濃大垣の人、露川の門、寛保三年九月十九日歿す、

無腸（むちやう）上田氏、名は秋成、通稱東作、餘齋、鵝居の號あり、浪華の人、國學を以て顯はる、俳諧は几圭に學び、宗因を慕ひ、蕪村と往來し、眞に餘技たり、文化六年九月歿す、年七十八、俳諧也哉抄の著あり。

無物（むぶつ）飯田氏、名は豐年、桂庵と號す、江戸の人、二世素丸門、文政三年二月二十二日歿す、年五十二。

無文（むぶん）山田氏、種寛の門、俳諧備後表の著あり。

無卜（むぼく）平田氏、幽翁と號す、越後の人、江戸に住す、宗因門、享保五年十月二十日歿す、年六十二。

無倫（むりん）志村氏、雪堂、拾柴軒の號あり、越後の人、江戸に出て、季吟に學ぶ、享保二年（或云八年）二月二十九日歿す、年六十三。紙文夾の著あり。

め

鳴雪（めいせつ）内藤氏、名は素行、老梅居と號す、伊豫松山藩士、文部省に奉職し明治廿四年職を罷て藩子弟の合宿所常磐會の監督となる、其漢學は正岡子規の師にして俳句は其弟子たり、日本派の起る社中の元老を以て推され、新聞諸雜誌に選者たること多年、俳名一世に高し、翁性恬淡快濶人に接する城府を設けず、常に輕忽事物に失敗多し、故に狼狽し居るの謎を隱して老梅居と號し、人の行末は成行に任すの語に因み鳴雪と呼ぶと云、嗜好は演劇、義太夫、三オンス入の藥瓶に酒を容て隨時に飲むことなりといふ、大正十五年二月二十日麻布笄町の家に歿す、年八十。著すところ老梅居俳話。俳句選。元祿廿家俳句講義。俳句作法。中外俳句抄。俳句の近道。俳聖名句選。俳句は如何に作り如何に味ふか。

冥々（めいめい）鹽田氏、通稱は茂兵衛、九淵齋と號す、奥州安達郡本宮驛の人、蠶商にして上毛武總を往來の序て春秋庵を

訪ひ、白堰の門に入る、同國の乙二と衝を爭ひて世に鳴る、粟蒔集の著あり、文政七年閏八月二十二日歿す、年八十六。

も

毛孔（もうこう）田中氏、名は軒汗、通稱新右衛門、花月庵と號す、大坂の人、蒼虬門嘉永元年八月二十二日歿す、年六十七。

毛紈（もうぐわん）北山氏、大雅堂と號す、彥根の藩士、許六の門。

毛條（もうこう）杉月亭、或は野菊亭の號あり、宇治田原に住む、蕪村門。

默阿彌（もくあみ）古河氏、有名なる狂言作者二世河竹新七なり、明治廿六年一月廿二日歿す年七十八。

木因（もくいん）ぼくいん。

木鷄（もくけい）木髮の門。

木節（もくせつ）近江大津の醫師、蕉門なり、蕉翁終焉の枕に侍し藥を勸めし人、糸瓜集の著あり。

木導（もくだう）直江氏、阿山人と號す、江州の人、蕉門。

木丹（もくたん）常生氏、生白庵と號す、江戸の人、素外の門、天明七年正月十六日歿す、年四十九。

木卯（もくぼう）但馬豊岡光行寺の住職、正音といふ、停雲亭と號す、蝶夢の門。

木髮（もくはつ）二世湖十の男。

木髮（もくはつ）深川氏、新樹庵と號す、江戸の人、六世湖十門。

木兵（もくへい）岡島氏、名は三紀、伊丹の人市中に隱れ俳を嗜む、維舟に學んで別に一家を爲す、人呼で依風といふ、人の應對に木偶を糸にて動かし、肯否を人形の首にて答へしと云、元祿十一年十月五日歿す年五十八。

元次（もとつぐ）安原氏、貞室の男。

本春（もとはる）野田氏、重春の弟、梅盛の門、三十六歌仙集。古鏡の著あり。

茂蘭（もらん）名は從、圓雅上人といふ、江戸の人、日宗の滿願僧都の法弟にして北總岩部妙法山に住す、依て麻衣山人の號あり、二世中川宗瑞に學び俳諧に遊ぶ曾て「啄木鳥や巳が谺にふり返り」の句をなし啄木鳥の茂蘭と稱せらる、安永八年九月八日寂す、年六十七。

守武（もりたけ）荒木田氏、伊勢山田内宮の神職、薗田長官と稱す、連歌に長し、滑稽の才能く後の誹諧を胚胎す、伊勢風是より起る、守武千句世に存す、天文十八年八月八日卒す、年七十七。

や

也有（やいう）横井氏、名は時敏、一名並明、又、順寧と云ふ、字は伯懷、通稱孫右衛門、蘿隱、暮水、遯高、知雨亭、半掃庵の號あり、尾州の藩士、食祿二千石を食む、和漢の學に通じ、俳諧狂歌を嗜み、致仕して後、城南前津に卜居す、名聲世に聞ゆ、殊に俳文に至ては古今獨歩の妙あり、天明三年六月十六日歿す、年八十二、尾州海西郡藤瀬村西音寺に葬る、著書に蘿葉集。蘿の落葉。蟻塚集。蘿隱集。蘿窓集。もり桶。千句集。菅見草。短梗錄。小皮籠。野夫談。みなむすび。峨洋篇。白話傳雜陳。夢の跡。永代藏。無夜食談。鶉衣あり。

野逸（やいつ）加藤氏、通稱定四郎、竹冷舍、默窓、七々庵の號あり、江戸の人、素丸の門に入て四世其日庵を繼ぐ、文化四年正月十六日歿す、年八十。松の栞の著あり。

陽和（やうわ）山岸氏、通稱宿見、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり。

陽秋（やうしう）瀬尾氏、桃翁の子。

羊素（やうそ）鈴木氏、通稱越後屋庄兵衛、江戸の人、低寛、雪明窓の號あり、初め無倫に學び、松珞と稱せしが、中比沾洲に從ひ、後三世立志に學ぶ、寛延四年四月八日歿す、著書に俳諧答問抄。玄々前集あり。

養得（やうとく）江戸の人、卜養門。

楊々子（やうやうし）丹後宮津の沙門、信徳の門、浦島集の著あり。

夜鶴女（やかくぢ）酒井氏、珍齋と號す、一世夜雪庵金羅の妻。

野紅（やこう）双白堂と號す、蕉門。小柑子の著あり。

野人（やじん）鳥飼氏、通稱加右衛門、播州水谷の人、寛政十二年八月歿す。

安明（やすあき）澁谷氏、通稱新四郎、貞徳の門。

安重（やすしげ）内海氏、名は光重、通稱治兵衛、不求子と號す、内海宗惠の從弟、梅盛の門、寛文中に歿す。

保友（やすとも）梶山氏、通稱多吉、又、吉左衛門、薙髮して宗吾と云ふ、海嶽庵、無心子の號あり、大阪に住す、貞徳の門、著書に、古今百句集。獨吟千句。大硯集。根無草あり。

安信（やすのぶ）寺島氏、通稱嘉右衛門、尾州鳴海の人、蕉門、享保七年十一月廿一日歿す。

康吉（やすよし）下村氏、通稱利兵衛、京の人、季吟門。

保吉（やすよし）藤原氏、江戸大門通の馬具商なりといふ、（俳道系譜には麻布芋洗阪の刀工黒田美濃守保吉なりいへり、）春秋庵白雄の門に入て其高足たり、篤厚の君子にて母に至孝、人呼ぶに、保吉先生といふ、天明四年三月歿す、年二十五（或云三十五）淺草正覺寺に葬る。

野水（やすゐ）淺野氏、工齋と號す、江戸の人、蕉門なり、一に其角門といふ、貞享五年七月二十一日歿す。

野水（やすゐ）岡田氏、通稱佐次右衛門、宜齋と號す、名古屋大和町に住し備前屋といふ醤油問屋なり、町方總代を勤め學に通ず、蕉門の古老なり、晩年俳を捨て和歌に親しみ、又普齋流の茶事に耽る、寛保三年三月廿二日歿す年八十六。

八千代（やちよ）京島原奥村某の抱遊女、實名を尊子といふ、松江維舟の門にて吉野に劣らぬ名妓、殊に筆跡麗はしく、東海道名所記、可笑記等に其噂見え、俳諧懷子に其句出たり。

冶天（やてん）赤野氏、通稱宗兵衛、雪茶店と號す、江州彦根の藩士、許六の門、著書に木園扇。兩部餅祭。晝寐隨筆。横平樂あり。

野童（やざう）去來の親友と云ふ、蕉門、元祿十四年六月二十日雷に打たれ歿す。

野坡（やはし）志田氏、（本姓武田）通稱半次郎、後彌助と改む、麻生庵、樗子の號あり、生國は越前福井なり、江戸三井兩替店に奉仕す、蕉門に入て附合の輕みに名を得たり、利牛、孤屋と共に炭俵の撰者なり、後西海に遊び、大阪に樗木社を結び、近江の無名庵を高津に移し、高津翁と呼べり、元文五年正月三日歿す、年七十八、大阪小橋町寶國寺に葬る。著書に炭俵。枯野塚。木曾の谷。草の道。杉丸太一丸。初蟬集。和便集あり。

八百彦（やほひこ）朝田氏、扇翁、十合軒の號あり、京の人、中川貞佐の門、安永六年三月二十日歿す、年八十一、百合追善集。繪本四季の色香の著あり。

野明（やめい）洛外嵯峨に住す、初名鳳仞。蕉門なり。

野也（やや）高梨氏、通稱丈庵、京の人、醫師なり、梅盛の門。

也蓼（やれう）伊賀の上野の人、奥州仙臺向崇禪寺の住職なり、士芳の後裔といふ、柳居の門。

ゆ

雄淵（ゆうえん）大場氏、通稱山城、瓢形庵と號す、仙臺大崎八幡の祠官、白居の門、文政十三年歿す、新鶴芝の著あり。

雪雄（ゆきを）梅室を見よ。

夕霧（ゆふぎり）京島原扇屋の抱遊女、實名は「てる」、扇屋後大阪新町に移る、猿簑に其句入集せり、延寶六年正月六日歿す、年二十七。

よ

溶々女（ようよう）松窓乙二の女、名を清といふ。著書に茶一杯。追福一集あり。

米彦（よれひこ）大阪堂島の米商、通稱彦太郎、白雀園と號す、長齋に學び、後士朗に教を受けしといふ、文政五年（或云十一年）歿す。

ら

來鶯（らいがい）能勢氏、通稱又十郎、觀雷齋と號す、江戸の人、著書に多和連草。きかまほし。思ひだし等あり。

來山（らいさん）小西氏、十方堂、湛々翁の號あり、攝州の人、（一に泉州の人に作る）前川由平に學び、次て宗因門となる、年二十に滿たず判者の列に入る、今宮に居し鬼貫等と交る、常に志を江戸の其角に通せしといふ、其後裔伊右衛門と稱し、文化頃連綿たりしと、享保元年十月三日歿す、年六十三、今宮一心寺に葬る。著書に淺ごま。今宮草等あり。

來之（らいし）早川氏、四明窓、春鷗舍と號す、京の人、竿秋の門、著書に猿利口。廣海原。燈の親あり。

來爾（らいじ）野木本氏、乾什の門。

來爾（らいじ）一世の男。

萊石（らいせき）桃隣五世を見よ。

來川（らいせん）足立氏、水軒、占鈴、万界夫の號あり、倫里の男、無倫より統を引き、來川に至て此派絶ゆといふ、享保二十一年二月十五日歿す、著書に金臺錄。夢物語。種瓢あり。

雷柱子（らいちうし）其角を見よ。

來耙（らいはい）中村氏、通稱八右衛門、二斗庵、俳諧堂の號あり、河内豊浦の人。

來々（らいらい）河合氏、五湖庵と號す、浪花の人、初め牛湖に學び、湖貫と呼びしが、後普求に學び、更名す、安永九年九月十七日歿す、年五十四、著書志賀の餘花あり。

浪化（らうくわ）東本願寺一如大僧正十六世の連枝にして、越中砥並瑞泉寺の住職なり、應々山人、休々山人、自遣堂の號あり、嵯峨の落柿舍に芭蕉に謁して其門に入る、翁終焉の際、年僅に二十三、最も末弟とす、多く去來に諮る所あり、元祿十六年十月九日寂す、年三十二。著書に有磯海。同續。氏並山。白扇集。名月集あり。

浪兮女（らうけい）三浦氏、名はみゑ、陸奥の人、逸淵の門、元治元年十月十六日歿す、年三十二。

羅江（らかう）高石氏、通稱喜右衛門、養老庵、野狐窟の號あり、初名丈雨、上總の人、嘉永元年六月十日歿す、年七十七。

落梧（らくご）加島氏、美濃長良川の人、蕉門に入る、芭蕉が十八樓の記は、此人の別墅に記したる文なり、元祿四年歿す。

螺窓（らさう）穗積氏、名は義親、老嵐肝と號す、初名永機、嘉永二年八月二十八日歿す。

羅人（らじん）山口氏、通稱甚四郎、蛭牙齋老桂高の號あり、京の人、柊屋と呼び書肆なり、淡々京に來りし時、之を家に留めて斡旋し其門に入りしが、中比其風調の非を悟り、貞德流を唱へて一家をなし、京六角御射山社中を組織し、旗幟を張る、世に御射山翁と呼べり、寶曆三年七月二十九日歿す、年五十四、著書に、嘉定かます。花紅葉。獨吟千句。廣羽鳥。あし扇。一萬句拔萃。鳴澤高音。太郎次郎百首。明心集あり。

羅城（らじやう）釋氏、圓珠庵、寂靜庵の號あり、尾州名古屋光蓮寺の住職なり、曉臺の門、文化四年十月八日寂す。

羅川（らせん）山本氏、浪華の人、天明時代、古調を唱道す。

羅父（らふ）伊勢の人、樗良門の高足。

羅文（らぶん）瀧澤氏、名は興旨、通稱直三郎、東岡舍と號す、江戸の人、馬琴の兄、越谷吾山の門、寛政十年八月十七日歿す、年四十。

闌更（らんかう）高桑氏、名は忠保、通稱長次郎、二夜庵、南無庵、半化房の號あり、加州金澤の人、醫を業とす、希因に學び、後京に出で復古を唱ふ、「枯蘆の日に日に折て流れけり」の句を吐て世に枯蘆の闌更と稱せらる、寛政五年花の本の允許を蒙り、東山雙林寺に芭蕉堂を樹て、一世の宗師となる、寛政十一年五月三日歿す、年七十三、著書に、蕉翁消息集。雪の翁。三册子。雪丸け。俳諧新々式。俳諧世說。落葉考。花故事。有の儘。農男集等あり。

巒化（らんくわ）高木氏、春秋庵、四海仙、柿本舍の號あり、美濃の人、獅子門十三世なり、明治十三年七月二十四日歿す、年八十一。

嵐外（らんぐわい）辻氏、通稱五七、椰の屋、六庵、南無庵、北亭の號あり、越前敦賀の人、初め闌更に學ぶ、闌更甲州の可都里か許へ送りて教を聽かしむ、遂に甲府に止り、天保二年三月二十六日歿す、年七十五。

蘭兮（らんけい）竹華坊と號す、江戸の人、完來に學び、後石鯨に賴る。

蘭古（らんこ）岡本氏、陶々舍と號す、大坂の人、矩州門。

嵐山（らんざん）武州の人、初名竹護、京の雅因か宛在樓に寄居し、嵐山と改む、安永の始に歿す。

蘭山（らんさん）吳隨の門、寶雪庵二世なり。

蘭之（らんしん）樗堂を見よ。

蘭舟（らんしう）森本氏、名は勝秀、葆光軒と號す、攝州伊丹の人、梶原保友に學び、又江戸に芳賀一晶を訪うて道を尋ぬ、晩年宗億と號し才麿、西吟等と合唱す。享保中歿す、寢覺二十日の著あり。

欄舟（らんしう）島氏、龜溪庵、古極庵、青瓢庵の號あり、初名蘭秀、江戸の人、得器の門、寛政十年十二月十二日歿す、年三十七。

蘭石（らんせき）中村氏、雪竹齋と號す、京の人、知石の門、元文三年七月二日歿す、年五十五。

蘭石（らんせき）一世の男、初名如蘭、天明二年正月十二日歿す、年六十九。

嵐雪（らんせつ）服部氏、（初井上氏）幼名粂之助、後通稱を彥兵衛と改む、黃落庵、寒蓼堂、不白軒、雪中庵、孤峯等の號あり、淡路三原郡小榎並村に生る、江戸に出て新庄隱岐守の家士となり、次て井上相模守に仕へ、幾程もなく致仕し、蕉門に入りて俳師となる、初名を治助（ハルスケ）と呼ぶ、濟雲律師の法弟となりて禪に參し、嵐雪と改む、本石町に住し、

晩年山伏井戸の側に移る、其角と駢び驅て蕉門の兩賢と稱す、後世雪門の開祖と仰がれ、寶永四年十月十三日歿す、年五十四、駒込竹町常檢寺に葬る、著書に其濱木綿、杜撰集。芭蕉一周忌集。若菜集。其袋。若水等あり。

藍水（らんすゐ）川邊氏、通稱藤助、松伏居と號す、武州松伏の紺屋なり、法雨の門、三世老茄園となる、文政十二年七月歿す。

嵐亭（らんてい）宮氏、新月庵、心花齋の號あり、江戸の人、藝太門、文化三年二月二日歿す。

鸞動（らんどう）古澤氏、本姓橋川、攝州伊丹の人、形役庵と號す、宗旦の門、出藍の稱あり、貞享三年七月晦日歿す、年二十二。野梅集の著あり。

嵐蘭（らんらん）松倉氏、通稱甚左衛門、（或云又五郎）板倉侯の臣、中歲仕を致して淺草に僑居し、蕉門に入て高足たり、元祿二年鎌倉旅行より病を得て、八月二十七日歿す、年四十七、谷中臨松寺に葬る、器粟合の著あり。

嵐々（らんらん）大坪氏、京の人、淡々門。

羅院（らゐん）中井氏、京の人、羅人の門に入て二世蛭牙齋たり、曾て罪あり壹岐に流され、明和三年赦に遇て歸り、點者に加はる、安永八年十月十三日歿す、年五十六。

り

李由（りいう）釋氏、（本姓越智或云河野）名は亮隅、字は買年、四梅盧と號す、別に月澤老人の號あり、近江國平田村、光明遍照寺四世の律師にして、蕉風を慕ひ其門に入る、五老井許六と友とし善し、寶永二年六月二十二日寂す、年四十五、著書に韻塞。蔦突。宇多法師あり。

梨一（りいつ）一祚氏、名は高啓、字は子明、簑笠庵と號す、江戸の人、儒を以て業とす、柳居に學ぶ、後越前丸岡に徵され儒臣となる、天明三年四月十七日歿す、著書に奧細道菅薦抄。本の清水あり。

柳几（りうき）橫田氏、通稱半內、布袋庵と號す、武州鴻の巢の人、柳居門、天明八年二月九日歿す、年七十三。著書に七時雨あり。

龍吟（りうぎん）岡田氏、通稱治助、六々庵、雷堂、屈伸子の別號あり、德川家御用達にして細木香以等と交る、福地櫻痴の日々新聞を起すや與て斡旋す、俳諧を梅年に學び雪門の判者なり、明治三十七年十月十三日歿す。

柳居（りうきよ）佐久間氏、名は長利、通稱藤左衛門、（或云三郎右衛門又半左衛門）守黑庵、二斛庵、鷗心亭、眠柳舍、松頓庵、露霞窓等の號あり、江戸幕府旗下の士、初め沾德の門に入り長水と號し、宗瑞、素丸等と五色墨に名を振ひしが、既にして其非を悟り、伊勢に麥林を訪うて其門に入り、麥阿と更名す、更に柳居と改め、江戸に歸りて大に伊勢風を唱ふ、延享五年五月三十日歿す、年六十三、淺草菊屋橋東國寺に葬る、著書に、同光忌。世の中百韻。高鼾。雨の日數。夏山伏。俳諧一筆鳥。俳諧和歌連歌等あり。

龍谷（りうこく）京の人、始め正業が弟子、後淡々門、其身無筆にて、五十餘年詠草を綴て諸人の句を乞ひ、俳諧常念佛と名つく。

柳莊（りうさう）今井氏、市中庵、古松亭、鷗翁等の號あり、信州善光寺村の代官と云ふ、文化八年十月二日歿す。

隆志（りうし）北村氏、錦花堂、信齋の號あり、京の人、信安門にして、狂詠に名を

得たり、明和元年九月六日歿す、年七十。著書に合せ鏡あり。

隆志二世（りうし）一世の男、初名隆雅、天明二年四月二十四日歿す。

柳雪（りうせつ）各務氏、通稱吉左衛門、野航亭と號す、美濃の人、支考の門、享保十三年歿す。

流水（りうすゐ）吉田氏、友次の男、尾州の人、梅盛の門、包井の著あり。

柳水（りうすゐ）中路氏、一に佐野氏、桃林庵と號す、京の人、初め桃隣の門、後丈石門に入る、寳暦八年五月十五日歿す、年六十七。

流石（りうせき）三輪氏、兎角堂と號す、京の人、初め不角に學び、後其諺に從ふ、延享元年歿す。

柳女（りうぢよ）伏見の人、鶴英が妻。

柳尾（りうび）内田氏、三瓜庵と號す、三世湖十に學び、初名浠十と呼ぶ、後一家をなす。

柳尾（りうび）内田氏、三瓜庵と號す、初名歩十、江戸の人、三世湖十の門。

柳尾二世（りうび）深川氏、寳井の門、二世三瓜庵を繼ぐ。

流味（りうみ）井口氏、通稱新右衛門、京の人、定淸門。

離雲（りうん）京清水寺の畔に庵を結び、惱惡庵といふ隱士也、梅盛門にして、兼て和歌狂歌に名あり。

柳門（りうもん）道迎庵と號す、二世宗瑞の門。

柳門二世（りうもん）一世の門。

柳也（りうや）横田氏、柳几の男、布袋庵二世なり、文化元年十月二十二日歿す。

龍鱗（りうりん）清水氏、名は玄昌、茶及香道の師なり、鳥醉の門、天明四年四月十六日歿す。

李下（りか）加賀の人、馬來の門、槐庵二世となる。

李角（りかく）政田氏、通稱良藏、木備の門、文化十三年七月二十六日歿す、年三十。

利牛（りぎう）池田氏、江戸三井家に仕ふ、蕉門、野坡と共に炭俵の撰者なり。

利牛（りぎう）溪氏、初名は鵜英、昨非庵と號す。傳統不詳。

李卿（りきやう）常陸下館石川侯の臣、奥山某が母、逸淵の門。

六窓（りくさう）橋庵と號す、江戸の人、鬱太の門、明和九年十一月十六日歿す、老の鶯の著あり。

六芝（りくし）宮田氏、通稱孫左衛門、高臥耶と號す、美濃の人、支考の門、寳暦三

年三月二十五日歿す。

陸馬（りくば）岡島氏、若水庵と號す、江戸の人、二世石鯨の養子となる、二世平砂の門、著書に俳諧百千鳥あり。

六林（りくりん）堀田氏、名は方舊、字は維濟、通稱紀六、恒山と號す、名古屋の藩士、也有の門にして俳文に巧に、和漢の學に綿通す、寛政三年七月二十日歿す、年八十二。まにふんでの著あり。

李溪（りけい）江戸の人、錦坡の門、文政二年歿す。

利水（りすゐ）服部氏、蕉門。

利雪（りせつ）中野氏、通稱與兵衛、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆なり。

李長（りちやう）鋼中氏、通稱新右衛門、淡路草加の人、玉屑の門、天保九年歿す。

葎友（りついう）荻原氏、阿波德島の人、宗因の門、四國猿の著あり。

立宇（りつう）十世鳴立庵なり、越後の人、慶應二年十一月二十二日歿す。

栗几（りつき）各務氏、通稱吉左衛門、美濃の人、柳雷の男、支考の門、寳暦五年正月六日歿す。

立枝（りつし）市川氏、勢州關宿の人、醫を業とす、三世立圃門、享和中歿す。

葎宿（りつしゆく）那波氏、通稱江雲、櫟軒と

號す、初名は志好、京の人、梅盛の門、後談林に交り、西鶴等と風交す、虎溪橋。相腹中の著あり。

立嘯（りつせう）淺井氏、通稱竹右衛門、京の人、立圃門。

立鼠（りつそ）今井氏、隱里軒と號す、江戸の人、五世立志の門。

栗堂（りつだう）櫻井氏、通稱卯右衛門、梨園と號す、播州姫路の人　青蘿の門、享和三年八月二十九日歿す。

吏登（りとう）櫻井氏、二世雪中庵なり、初名人佐、次に斑象、次に李涧と改め、又吏登と書す、嵐雪の末弟なり、先嵐周竹より點式を讓られ、雪中二世となる、寳暦四年六月二十五日歿す、年九十三。本所法恩寺に葬る、著書に野遊。或問珍。ぬか袋。起朝。和竹聲。桃の親。七部搜等あり

李東（りとう）加賀洲上村の里正、麒麟に名あり、希因門。

李方（りはう）雪齋、爻珍重と號す、初祖乾洲の門。

梨風（りふう）奥村氏、玄暉堂と號す、京の人、丈石の門、寳暦十三年十月六日歿す、年五十一。

梨風（りふう）土田氏、伊賀の人、杜若の男、

土芳の門。

里風（りふう）釋氏、江戸の人、調和の門。

立宜（りふぎ）高井氏、初祖立志の長子、窟梅子の號あり、父に先て歿す、著書に女夫草。櫻かゝみあり。

立吟（りふぎん）小野川氏、糸耕軒と號す、盲人なり、官檢校となる、初代立志の門。

立和（りふくわ）兎睡堂と號す、三世立志の門。

立和（りふくわ）境氏、名は滿直、通稱善五郎、江戸の人、初代立圃の門。

立和（りふくわ）滿氏、師竹庵と號す。

立砂（りふさ）下總馬橋の人、元蓼の門、寛政十一年十一月二日歿す。

立志（りふし）高井氏、松樂軒と號す、京の人、立圃の門、江戸に住す、天和元年十月二十一日歿す、著書に眉出千句。樗木集あり。

立志二世（りふし）一世の次男、幼名犬松、松雨軒、和諧堂の號あり、初名は立詠、寳永元年八月十日歿す、年四十八。著書都の技折。難波技折あり。

立志三世（りふし）二世の男、名は心保、和散才と號す、初名春水、次に立詠と改め、父歿後立志となる、享保九年十一月二十

一日歿す、年四十二。著書に、雪の果。庭のまさ。脉中集あり。

立志四世（りふし）淺見氏、和樂園と號す、初め介我の門にして如格と稱せしが、立志三世に隨ひ、師歿後襲名して剣者となる。

立志五世（りふし）關氏、大中庵、青松庵の號あり、四世の門、後得器に學び、四世立志歿後襲名す。

立似（りふじ）喜多村氏、名は宗清、休齋と號す、大阪の人、初め令德に從ひ、次に貞室の教を受け、後立圃門となる。著書に烏帽子箱。入聟集あり。

立圃（りふほ）野々口氏、名は親重、通稱庄左衛門、（或云次郎左衛門、又市兵衛）丹波保津の產、武門に生れ、京師に出て紅粉屋と稱し、雛人形を商ふ、和歌を烏丸光廣卿に學び、畫を狩野探幽に承く、書法を尊朝親王に習ひ、俳諧を松永貞德に問ふ、薙髮して松翁と呼べり、後年師命に背て自ら俳式を立て自立す、土岐家に徴されて奉仕す、延寶九年九月三十日（一說に寛文十二年三月十七日）歿す、年七十一、二條寺町要法寺に葬る。著書には發句帳。花火草。追善九百韻。花月千句。空礫。若狐。万句集。

千句集。河船德萬歲。信親千句。雜談集。小町踊。小相撲。濱萩。明鏡。唐人踊。あた花。歸花。袖中記。鶴鷺千句。碁打千句。若楓。暮繫集。老鳥千句。摺火打。烏帽子筥。片輪車。硯俳諧。詞寄。大峰。江戸紫。九十九折。みこの舞。こきり等あり。

立圃(りふほ)二世 初祖立圃の外孫、幾重齋と號す、岩城の人、奥州須賀川にて、芭蕉等躬と三吟あり、畫に巧みなり。

立圃(りふほ)三世 資生氏、通稱定太夫、萬菊翁と號す、京の人、能太夫なり、初め福田露言に學び、雨言と稱せしが、後蕉門に入て沾圃となり、續猿簑の撰者たり、晩に立圃の名を繼て三世となる、延享元年十月十二日歿す。

埋木(りぼく) 江戸の人、調和の門。

倫員(りんいん) 藤村氏、名は忠久、通稱源之丞、京の人、梅盛の門、茶道の宗師にして如堅と呼ぶ、木玉集の著あり。

林鴻(りんこう) 堀江氏、名は重則、風雲子、烟月堂の號あり、江州大津の人、似船の門、著書に京羽二重。あらむづかし。口ごたへ等あり。

林石(りんせき) 甲良氏、伏龜堂、郁齋の號あり、京の人、知石の門、笠石が寸松堂を繼ぎ三世となる、寶暦二年四月二十六日歿す、年六十三、著書に、松の林。梅の林。富士の雪あり。

倫里(りんり) 足立氏、通稱久兵衛、穗葉軒と號す、江戸の人、志村無倫の門、元文二年十二月十二日歿す。葉の雫の著あり。

吏明(りめい) 川村氏、通稱辨之助、蕉門。

令敬(りやうけい) 村上氏、名は正孝、京の人、令德の門、旅枕の著あり。

良泉(りやうせん) 增尾氏、本姓は白井、阿波の人、夜霜軒と號す、保友の門、醫を業とす、伊丹在岡に住す、又茶事に堪能なり。

涼袋(りやうたい) 建部氏、名は綾足、字は孟喬、吸露庵、寒葉齋の號あり、奥州津輕藩の家老、喜多村將監の次男なり、弱年家を出て京師に至り、東福寺に入て僧となる、還俗して長崎に至り、畫を學び、大坂に流寓し、野坡の門に入て俳を學ぶ、尾州に行き支考に從ひ、又麥林に倚る、名を葛鼠といふ、既にして加賀に希因を訪ひ都因と號し、又去て伊勢の梅路に從ひ、淡々に交り、遂に江戸に出て、加茂眞淵に就て國學を修む、片歌を起して片歌道守と號す、此間繪事を以て業とす、兼て小說に筆を執り、吉野物語。西山物語の作あり、晩年東國熊谷驛に至り歿す、安永三年三月十八日なり、年五十六、牛島弘福寺に葬る、著書に、俳諧明題集。俳仙窟。南北新話。涼袋獨吟集。蕉門頭陀物語。杖のつき。片歌道のはしめ。同草のはり道。同二夜問答。同舊宜集。同東風流。同百夜問答、此他國文の隨筆、畫本の類甚多し。

良典(りやうてん) 館氏、意行子と號す、江戸の人、季吟門、さむしろ集の著あり。

涼菟(りやうさ) 岩田氏、名は正致、通稱亦次郎、後權七と改む、園友齋と號す、伊勢山田の祠官にして、蕉門の故老なり、神風館中興の祖となり、大に伊勢風を起す、享保二年四月二十二日歿す、年五十九、著書に、麻刈。中宿。潮もろみ。裸島。山中集。行脚戾。皮籠摺。一幅半。三匹猿。沙つばめ。裸島跡追。三日歌仙等あり。

令德(りやうとく) 鶏冠井氏、通稱九郎右衛門、陀隣軒、梨柿園の號あり、京の人、貞德門の老足なり、延寶二年(或云七年)三月三日歿す、年六十八(或云九十一)著書に、昆山集。土塵集。四十四年。親

炙。擧直集あり。

良能(りやうのう) 勃々庵と號す、寶暦時代、京の人。

涼波(りやうは) 千葉氏、茶仙堂と號す、江戸の人、徒流の門。

令富(りやうふ) 通稱清兵衛、令德の養嗣子なり、兼て和歌を善す、元祿の末六十餘歲にして歿す。

良保(りやうほ) 片桐氏、通稱清右衛門、三夢、兀元子の號あり、京の人、初め令德に學び、後貞德門となる、著書に、辨說集。風俗集。戲謔草。千句。獨步集。破枕あり。

良品(りやうほん) 友田氏、通稱覺左衛門、伊賀上野の人、梢風尼の夫、蕉門なり、享保十五年六月歿す。

菱湖(りようこ) 上村氏、通稱菱屋小兵衛、京の人、闌更門。

綾呉(りようご) 三宅氏、通稱勇次郎、楊柳園、柳架坊の號あり、江戸幕府の士、南架の門、天明五年五月十二日歿す。

李流(りりう) 三宅氏、友千亭と號す、嚙山の男。

李琳(りりん) 田中氏、固有庵と號す、京の人、宗專の門、安永三年九月七日歿す、年五十二。

梨翁(りをう) 虎杖庵と號す、信州の人、白雄門八弟子の一人。

梨翁(りをう)二世 一世の男、通稱八郎、二世虎杖庵なり。

れ

鈴賀(れいがい) 池田氏、九河翁、白嶺と號す、京の人、宋屋の門に入て、其初名鈴賀の名を嗣ぐ。明和八年十月九日歿す。

鈴山(れいざん) 人見氏、榮泉堂と號す、京の人、宋屋の門、寬保三年十一月十一日歿す、年三十四。

了雨(れうう) 吉田氏、戸樞庵と號す、京の人、才麿の門、著書に梅朝。此君。波入日。二日影あり。

了我(れうがい) 江戸の人、沾德門。

寥崖(れうがい) 妙々庵の號あり、能州の人、文化七年十月二十四日歿す。

寥和(れうくわ) 大場氏、名は森茂、通稱仁左衛門、柳隣、取尺齋、規矩庵、萬里亭、茶酒隣の號あり、江戸の人、伊奈半左衛門の臣、初め蕉門に入り、青夢と號し、後嵐雪に學ぶ、寶暦九年十月二十五日歿す、年八十三、淺草誓願寺中林宗院に葬る、著書に、俳諧職人盡句合。抒筵。富士拾遺。風の末。五色墨一丁墨等あり。

寥和(れうくわ)二世 通稱三河屋太兵衛といふ、江戸の人、初め初世宗瑞の門に入り、白兎園二世を嗣ぎ風葉と稱せしが、故ありて之を捨て寥和を繼で二世を名告る。

寥和(れうくわ)三世 淺井氏、寶雪齋、海鶴庵の號あり、奥州磐城平の藩士、初め三世宗瑞の後を嗣ぎ、四世宗瑞と呼びしが、寥和の後を襲ひて三世となる、享和三年十月五日歿す、年四十三。

寥和(れうくわ)四世 田島氏、通稱五助、和晉齋と號す、江戸の人、初名桐葉と稱し、三世寥和に學び、四世爬尺齋となる、文政六年正月四日歿す、年五十三。

寥和(れうくわ)五世 羽鳥氏、名は方英、通稱三次郎、豊山と號す、四世の門、安政五年十月八日歿す、年六十五。

了國(れうこく) 椿庵と號す、豊前の人、士朗の門、著書山吹集あり。

寥松(れうしよう) 巒氏、八朶園、氷黑井、大年盧の號あり、江戸の人、藝太の門、天保三年閏一月十七日歿す、年七十三。露陀蘿尼の著あり。

蓼太（れうた）大島氏、（本姓吉川）名は陽喬、通稱は平八、信州寐覺の里大島村の產、江戸に出て雪中庵史登の門に入り、遂に第三世の宗師となる、初名里席、宜來、豊來、老鳥など呼べり、横山町より深川に轉じ、空摩居士と號す、雪門派世々宗師の中、最も流行して世に鳴る、天明七年九月七日歿す、年七十、（或云八十）深川六間堀要津寺に葬る、著書に、百羽掻。武藏野三歌仙。七柏集。筑波紀行。鏡の花。水面集。住吉千句。三春日記。眞砂歌。嵐雪文集。芭蕉庵再興集。雪おろし。十二歌仙。俳諧十三條。未來記。芭蕉翁眞跡集。棚さがし。無門關。七部捜。芭蕉句解等あり。

了派（れうは）石井氏、名は溢久、通稱彌三郎、京の人、宗祇の門。

了派（れうは）廣瀨氏、宮川庵と號す、初名鐵鐸、京の人、宗屋の門、安政四年十二月二十八日歿す、年七十一。

了輔（れうほ）野村氏、青顱庵と號す、初名雨靜、江戸の人、蓼太門、天保七年十一月十四日歿す、年八十二。

列山（れつざん）關根氏、晩翠園と號す、南臺の門、白芹の次男にして、初名花洲と號す、其日庵を嗣ぎ七世なり、文政九年八月二十五日歿す。

蓮谷（れんこく）板倉氏、雷風庵と號す、京の人、延享五年二月十日歿す、俳諧溫故集の著あり。

連國（れんこく）箕輪氏、通稱善左衛門、秋元家の臣、雲津水國の門。

蓮之（れんし）松木氏、通稱次郎右衛門、卯時庵、青雲子の號あり、江戸の人、杉風に學び、長水等と五色墨を起し鳴る、後珪林と改め、江戸風の撰者たり、寛保二年六月二十八日歿す、年六十三、俳諧水車の著あり。

蓮之二世（れんし）山路氏、江戸の人、初祖の門、二世卯時庵なり、文化十四年七月十七日歿す、年七十一。

蓮二（れんじ）支考を見よ。

蓮宿（れんしゆく）風窓湖十の妻。

練石（れんせき）福田氏、石々翁と號す、京の人、鞭石に學び、二世而笑堂となる、寛政元年七月五日歿す、年八十八、著書に、岸柳。糸柳。高低窟。礎駟松。高軒あり。

戀稻（れんたう）三世湖十を見よ。

漣丈（れんぢやう）錦退窟、或は墨水西と號す、江戸の人、蓼太の門、安永八年十一月十八日歿す。

連馬（れんば）大町氏、柳橋庵、太平庵の號あり、江戸の人、存義の門。

連馬二世（れんば）吉野氏、初世の門。

連馬三世（れんば）望月氏、二世の門。

漣々（れんれん）大久保氏、通稱忠保、恪堂と號す、又花垣と呼ぶ、江戸の人、雪明門に入て去來庵三世となる、後去て爐扇門に入る、明治十九年三月五日歿す、年五十六、著書に、白雄夜話。俳諧道の案あり。

ろ

魯隱（ろいん）山形氏、名は長康、通稱用助、繩海子と號す、伊賀の人、大坂今橋に住す、長齋の門。

樓川（ろうせん）谷口氏、無事庵、木樨庵の號あり、江戸の人、初め三田白峰に學び、後祇空に教を聽く、馬場存義等と江戸座の故老を以て稱せらる、天明二年十月一二十九日歿す、年八十四、淺草門跡內善照寺に葬る。

樓川二世（ろうせん）米氏、萬物庵、貞松齋の號あり、難口に學び、木樨庵三世となる、俳諧獨稽古の著あり。

露香（ろかう）東松氏、名は伊緑、我春堂と號す、信濃日々新聞の記者なり、一茶の研究家として知らる、大正七年一月八日歿す年五十二。

呂蛤（ろかふ）西村氏、京の人、四世夜半亭を繼ぐ。

露牛（ろぎう）赤萩氏、江戸の人、初め湖十の門、花菱と呼ぶ、後露沾門となる。

露光（ろくわう）大越氏、名は祐泰、橘井軒、靈嶽の號あり、奥州の人、俳を露沾公に學び、同國白河に醫を業とす、天明四年七月九日歿す、年八十一。

呂丸（ろぐわん）一に露丸に作る、圓司氏、通稱左吉、嗣柏堂と號す、羽州羽黑の人、京に出て蕉門に入る、元祿九年二月三日歿す。

魯丸（ろぐわん）曇華齋と號す、美濃の人、丈草の門、春の鹿。雪白川の著あり。

鷺喬（ろけう）山本氏、市中庵と號す、山城伏見に住す、蕪村等と風交す、俳題正名の著あり。

露月（ろげつ）豊島氏、名は貞和、通稱治左衛門、五重軒と號す、初名識月、剃髮して後鵑翁と呼ぶ、江戸に住し、謠曲の師なり、露沾の門、寛延四年六月二日歿す、年八十五、著書に、俳諧宮遷。二子山。倉之衆。名物鹿子。二重染。卯月庭訓。閣の梅。寄進能。句靈寶。跡の錦等あり。

露言（ろげん）福田氏、素竹軒、風琴子の號あり、江戸の人、初調和の門に入り、調也と稱せしが、後露沾公に從ひ露言と改む、元祿四年四月十日歿す、年六十二。

露言二世（ろげん）福田氏、白堂と號す、一世露言の次男なり。

廬元坊（ろげんばう）仙石氏、茶話仙、黃鸝園、里紅等の號あり、美濃の人、支考門の高足にして、獅子庵二世の宗師なり、常に烏藤を鳴らして、諸國を吟行す、延享四年五月十日歿す、年五十六、著書其日歌仙。文星觀。藤の首途。花供養。渭江話。袖土產等あり。

呂國（ろこく）山脇氏、五竹庵と號す、大坂の人、百嬰の門。

露十（ろじ）志村氏、竹葉城と號す、晋阿の門。

露松（ろしよう）三枝氏、通稱平左衛門、喜月庵と號す、蓁峨の門。

鷺水（ろすゐ）青木氏、名は五省、通稱治左衛門、白梅園、三省軒、歌仙堂の號あり、京の人、立圃の門なり、才學ありて物語の作を爲す、享保十八年三月二十六日歿す、年七十六、（此歿年疑はしと大系圖にあり）俳諧の著書には、此衆。手習。糸屑。万才樂附合。俳諧新式。若夷。新玉櫛笥。俳諧良材。俳諧指南。春のもの等あり。

露石（ろせき）水落氏、名は義一、聽蛙亭と號す、大坂人、洋品を商ふ、子規派の俳人にて青々と共に寶舟を發行し、關西の威を輝かす、大正八年四月一日歿す年四十八。露石史傳研究に力を盡し、逸存の古書を紹介して後生を惠みし功尠なからず、就中蕪村遺稿。太祇句選後篇の如き發見は世の珍寶とするところなり、遺稿に蛙鼓、聽蛙亭雜筆あり。

蘆夕（ろせき）越人を見よ。

露川（ろせん）澤氏、通稱市郎右衛門、月窓庵、月空居士の號あり、伊賀鷹山村の人、尾州名古屋に住し、藤屋と稱し珠數師なり、蕉門に入て後一家をなす、曾て支考と風調を論じ互に爭ふ、寛保三年十月三日歿す、年八十二。著書に、流川。枕かけ。記念頭。合楔。矢矧堤。鸚武石。小溢紙。奉納集。北國油。西國油。赤裸。玉曲集。此原集。花卯集。

菊の宴。船倉集。不斷櫻。二人行脚。田植塚。庵の記等あり。

鱸船（ろせ）橋本氏、松江堂と號す、京の人、丈石の門、寶曆九年二月十三日歿す、年五十一。

呂叟（ろそ）小坂氏、名は敎忠、通稱清左衛門、露草園、紫欄齋の號あり、下總香取の人、江戸に出て鳳朗に學ぶ、嘉永元年正月二十七日歿す、年八十。

盧中（ろち）古澤氏、芸暉堂と號す、京の人、幼名牛磨と呼び才磨の門なりしが、後知石に從ふ、延享元年十月六日歿す、年四十四、著書に、狂連千句。袖鉋。園莖立あり。

盧仲（ろち）倉橋氏、名は勝正、通稱忠藏西湖堂と號す、駿州小島の藩士、寸長の門、寛政元年九月九日歿す。

露竹（ろち）重松氏、通稱辨左衛門、旭窓二世、翠雲堂二世たり、松平隱岐守の家人、葛哉の門。

魯丁（ろち）向井氏、元竹の三男、去來の弟なり、長崎に住す、蕉門、享保十二年歿す、年七十五。

路丈（ろち）馬島氏、通稱玄珍、越後高田の人、醫を業とす、士朗の門、文政中歿す。

路通（ろつ）芭蕉近江行脚の折、路傍の乞食の歌才あるを稱し、引て歸る、即ち名を與へて路通と云ふ、（一說に八十村氏、通稱與次右衛門と云ふと、）後年師命に背き、勘氣を享け鬼貫等と結ぶと、實傳未詳、著書には、勘進牒。月山發句合。芭蕉翁行狀記。桃れぶり。彼岸月。旅袋等あり。

路通（ろつ）荒井氏、名は正英、十三庵、試爪齋の號あり、江戸の人、珪山門。

露庭（ろて）露沾の門。

露沾（ろて）内藤氏、名は義英、遊園堂、傍池亭と號す、磐城平の城主、風虎公の嗣子なり、宗因に學び、後芭蕉其角等を招きて唱和し、自ら一家をなす、享保十八年九月十四日卒す、年七十九、鎌倉光明寺に葬る。

鷺白（ろは）黑岩氏、通稱忠右衛門、雲嶺庵と號す、上州草津の人、閼更の門、文化七年八月二十七日歿す、年七十九。

魯文（ろぶ）假名垣氏、有名なる戲作者、本名は野崎文造、細木香以の添削を受て俳句を詠ず、明治廿七年十二月八日歿す年六十五。

わ

横几（わう）津村氏、江戸の人、其角門。

和及（わき）高村氏、露吸庵と號す、京の人、常長に學び、上手の聞えあり、晩年洛西壬生村に隱れ、直唱法師といふ、元祿五年正月十八日歿す、年四十四、著書に、番匠童。水莖の岡。雀の森。藤波集。薛等あり。

和俊（わし）寺井氏、破扇子と號す、尾州熱田の人、江戸に住す、和及門。

倭泉（わせ）石田賦泉の妻、普求の門。

曰人（わつ）遠藤氏、名は定矩、字は文規、通稱清右衛門、後伊豆之介と改む、木間庵、言外堂、清湖庵、柚庵、桃崦、濁齋、竹林舍、富山翁の數號あり、奧州仙臺の藩士、白居の門に入て學ぶ、詞才時流に抽づ、天保七年四月二十日歿す、年七十九、仙臺蓮坊小路松音寺に葬る、著書に四五枚集。炭俵註。暮雨句集。集脈要領。七部礫嘶。蕉門諸生全傳。瀧おぼろ集。暮雨句集等あり。

爲角（ゐか）安井氏、一圓堂と號す、京の人、普求の門。

爲裘（ゐき）角田氏、菜窓、鼠嘲の號あり、江戸の人、初名戀荷、三世湖十門なり。

惟草（ゐさ）黑川氏、惟草庵、無漏軒、夙也坊の號あり、江戸の人、持明院流の筆道指南をなす、寥松の門、俳諧人名錄の著あり。

爲山（ゐざ）關氏、通稱永藏、梅の本、月の本と號す、江戸の人、梅室の門、明治八一年一月十九日歿す、年七十五。

維舟（ゐし）松江氏、名は重頼、通稱大文字屋治右衛門と云、宿屋を業とす、自江翁、乳父子、腐俳子の號あり、京の人、貞德翁の高弟、性狷介にして爭氣あるを以て師の勘氣を被り、別に一家をなして鳴り法橋に叙せらる、晩年談林風を謌ひ、延寶八年六月二十九日歿す、年七十四、東山大谷に葬る、著書には毛吹草。狗猲集。今樣姿。浮世長男。懷子。溜池。河ごさ。乳母。大井河。佐夜中山。武藏野。藤枝集。菊千代。梅千代。名取川。江戸水道。打破春澄。維舟隨筆等あり。

韋吹（ゐす）大井氏、有底窩と號す、越前の人、支考に學ぶ。

惟然（ゐぜ）廣瀨氏、初名は素牛、辨慶庵、鳥落人、風羅堂、梅花佛の號あり、美濃の人、廣德齋安通の舍弟にて、蕉門に入て別に一風を爲す、師歿後師の句を念佛に唱へ、風羅念佛と稱し、諸國を風狂す、寶永七年五月二十一日故鄕に歿す、家集天狗集一卷あり。著書に、三千折。二葉集あり。

爲大（ゐだ）杉堂と號す、江戸の人、四世沾山の門。俳諧參語の著あり。

惟中（ゐち）岡西氏、名は勝、字は赤子、一時軒、困々堂の號あり、因州鳥取の人、初め備前岡山に儒を業とせしが、延寶五年京に出て、烏丸資慶卿に就て歌學を修め、又浪華に宗因が門に入て俳諧に遊び、遂に浪花に止り醫を業とす、元祿五年八月十日歿す、年五十四、世に伊勢の園女が夫とするは誤なり、著書には俳諧蒙求。近來風躰抄。いつれ柳の。次郎太郎千句。俳諧三部抄。十百韻。名所題林。澁團扇返答。砂金草紙。消閑雜記。破邪顯正返答。永郎子紀行。閑々堂訓叢。和歌秘密抄。眞字徒然草。徒然草直解。續無名抄。枕草子傍註等あり。

ゑ

越山（ゑつざん）通稱環屋平六、曲三世と號す、因州の人、雪師の門。

越人（ゑつじん）佐分利氏、（本姓越智）名は氏恒、通稱は平次郎、後七兵衛、（一に勘助後兵太夫に作る）眉山子と號す、肥後熊本の藩士、島某の二男、佐分利家の養子となる、養父と共に流浪し、美濃國加納に住し、父歿して後尾州名古屋に移り、紺屋を業とす、時に名を菱屋重藏と呼ぶ、芭蕉巡錫の折入門し、逢士と稱せらる、元祿三年十月本國に召還され、三十人口三百石を食み、下大夫となる、此時兵太夫と名告り、雅號を蘆夕と改む、元祿十五年三月十四日歿す、熊本流長寺に葬る、著書に、不猫蛇。春の月。庭竈。猫の耳。散尾冠等あり。

悅春（ゑつし）岡田氏、通稱大文字屋次郎兵衛と云ふ、大阪の人、初め令德に學び、後宗因門となる。

猿左（ゑんさ）戸谷氏、通稱は吉九郎、嗽第庵と號す、信州善光寺の人、享和元年二月七日歿す。

艶之（ゑんし）齋藤氏、通稱五郎兵衛、（一に儀左衛門）初め白芥の門に入り、後秦々に學ぶ、聽水館三世なり。

艶士（ゑんし）江原氏、梅樹軒と號す、出羽某社の祠官、貞德風の俳を能す、正德二年六十一にして歿す、梅の露。杷菅の著あり。

艶士（ゑんし）横田氏、（一に熊澤氏）通稱は彌九郎、壺谷軒、短尺堂、北流亭の號あり、江戸の人、初め福田露言に學び、後調和の門に入る、晩年眉丘子と號し、醫を常業とす、著書に水比目魚、分外集等あり。

燕志（ゑんし）東氏、匍匐庵、東流窓の號あり、初世萬英の門、古例座を江戸に立て、葛飾風の席順を定む。

燕志女（ゑんし）橋本氏、名はつね、花鏡井と號す、紀州の人、岷考門。

遠舟（ゑんしう）和氣氏、名は由貞、通稱は仁兵衛、浪華の人、書道を以て名高し、俳事は宗因門にして、八重一重、浪華辨慶、套哉等の著あり。

猿雖（ゑんすゐ）築山氏、通稱は内神屋惣七郎、東麓庵、西麓庵の號あり、後薙髪して意專と號す、伊賀上野の人、蕉門三十一人衆の一なり、寶永元年十一月十日歿す、年六十五。

遠水（ゑんすゐ）樋口氏、江戸の人、福田露言の門。

燕石（ゑんせき）富永氏、通稱次右衛門、土佐の人、貞德の門、牛飼集の著あり。

袁丁（ゑんてい）森川氏、通稱右衛門、琅玕井と號す、武州大谷村の人、江戸に出て白雄に學ぶ、天保二年十月十一日、八十八歳にて歿す。

圓立（ゑんりう）今井氏、（一に小川氏）通稱了三、京の人、初世立圃の門、神子舞、花火綱目の著あり。

を

鷗里（をうり）閑日庵と號す、阿波の人。臥鵬の門、後應吏と書す、三四考の著あり。

屋烏（をく）石井氏、名は堅、字は好鄕、五竹庵と號す、大坂に住す、木僊の門、三世八千坊なり。

温克（をんこく）藤中氏、安足亭樂成庵の號あり、江戸の人、買明の門。

俳諧年表

（此篇は概要を示す爲なるが故時代の標的とならざる者は省略せり）

年號	永正	大永	享祿	天文
干支	十七年間	七年間	四年間	廿三年間
俳諧畧史	十一年山崎宗鑑犬筑波集を撰す俳諧の權輿なり	五年伊勢神官荒木田守武教訓世の中百首を詠ず傳えて伊勢論語の稱あり		九年荒木田守武獨吟千句の連歌をなし俳諧の俑を造る此以前には長き連句の滑稽はなかりしなり
上梓俳書々目				
俳家歿年並ニ享年月日		牡丹花肖柏歿（七年四月四日八十五）		柴屋軒宗長歿（元年三月六日八十五） 荒木田守武歿（十八年八月八日七十七） 里村昌休（廿一年十一月五日四十二） 山崎宗鑑（廿二年十月二日八十九）

弘治	永祿	元龜	天正	文祿	慶長
三年間	十二年間	三年間	十九年間	四年間	十九年間
		二年二月五日山城小鹽山勝持寺にて連歌の大會あり世に大原千句といふ			三年八月松永貞德花の本宗匠の勅許を蒙り連哥、俳諧分れて獨立す五年齋藤德元關ヶ原の合戰敗れ京に出て俳人となる
					里村紹巴歿（五年四月十二日七十九） 里村昌叱歿（八年七月廿四日六十五） 里村玄仍歿（十三年四月廿三日三十七） 嶋川親長歿（十五年五月八日七十八） 細川幽齋歿（十五年八月廿日七十七）
	石井了派歿（二年五月）				

元和	寛永元	二	三	四	五
九年間	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰
伊勢神路山の麓に盲人杉田望一あり守武の韻を慕うて一流の俳諧をなし其門流又貞德派と往來す	改元二月三十日				安原貞室貞德の門に入る 德元獨吟千句を詠す 德元江戸へ下る

六	己巳		十一月五日貞門山本西武始めて京都妙滿寺に會席を開き百韻を滿尾す
七	庚午		
八	辛未		西山宗因、其主加藤正方と連歌を行ひ里村昌琢に判を乞ふ之を寛永千句といふ
九	壬申		西山宗因主家退轉に肥後を去りて浪人す
十	癸酉		松江重頼犬子集を編む卷頭に立圃の句を載せさりしことにて兩人相挑む
一	甲戌		雛屋立圃の發句帳刊○重頼犬子集刊

杉田望一歿(六月五日八十三)

二	乙亥		
三	丙子		宗因始めて重頼と會し俳諧味を知る時に三十二才
四	丁丑		
五	戊寅		宗因北野へ移居す
六	己卯		北村季吟江州より京へ出つ十六才
七	庚辰		

里村昌琢歿(二月五日六十一)

里村玄仲歿(二月三日六十一)
烏丸光廣卒(七月十三日六十)

西武鷹筑波集刻

重頼、道節江戸へ下る

十八 辛巳		徳元の俳諧初學抄刊行江戸に俳書を刻する始と云	
十九 壬午	季吟貞門に入る○立圃と重頼と確執す○西山宗因浪華に移る○立圃重頼獨立して各一派をなす	安原貞室の百韻自注出つ	
二十 癸未	池田正式吉野行脚○貞室江戸に赴く○立圃のはなひ草俳式の初と云 重頼、立圃、西武、令徳、貞室、梅盛、季吟の七人を貞門の七俳仙と呼べり	立圃嚏草出づ式法の書 貞徳の淀河、油糟出づ犬筑波の釋及今流を示せし書合せて新増犬筑波集と云	
正保元 甲申	改元十一月二十三日	幸和底拔臼刊	
二 乙酉	季吟玉津島の廟祝となる	重頼毛吹草刊	
三 丙戌	三月十七日貞徳花咲亭に於て俳式を定む○石田未得相州行	正式氷室守○幸和鵜鷺千句	

四 丁亥	宗因浪花に向榮庵を結ふ 山田將監美濃より入京 徳元、未得、卜養、玄札、加友を貞門江戸の五哲と稱す	重頼大原三吟、毛吹草追加刊行季吟山の井刊	杉木美津女歿(七月二日六十五) 齋藤徳元歿(八月廿八日八十九)
慶安元 戊子	改元二月廿六日 守武百回忌を修す	守武千句刊行○正章千句	
二 己丑	貞徳始めて歳旦の三ツ物を試む三ツ物とは發句、脇、第三と三句を一體としたる連句なり	望一千句○令徳崑山集○立圃花月千句○同空礫○定環野行集○滿目集	
三 庚寅	石田未得京より江戸に皈る	望一山田俳諧集○同後千句○貞室片言なほし○重頼獨吟千句西武久留流	里村玄的歿(八月廿八日五十八) 古筆一村歿(閏十月廿八日)
四 辛卯	貞徳の御傘世に出づ俳式之に則る	貞徳の御傘刊行○匠材集	里村昌倪歿(七月十八日六十四)
承慶元 壬辰	改元九月二十八日 八月貞室貞徳より二世花の本を許され宗匠となる	立圃萬句集○久次十寸鏡○立圃若狐	

萬治元	三	二	明暦元	三	二
戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳
改元七月二十三日	神田貞宣蝶々子と改め獨立す貞室門なり	二月廿五日菅公七百五十年祭に當り宗因大坂天滿の社頭に萬句を興行し檀林の旗を樹つ時に五十二歳	改元四月十三日 貞室芳野吟行		
喜雲京童○元治拾玉集○無能尾張八百韻○燕石牛かひ	梅盛鸚鵡○西武砂金袋○春清かゞし○蝶々子物忘草○安靜細布	貞室玉海集○梅盛口眞似草○皆盧世話燒草○一雪鋸屑○是誰破晉魔○休安夢見草○令徳土塵集○宗因向榮文集	貞徳紅梅千句○玄扎十種千句○信親千句	四武荻花集	立圃俳諧千句○同河船徳萬歳
			馬淵宗畔歿(春) 井阪春清歿	未吉道筋歿（世に白うるりの道筋と云）	松永貞徳歿(十一月十五日八十三)

四	三	二	寛文元	三	二
甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥
鶏冠井令徳獨吟千句をなす		宗因江戸に遊ふ芭蕉藤堂良精に仕ふ其子良忠の侍となる十九才重頼、正式と爭ふ	改元四月二十五日	重頼、立圃爭て絶交す	
俳諧両吟集○重頼小夜中山○正由俳林良材○重俊名所附合○蠅打	貞徳俳諧記○貞徳五條百句○一雪茶杓竹○成安埋草○季吟駒山の井○同續	元隣俳諧仕様○同小式○是誰初元結○同玉櫛笥○光方雀子集○安靜鄙談集○喜雲都案内者	梅盛木玉集○同落穂集○道甘花の露○同絲瓜草○梅盛早梅集○元隣身樂千句○定清尾蠅集○一興浮世長刀○隨流紙屋川水車	重頼懐子○同乳母常矩幕紫集○由雪和歌竹○常辰木男さらひ○立圃九百韻○顯成境草○武川繼子立	貞徳百韻自註○喜雲鎌倉物語○梅盛拾子集○元治卅六俳仙
					名妓高尾歿(十二月廿五日)
					里村玄俊歿(七月七日五十)

五	六	七	八	九	十
乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌
此頃日中常矩貞徳風を去りて談林に移り其調を謳吹す	六月芭蕉蟬吟の位牌を高野山に納む○正式室氷室守を著はし維舟と絕交す	芭蕉故國を逐轉して京に入り季吟に從ふ廿四才	上島鬼貫八才にして「こい〳〵といへど蟹が飛んでゆく」の詠あり○高島梅盛幕府より召さるれど辭して赴かず		談林の流行に從ひ貞門實年篤銳の士は多く之に化しゆき中にも高野幽山、池西言水、伊藤信徳、高井立志、芳賀一晶、岸本調和等は聞えたる作家なりしが次第に反旗をひるかへせり
立圃小町踊○由健みやこ草○友貞天神法樂集○西武あはゝ千句	一雪洗濯物○同阿波千句○貞室氷室守○重徳獨吟集○季吟俳諧揃○長慶遠近集○良保風俗集	加友伊勢踊○季吟新續犬筑波○立圃小相撲○良保蟲譜草○貞室玉海集追加○喜雲京童跡追○立靜古今四季友○重軌鳴呼立千句	梅盛便船集○同細小石○道弘朱紫○春流藪香物○安都鳥合○宜休難波草○種寛詞友○立野道速○重親湊舟十萬句		立圃演荻○貞徳天水抄○季吟十會集○正辰大和順禮○隨葉集大全
里村玄陳歿(正月五日七十五) 温野慶友歿(半井卜養の父)	藤堂蟬吟歿(四月芭蕉の主人) 二條千丸卒(七月廿八日六十)		松平一景歿(十月十九日松山城主)	石田未得歿(七月十八日八十二) 野々口立圃歿(九月晦日七十一)	

四	三	二	延寶元	十二	十一
丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥
談林風に入る	芭蕉故郷伊賀を見舞秋東都に歸る○其角圓覺寺大嶺和尚に參す○大淀三千風獨吟三千句を吐く○鬼貫	春、田代松意其師宗因を江戸に招き江戸談林の旗を飜し大に振ふ○京の菅谷高政江戸談林に對し同じく宗因を招き惣本寺半傳蓮舍を結び東西相呼應して鳴る	井原西鶴天滿にて一日二萬三千句を吐く○池田宗旦伊丹に居を移す○芭蕉深川杉風の別墅に入り剃髮して風羅坊と云時に三十一才其角芭蕉の門に入る十四才	鬼貫維舟の門に入る十三才 椎本才麿西鶴の門に入る	九月芭蕉江戸に來り小澤卜尺に寄る時に二十九才 北村季吟幕府より召されて江戸に出づ
元隣實藏○季吟諸國獨吟集○重以給入百人一句○以仙落花集	立圃明鏡○季吟花千句重安糸屑○令徳新續獨吟○高政俳諧綸合○宗因大坂獨吟集○西武砂金袋後集○芦分船○澁うちは○紅葉鮒	重賴藤枝集○宗因釋教百韻○舊山大和笠○宗旦遠山鳥○重棨短冊集○立志思出千句○谷遊海士釣舟○如意寶珠○俳諧無言抄	梅盛山下水○重賴今様委○隨流鶯笛○休子武藏野集○宗房貝おほひ○一雪晴小袖○顯成てくり舟○重徳塵塚	繼舟時世委○季吟埋木○當矩捨舟○種寛誘心集○四翁十百韻○正辰續大和巡禮○一見松花集	
西鶴正木蔕○蝶々子玉手箱○同當世男○松意談林十百韻○維舟武藏野○宗因天滿百韻○西吟西行櫻○遠舟難波辨慶○一雪言羽繼○安静○友春溫故日錄	松山玖也歿(四月) 露の坊歿○岡本胤及歿 神野忠知歿(十一月廿七日五十二) 荻野安靜歿	平澤重光歿(四月十四日六十四) 山岡元隣歿(或云寛文十二と) 青木道伯歿	鷄冠井令徳歿(三月三日六十八) 加藤駿齋歿(八月十一日五十四)	安原貞室歿(二月七日六十四) 里村玄祥歿(十月廿二日) 荒木加友歿(三月江戸五哲の一)	由良正春歿(四月晦日) 白話寂(四月十四日五十四) 伊藤如春歿(四月廿二日)

五	六	七	八	天和元	二
丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌
松江維舟も此頃に至り談林化したり○岡西惟中備前より大坂に來り宗因門に入る	鬼貫慧能錄を著す十八才談林の流行は新井白石が桐蔭の名を以て指を此道に染めしにて感化の大なるを知らる	宗因芭蕉江戸にて始めて出會○隨流破邪顯正を著して高政の中庸委を難詰し俳せて談林を包る○前句附此頃始るといふ	惟中破邪顯正返答を著し隨流に答ふ○又二ッ盃を出して隨流を打つ者あり俳諧賴政を著し挑む者あり隨流猿とりもちを書て又馭撃す	桃青信德が七百五十韻に次て二百五十韻を興行し次韻と云此卷より蕉風の一體を胚胎せり○攝州伊丹の池田宗旦維舟に學び談林に入り伊丹流の一派を起す	春池西言木江戸より京に歸る○冬深川芭蕉庵類燒し桃青甲州杉風が親戚の家に寓す○其角芝金池院門前に移る
立圃唐人踊○一雪肩入奉公○西鶴大矢數○惟中三部抄○維舟江戸水道○水雲大長刀○梅盛類船集○卜琴玉江草○惟中風體集○同澁團問答○一風乘合船○六番發句合	高政中庸姿○松意幕づくし○言水江戸新道○同東日記○季吟弘誓舟○西鶴博多百合○幽山江戸八百韻○宗旦籠拔○四人法師○江戸三吟不卜廣小路○常矩膳覺集○保友犬硯集	益友ぬれ鳥○三千風大矢數○西鶴杉やき○維舟名取川○貞恕わたし船○貞恕新玉海集○隨流破邪顯正○言水江戸蛇の鮓○才麿坂東太郎○桃青奉納百韻○常矩塵取○千春假舞臺	其角田舍句○常盤舍句合○延寶二十歌仙○談林三百韻○江戸大坂通し馬○信水江戸辨慶○心友伊勢宮笥○幽山船枕○自悅洛陽集○一晶四懸隔衆○不卜向ヶ岡○高政釋伽汁	次韻○野晒紀行○一晶萬水入海○調和富士石○常矩雜巾○西鶴後大矢數○信德七百五十韻○宗旦五ヶ國集○鬼貫西瓜三ッ集○賀子山海集	似春芝肴○心友御田扇○千春武藏曲○春澄一日三百韻○言水後樣委○益齋櫻千句○京三吟集○三箇津
	山本西武歿（二月十八日七十三） 平澤定門歿（十月八日七十） 半井卜養歿（十二月廿六日七十二） 名妓夕霧歿（正月六日二十七）	里村昌通歿（十二月十二日六十五）	松江維舟歿（六月廿九日七十四） 椋梨一雪歿（九月二日六十）	高井立志歿（十月二十一日）	石田未琢歿（三月廿日七十） 田中常矩歿（三月二十日） 西山宗因歿（三月廿八日七十三） 里村昌隱歿（五月九日五十）

三	貞享	二	三	四	元祿元
癸亥	申子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰
秋芭蕉庵再興の寄附を募る○北村季吟新玉津島に居す○四月大淀三千風仙臺を發し諸州を漫遊す	改元二月二十八日 二月其角大坂に赴く去來と對面○丈草武門を辭して剃髮○秋芭蕉伊勢に赴き尾張に入り五歌仙成る○冬同美濃に赴○鬼貫謝の外に諸諸なしと大悟す	芭蕉古池の吟あり（春の日に出づ）	芭蕉本間道悅に醫を學ぶ○鬼貫東武に赴く○其角木賀溫泉に遊ぶ○杜國尾州御藏米に不正ありて篠島に流され尋て國を追放せらる	芭蕉鹿島に吟行す○同伊賀に赴き無名庵に入る○去來妹を携へ伊勢に赴く○芭蕉杜國を携へ吉野へ吟行す	改元九月晦日 七月其角京に至る○夏芭蕉岐阜に赴く○秋芭蕉尾州より更科の月に赴く
其角虛栗○宗旦三人蛸○西吟ねざめ二十日集○其角新二百韻○自悅空林風葉○水丸廿日鼠○	冬の日（七部ノ一）○其角蠹集○同花時鳥○鬼貫有馬日出○園水赤曾有格○題林一句	春の日（七部中）○其角新山家○熱田三歌仙○鞭石磯馴松○一樓賦○曲肱ゆたか山○清風稻むしろ○調實白根嶽	其角初懷紙○言水京日記○仙化蛙合○西吟庵櫻集○三千風富士詣○清風一ッ橋	其角續虛栗○芭蕉鹿島紀行○不卜續ヶ原○尙白一ッ松○嵐雪若水集○宗旦野梅集○一晶丁卯集○未達關相撲○信房茄子喰さし	西吟浪花櫻○都水包井集○西吟鹽味集○同彌生山○等躬白川文集○常牧遠あるき○除風青蓮○季範浮草○句餞別
	平澤定香歿（四月二十日四十）	幻吁寂（正月二日五十七） 隼士常辰歿（二月九日）		妙務尼歿（四月八日五十七其角母）	淺野工齋歿（七月廿一日） 里村昌程歿（十月廿八日七十七） 小林一笑歿（十一月六日三十六）

二	己巳	芭蕉奥州より北陸へ行脚す曾良同行○冬芭蕉去来が落柿舎に寄寓す○嵯峨日記あり○浪華國女蕉門に入る○季吟幕府の召に應して歌學所の總裁となる	荷兮曠野集（七部中）其角十七條○三千風行脚文集○似船苗代水○支考東四夜話○露川花盧木○曉翠せみの小河	高島玄扎歿（十二月十四日八十三）		
三	庚午	四月芭蕉幻住庵を近江堅田に結ぶ○浪化支考蕉門に入る○鬼貫福島に移り犬居士成○芭蕉熱田に遊ぶ○越人熊本に歸參す○其角居を神明町に移す	可政物見車○和及雀の森○鬼貫大傳物狂○其角いつを昔○ひさご（七部中）○西水特牛○嵐雪具憎其角花摘○同讀か家○新三百員○宰直縮月夜○常牧萬歳樂○圃水物見車返答	南杜國歿（二月二十日）		
四	辛未	嵐蘭吉野に遊ぶ○去來凡兆芭蕉の勸に從ひ猿蓑を撰す蕉風の花實具はるものとへり	猿蓑（七部中）○其角雜談集○西鶴石車○律友四國猿○路通勸進牒○東德花見獨吟歌仙○才麿吾ゑくぼ○蕉常卯辰集○和及墨匠童○琴風瓜作○林鴻京二羽重○昨非屋祭	高瀬道甘歿（二月十五日八十三）岡村不卜歿（四月九日）福田露言歿（四月十日六十二）		
五	壬申	芭蕉彦根に遊ぶ○鬼貫幻住庵に芭蕉を訪ふ○許六蕉門に入る	隨流貞德永代記○支考葛の松原○如泉摺火打○酒堂深川集○只丸足撫○車庸己が光○俳諧籟物語○世の爲○等沙汰○斷始○許六韻塞	井原西鶴歿（八月十日五十二）松倉嵐蘭歿（八月廿七日四十七）竹下東順歿（八月廿九日七十二）池田宗旦歿（九月十七日五十八）		
六	癸酉	六月廿八日其角三圍にて雨乞の句をす○此頃天下の俳風蕉風化して貞門も談林も其名のみ實は遂に幽玄體に赴く	轍士糸屑○當牧此花集○其角萩の露○春秋俳諧集○兀峯桃の實○林鴻あらむつかし	圓司呂丸歿（二月二日）草壁擧白歿（春蕉門）油屋千里歿（七月十六日蕉門）出口貞本歿（十月二日七十一）六成堂馬佛歿（十一月廿二日）		
七	甲戌	芭蕉彦根に遊ぶ○鬼貫幻住庵に芭蕉を訪ふ○許六蕉門に入る○此頃天下の俳風蕉風化して貞門も談林も其名のみ實は遂に幽玄體に赴く○支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く	其角枯尾花○同句兄弟○炭俵（七部中）不角芦分船○轍士七車○泥足其便○丈草ねころび草○荷兮晝寢種○浪花名月集○東潮松かさ○素牛藤の實	北村湖春歿（正月十五日五十三）續猿蓑（七部中）○桃隣むつ千鳥○其角錦繡談○同末若葉○調和夕紅○荷兮橋守○風國菊の香○俳諧良材集○江戸土産	支考笈日記○路通翁行狀記○浪花有磯海砥並山○風國木からし○嵐雪わかな○露川やはぎ堤		
八	乙亥	支考江戸に至る○素堂古郷に父母の墓を展す○許六翁の像を刻み智月尼に贈る○秋色十三にて上野に櫻の句を詠ず○江戸に前句附流行	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
九	丙子	三月蕉翁三回忌を東山に行ふ○桃隣奥州へ行脚陸奥千鳥の稿あり○浪花上洛す	史邦小文庫○甲圃翁草○其角若葉合○轍士元祿拾遺○北枝褒の名殘○許六韻寒○路通桃ねぶり○風國初蟬	其角枯尾花○同句兄弟○炭俵（七部中）不角芦分船○轍士七車○泥足其便○丈草ねころび草○荷兮晝寢種○浪花名月集○東潮松かさ○素牛藤の實		
十	丁丑	支考北國行脚○立羽不角法橋の官位を受く	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
十一	戊寅	翁歿後俳風漸く素れんとし去來其角に書を贈り許六に詰問し俳諧問答成る○十二月多賀潮古八丈に流さる○風國の泊船集は芭蕉句集の最初のものとす	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
十二	己卯	二月三千風鳴立澤に犬西行と號して住す十三都の遊女に勸進して碑を立	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
十三	庚辰	其角茅場町に移る○支考主催して翁七回忌を義仲寺に行ふ○三千風仙臺に遊ぶ	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			

二	己巳	芭蕉奥州より北陸へ行脚す曾良同行○冬芭蕉去來が落柿舎に寄寓す○嵯峨日記あり○浪華國女蕉門に入る○季吟幕府の召に應して歌學所の總裁となる	荷兮曠野集（七部中）其角十七條○三千風行脚文集○似船苗代水○支考東四夜話○露川花盧木○曉翠せみの小河	高島玄扎歿（十二月十四日八十三）		
三	庚午	四月芭蕉幻住庵を近江堅田に結ぶ○浪化支考蕉門に入る○鬼貫福島に移り犬居士成○芭蕉熱田に遊ぶ○越人熊本に歸參す○其角居を神明町に移す	可政物見車○和及雀の森○鬼貫大傳物狂○其角いつを昔○ひさご（七部中）○西水特牛○嵐雪具憎其角花摘○同讀か家○新三百員○宰直縮月夜○常牧萬歳樂○圃水物見車返答	南杜國歿（二月二十日）		
四	辛未	嵐蘭吉野に遊ぶ○去來凡兆芭蕉の勸に從ひ猿蓑を撰す蕉風の花實具はるものとへり	猿蓑（七部中）○其角雜談集○西鶴石車○律友四國猿○路通勸進牒○東德花見獨吟歌仙○才麿吾ゑくぼ○蕉常卯辰集○和及墨匠童○琴風瓜作○林鴻京二羽重○昨非屋祭	高瀬道甘歿（二月十五日八十三）岡村不卜歿（四月九日）福田露言歿（四月十日六十二）		
五	壬申	芭蕉彦根に遊ぶ○鬼貫幻住庵に芭蕉を訪ふ○許六蕉門に入る	隨流貞德永代記○支考葛の松原○如泉摺火打○酒堂深川集○只丸足撫○車庸己が光○俳諧籟物語○世の爲○等沙汰○斷始○許六韻塞	井原西鶴歿（八月十日五十二）松倉嵐蘭歿（八月廿七日四十七）竹下東順歿（八月廿九日七十二）池田宗旦歿（九月十七日五十八）		
六	癸酉	六月廿八日其角三圍にて雨乞の句をす○此頃天下の俳風蕉風化して貞門も談林も其名のみ實は遂に幽玄體に赴く	轍士糸屑○當牧此花集○其角萩の露○春秋俳諧集○兀峯桃の實○林鴻あらむつかし	圓司呂丸歿（二月二日）草壁擧白歿（春蕉門）油屋千里歿（七月十六日蕉門）出口貞本歿（十月二日七十一）六成堂馬佛歿（十一月廿二日）		
七	甲戌	芭蕉彦根に遊ぶ○鬼貫幻住庵に芭蕉を訪ふ○許六蕉門に入る○此頃天下の俳風蕉風化して貞門も談林も其名のみ實は遂に幽玄體に赴く○支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く	其角枯尾花○同句兄弟○炭俵（七部中）不角芦分船○轍士七車○泥足其便○丈草ねころび草○荷兮晝寢種○浪花名月集○東潮松かさ○素牛藤の實	北村湖春歿（正月十五日五十三）續猿蓑（七部中）○桃隣むつ千鳥○其角錦繡談○同末若葉○調和夕紅○荷兮橋守○風國菊の香○俳諧良材集○江戸土産	支考笈日記○路通翁行狀記○浪花有磯海砥並山○風國木からし○嵐雪わかな○露川やはぎ堤		
八	乙亥	支考江戸に至る○素堂古郷に父母の墓を展す○許六翁の像を刻み智月尼に贈る○秋色十三にて上野に櫻の句を詠ず○江戸に前句附流行	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
九	丙子	三月蕉翁三回忌を東山に行ふ○桃隣奥州へ行脚陸奥千鳥の稿あり○浪花上洛す	史邦小文庫○甲圃翁草○其角若葉合○轍士元祿拾遺○北枝褒の名殘○許六韻寒○路通桃ねぶり○風國初蟬	其角枯尾花○同句兄弟○炭俵（七部中）不角芦分船○轍士七車○泥足其便○丈草ねころび草○荷兮晝寢種○浪花名月集○東潮松かさ○素牛藤の實		
十	丁丑	支考北國行脚○立羽不角法橋の官位を受く	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
十一	戊寅	翁歿後俳風漸く素れんとし去來其角に書を贈り許六に詰問し俳諧問答成る○十二月多賀潮古八丈に流さる○風國の泊船集は芭蕉句集の最初のものとす	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
十二	己卯	二月三千風鳴立澤に犬西行と號して住す十三都の遊女に勸進して碑を立	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			
十三	庚辰	其角茅場町に移る○支考主催して翁七回忌を義仲寺に行ふ○三千風仙臺に遊ぶ	支考惟然伊勢より大阪に至り芭蕉の病に侍す○去來丈草等翁の枕頭を守る○其角九月上京して不圖翁の病床に會す○嵐雪桃隣等翁の法事に粟津に赴く			

十四	十五	十六	寶永元	二	三
辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌
其角此頃酒落俳諧を起す調和、一蜂、子英、沾德、不角等之に和す	此暮十二月十四日赤穗義士吉良邸に討入あり其内大石可笑、大高子葉、富森春帆、神崎竹平、吉田白砂等は俳諧に遊びし徒なり○浪化去來を訪ふ	季吟八十の賀あり其角、嵐雪、去來、丈草、越人、支考許六、野坡、杉風、北枝を蕉門十哲と稱すれど出處確かならず	改元三月三十日	青流潭北奥州に遊ぶ	芭蕉十三回忌双林寺に行ふ惟然風羅念佛を唱へて噪狂す
其角焦尾琴○三千風笈さがし○不角笠の蠅○露川枕かけ○舍羅道島狩○萬子そこの花○十丈射水川○杉風續別座敷	轍士花見車○許六宇陀法師○芭蕉奥の細道○正秀白馬集○吾仲柿表紙○白雪三河小町○素覽幾人水主○沾州五十四郡○了我二番鶏○惟然二葉集	雲鈴入日記○如泉日本國○凉菟行脚戻○野紅小柑子○支考草枕○千山當座拂○牧童草刈笛○不角廣海原○青すだれ○虚空集	凉菟山中集○去來渡り鳥○沾州のぼり鶴○支考三疋猿○朝叟家門集○正秀栗雀○會木藥人形	助然山彦集同續○來山萬人講○野坡杉丸太○朝叟縮柳○沾德餘花千句○野坡木曾の谷○同枯野塚○支考六花集○沾凉反古談○凉菟はだか島○邊竹原懷日記	許六風俗文選○轍士夜櫻○東山萬句○巴靜波計都以天○珠來七異跡○支考家見舞○嘯風袋角○臺新蟻の宿○魯丸春の鹿
野童歿（六月廿日京の人） 風國歿（七月三日去來甥） 藤谷貞兼歿（十月廿七日八十七）	乾貞恕歿（三月四日七十） 北村正立（八月廿一日） 和田東潮歿（江戸人嵐雪門）	釋浪化寂（十月九日三十二）	市川才牛歿（二月十九日五十四） 釋丈草歿（二月廿四日四十五） 千代倉知足歿（四月十三日六十六） 二世立志歿（八月十日四十八） 向井去來歿（九月十日五十四） 築山猿錐歿（十一月十日六十四）	北村季吟歿（六月十五日八十二） 釋李由歿（六月廿二日四十五） 富尾似船歿（七月十六日七十七） 中川喜雲歿（十月三日七十） 相良等躬歿（十一月四日七十八）	石田成丸歿（七月三十日） 智月尼歿（七十四）

四	五	六	七	正德元	二
丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰
三笠附行はる冠の五文字を三ッ出して三ッ冠に各七文字五文字を附て勝負を爭ふ○北藤浮生原俳論を著はして酒落俳諧を化鳥體と匐る	支考北越に遊ぶ○渭北京に上りて長生庵仙鶴に拮抗して半時庵淡々と名乘り一種の江戸一流を皷吹す	四月四日三千風「けふぞはや見ぬ世の旅の衣更」と辭世の句を石に刻み飄然去て行く處をしらず○惟然風狂してあるく○一蝶赦に遭て歸る	蕉翁十七回忌に東山双林寺に碑を立つ○水間沾德尤も流行し江戸風之に依る	改元五月七日支考自ら死すと稱して跡をかくし越中に隱る○立羽不角化鳥風と稱して酒落の口合を主としたるものを唱へ一派に喧傳す	
○言水我身皺○支考南無俳諧○浮生原俳論○出紫又深川○田舍わたらひ	支考夏衣○立詠庭の卷○萬李田植唄○百里遠のく○鬼睡寶の市	青流島筑波○乙州笈の小文○淡々糸屑○朱拙星合○仙鶴寄南篇○吟墨十六夜集○鷺水新玉櫛笥	支考貞享式○百里續誰か家○東推船庫集○粟津ヶ原（追善）	支考墨直○阿難話○沾德枝葉集○素堂とく〳〵の句合	蝶羽千鳥掛○蓮谷溫故集○許六正風彦根振○沾石耕作集○風和把菅○新古山川集
寶井其角歿（二月卅日四十七） 芳賀一晶歿（四月五日六十三） 兒玉好春歿（八月十一日五十九） 服部嵐雪歿（十月十三日五十四） 室賀轍士歿（　　）	中島隨流歿（二月十一日八十） 橋部竹翁歿（三月五日六十二）	岡本苔蘇歿（三月三日八十五） 河合曾良歿（十月廿二日六十二） 小澤卜尺歿（十二月廿四日九十四） 兒玉松春歿（　　）	廣瀨惟然歿（五月廿一日六十四） 中尾我黑歿（十月六日七十一） 神戸祐甫歿（八月十五日七十九）	北條團水歿（正月四日四十九） 廣岡雪芝歿（九月廿八日）	江原風波歿（二月十八日六十一） 榎並貞富歿（五月六日七十二） 林桐葉歿（五月十三日） 釋只丸寂（十一月二日七十一） 森本蟻道歿（五月十三日四十八）

三	癸巳	其角七回忌に追善集刊行さる○露川涼莵北越に赴く
		鬼貫獨語○芥帆俳諧作者部類○風竹赤裸
		松井汝村歿（　）
四	甲午	稻津青流早雲寺に薙髪して祇空と改む
		支考俳諧十論○周竹菊いたゞき○月夜伊丹發句會○巴兮山琴集○許六和漢三體詩○涼莵麻刈○祇空みかへり松
		大野秀和歿（八月十二日六十四）
五	乙未	涼莵支考相會す○流行は江戸に沽德一派○伊勢に涼莵○美濃に支考○尾張に露川○近江に許六○餘は諸國著しからず
		支考發願文○同梅のわかれ○許六歷代滑稽傳○乃露八夕暮
		青木春泥歿（七月廿日六十三）山本子英歿（六月二日）片山助叟歿（八月十二日）齋藤如泉歿（八月十七日七十餘）森川許六歿（八月廿六日六十）岸本調和歿（十月十七日七十八）
享保元	丙申	改元七月芭蕉廿三回忌越人不猫蛇を著はして支考を劾る其十論を難詰す支考之に答へて劒かけを著す
		鬼貫老の寢覺○白狂劒かけ○冶天兩部餅祭○江戸いかだ○越人不猫蛇
		小西來山歿（十月三日六十三）山口素堂歿（八月十五日七十五）山本荷兮歿（　）
二	丁酉	三笠附を禁ぜらる
		支考俳諧古今抄○同本朝文鑑○淡々戀百吟○野坡初蟬集○沽德船便○雁山通天橋○沽涼百福壽○陶巨畫寢隨筆
		摩詰雲鈴歿（二月二日）北藤浮生歿（正月廿三日四十八）岸本和英歿（二月四日四十二）下村堤亭歿（二月十二日四十）岩田涼莵歿（四月廿三日五十九）
三	戊戌	閑女智鏡と改む○千代初契の詠あり
		言水九折集○來山木の葉駒○遠千鳥
		立花北枝歿（五月十二日）香田正宣歿（五月十二日五十八）內藤風虎卒（五月廿九日六十七）佐保介我歿（六月十八日六十七）梅原貞爲歿（七月十四日五十六）

四	己亥	神澤杜口俳諧に指を染む十歳○支考露川實を書て澤露川の附合を難ず露川之に答へて合槧を著はす
		其角類柑子○支考露川實○十論爲辨抄○惟然三千折○格枝綿大名○露川庵の記○紫紅其蓮集○淡々六百韻
		天野桃隣歿（十二月九日七十一）生駒萬子歿（四月廿八日六十六）
五	庚子	支考東國行脚
		言水都曲集○沽涼卅六番句合及綾錦
		梅津文鱗歿（二月廿五日）菅沼曲翠歿（七月廿日）盛一永歿（九月十一日）井上道山歿（八月十五日六十四）平田無卜歿（十月廿日六十二）
六	辛丑	露川北越行脚
		貞佐身延詣○何狂夢中問答○沽德續余花千句
		江左尙白歿（七月十九日七十三）多賀岩翁歿（六月八日）松本永固歿（十二月十一日）寺島安信歿（十一月廿一日）
七	壬寅	早野巴人京に上る○此頃赤井芳仝北野笠置連歌の執筆を勤む
		沽德俳度曲○來山今宮草○潭北後の月日○東都四幅對
		志村無倫歿（二月廿九日六十三）釋千那寂（四月十七日七十三）永田正秀歿（八月三日六十七）四方郎朱拙歿（八月三日六十六）
八	癸卯	生玉琴風奥州に遊ぶ○智鏡江戸に安藤家に仕ふ○未適仙臺に三千風の碑を立つ○地口附流行忽ち禁に逢ふ
		支考雜陳二百韻○淡々雜談集○貞佐俳諧其柱○七里淡雪○晋子十七回忌○沽涼百華實○舊德卯のこよみ
		多賀曉雲歿（正月十三日七十三）大坂屋万乎歿（八月十五日）三世立志歿（十一月廿一日四十二）
九	甲辰	蓮二坊諸國へ三千化の廻文を出す
		正秀水の友○也白甫鴉集○虎角古紙衣○支考蓮の葉風

十	十一	十二	十三	十四	十五
乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌
もじり付流行○	才麿江戸に來る江戸の俳諧怖るゝに足らずと豪語す	沾涼湯島に萬句興行 十二月兒島大圭、几山、指山、羅人、卓々と謀り各自立して淡々社中を脱せんと五吟の百韻をなし倭錦と題す	大圭淡々と爭ひ公訴して敗る	淡々雅莚を圓山に張り大圭、羅人等と和睦す○春門人竿秋に半時庵點印を讓る○大圭浪花に赴く	羅人淡々の許を受け點者となる○乙由加賀に行脚して千代を訪ふ○淡々江戸に赴く
貞佐江戸歌仙合○沾州百千萬○石想四時觀○倫里葉の雫○露月おか玉の木○同鄙鶴○同上京染	野坡八島○沾涼鳥山彦○信安花拾遺○千鳥春の水○百花文月往來	來川種瓢○吾仲初茄子○支考桃の首途○同和漢文藻○雲皷しかきく○一字芋頭○鬼貫七車	淡々萬國燕	貞佐紙蚤○支考東花式○同十論拾遺○魯石都の土産○常陽花おふこ○言石花紋日○晋雪雲の臺○布門たつか弓	三升父の恩○續江戸筏○千英木曾麻衣○淡々無想集○紹蓮水かゝみ○里紅藤の首途○金毛杖の名殘
秋色女歿（四月十九日五十七） 河曲一蜂歿（九月十五日八十五） 谷木因歿（九月晦日八十） 仲上法策歿（六十九）	生玉聖風歿（二月七日八十八） 宮川松堅歿（二月廿三日九十五） 智鏡尼歿（四月二十日六十三） 山岸半殘歿（六月十二日七十三） 水間沾德歿（六月三十日六十二） 柳川晋風歿（十一月七日）	高野百里歿（五月十二日六十二） 豊島佳風歿（十二月十四日四十九） 向井魯町歿（七十二）	福田鞭石歿（二月十五日八十） 各務柳雪歿（二月十九日） 中西大町歿（五月十四日） 堀内雲皷歿（五月二日六十四）	長島甘谷歿（四月十一日） 土田杜若歿（八月六日） 榎岸友我歿（九月廿五日六十七） 山本孟遠歿（九月三十日六十一） 辻荻子歿（十月十日） 久米田杉尋歿（十二月）	服部士芳歿（正月十八日七十四） 瀧方山歿（五月廿二日八十） 友田良品歿（六月） 寺井西角歿（八月八日七十） 瓜木晩山歿（八月十五日六十九） 鷲田青峨歿（十一月十三日）

十六	十七	十八	十九	二十	元文元
辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰
塵元坊九州行脚 柳居、素丸、宗瑞、蓮之、咫尺の五人五色墨といふことを起す互に判者となり正風を復興せんとす然れ共江戸風の派手を免れずして幾千もなく廢る	鈴木半素點者となる	一世湖十老鼠と改名男永機二世湖十となる	淡々大阪に居を移す	春宮岡有佐判者に列す○秋深川八幡に祇空の祠を建つ 此年間流行を擬にしたるは沾州が比喩體、乙由の伊勢風、淡々が半時庵風にして支考が美濃風は精や圏外に出でしがごとし	改元五月七日
江戸五色墨○梧山青海波○不角正風集○一之桐一葉○貞佐梨園○超波落葉合○湖十犬新山家	不角柾の葛○祇空百番句合○盧元坊文星觀○吏登或問珍○古今俳諧集○蝶々子江戸紫	巴人一夜松○凉俗二夜問答○露月江戸名物鹿子○童平節文集○山之兩の落葉○貞佐其柱	巴靜吾妻からけ○來川金臺條○麥阿高いひき○米仲諸公畵讃○淡々紀行俳談	盧元袖土産○吾鼠筑紫野○沾州親うくひす○湖十續花摘○似錦集	支考雪月花○魚貫新句兄弟○不角正風江戸菅笠○聟引出集
各務支考歿（二月七日六十七） 中尾槐市歿（六月十一日） 青木祖順歿（九月十一日） 平岡文蛤子（十月二日四十） 田中丈竹歿（十月廿七日六十七）	杉山杉風歿（六月十三日八十六） 淺井吟竹歿（六月廿八日） 安藤冠里卒（七月廿五日六十二） 桑岡貞佐歿（九月十二日六十三） 杉野配力歿（十一月十七日八十一）	重田梧山歿（三月二日三十八） 青木鷺水歿（三月廿六日七十六） 釋朱人歿（七月十五日鳴立庵二世） 稻津祇空歿（四月二十三日七十一） 内藤露沾卒（九月十四日七十九）	石井藤四歿（二月廿五日六十九） 山本規妙子歿（二月廿六日四十八） 五十嵐千山歿（四月廿四日六十六） 雪津水國歿（五月八日） 志水延湖歿（五月十六日六十九） 兒島大圭歿（六月三日四十四）	太田白雪歿（六月七日七十五） 池田二川歿（十月九日六十）	足立來川歿（二月十五日） 三宅袋河歿（五月十七日四十一） 四時堂其諺歿（八月廿二日七十一） 兒玉松泉歿（九月三日五十三） 鶴見一漁歿（五月朔日）

二	丁巳	巴人京を去て江戸に歸る	東登野遊○弄花まきすだれ○圓六浦笠○世中百韻
三	戊午	山口羅人年々六月都鄙の俳士を集めて一晝夜萬句の興行をなす	祇徳竹馬集○園二抱籠
四	己未	麥林の伊勢風諸國に擴まり江戸には柳居加賀には希因其尤なり	原松屋月夜○不角友晉鶴○不及天遊鉾○淡々其角卅三回○午寂つの文字
五	庚申	三月大島蓼太吏登門に入る	淡々かいつの海
寛保元	辛酉	改元三月三日 謎付流行	有佐其砧○貞佐四鉾辻○白主寛保百韻○祇丞獨相撲○祇徳鳥なし三吟
二	壬戌	穆良父と共に勢州山田に移住す十四歳	淡々文集○遊五佐夜の中山○龜世雪の旅

上島鬼貫歿（八月二日七十八）	種本才麿歿（正月二日八十二）	志田野坡歿（正月三日七十八）	千代倉蝶羽歿（十一月十三日六十五）
中村蘭石歿（七月二日五十五）	井岡肇寧女歿（七月十九日）	鈴江知木歿（五月廿八日四十四）	人見午寂歿（十二月廿一日）
深川湖十歿（七月廿七日六十三）	植村惟安歿（八月十七日六十八）	清水超波歿（七月十二日三十六）	桐漏貞山歿（七十）
平野鶴歩歿（八月廿三日五十三）	足立倫里歿（十月廿二日）	鈴鹿知石歿（十二月十三日六十）	
今村幸德歿（九月十六日四十）	永田寿泉歿（十月廿七日八十四）	貴志沽洲歿（十二日十七日七十）	加藤原松歿（正月五日五十八）
中川乙由歿（八月八日）	濱田酒令歿（ ）	落合一貞歿（正月九日）	山口酉生歿（正月十五日七十五）
			早野巴人歿（六月六日六十六）
			松木珪林歿（六月廿八日六十三）

三	癸亥	蕉翁五十回忌に京都に芭蕉堂を建つ○浦川富天四國に赴く○芳室八十の宴を催す江戸に宗匠として立つ者三十餘人貸てなきことゝいへり○	菊鈴四の奥○沾涼藻塵袋○祇空著の花○柳居同光忌
延享元	甲子	蝶夢沾德の枝葉集を讀て始めて俳に入る十三歳	不角春の言○湖十亭環○一丸花琴集○遊五雪の尾花
	乙丑	横井也有江戸に遊ぶ	果然時津風○不角續清鉋○寥和俳諧職人盡○白羽俳諧古紫○祇中浦やどり○都因杖つき○一水本たゝら
二	丙寅		芦角手濃紙○淡々發句集○素丸乞食袋○嵐雪句集○何誰薙髪集○輕子談笑隨筆
三	丁卯		其角五元集○同拾遺○羊素俳諧答問集○秋瓜鳥の都○不玉秋の夜○隆志合せ鏡
四	戊辰	改元七月十八日 不角北總に遊ぶ	蓮谷溫故集○涼岱南北新話○桑々畔句集○瓢水諧歌集○舍朶其燈

吹山市貢歿（正月四日五十三）	太田巴静歿（二月十九日）	山本海德歿（三月十三日四十四）	二世胡十歿（正月廿四日）
竹田羽紅歿（閏三月五日）	志村常仙歿（二月廿九日三十二）	實生沾圃歿（十月十二日）	紫子春來歿（二月十五日四十九）
三田白峯歿（四月十八日）	畫田大立歿（四月廿八日六十九）	中村吟松歿（ ）	江川百洲歿（四月十四日）
澁露川歿（十月三日八十二）	常盤澤北歿（七月三日）		大矢白鳩歿（九月廿七日七十九）
堀尾調和歿（二世）	中川宗瑞歿（七月三十日）		居初乾峯歿（十月四日三十四）
岡田野水歿（三月廿二日八十六）	古澤芦中歿（十月六日四十四）		芳澤金毛歿（十一月廿六日八十）
			椎本芳室歿（三月四日八十四）
			釋角上歿（五月四日六十）
			芳家逸志歿（五月八日八十）
			菊岡沾涼歿（五月廿七日五十八）
			中川貞佐歿（十月廿四日六十二）
			佐久間柳居歿（十二月六日六十八）
			總屋喬因歿（五月廿日六十三）
			堀内仙鶴歿（七月十一日五十一）
			二世蜚谷歿（十月廿一日七十四）
			赤井芳金歿（十一月六日七十四）
			坂倉運谷歿（十二月二日七十四）

二	三	寶暦元	二	三	四
己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌
	也有致仕す○紀逸高點句を集めて武玉川を出し寶暦六年までに十篇となる十一卷より江戸枝折と改名し五卷あり之を川柳點の起原とす	改元十一月三日	貞徳百回忌○太祇京に上り京に住す	也有尾州前津里に隱遁す	
千鹿庵句集○盤谷四季發句	紀逸武玉川○不角村雀○風律淺緑○風狀閑盞○富天民歌行○玄峰集○江西坊頭陀行	丈石俳諧家譜○古今短册集○頭陀物語○續五色墨○蓼太雪おろし	寥和一丁墨○續五元集○風狂文草○湖十新石なとり○後紅梅千句	わくがせわ○十論代斷志○家の杖	紀逸雜話抄○北溟十二題○八菊二人笠○柳軒うつ蟬○涼岱獨吟集
堀尾和專歿（三月八日） 西嶋名歿（五月） 熊谷素秋歿（十月） 立橋那牛歿（八月十五日四十四） 村井古道歿（十月四日六十九） 高屋去雲歿（十一月十日六十三）	森川鶴人歿（三月朝日五十二） 北川貞扇歿（五月十六日六十四日） 窪田松琵歿（八月十五日七十六） 河畑慶山歿（八月廿四日四十四） 長野馬貞歿（九月十九日八十七）	吉井雲鈴歿（二月五日七十八） 鈴木羊素歿（四月八日） 長谷川馬光歿（四月朝日） 豊島露月歿（六月二日八十五）	田々貞林石歿（四月廿六日六十三） 山口羅人歿（七月廿九日五十五） 山中梅應歿（十二月）	富田六芝歿（三月廿五日） 立羽不角歿（六月廿一日九十二）	櫻井東登歿（六月廿五日九十三） 二世祇德歿（十一月廿六日）

五	六	七	八	九	十
乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰
千代剃髮して素圓と號す	淡々也有と會す發句あり「化物の正體見たり枯尾花」○鳥醉上方に行脚す此夏松露庵を左明に讓り鳴立庵三世となる	守武を五十鈴川岩井田山に祭り社を建つ		田川移竹頻りに古調を唱へて時流を嫌ひしも時至らず齡足らず遂に復古の功を成さずして逝く	烏明松露庵三世を嗣ぐ○樗良近江に遊ぶ
牧童俳諧百太郎○紹鷗うたゝね○蓮二吟集○素丸教訓百首○夜半亭發句帖	春來東風流○蓼太續其袋	涼岱俳仙窟○松吾二歌仙○紀逸歲花集○几圭唱相手○閑居鳥○蓼太芭蕉句解	俳諧三部書○夜の花	桑岡集○近道集○米仲翁隨筆○壬生山家○櫻勸進○野坡吟草○紙岱○千梅自娛文草	紀逸黃昏日記○尺龍風流陀羅尼○梅几七時雨○僧都問答
各務栗几歿（正月六日） 右江渭北歿（二世）	佛行坊不覺寂（四月十七日） 山本龜成歿（六月廿五日） 長村豐秋歿（十一月廿九日五十七） 藤田和三歿（秋）	各務東羽歿（九月十八日） 長谷川馬泥歿○長島宗久歿	大場寥和歿（正月廿五日八十三） 富岡有佐歿（四月廿七日） 中路柳水歿（五月十五日六十七） 市川栢延歿（九月廿四日七十一） 內田沽山歿（　）	岩本乾什歿（二月十七日八十） 松岡太魚歿（九十） 丹羽以之歿（七月十三日） 田川移竹歿（九月十三日五十一）	松露庵左明歿（八月廿日五十） 高井几圭歿（十二月廿三日七十四）

十一	十二	十三	明和元	二	三
辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌
大阪天王寺に翁の碑を建つ	鳥酔上方より歸庵す○十月樗良無爲庵を伊勢に結び古調を唱ふ	樗良熊野に遊び木の本に庵を結び二段集を選す 月次萬句合盛に行はれ勝句 四百四五十を半紙五六枚に暦の如く細字に印刻して榻ゟ机鳥、露丸、川柳判者	改元六月十三日 堀田麥水諸子と會して正風を唱ふ 麥水は虚栗調を祖述して佶屈なりしかば復古と雖も行はれざりき	涼帒淺草に住す 樗良を先頭に復古の氣運旺んとなり此年に入りて麥水、蕪村、曉臺、闌更、白雄、蝶夢、青蘿、蓼太等皆起りて蕉風を唱へたり	中井羅風罪ありて壹岐に流され年を重ねしが此年赦に逢て歸洛す
夏引集○蓼太七部搜○壽來御傘難問○牧十三部集	春耕糸切齒○白牛花たんす○蓼太無門關○樗良我庵集○李選文選	嘯山俳諧古選○蓼太棚さかし○闌更花故事○曉臺蛙口亭集○耳得芙蓉文集○素風愚痴問答○涼帒明題集○千代尼句集○文塚集○蛙袋○俳諧非十論	俳諧有耶無耶の關○文鳴猿談義○正月堂師走嚢○風律紙魚日記○蕪村夜半帖	蓼太未來記○芭蕉眞蹟集○既日埋木○同正門昔語集○百一集○蝶夢乙酉畳直し	文鳥いさ白山○柏舟六指○祇德古狀揃○藤の元○暮柳發句集
慶紀逸歿（五月八日六十八） 片山寸長歿（六月廿七日四十九） 細井之水歿（六月朔日七十三） 藤井晋流歿（十一月廿五日八十二） 松木淡々歿（十二月二日八十八）	菅原飛良歿（三月四日五十一） 雲裡坊歿（四月廿七日六十六） 星飯法師寂（四月） 寺町百庵歿（十月） 奥村梨風歿（十月六日五十一）	心祇歿（十月廿三日五十七） 鞭丸歿（十一月廿四日五十五） 祇丞歿○角々歿	守再賀歿（七月十七日七十三） 正木風狀歿（八月廿七日五十二） 北村隆志歿（九月六日七十） 山中翠柳歿（十月十二日七十二） 木村臣石歿（十月十三日五十二） 活井蘭室歿（十一月廿八日七十二）	三谷因石歿）三月廿八日六十七） 八木此通歿（三月廿八日五十八） 青木宗鳳歿（十二月十日七十六）	望月宗屋歿（三月十一日七十九） 岡田米仲歿（六月十五日） 戸田文鳴歿（九月七日六十一） 小菅蒼狐歿（十一月六日五十五）

四	五	六	七	八	安永元
丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰
大江丸松島に遊び歸て蓼太の門に入る○涼帒大阪に赴く○蝶夢岡崎に五升庵を結ぶ	小林一茶六歳「吾と來て遊べや親のない雀」の句あり	存義、買明、樓川相會して江戸風を鼓吹す○百明鳴立庵四世を嗣ぐ	曉臺湖南に遊ぶ○蕪村京の點者の列に入る○昨鳥名を春秋庵白雄と改め冬の日の高調により新風を唱ふ	樗良北國に行脚す○曉臺東國を行脚す○素郷蝶夢の門に入る○蓼太芭蕉庵を再興す	改元十一月廿五日 蓼太深川の火災に遭ふ
馬光發句集○珪山瓜の蔓○左舟反古文庫○淇水袖の浦○百萬夢ひらき○也有蘿葉集○樗良我庵集	鬼貫句選○姑射文庫○二夜歌仙○古硯○俳諧觸○俳諧近道	都貫城並集○蓼太句集○宗屋ひようたん集	俳諧家譜拾遺○珪山俳諧古事談○曉臺枝折萩○素丸大夫新話○草の古根○小槌大成	蓼摺古義○俳諧名物鑑○雪おろし○素丸笑ひつゞけ○闌更落葉考○樗良石をあるじ	曉臺秋の月○柏舟一字槃若○几菫其雪影○つるいちご○藤枝折
山田由林歿（九月十五日） 板羽紙隔歿（九月廿三日五十一） 浦川富天歿（五月十日）	人見蝶之歿（八月廿五日五十一） 神風館何聲歿（二月廿四日）	白井鳥酔歿（四月四日六十八） 黒瀬虚舟歿（六月十六日八十） 細井之水歿（九月九日四十四） 北川花杖歿（十一月十七日七十） 田中千梅歿（四月十五日）	速水花里歿（三月十二日六十七） 二世乾峯歿（四月廿七日四十七） 辻鼠公歿（八月廿五日四十四）	上田素鐘歿（正月廿八日七十四） 増田眠牛歿（三月六日五十三） 山本普求歿（七月廿一日七十九） 炭太祇歿（八月九日六十三） 山口波光歿（十一月十二日） 黒柳召波歿（十二月）	二世宗瑞歿（八月九日五十二） 松木竿秋歿（九月十一日七十八） 上阪可焉歿（九月十三日七十五） 池田鈴賀歿（十月九日）

二	三	四	五	六	七
癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌
樗良再び北國に赴く○野逸其日庵四世を嗣ぐ○秋蕪村樗良几董と共に嵐山の居を訪ひ一夜四唫成	秋樗良上京して京に住す○士朗京坂に漫遊す	曉臺佐渡に遊ぶ佐渡日記の著あり	蝶夢大和河内に遊ぶ○一茶生家を逐はる十四歳○五月深川芭蕉堂建	蝶夢高野に上る○同義仲寺の管督となる	樗良加賀山代の温泉に遊ぶ○蝶夢信越に遊ぶ
几董明烏○芭蕉文集○素丸說叢大全○嘯山俳諧新選○闌更俳諧世說○其明俗表紙○蕪村玉藻集○鳳足天狗問答○二弟準繩	去來抄○嵐雪文集○蕉門語錄○類題發句集○闌更新々式○一音瓜の實○古學要談○芭蕉消息集○秋香亭句集○其角直指傳○家雅見草○七部集	大魯俳諧五子稿○麥水蕉門附句注解抄○曉臺熱田三歌仙○闌更雪まろげ○蓼太眞砂歌○同三春日記	樗良時雨笛○土芳三册子○麥水新虛栗○几董續明烏○樗良菊の香○同月の夜○蕉翁俳諧集○同附合集○同文集○圃齋其蓬○吐屑庵句集	樗良花七日○春泥句集○古來庵句集○素外古今句鑑○蓼太句集○祇德富士筑波集○一鼠奥の近道○無名むかし口	湖桂旅寢論○樗良石をあるじ○故貝花傳授○蓼太鏡の花○素外猿筑波集○梨一奥細道菅菰抄○楚石三篇五色墨○吏登もゝの親
湯淺隨古歿（四月廿一日五十四） 横田几山歿（六月九日七十五） 嵐山歿（九月廿四日）	建部涼帒歿（三月十八日五十六） 河合見風歿（四月） 田中李琳歿（九月七日五十一） 松籟庵太蕪歿（十月廿二日）	中井仙徑歿（七月廿九日七十一） 宮本修古歿（八月四日五十七） 千代尼歿（九月八日七十四） 中島五始歿（九月十三日六十六） 八千坊舍椁歿（八月三日七十一）	山本宗專歿（六月廿八日八十二） 村田車用歿（六月廿八日五十八） 桃隣二世歿（十二月十五日八十一） 千代倉蝶羅歿（五月六日五十四）	淺田八百彥歿（三月廿日八十一） 三國歌川女歿（七月十七日六十一） 興津雅因歿（十一月廿六日）	小栗旨原歿（六月十六日五十四） 吉分大魯歿（十一月十三日） 素堂二世歿（十二月廿四日佐々木氏） 市川五粒歿（二月廿五日七十）

八	九	天明元	二	三	四
己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰
蝶夢出雲美作に赴く○樗良更科に遊ぶ	年間流行の人を擧ぐれば樗良、蕪村、曉臺、闌更、白雄、蓼太、青蘿、夢蝶等の復古派及江戸派の殘存せる故老二三のみ	蕪村主宰して洛東金福寺に芭蕉堂及碑を建つ○蓼太筑波に赴く		蕉翁九十回忌曉臺を會頭とす○素鄕京より盛岡に歸り望春亭を結び蕉風を皷吹す	九月蝶夢吉野に遊ぶ○八千坊筑紫に行脚す
調和俳林不改集○千梅白翁文草○也有鶉衣○蝶夢名所小鏡○宜苗水かけ草	白雄春秋稿○蕪村桃李○素堂甲子吟行○秋瓜二期の春○柳絮花筐	蓼太七栢○梅翁發句集○十番左右句合○素外類句辨○同名知折○堤亭種おろし○舍椁五色舟○	蕪村花櫻帖○來山續今宮草○麥水蕉門一夜口授○也有鶉衣後篇○蒼狐柏掌千句○梅丸茜掘○何來あみだ笠○翁文集○吐月句集	曉臺風羅念佛○鬼貫七車○麁文年浪草○半化坊花の翁○蓼太百羽掻○同武藏野三歌仙○樗良七部集○大峨翁文反故○半化坊雪の翁○五車反古○齒固○七名八體附合要錄	吾山朱紫○素外江戸河○宗瑞俳則○蕪村新花摘○鬼貫獨言○蕪村句集○樗良句集○から檜葉
谷口田女歿（七月廿日樗川の妻） 早川丈石歿（七月廿一日八十五） 三世[illegible]歿（九月朔日五十二） 中井羅院歿（十月十三日五十六） 笠家左簾歿（十一月廿三日六十六） 釋茂圃（歿九月八日六十七）	三世湖十歿（七月十五日） 田中五竹坊歿（七月廿六日八十一） 安田以哉坊歿（八月廿九日六十六） 飯島叶月歿（九月四日五十四） 河合來々歿（九月十七日五十四） 三浦樗良歿（十一月十六日五十二）	蓮宿女歿（二月六日湖十四代の妻） 木地屋風律歿（四月廿九日六十一） 諸九尼歿（九月十日六十八）	二世蘭石歿（正月十二日六十九） 二世隆志歿（四月廿四日） 馬場存義歿（十月三十日八十一） 谷口樓川歿（十一月廿九日八十四） 角鹿齋一鼠歿（正月廿一日五十三）	皐月平砂歿（二月廿八日七十六） 一祚梨一歿（四月十七日七十） 横井也有歿（六月十六日八十二） 牧冬映歿（八月廿四日六十三） 與謝蕪村歿（十二月廿五日六十八） 堀田麥水歿（十月十五日六十三）	藤原保吉歿（三月二十五） 田本野菊女歿（五月二十日五十八） 大越露光歿（七月九日八十一） 杉坂百明歿（七月廿二日） 交買明歿（十二月九日七十四）

五	六	七	八	寛政元	二
乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌
闌更東國行脚○几董夜半亭を嗣ぐ	十一月蝶夢三州に赴く○七月但馬城崎の温泉に遊ぶ		遲月奥州行脚○曉臺京を去る○几董淡路に遊ぶ 此年間は新流興起の後を享けて几董、月居、士朗、樗堂、宜麥、大江丸、完來、小知、二柳八千坊などの奮闘史なり	改元正月二十五日 蝶夢四國に遊ぶ○遲月常州神崎に結菴す○呂蛤夜半亭四世となる	曉臺、青蘿、闌更、皆宗匠號を免許せらる○一茶二六庵竹阿の號を嗣ぎ點者となる廿八歳○蒼虬闌更の門に入る
杉風句集○雪逕冬牡丹○素丸梅の絢○蓼太句集三篇○續一夜四歌仙	津富古句鑑拾遺○几董點印論○蕉翁消息集○重厚句双紙○几董手引蔓○樗良文集○成美魁春帖	俳諧也哉抄○七部拾遺○重厚乞食袋○吏登句集○其角七部集○故人五百題○一茶百話○猿みの瓜しるじ○もとの水	樗良句集○曉臺夜の柱○成美一夜流行○車蓋桃の白實○農男	几董井華集○成美淺草集	太蕪發句集○大江丸俳懺悔○素丸夏孟子論○梅人冬かつら○紫曉鐘筑波○玉兎集
山村月巣歿（正月五日五十六） 三宅綾吳歿（五月十二日）	中村慶子歿（八月三日六十八） 再和坊歿（正月七日六十一） 涌江含葵山歿（八月十五日）	大島董太歿（九月七日八十） 越谷吾山歿（十二月十七日七十） 加藤貫阿歿（正月十三日） 二世徑童歿（四月七日七十三） 洪珠來歿（二月廿九日七十）	横田柳几歿（二月九日七十三） 中村蔵石歿（七月） 中村隹山歿（九月二十一日）	釋孤桐歿（二月三日五十六） 四世湖十歿（五月廿七日） 福田練石歿（七月六日八十八） 倉橋蘆中歿（九月九日） 高井几董歿（十月廿三日四十九）	多少菴秋瓜歿（二月十一日） 櫻井雪舘歿（二月廿二日七十四） 子日庵佛仙歿（六月十一日） 柄井川柳歿（九月廿三日七十三） 二六庵竹阿歿（三月十三日）

三	四	五	六	七	八
辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰
蝶夢秘書六十部を粟津文庫に納む○長翠春秋庵二世となる○曉臺北國行脚○小石川關口に五月雨塚立つ	白雄歿後の江戸俳壇は其門派の占る所となり長翠、道彦、葛三、巣兆冥々春鴻、碩布、梨翁等を春秋下の八大家と呼び威を振へり	闌更花の本宗匠となる○完來上京す○十月抱一本所番場に移る○芭蕉百回忌○卓池士朗門となる	葛三春秋庵三世となる○蝶夢五升庵を瓦全にゆづる○長翠道彦と隙ありて春秋庵を退き中山道本莊宿に小簑庵を結ぶ次で酒田に殘露庵を構ふ		飯田篤老闌更門に入る十九歳田禾と呼ぶ
水の月○鵜の首○續深川集○暮雨庵集	蝶夢新類題發句集○俳諧古集之辨○定雅品ゑらび○梅人繼箸○古聲百年の冬	白雄句集○芭蕉翁繪詞傳○俳諧扶桑車○玉屑道の灯影○落梅花	冬の日解○發句三傑集○道彦そゞろごと○巣兆武藏野○瓦全百韻	素外天狗話○五明ひとり歩行○續七部集○俳諧和唐材	升六冬の日註解○莊丹三家發句撮解○素丸句集○俳諧六家集○青流寛八集○秋風庵句集○紫曉うき草日記
松岡青蘿歿（六月十七日五十二） 柳十口歿（七月廿一日六十九） 加舍白雄歿（九月十三日五十七） 增霜後歿（十二月廿九日八十三）	加藤曉臺歿（正月廿日六十一） 上田馬來歿（七月十二日五十四） 白尼坊歿（八月九日八十八） 哲阿彌歿（秋佐藤氏）	二世左簾歿（五月廿一日） 釋西奴歿（八月十二日） 大野傘狂歿（十二月十七日六十七）	東金羅歿（正月五日） 二世旨原歿（七月七日） 鳴立庵柴居歿（十月九日）	神澤杜口歿（二月十一日八十六） 釋雪才寂歿（七月九日六十二） 溝口素丸歿（六月廿日八十三） 釋蝶夢寂歿（十二月廿四日六十四） 萬屋車蓋歿（二月十八日） 早川來之歿（九月廿七日）	壽秀國歿（六月十八日八十六）

九	十	十一	十二	享和元	二
丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌
十月六日宗菅今宮十萬堂に於て獨吟一萬句を吐く○十一月抱一上京す	抱一千東に居を移す○鳳朗江戸に出づ道彦の門に入る	雨什四世松露庵となり幾干もなく遷還す	蒼虬芭蕉堂二世となる○烏明再び松露庵に戻る○大江丸東國に遊び駿の三月四つきを草す	改元二月五日坐來松露庵四世となる○士朗江戸に來る	士朗伊勢へ赴く○
十口俳諧家譜拾遺○素外根元集○南北新話○職人盡發句合	沽山二册子○犠姑射文庫○白露俳論○不白翁句集○士郎橘日記○五明三等の文	蕉村三十六俳仙○同俳仙集○成美淺草ほうこ○圓蘭集○八千坊十家集類題○柚日記	墟山獨喰○新五子稿○升六花見次郎○素綾千里獨歩○俳諧問答○集兆とくまんざい○菊の香	三册子○雅亭畵讃集○新題林發句集○俳諧歲事記○舊國俳諧袋○集兆おほろ豆腐○士朗蟻芝集○宗順ありのすさび	十論奥儀解○同裸問答○俳諧芭蕉談○二色草紙○長持男○白馬奥儀解○兵庫船○七部集拾遺
村上玄武坊歿(正月十九日六十)	村田巴江歿(五月廿八日七十四)	渡邊倚青歿(八月二日)	司馬可因歿(八月十三日)	和田後川歿(二世葎柳舍)	高城都雀歿(十一月八日)
小菅寶馬歿(二月十九日七十二)	島嶺舟歿(十二月十二日三十七)	高桑闌更歿(五月三日七十二)			
島井琴松歿(十二月廿六日)					
去來庵宗讃歿(七月)					
島津富歿(十二月廿一日六十七)					
好文亭青牛歿(廿九日正月七十五)					

三	文化元	二	三	四	五
癸亥	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰
年間秋田の五明、酒田の長翠、南部の素郷、仙臺の乙二を併せて奥羽四天王と呼ぶ○又江戸の成美道彦京の月居を寛政の三大家と稱す	改元二月十九日梅室加州藩の仕を致して俳人となる三十六才	信州素檗士朗に通ず		梅室上京す	
窒麥淺川集○奥の枝折○俳諧名數○若葉集○蕉翁古式俳諧○庵大集○新神田集	柴居蟇丸○俳諧蟾舌錄○俳諧參語○成美家集○士朗句集○道彦畠芹集○士朗句集○麥阿濱庇○四海句双紙○月令博物筌○炭俵註○松蘿	沽山非文考○士朗七部集○甲斐屑	俳諧手爾波抄○道彦嵩目集○金蘭集	岳輅閑子島○五瓶俳諧通言○發句題叢○かつしか掘○枯野集○五百羅漢	雉啄日々稿○午心芳春帖○四國七部集○石の皮○水屑草紙
望月武然歿(正月廿三日八十四) 二柳庵桃居歿(三月廿八日八十一) 石河積翠歿(七月四日) 淺井寥和歿(十月五日四十三) 吉川五明歿(十月廿六日七十三)	井上重厚歿(正月十八日六十六) 早野巽竹歿(六月一日) 神取素健歿(八月四日三十五) 竹內玄々一歿(八月廿五日六十三)	大伴大江丸歿(三月十八日八十四) 井川雪下園歿(十二月廿五日)	嵐亭治助歿(二月二日) 四世桃隣歿(三月廿四日三十四) 山本東瓦歿(四月十八日) 市川白猿歿(十月廿九日六十六)	加藤野逸歿(正月十五日八十) 金子乙因歿(四月廿五日五十三) 久米雪翁歿(五月九日) 釋松兒歿(七月十七日) 釋羅城歿(十月八日七十二) 釋遲月歿(九月十五日六十三)	
					熊澤元雨歿(四月十五日) 鐵臺尼歿(十月三日蓼太妻) 關雪萬歿(九月十七日七十五)

六	七	八	九	十	十一
己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌
雪雄始めて梅室と名告る		葛三西國行脚○卓池三州岡崎にて岡崎正風を唱ふ	素檗郷に返る○鶯笠江戸に出づ		
士郎浦からす○燕村七部集○曉臺句集○成美冬の日解○巣兆王の春○春坡筑紫題林抄○俳諧所名集	來鉅菊苗集○道彦澁四ツ手○宜麥繪歌仙○枇杷園隨筆	玉池雜藻○續繪歌仙○青ひさご○わらづと集○袖双紙○杉のしほり○四季文集	俳恩記○俳諧寂栞○萍窓集○俳諧歌論○日人四五枚集	嵐亭俳話○萬家人名錄○野晒紀行抄○金蘭集○反故搜○松の栞	瓦全長うた○枇杷園七部集○其角發句集○類句辨後篇
上田無腸歿（九月　日七十八） 畑　金鶴歿（正月廿一日四十三） 芝原如圭歿（八月十八日四十餘） 今泉恒丸歿（九月十四日六十） 三浦吳山歿（四月廿四日）	櫻田臥央歿（六月四日） 笹屋騏六歿（八月） 下村春坡歿（十月十九日六十一） 紀梅亭歿（七月七日七十七） 井田寒厓歿（十月廿二日六十一）	小野浙江歿（二月十九日） 岩下希言歿（三月廿三日） 松村月溪歿（七月十七日七十） 栢若寸來歿（八月十五日八十） 文鳥舍銀鶴歿（九月二十八日） 甘泉庵宗普歿（十二月廿三日五十五）	金森桂五歿（二月九日） 井上士朗歿（五月十六日七十六） 淺見左逸歿（九月廿三日六十五）	平澤月成歿（五月廿日七十九） 常世田長翠歿（八月十二日） 黃華庵升六歿（九月三日） 二世平砂歿（十一月五日七十八）	三世宗瑞歿（二月十五日七十二） 栗田樗堂歿（八月廿一日） 長田青藍歿（九月廿三日） 建部巣兆歿（十一月十七日） 榎本星布女歿（十二月廿八日）

十二	十三	十四	文政元	二	三
乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰
		道彦京に上る	改元四月二十二日 兀雨五世松露庵となる	一茶奥州に行脚す	一茶中風を病む蘇生坊と名告る○梅室大坂へ移る九月中國を遍歷す
月居俳諧問答○芭蕉翁七書○蕉翁附合評註	俳家奇人談○北元戀の枝折○後かなし文○百畫讃○俳諧西歌仙	曾波可理○湯の花集○不二時雨○花ふくろ	沙羅句集○しのふくさ○花くらべ○木かくれ集	隨齋諧話○玉田集○篤老自選句帖○春懷紙○俳諧他讃句	流行七部集○藻刈船○影七尺○連歌茶談
高柳莊丹歿（二月十四日） 二世八千坊歿（正月五日七十四） 須田一之歿（七月七日八十三）	夏目成美歿（十一月十九日六十八） 大綱白其歿（正月廿日八十三） 堀口沙羅歿（十一月六十九） 釋文曉歿（三月三日八十二）	木村小知歿（九十二） 大島完來歿（四月十八日七十） 野村白壽歿（六月十六日七十九） 五味可都里歿（九月十五日七十五） 關根白芹歿（十月廿一日） 鹿窪南臺歿（十二月廿四日三十一）	岩波午心歿（正月十三日） 瀨部芋成歿（四月十二日八十三） 倉田葛三歿（六月十二日五十七） 鈴木道彦歿（九月六日六十三） 二世川柳歿（十月十七日）	二世存義歿（正月廿五日） 五世宗瑞歿（三月廿八日六十六） 高橋東阜歿（十月十一日六十七） 素月尼歿（九月二日六十一）	桃隣五世歿（正月十四日） 飯田無物歿（二月廿二日五十二） 小野素郷歿（四月廿九日七十二）

四	五	六	七	八	九
辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌
一茶困窮哀願書を廬に出す	梅室江戸出府○茶靜江戸に存在する翁塚を記して茗荷と云	多代女江戸に出づ○鶯笠京に赴く○四月梅室江戸に來る○嵐外行脚		井上茶靜自句を各宗匠に撰ましめて其撰句を筆の儘刻し美佐古と名く	五月抱儀二條家より宗匠號を免許せらる○四馬逸淵門に入る○蓑々入世其日庵となる
成美四山藁○歷木集○茶摺小木○雪のかつら	月居遺の便○茗荷○東武六歌仙	何丸七部大鑑○素檗句集○築紫土産○能靜子○續猿簑注解○梅翁發句集○鵜衣續篇	みはしら○うそかへ	茶靜美佐古	芭蕉翁句解大成○木葉百韻○百羽掻○手折菊○陳情集
藤森素檗歿（二月廿六日六十四） 釋岳輅歿（五月十一日） 山岸秋良歿（九月廿五日七十二）	三世左簾歿（正月廿三日） 長谷来彦歿（　）	四世寥和歿（正月四日五十三） 谷素外歿（二月八日九十） 松窓乙二歿（七月九日六十九） 虎杖庵天姥歿（八月八十三）	鹽田冥々歿（閏八月廿二日八十六） 黒江雲白歿（八月廿七日七十九） 柏原芝山歿（九月九日六十一） 柏原瓦全歿（九月廿七日七十二） 七五三長齊歿（四月十九日六十八）	平野梅翁歿（五月十六日） 東儀り非歿（十月十一日） 赤松麥子歿（十一月十八日） 佐藤一亭歿（三月四日五十七） 櫻田左文歿（六月廿七日五十七）	西村定雅歿（二月十二日八十三） 中島秋壑歿（三月廿九日五十） 飯田蕉花歿（四月廿三日四十九） 關根到山歿（八月二十五日三十七） 山口青門歿（八月八日七十三） 田上菊舍尼歿（八月廿三日七十四）

十	十一	十二	天保元	二	三
丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰
卓池四國へ赴く○此頃一具龜島大圓寺を退き江戸に出で俳人に交る	千崖四國行脚	蒼虬加賀に歸る○鶯笠江戸に歸る	護物大坂に赴く		
俳諧多讀篇○俳諧一葉集○天狗杖○蠹の一本○梅文庫○七部餘錄	月居七部集○俳諧七部餘錄	曉臺七部集○俳諧正語抄○梅室付合集○鵜衣拾遺	俳諧一串抄○花讃女句集○梅翁餘情	晋子一傳錄○耳さらひ○八朶園句纂	續俳家奇人談○北枝發句集○新葉發句集
菖蒲園雪中歿（二月廿日） 三世川柳歿（六月二日） 柴田鼠水歿（八月六日） 小林一茶歿（十一月十九日六十五） 栗本玉屑歿（栗本二世） 小出宗泉歿（七月）	川路宜麥歿（十二月廿二日七十八） 草川宇橋歿（八月十七日六十一） 青野太笠歿（八月十八日） 酒井抱一歿（十一月廿九日六十八）	櫻井蕉雨歿（五月七日） 須田一之歿（七月七日八十三） 大場雄瀾歿（　） 三津井雨當歿（十二月十二日六十六）	村山草石歿（六月十日八十） 古川花讃女歿（七月廿四日二十三） 安田漫々歿（五十六） 石井屋鳥歿（二月廿四日七十六）	山崎春嶺歿（五月廿八日） 釋寶風歿（七月二日） 高橋世南歿（三月十一日） 三橋花城歿（十一月十三日八十三） 曾長成歿（十二月十二日三十八）	八朶園峯松歿（十一月十七日七十三） 小河原雨塘歿（十一月十八日七十五） 隅田亭豪山歿（二月廿九日）

四	癸巳	蒼虬加賀に下る	蕪村發句解○白雄夜話○芭蕉句墳 苔の花
五	甲午	梅室加賀に歸る○蒼虬抱儀の招により江戸に下る	北元古學蔵斷字論
六	乙未		乙二七部集○俳諧仕様帳 梅室家集
七	丙申		
八	丁酉		今七部集○蕪句双設○蕪村文集 續蒿か本○俳家大系圖○杉家印可傳○言笛集○三四考
九	戊戌		

四	癸巳	蒼虬加賀に下る	田村青蛾歿（二月二十日） 大澤月朶歿（二月廿五日） 六世湖十歿（十月廿日六十二） 矢部徂東歿（九月十二日）
五	甲午	梅室加賀に歸る○蒼虬抱儀の招により江戸に下る	太田萬里歿（七十七） 花屋奇淵歿（五月十五日七十六）
六	乙未		寺村百池歿（十二月十七日八十八） 木村翠羽歿（三月十日） 竹立庵且水歿（二月十七日五十八）
七	丙申		金澤風谷歿（三月六日五十九） 遠藤曰人歿（四月廿日七十九） 野村了輔歿（十一月十四日八十二）
八	丁酉		淺逸歩仙歿（十月廿四日六十九） 茂呂何丸歿（十月廿七日七十七）
九	戊戌		鴨北元歿（二月十五日） 巢瀬千厓歿（五月十一日）

十	己亥		蒼虬句集○梅室句集○梅林茶談
十一	庚子	梅室京に歸る○反故庵天來俳諧七草を著して梅室を攻撃す	俳諧七草○俳諧小筌
十二	辛丑	俳諧卷の田出てゝ七草を反駁す	俳諧芥川○秋風庵文集○耳さらへ○玉の光○春の田
十三	壬寅		方圓發句集○俳諧職業盡○俳諧季寄圖考○
十四	癸卯	此年間の流行兒は所謂天保の三大家と稱せられし蒼虬、梅室、鳳朗の鉾臺にて自餘の俳士は其鼻息に顰るのみ	禾葉俳諧集
弘化元	甲辰	改元十二月十三日	花兎○笈さらへ○箕吹草

十	己亥		
十一	庚子	梅室京に歸る○反故庵天來俳諧七草を著して梅室を攻撃す	松本樨柯歿（二月廿一日五十六） 知足坊一圓歿（七月七日七十一） 伊達布席歿（六月十二日八十一）
十二	辛丑	俳諧卷の田出てゝ七草を反駁す	小島大梅歿（五月廿九日七十） 亘理溶々女歿（六十二）
十三	壬寅		成田蒼虬歿（三月十三日八十二） 鈴木應々女歿（三月廿七日） 柳亭種彦歿（七月十八日六十）
十四	癸卯	此年間の流行兒は所謂天保の三大家と稱せられし蒼虬、梅室、鳳朗の鉾臺にて自餘の俳士は其鼻息に顰るのみ	大島對山歿（二月十一日五十七） 喜多川梅價歿（三月三日七十） 川村碩布歿（十一月九日九十一） 矢島蓁峨歿（七月七日）
弘化元	甲辰	改元十二月十三日	四世川柳歿（二月五日六十七） 馬場蓁々歿（二月十三日六十八） 石井禾葉歿（四月廿三日） 鳴立庵雉啄歿（六月十四日） 谷川護物歿（七月廿八日七十三）

二	三	四	嘉永元	二	三
乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌
	西馬江戸に來り住す		改元二月十六日此年より以下慶應に至の間何々五百題と稱する類題句集の刊行夥しく皆其年號を冠らして時流に投せんとせり		
鶏口集○舎利風語○蓼々翁句集	種茄子○木の實發○		風俗文選犬注解○七部集連句早見○一茶發句集○嵐外發句集	俳人百家撰○四壁堂句抄○十家類題集	俳諧問答○あこめ垣○鳳朗發句集○月底發句集
辻嵐外歿（三月廿六日七十五） 田川鳳朗歿（十一月廿八日八十四）	鶴田卓池歿（八月十一日七十九） 仁井田碓嶺歿（四月廿二日六十七） 古河風外歿（十二月五日六十九）	釋盧白歿（十月晦日七十五） 住田素鐵歿（七十六）	小坂呂叟歿（正月廿七日八十） 吉村物外歿（六月十九日） 木造萬鐘歿（十月廿日） 曲亭馬琴歿（十一月六日八十二）	中田冬史歿（五月廿九日四十八） 三世冬瞑歿（五月五日九十）	福谷水竹歿（正月十二日六十四） 御漢有計歿（四月六日）

四	五	六	安政元	二	三
辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰
梅室花の本宗匠を免許せらる			改元二月二十七日丈雨七世雪中庵となる鳳洲と改む	兒玉逸淵江戸を退き武藏本庄驛に閑居す	
三幅對○俳諧袖珍抄○歲事記栞草○青々處句集	○おらが春○俳林小傳○友千鳥○護物發句集○破魔弓○袖珍抄後篇	晴霞集○道の栞	俳諧茶話○沙羅句集○碩布發句集	一具斷橋詞藻○一翁四哲集○そのうつき○	蓬萊集○袋掃除○やまかつま
七世沽山歿（十月十一日） 平野三我歿（八月十五日）	三露園岱年歿（正月十三日） 櫻井梅室歿（十月一日八十四）	鈴木松什歿（四月十八日四十八） 黒川惟草歿（一月六日） 高梨一具歿（十一月十七日七十三）	小田切蓼阜歿（八月朔日五十二） 相馬其山歿（正月廿六日）		桑原右麥歿（六月十六日五十） 河原悠々歿（十一月廿七日八十一）

四	五	六	萬延元	文久元	二
丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌
		多代女江戸に出づ	改元三月十八日	改元二月十九日	
雪竿集○春秋稿	蠹頭奥の細道○安政附合集○五元一覧	葛飾正統系圖○貞享式海印錄	稗河狹霧逆志抄○七部婆心錄	蒼虬附合集	蕉門師說錄
新田雲里歿（五月十七日五十九） 寺島杜夢歿（六月廿一日六十七） 足了庵禾月女歿（七十）	過日庵組鄉歿（八月七日） 得燕歿（八月十二日） 富處四馬歿（八月十五日五十一） 五世川柳歿（八月十六日七十二） 村松春甫歿（八十七）	市川赤海歿（三月廿三日七十） 豐島由誓歿（九月二日七十一） 馬場錦江歿（九月十九日）	兒玉逸淵歿（七月二十日七十二） 三浦有一歿（十二月十二日七十二） 牧岡六來歿（十一月七十六）	守村抱儀歿（正月十六日五十八） 坂上竹煙歿（七月十四日）	

元治元	慶應元	二	三	明治元
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰
改元二月二十日			世の中騷しく將軍上洛其他長州征伐薩摩屋敷取拂など民間の贈を寒からしむるにより月次大に衰へたり	改元九月八日 維新の初め諸般の事定らず人々俳事を擧ち爲に宗匠糊口に窮する者多し
狗兒草○道の杖○俳諧一覽集	浪化句集○蕉風格外辨		逸淵句集○	
野木右通歿（二月廿四日五十） 梅笠歿（六月十一日五十九） 柚庵長橋歿（六月十二日） 坂東茶雷歿（八月廿一日六十九）	市原多代女歿（八月二十日九十三） 伊藤雨后歿（十一月九日）			
堤梅通歿（三月十二日六十八） 三浦浪兮女歿（十月十六日三十二） 海老原新甫歿（十一月十七日）	秋山御風歿（正月廿六日七十二） 小林卓朗歿（四月十六日） 鳴立庵立宇歿（十一月廿二日）			
山邊清民歿（十二月九日七十五） 三世金雞歿（十二月廿七日六十九） 板倉寨馬歿（十一月八十） 竹村鶴叟歿（十一月廿四日）	釋不染歿（五月五日） 芭蕉堂公成歿（六月六日六十一） 窪田連山歿（六月六日六十）			

二	三	四	五	六	七
己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌
				太陽暦に改まり季題に新規を取入るゝものあり	
風外句集	六葉集	抱儀句集○見外發句集			
四世左簾歿（四月四日八十一）					
岡田米壺歿（十月八日）					
藤井鼎左歿（六十八）					
永井一朗歿（八月二日五十）					
細木香歿（九月十日四十九）					
有馬以長歿（十一月廿一日六十四）					
國井化月坊歿（十二月十七日七十七）					
太白堂四夕歿（八月十二日六十一）					
森川才馬歿（六月八十三）					
		高松蟻兄歿（正月八日八十三）			
		江口弧月歿（七月十九日八十四）			
		河田寄三歿（九月十九日六十六）			
			小林見外歿（二月二十日）		
			山本樵蔭歿（正月十八日）		
			雪中庵鳳洲歿（九月十二日六十一）		

八	九	十	十一	十二	十三
乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰
					角田竹冷始めて郵便報知新聞に俳句を掲ぐ○三森幹雄俳諧明倫雜誌を發行す
御風發句集			ふたつき集	四木集	八十六歌仙○
守田雀庵歿（十二月十六日八十）					
有礒庵五渡歿（十一月十二日六十一）					
紫花庵萬籟歿（二月十七日）					
神風館只青歿（四月十五日）					
淺見野井歿（四月廿二日六十三）					
伊藤嵐牛歿（五月廿八日七十九）					
赤松木公歿（十月二日）					
螺舍秀氏歿（十二月廿二日五十六）					
月の本爲山歿（一月十九日七十五）					
中澤笳雪歿（五月廿四日）					
有竹居未佛歿（十月廿日六十一）					
松の本素屋歿（十月廿一日六十六）					
西田物外歿（八十）					
施無畏庵未足歿（五月廿五日）					
					大谷文壽坊歿（一月十三日八十二）
					關口卜紫歿（四月十九日）
					小林葛古歿（七月十三日八十八）
					高橋歌榮女歿（四月五日三十一）

十四	十五	十六	十七	十八	十九
辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌
俳諧みゝな草○祖父の恩	花の俤	龜戸千句○夷白發句集○三疋猿		十湖發句集	
春秋庵弘湖歿（七月十二日） 古夢舍默池歿（八月十五日） 岡本五休歿（八月廿四日六十九） 二不軒完鳴歿（八月三十日） 東杵庵顯言歿（十二月四日六十五）	羽鳥半海歿（一月四日七十六） 六世川柳歿（六月十五日六十九） 椿月杵歿（七月八日六十一）	八千坊骨年歿（九月廿六日六十七）		鳴立庵壽道歿（五月廿四日三十五） 五世左簾歿（六月廿一日） 玉心堂素兄歿（八月八十一）	雪簑人宜來歿（一月十三日三十） 小簗庵春潮歿（二月十一日七十三） 對梅宇乙彥歿（二月廿八日六十一） 花垣連々歿（三月五日五十六） 語石庵精知歿（九月一日）

二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五
丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰
永機主催して義仲寺に蕉翁の法會を營む七日に及ぶ○永機其角堂を機一に譲り阿心庵となる	梅年雪中庵を雀志に譲る	月次點取の流行に大勢の集句を各宗匠に點せしめて高點者某物を占むるを誇とし各所に圓體あり宗匠の點料一句一匁にて文久錢一ツ一匁五毛の料を取るは竭り其角堂永機のみなり			竹冷越後佐渡に吟行す 正岡子規始めて文學的俳句を說て天保以後の俗調を排す世人漸く睡を覺して清新の趣に向ふ學者の俳句に指を染むる者多し
指直猿簑附合註解					春湖發句集○嵐牛發句集○幹雄俳諧自在法○芳律山吹叢誌
春暉園太年歿（三月十五日六十五） 文合庵兎玉歿（八月十四日六十一）					
八巢謝德歿（五月六日） 眞實庵永年歿（六月廿五日五十） 五竹庵百可歿（六月十三日） 百鳥園英舍歿（九月廿七日七十一）					
鳴立庵松頂歿（八月十八日）					
花の本芹舍歿（一月廿三日八十六） 生川春明歿（八月七日八十七） 奥平鶯居歿（八月廿五日八十三） 佳峯園等栽歿（十二月六日八十八） 不說庵五雀歿（九月十七日八十一）					
七世川柳歿（九月五日六十七） 八世川柳歿（十月一日七十三） 太白堂吳仙歿（十月廿六日六十四）					
九世宗瑞歿（二月十一日七十一） 八千坊流美歿（二月十四日六十四） 東杵庵月彥歿（三月廿日六十八） 芭蕉堂艮大歿（九月十四日）					

廿六	癸巳	正岡子規鎌倉に遊ぶ○竹冷飛彈に遊ぶ○襲庭篁村早稻田文學に俳諧一斑を揭ぐ○子規日本新聞に芭蕉雜談を載す○
廿七	甲午	子規子小日本に俳句を募集す新氣運將に起るの時なり毎日新聞も又俳句を募集す○尾崎紅葉讀賣に俳句を撰す○筑波會といふ帝大生の俳句會起る
廿八	乙未	日淸戰役に子規從軍記者として金州に赴き五月病て歸る○岡野知十俳諧風聞記を每日新聞に揭ぐ○秋聲會起り竹冷紅葉之が牛耳を執る
廿九	丙申	秋聲會にて雜誌秋の聲を發行す唐紙四六大の十四五枚綴なり○月並といふ語は俗俳を意味する語となりて廣く用ゐらるゝに至れり
三十	丁酉	竹冷文藝俱樂部に新調俳諧論を載す○讀賣新聞に近世俳人譚を出す○內田不知庵芭蕉傳を雜誌太陽に揭ぐ○九月博文館にて俳諧文庫の發行を企て古俳書の刊行に從事す
一	戊戌	伊豫松山に於て日本派の雜誌ほとゝぎすを發行す極堂等之が編輯に當る十號許にして廢し東京に移す
二	己亥	太陽に俳人十二傑を募る撰に當る者永機、子規、みき雄、紅葉、聽秋、竹冷、小波、雀志、酒竹、得知、鳴雪、桂花なり
三	庚子	寒川鼠骨入獄記を草してほとゝぎすに揭ぐ新囚人といふ○夏期講習に俳諧講座を開く竹冷治革史を鳴雪碧梧桐蕪村集を講ず
四	辛丑	知十紫吟社を結び雜誌半面を出す大阪に靑々露石結んで雜誌實船を發行す○讀賣新聞百圓の懸賞句を募り俗化に導きをす
五	壬寅	新派、舊派の調截然と別れ來りしが此頃より舊派漸く新派を擡して時代に移らんとせる傾きあり
六	癸卯	秋聲會卯杖を發行す
七	甲辰	中川霞城京都に鼈奏を發行す

廿六	俳諧名譽談○明治枯尾花○波鳴七部集講義○獨祭書屋俳話
廿七	俳諧史傳○俳諧友かゝみ
廿八	坿補獨祭書屋俳話刊行
廿九	坿訂蕪村句集○俳諧名家選○俳家系譜○新釋奧の細道
三十	伊豫松山に於て日本派の雜誌ほとゝぎすを發行す極堂等之が編輯に當る十號許にして廢し東京に移す
一	俳諧木太刀○永機新五元集○俳句入門○新俳句
二	俳諧大要○中興五傑集○鶉衣評釋○俳人蕪村○月と花○俳句評釋
三	蕪村遺稿○晋其角○雨華抱一○成美全集○太祇全集○几董全集○召波樗良全集
四	春夏秋冬○俳家逸話○俳諧年表
五	獨祭書屋俳句帖抄○俳句小史○俳句大觀○俳諧百話
六	紅葉俳諧新潮○碧梧桐俳諧漫話
七	靑々妻木○蕉門十哲句選○俳諧逸品帖

廿六	古河默阿彌歿（一月廿二日七十八）南無庵文器歿（四月十九日七十七）春秋庵有柳歿（七月七日八十五）
廿七	近藤金羅歿（十月三日六十五）
廿八	佐野蓬雨歿（一月十三日八月七）藤野古白歿（四十月二日）
廿九	林江左歿（六月廿七日五十九）江澤梅逸歿（二月廿九日三十）
三十	醒雪連俳小史○酒竹與謝蕪村○雪人校註蕪村全集○碌翁炭俵集註解○永機七多良樹○古白遺稿
一	桃支庵指直歿（十一月六日七十）吳山堂玉成歿（五月十九日五十六）
二	桂花園桂花歿（六月十六日七十）其日庵素琴歿（十月四日六十九）田寧庵詩竹歿（十月十四日）細鱗舍松江歿（十二月三日四十一）
三	酒葉月人歿（三月三日二十二）木下釣月歿（十一月廿一日二十一）
四	大橋乙羽歿（六月一日三十三）樗庵稻處歿（七月十六日八十七）小川琴香歿（十二月廿五日八十三）芭蕉堂楓堂歿（七十四）
五	鳴立庵宇山歿（一月廿五日）蘇山人歿（三月廿三日）正岡子規歿（九月十九日三十六）
六	木村素石歿（一月廿七日六十七）堀越園州歿（九月十三日六十六）尾崎紅葉歿（十月三十日三十七）
七	老鼠堂永機歿（一月十日八十三）雷堂龍吟歿（十月十三日）

卅八	乙巳	瓊音蕉風○知十俳趣と蕪趣○蕪村遺稿講義
卅九	丙午	俳諧馬の糞○四明俳諧美學○俳諧奇調集○標註蕪村俳句全集
四十	丁未	鳴雪俳話○俳句問答○紅葉句帖○明治の俳風○俳論史○俳句資料解釋○俳話一口噺
四十一	戊申	俳句大成○俳諧研究○新修歲事記○新春夏秋冬○虛子句集
四十二	己酉	天明調漸く倦怠の色あり碧梧桐の一派文語體の廿五字三十字の句を作り新傾向論を唱ふ 銅牛俳諧新研究○日本俳句抄○新撰俳諧辭典
四十三	庚戌	一茶大に世に持囃さる 四明句集○一茶七番日記○一茶研究○銅牛坂に車

		不白軒梅年歿（一月十二日八十五）
		谷活東歿（一月八日） 久保田米僊歿（五月十八日五十五） 川村鳥黑歿（十二月廿九日六十九）
		川上眉山歿（六月十五日四十） 雪中庵雀志歿（十二月廿三日五十八）
		野崎柴谷歿（一月廿一日三十三）
		春秋庵幹雄歿（十月十七日八十二）

四十四	辛亥	虛子專ら小說に執筆す 日本俳諧史○俳句大辭典
大正元	壬子	改元七月三十日 碧梧桐の新傾向漸に流行し之に化せざるは唯に舊派と二三の新派あるのみ 聽雨窓俳話
二	癸丑	俳句一般に認られて中小學の教科書中に和歌と共に挿入せらるゝに至る 芭蕉の臨終○芭蕉句選講話○鶯子句集
三	甲寅	井泉水自然の扉○青城破芭蕉○中外俳句抄
四	乙卯	碧梧桐雜誌海紅を發行す 水巴句集○南浪句集○新傾向句集
五	丙辰	蕪村の研究既に時代を去り芭蕉熱擡頭す 俳聖芭蕉翁○俳通○江戸庵句集

		牧野望東歿（一月十六日三十八） 大野洒竹歿（十月十二日四十二）
		安藤橡面坊歿（九月十五日） 梅澤蠹水歿（四十）
		夏目漱石歿（十二月九日五十） 宮澤朱明歿（四月十五日三十一）

六	丁巳		和風俳諧新研究○漱石俳句集○蕪村夢物語○句佛上人○俳人子規○左衛門句集○俳句提唱	中川四明歿（五月十六日六十八） 坂本四方太歿（五月十六日四十五） 太田南岳歿（七月十三日四十二） 佐々醒雪歿（十一月廿五日四十六）
七	戊午	此頃より三四年間荐りに俳句作法解し方の書發行せらる	紅葉句集○俳句十講○ひこはえ○俳句階梯○俳句の考へ方○進むべき俳句の道○俳句は斯く解し斯く味ふ	雪中庵宇貫歿（一月五日五十五） 東松露香歿（一月八日五十二） 柳川春葉歿（一月九日四十二）
八	己未		無腸遺稿○蛙皷○禮讃○俳味と信仰味○俳句の解し方○俳句と其作り方	森山鳳羽歿（二月廿九日七十九） 角田竹冷歿（三月廿日六十四） 水落露石歿（四月一日四十八）
九	庚申	ほとゝぎすに其角研究を發表す山中笑、鳶魚、若樹、竹清なんど非俳人多く加はる	青々俳句雜感○竹冷句抄○芋錢三愚集○俳句選評○光明三昧○新らしき俳句を見よ○俳句は如何に作り如何に味ふか	古野左衛門歿（一月廿二日四十七） 大須賀乙字歿（一月廿四日四十一） 柳下孤村歿（八月卅一日三十八）
十	辛酉	芭蕉研究旺んとなり其著書續出す○新傾向衰へ初め古調に復る者多し	瓊音芭蕉全集○芭蕉翁の一生○芭蕉の言葉○新選一茶全集○一茶選集○奥細道評釋○新に俳句を作る人に○新しき俳句の作り方○小學讀本中の俳句評釋	市村燕子歿（十月十五日三十三）
十一	壬戌		其角研究○芭蕉翁傳○芭蕉翁の面影○芭蕉句選略解○芭蕉俳句全錄○祇空年譜○俳句の作り方○中學讀本中の俳句評釋	饗庭篁村歿（六月二十日六十八） 兒島無角歿（九月四十七）

十二	癸亥	東京大震災の爲文籍多く灰燼となり俳句者流一時閉息す甲子年改まり萬事復興に向ふ進展測るべからず	芭蕉研究○旅人芭蕉○野晒紀行評釋○芭蕉俳句新釋	森猿男歿（四月十八日六十三）
十三	甲子	震後俳諧一層流行し京坂東京の諸俳誌續刊せられ新に起るものも少なからず	刊行の著書多くは震災に失はれたる俳書の復舊にして新著は罕なり唯大坂には昨年末公刊したる新選俳諧年表が此年の劈頭を飾る著述の精華なりき	
十四	乙丑	芭蕉の研究熱高潮に達し諸誌に論文、史實の掲げらるもの多く次て一茶の崇拜又昌んなり○古俳書熱も非常に昂まり市中の價千金に換ふ有樣なり隨て古典の叢書多く出版せらる	蕪村俳諧學校○俳諧古典集○古俳書文庫○一茶文庫○竹冷文庫○青明集○同續○一茶七部集○芭蕉俳句研究○同續○芭蕉研究○芭蕉俳句新釋○俳人芭蕉○漱石俳句集○冬の日抄○一茶良寛芭蕉○此他芭蕉に關する者甚多し	
十五	丙寅	前年に次で芭蕉、一茶の盛事なり古俳書の覆刻に日本俳書大系の豫約大出版出づ	芭蕉俳諧の根本問題○畫人蕪村○蕪村全集○其角俳句新釋○年刊發句集○日本俳諧大系○俳諧七部集新釋	小栗風葉歿（一月十五日五十二） 內藤鳴雪歿（二月廿日八十） 倉田萩郎歿（六月二日五十八） 松島十湖歿（七月十日七十八）

昭和元年十二月廿九日印刷
昭和二年一月三日發行

增訂新撰俳諧辭典奥附

定價金五圓五拾錢

著作權所有

著者　岩本梓石
著者　宮澤朱明
東京市日本橋區通一丁目十九番地

發行兼印刷者　大倉保五郎
東京市京橋區新榮町五丁目七番地

印刷者　大倉印刷所

發行所　東京市日本橋區通一丁目十九番地
大倉書店
振替口座東京二三八番
電話茅場町四一五・四一六番

大倉印刷所 Y.O 東京

大倉書店發行圖書

岩本梓石著

俳諧七部集新釋

四六判ポプリン製
四百七十餘頁
定價金貳圓八拾錢
送料拾八錢

最新刊

芭蕉逝て二百十餘年その骨髓たる俳諧七部集に註解の備らざるは文藝上の遺憾として本書は現はれたり。從來難解とされたる諸句に向て直截簡明なる解說を施し別て俳諧連句には一句毎に接續の意義附肌を釋明して晦澁なる附合も一見容易く其趣味を味ふことを得べき指針を示す等著者獨創の見解を以て斯界に貢献せんことを期したり。俳諧に趣味を有せらるゝ人士の心讀せらるべき良書としてお薦めする。

目次概略

一、七部集讀例
一、阿羅野
一、炭俵
一、冬の日
一、ひさご
一、續猿蓑
一、春の日
一、猿蓑
一、七部集作家表……以上

大倉書店發行圖書

石井露月序
寛克彦序
船山草花著

俳諧研究の根本的要訣 俳諧哲理

四六判洋布製
四百四十餘頁
定價貳圓參拾錢
書留送料拾八錢

最新刊

俳諧に關する著書は頗る多いが俳諧の道を說いたものは一つもないと云つてよい。古來藝道の語があるが斯の道を闡いた芭蕉翁も言葉は俚俗に近きも心は向上の一路に遊ぶべしとか、心の俳諧とか云つて俳諧の道を敎へてゐる。芭蕉翁ハ德望は何人も之を崇敬し、且其の雖大なる感得は何人も追慕してゐるが、才智高きものは道を解せず、句作に堪能なるものは心法を知らず、此道や行く人なしとの代は正に俳道類れて地に墜ちたと言つても過言ではあるまい。著者玆に見る所あり、俳諧の道を說き心法を明にし俳諧の哲理を極めて無味乾燥の理窟を避け、趣味津々の間に不知不識俳諧の大道に導く、從來の俳句作法とか俳句評釋とか俳諧史等に滿足せぬ人は速に一本を手にせられよ俳諧空前の快書として敢て湖におすゝめする。

大倉書店發行圖書

新式 **獨和大辭典** 登張信一郎著 定價金六圓五拾錢 三六判總布製 貳千三百七拾頁 送料書留 廿七錢 總語數十餘萬言

新譯 **獨和辭典** ポケット版 登張信一郎著 定價 金參圓 ポケット版總革 特製携帶至便 送料書留 拾六錢 壹千壹百貳拾頁

增訂 **新佛和辭典** 野村泰亨著 定價金參圓五拾錢 三五判總布製 壹千參百拾餘頁 送料書留 拾八錢 總語數約七萬言

新和佛辭典 松井知時共 上田駿一郎著 定價金參圓五拾錢 三五判總布製 壹千壹百四拾頁 送料書留 拾八錢 總語數約七萬言

新譯 **露和大辭典** 鈴木於蒐平 八杉貞利共譯 松本圭亮 定價金七圓五拾錢 三六判總布製 壹千六百六拾頁 送料書留 廿七錢 總語數約拾萬言

大倉書店發行圖書

夏目漱石著 四名篇

▽**吾輩は猫である** 袖珍判革製 七百五十餘頁 定價貳圓貳拾錢 送料拾八錢 本書を讀まない紳士淑女はないと思ひますが若しあつたら至急御一讀下さい

▽**行人** 袖珍判布製 六百五十餘頁 定價金貳圓 送料拾八錢 「友達」「兄」「歸つてから」「塵勞」の四章より成る一息毎に一章を讀む感亦更に深し

▽**漾虛集** 袖珍判美裝 三百八十餘頁 定價壹圓七拾錢 送料十六錢 倫敦塔、カーライル博物館、幻影の盾、琴のそら音、一夜、薤露行、趣味の遺傳を收む

▽**文學論** 袖珍判布製 七百四十餘頁 定價貳圓參拾錢 送料十八錢 「文學とは如何なるものぞ」といへる問題を根本的に解決論述せられしものである

大倉書店發行圖書

文學博士 芳賀矢一著

新式辭典縮冊

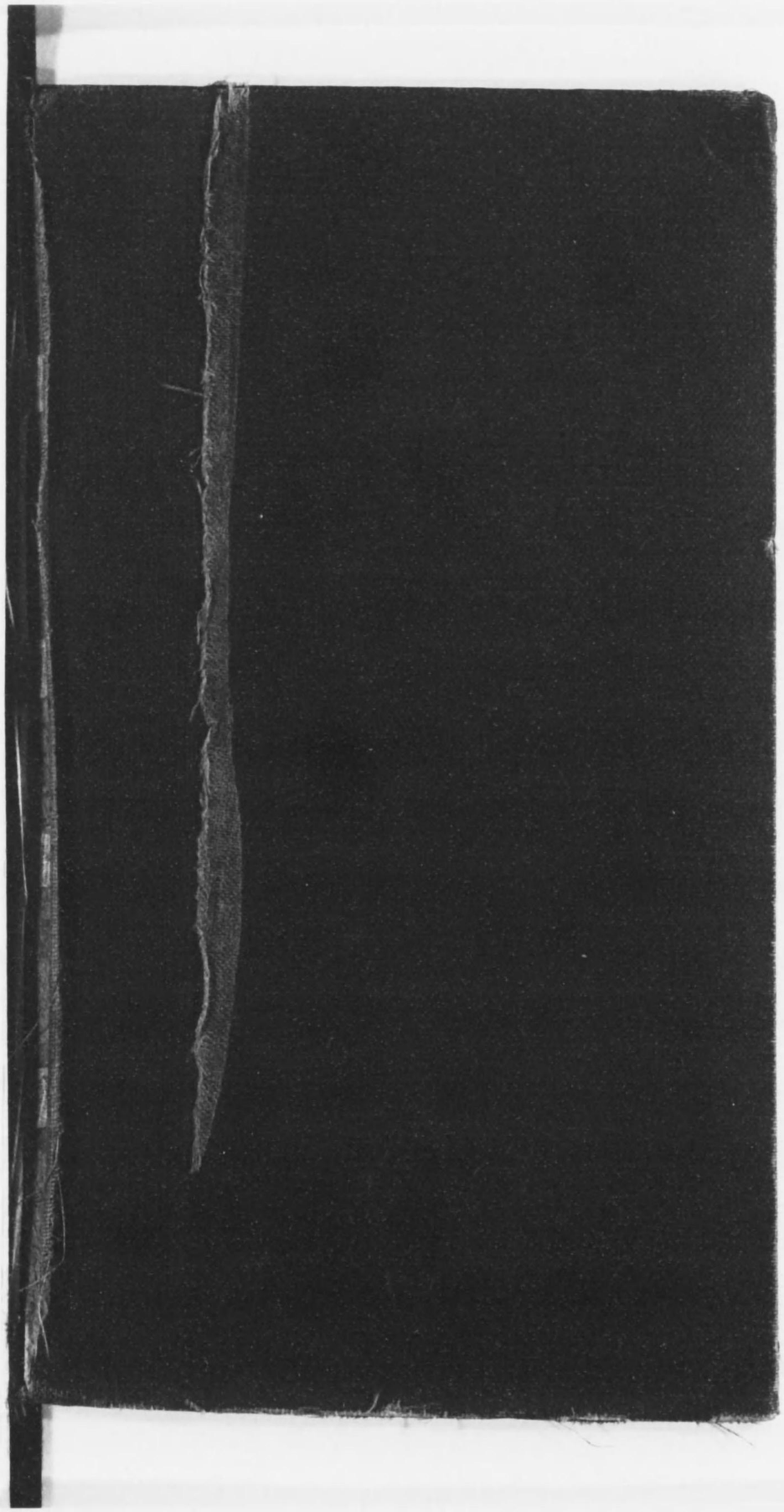
總革製三六判
壹千三百餘頁
附錄固有名詞辭典
定價 參圓八拾錢
送料 貳拾七錢

印刷鮮明なる
第三十二版

一番新しい排列法による國語辭典

從來の國語辭書は總て假名順により排列してあります。卽ち前者ではブンケンの條下に文獻、文遣、聞見分限等と排列されて、假名でこそ順序立つてゐれ、漢字國字に於ては其の間すこしも聯絡はなかつたのであります。新式辭典では文雅、文豪、文學、文化、文勳、文藝文獻等を又ブンタマ(玉)の條下には玉垣、玉簾、玉串、玉敷く、玉垂れ、玉手箱、玉貫く等を何れも文及び玉を頭字に載いた類語熟語成句を全部收めてあります。それ故ブン(文)なら文タマ(玉)なら玉を一つ丈け引けば汎ゆる文と玉とに關したものは一目の下に見出すことが出來るのであります。

讀書人の書齋に必備すべき辭書

85
185 v

終